

原爆
思い出
の手記
集

忘
れ
な
草

目次

口絵 昭和四十二年八月九日の原爆死亡者慰霊祭並に犠牲者名碑除幕式の写真

長崎医科大学及び付属病院周辺の地図、並に基礎教室建物の配置図

揆 抄	長崎医科大学原爆犠牲者名碑建設の経緯と経過	調 来 助	三 谷 靖	一
揆 抄	長崎医科大学原爆犠牲者の慰霊祭と名碑除幕式	調 来 助	調 来 助	二
原爆犠牲者名碑建設の経緯と経過	原爆死亡学生の靖国神社と遺族援護請願に関する陳情経過	調 来 助	調 来 助	三
靖国神社靈輿奉安祭に参列して	原爆思い出の手記集「忘れな草」の出版について	滝 川 勝	調 来 助	五
原爆記念誌「追憶」について	追 憶 記	調 来 助	調 来 助	八
原爆犠牲者名碑によせて	原爆前後の思い出	古屋野 宏 平	調 来 助	九
亡き友の御遺族にお会いして	学友と原爆遭難の思い出	清 木 美 徳	調 来 助	一〇
原爆 思い出の手記集	一、教授遺族の手記	横 山 復 次	調 来 助	一一
二、助教授・講師遺族の手記	三、助手・副手遺族の手記	西 森 一 正	調 来 助	一三
四、医学部学生遺族の手記		浅 沼 桂	調 来 助	一四

長崎医科大学原爆犠牲者遺族会々長
長崎大学医学部長

(一) 医学部仮卒業生遺族の手記	二三
(二) 医学部四年生遺族の手記	二六
(三) 医学部三年生遺族の手記	三六
(四) 医学部二年生遺族の手記	三九
(五) 医学部一年生遺族の手記	五四
五、医専学生遺族の手記	六八
(一) 医専仮卒業生遺族の手記	六八
(二) 医専三年生遺族の手記	六九
(三) 医専二年生遺族の手記	七三
(四) 医専一年生遺族の手記	一〇二
六、薬専学生遺族の手記	一三五
(一) 薬専三年生遺族の手記	一三五
(二) 薬専二年生遺族の手記	一四〇
(三) 薬専一年生遺族の手記	一四二
七、看護婦遺族の手記	一四三
八、事務職員の遺族の手記	一四八
寄贈者の御芳名	一五五
編集後記	一五六
調 来 助	

長崎医科大学原爆死亡職員・学生並に遺族代表者の名簿

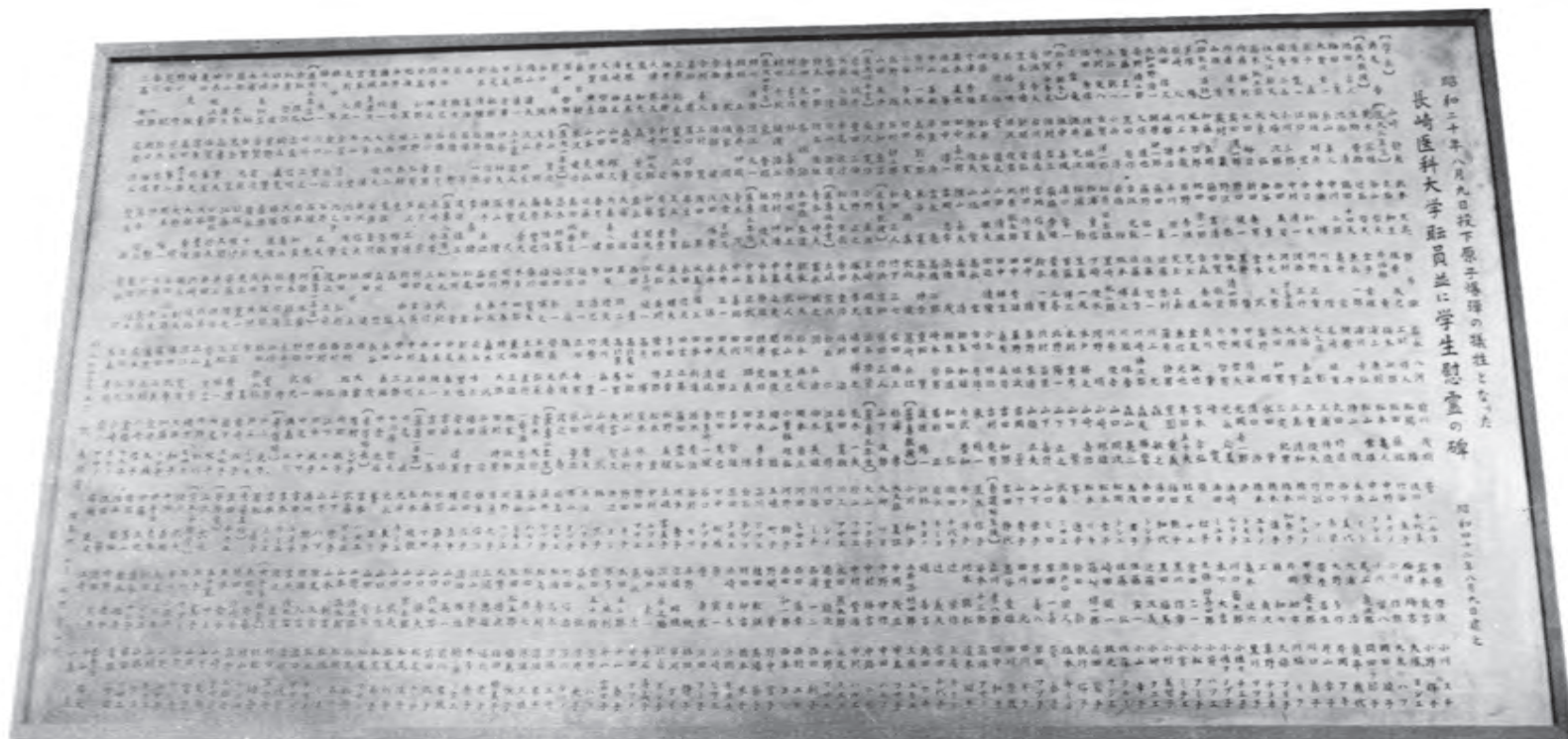


口絵写真の説明

- 一、慰霊碑前に安置された名碑の除幕の瞬間
- 二、旧長崎医科大学原爆犠牲職員並びに学生の記念碑全図、次頁の人名表はこの記念碑をオフセット版にて表示したもの
- 三、三谷医学部長の挨拶
- 四、調遣族会長の挨拶
- 五、調遣族会長の焼香
- 六、遺族一同の黙禱
- 七、調遣族会長より松岡国一氏へ感謝状贈呈
- 八、グビロが丘の慰霊祭全景
- 九、旧長崎医科大学付属病院及び東側丘陵の見取図
- 一〇、旧長崎医科大学基礎教室の配置図



1. 慰霊碑前に安置された名碑の除幕の瞬間



2. 旧長崎医科大学原爆犠牲職員並びに学生の記名碑全図
次頁の人名表はこの記名碑をオフセット版にて表示したもの



4. 三谷医学部長の挨拶



5. 調遣族会長の挨拶



6. 調遺族会長の焼香



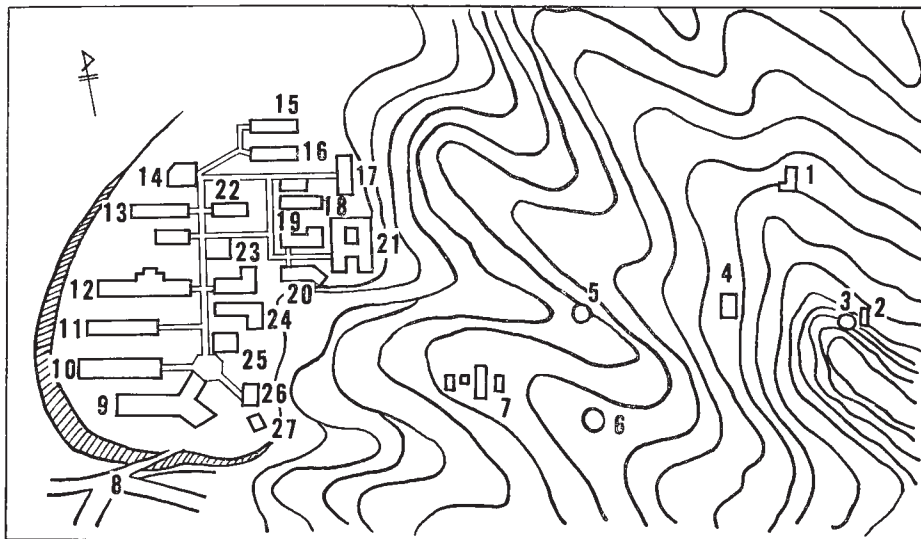
7. 遺族一同の黙禱



8. 調遣族会長より松岡国一氏へ感謝状贈呈

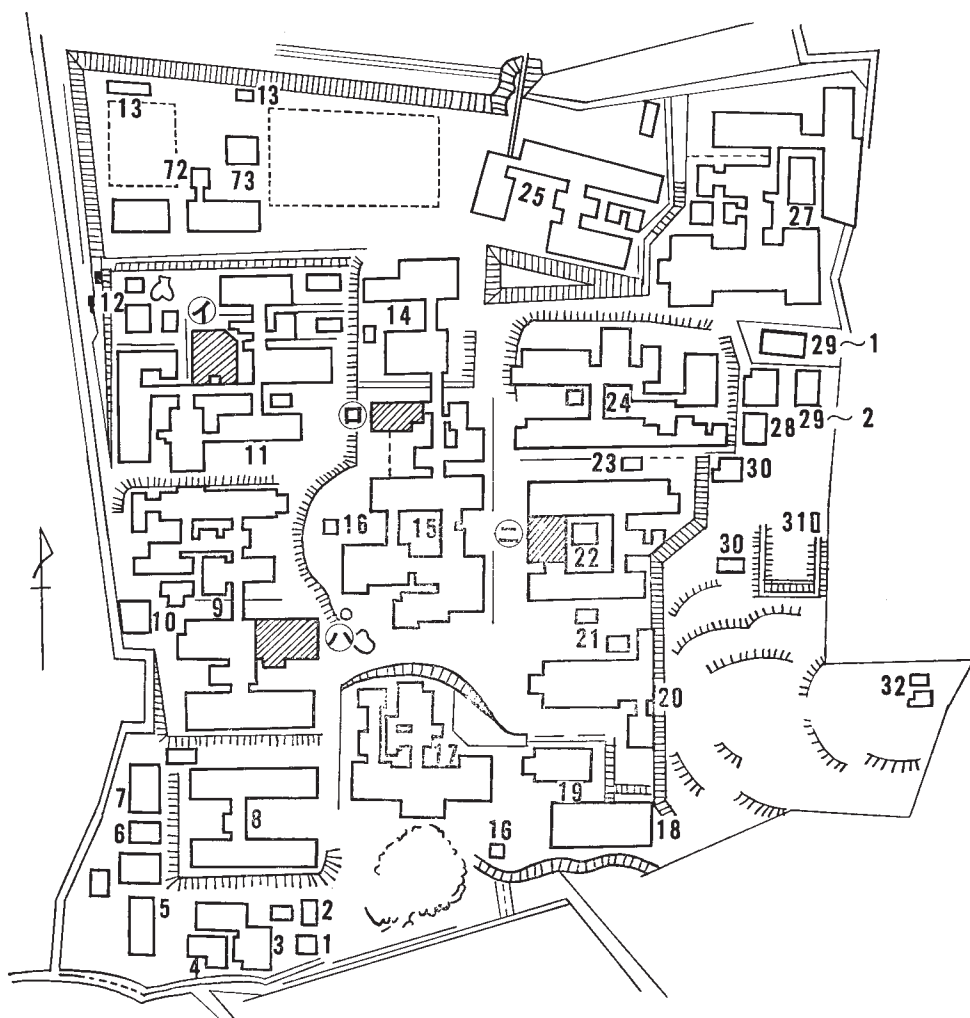


9. グビロが丘の慰霊祭全景



10. 旧長崎医科大学附属病院及び東側丘陵の見取地図

1. 丘の中腹の民家
倒壊したが焼けず、この家より米と釜を持ち出し握り飯を作って被爆者に配給した。
2. 穴弘法の茶店
倒壊、焼けず。
3. 穴弘法（様）
入口は幅55cm、高さ145cm、奥行は約3×3m²の広さを有する洞窟で、奥に弘法大師が祀られている、一般の信仰が厚い。
4. 穴弘法寺
小さいが綺麗なお寺であった。真言宗、原爆の際倒壊、但し火災は起らなかった。
5. 放射線科の急設バラックの所在地で、私（調）は8月9日の夜ここで一夜を過した。
6. 角尾学長及び高木附属医専部長が9日夜野宿されたところ。
7. 保健婦養生所
古い木造建物、原爆爆発後間もなく発火炎上。
8. 外来本館前の坂道
この坂道には人、馬などの死体が無数に見られた。
9. 外来本館：コンクリート建、地下1階、地上3階、全焼。
10. 内科病棟：地下1階、地上3階
11. 耳鼻咽喉科病棟：2階
12. 外科病棟：3階
13. 産婦人科病棟：3階
14. 北講堂：階段教室
15. 小児科病棟：2階
16. 眼科病棟：2階
17. 精神科病棟：2階
18. 皮膚泌尿器科病棟：2階
19. 高北（伝染病棟）：2階
20. 高南（結核病棟）：地下1階、地上2階
21. 看護婦寄宿舍：木造2階
22. 産婦人科手術室：2階
23. 古屋野外科手術室：2階
24. 調外科手術室：2階
25. 南講堂：1階平面、2階階段
26. 調理部：2階
27. 洗濯室：2階



11. 旧長崎医科大学基礎教室の配置図

- | | | |
|-----------|----------------|-------------|
| 1. 門衛所 | 13. 物置, 便所及脱衣所 | 25. 薬理学教室 |
| 2. 自動車々庫 | 14. 細菌学教室 | 26. 温室 |
| 3. 配電室 | 15. 衛生学教室 | 27. 薬学専門部 |
| 4. 学生会議室 | 16. 銅像 | 28. 水槽及ポンプ室 |
| 5. 柔剣道場 | 17. 本館 | 29~1 銃器庫 |
| 6. 物置 | 18. 雨天体操場 | 29~2 生徒控所 |
| 7. 機械工室 | 19. 学生集会所 | 30. 大弓場 |
| 8. 法医学教室 | 20. 図書館 | 31. 射的場 |
| 9. 病理学教室 | 21. 大講堂 | 32. 睦会々議室 |
| 10. 土蔵 | 22. 生理学教室 | 72. 医学専門部 |
| 11. 解剖学教室 | 23. 蓄電室 | 73. 生徒控所 |
| 12. 焼却場 | 24. 生化学教室 | |

備考：斜線は多数の学生が遭難した講堂を示す。

① 解剖学講堂 (医専1年生) ② 衛生学講堂 (医専2年生)

③ 病理学講堂 (学部2年生) ④ 生理学講堂 (学部1年生)

挨拶

長崎大学医学部長 三 谷 靖

本日はあの原爆が投下されて丁度二十二年目に当ります。当日を憶わせるようなこの暑い中を多数の御遺族の方々が、しかも中には随分遠方からお集り頂いたことを心から御礼申し上げます。

最愛の肉親を失われた皆様、今までの長い間、さだめし物心両面に色々の御辛労がおりだったこととお察し申し上げます。

当時私は東京在住で、当時の長崎の実状は存じませんが、終戦直後の広島へ被爆者の治療に行き、身を以ってその惨状を体験しましたので、皆様の御感慨を充分にお察し出来ます。

この度関係各方面の御努力により、漸く殉難学徒も動員学徒に準ずる扱いを得られる運びとなり、近く靖国神社に合祀されることになりましたことは、せめてもの喜びであります。また本日は、御列席の調名誉教授やその他の方々の御骨折により、殉職された職員、学生、看護婦たち、全員八百七十四名の御姓名を刻みました真鍮板の名碑の除幕を致すことになりました。

ここに謹んで、今は亡き方々の御冥福をお祈り申し上げると共に、今後再び世界の何処に於ても、このような惨状の繰返されることのないよう、誓い且つお祈りするものであります。

挨拶

長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会々長 調 来 助

私は原爆で亡くなった長崎医科大学学生の遺族の一員として、数年前から学徒遺族会の請願運動にも参画して来ましたが、本年二月、幸に多年の宿願であった死亡学生の靖国神社合祀と、遺族援護の実現を見るに至りました。この成果は遺族全員の熱意もさることながら、偏えに関係各位の温かい御援助の賜物と深く感謝し、一同に代って厚く御礼申し上げます。

しかし翻って考えますに、原爆の尊い犠牲となったのは、常に学生達だけでなく、角尾学長を初めとして、惜しみても余りある教職員の方々、うら若くして散華した看護婦諸嬢、前途洋々たる事務職員諸君等、合せて八百七十余名に上るのであります。私はかねがねこの方々の英名を永くこの地に遺したいと考えておりましたが、幸に本学同窓会諸賢並びに看護婦諸姉の御芳情と、松岡国一様の献身的御協力により、唯今除幕されたような見事な名碑が完成されました。

この名碑はやがて学内の何処かに安置され、大学がつづく限り永久に保存されて、再びこのような悲惨な災禍が起らないよう、そして長崎大学が益々栄えゆくよう、末永く見守ってくれるものと信じます。どうか遺族の方々も、機会ある毎に本学を訪れて、この碑を温かく御愛護下さるよう、切にお願い致します。

長崎医科大学原爆犠牲者の 慰霊祭と名碑除幕式

調 来 助

昭和四十二年八月九日、今日は私達が終生忘れることの出来ない原爆記念日、朝から空は一点の雲もなく晴れ上って、焼けつくような真夏の太陽が燦々と輝いている。丁度今から二十二年前の、あの呪わしい日と全く同じようだ。

恒例の慰霊祭は、毎年原爆投下の十一時二分に行なわれるのであるが、今年はその前に犠牲者名碑の除幕式が舉行されるので、開始時刻が十時三十分になり繰り上げられ、既に十時前から多数の遺族や大学関係者達が、長蛇の如く引きもきらず、緑に包まれたグビロが丘の慰霊碑めざして登って行く。その大半は年老いた老男老女で、顔には皆悲しさと嬉しさが交錯した複雑な表情が浮んでいる。

丘の上には昨日からテントを張り、椅子が並べられ、慰霊碑の前には三谷医学部長、岸本附属病院長、角尾元学長未亡人、高瀬名誉教授、北村名誉教授、調名誉教授、倉成代議士、原爆犠牲学徒遺族会、ABCC、その他多数の遺族から贈られた生花や花輪が一杯に飾られ、今日除幕される大きな真鍮板の名碑が、真新しい白布に覆われて、慰霊碑の前面中央に据えられていた。誰があげたのか、もう既に紫色の香煙が縷々と立ちのぼっている。

名碑の除幕は、犠牲学徒遺族の一人である滝川勝氏の令嬢（小学六年の一二三嬢と四年の富士子嬢）二人の引幕によって、滞りなく行なわれた。駆けつけた十数名の報道陣のカメラが、パチパチと音をたてる。一同は声もなく、大きな目に涙をたたえながら見つめている。厳粛な一瞬であった。

続いて三谷医学部長、調学徒遺族会長の挨拶があり、調会長から名碑の製作者松岡国一氏に感謝状が贈られた。十一時二分になると、一同サイレンを合図に敬虔な黙禱を捧げ、それがすむと医学部長、病院長、遺族会長の焼香に続いて、各自思い思いに

名碑の前に進み、香をたき礼拝しながら、我が子我が兄弟の名を碑面に探し求め、暫らくは立ち去り兼ねた風情であった。

今年の参列者は例年を遙かに凌駕し、さすがの慰霊碑前広場も、参拝の人々で埋まって、立錫の余地もない程であった。受付で集計したところによると、死亡学生の遺族だけでも一七二組あり、而も一人で来られた人は殆んどなく、皆数人連れだってお参りに来られたので、学生以外の遺族や大学関係者を加えると、優に五〇〇人を突破していたと思われる。

試みに学生遺族一七二組を地域別に分けてみると、長崎県の一〇五は当然のこととして、佐賀県一二、福岡県一五、熊本県四、大分県二、宮崎県四、鹿児島県九で、九州内から一五一組、その他は中国地方六、四国三、京阪神八、東京三、仙台一などで、このような遠隔の地から多数参列して戴いたことは、長崎大学当局としても、又学徒遺族会としても、全く感激の外はなかった。

焼香がほぼ終ると、十一時三十分頃から名碑を基礎の第二講義室に移し、遺族の方々にもお集り戴いて、改めて学部長、遺族会長はじめ、久保参議院議員、倉成衆議院議員夫人、杉本市会議員の方々のお話があり、次いで医学部補導課の神谷係長から、文部省見舞金下付申請の件について懇々とお話があつて、十二時半頃散会した。

この日、私は数々の学徒遺族の方々から丁寧な御挨拶を受けたが、倉皇の間のこととて、多々失礼の点のあつたことをお詫び申上げたい。又御老体にも拘らず御臨席いただいた古屋野元学長や、はるばる東京から駆けつけて下さった内藤前教授未亡人に對しても、充分な接待の出来なかつたことを甚だ遺憾に思っている。

×

×

×

この慰霊祭は毎年八月九日に、長崎大学医学部のグビロが丘で行われますので、遺族会からは改めて御案内状は差上げませんが、来年も是非お参り下さいますよう、お願い申し上げます。今年完成された名碑も、除幕式の時と同じように慰霊碑の前に飾りますし、今年の慰霊祭に間に合わなかつた学生達の名も、来年の記念日までは必ず追加彫刻しておく積りであります。

(昭和四二、一〇、二五)

原爆犠牲者名碑建設の 経緯と経過

調 来 助

原爆の犠牲となった長崎医科大学の職員並に学生の氏名を、石に刻んで永久に遺したいという希望を私が抱き始めたのは、大学を定年退職した後、即ち昭和四十年の原爆記念日の頃だったと思う。

当時私達は「長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会」を結成して、原爆死亡学徒の靖国神社合祀と、遺族に対する援護措置を、政府当局に請願陳情していたが、長崎医大の学生は動員学徒でなかったという理由で、中々認めて貰えず、難航に難航を重ねていた。日本の国を、また我々国民を破滅から救った程の尊い犠牲になりながら、それを政府が認めてくれないなら、せめて我々の手で、その死が大死でなかったことを証拠立てるために、角尾学長以下八百有余名の英名を石に刻んで、永久に遺そうと考えたのが、そもその発端であった。

幸に本年にはいり、我々学徒遺族の多年に亘る労苦が報いられ、原爆死亡学生だけはその悲願が達成されて、遺族に対しては七万円宛の見舞金が出付され、死亡学生は皆靖国神社に合祀されることになったが、教職員、事務職員、及び看護婦達の分は未解決のまま残されているので、私は学生の問題とは別に、それと切り離して、懸案だった名碑建設のことを医学部教授会に図り、その賛同を得てこれを実行に移すこととしたのである。

本年四月、私は学会旅行から帰ると、すぐ方々の石材店を訪ねていろいろ相談してみたが、これを石で作ることには大変難色があった。即ち

- (一) 九百人に近い人名を刻むほど大きな石材は、絶対に得られないこと
- (二) たとえ数枚の石材を接ぎ合せてそれに名前を刻むとしても、今年の記念日まで

には到底間に合わないこと

(三) 石材では細い字が刻めず、又風化によって字が磨滅し易いこと

など、いろいろ不利な点のあることが判明した。私は残念でたまらないので、中山石材店主に何かよい方法はないかと相談したところ、「銅板がよいだろう」と、その方法まで親切に教えて戴いた。

そこで私は石材で作る計画を銅板に切替え、教えに従って三菱造船所総務課に問合せてみた。この方は結局駄目だったが、その後偶然に、全く偶然に長崎大学本部の永井庶務課長補佐から、又と得難い立派な人物を紹介された。その人は松岡国一という人で、数年前に三菱機械検査課技師を定年退職し、現在は長崎県金属協同組合秀工社業務部長を勤めており、三菱在職中に、原爆で死んだ純心短大生二〇〇余名の名を彫刻したことのある経験者でもある。私はその名碑を見せて戴いたが、真に見事な出来映えで、これだったら永久に磨滅することなく保存することも出来、而も八月九日の記念日までに充分間に合うとのことだったので、一も二もなく一切を同氏にお願いすることにした。時に五月十六日、原爆記念日まであと三カ月もない。

大急ぎで模造紙二枚半を接ぎ合せ、先ず実物大の下書きを作ることにした。縦一メートルを九段に分け、一段に一〇〇人を書くと、一人分が巾一・八センチ、長さ八・八センチの短冊形となり、それに一人一人名前を書き入れるのである。線を引くだけでも容易ではなかった。然し私が最も苦心したのは、「間違いない人名を洩らすことなく書き入れること」であった。遺族の判明している人は別として、不明のものは、古い記録をたどって判定する以外に方法がないので、医学部内に名碑建設委員会を設けて戴いて検討したが、それでも自信の持てないものが相当数あった。何ぶん古い記録そのものが、生残りの学生の記憶によって書かれたものであるから、医専一年生など、七月一日に入學式があつて初めて顔を合せ、一カ月余りで死んで行った多数の学生の中、数人が記録から洩れるのも無理ないことと思う。実際にそのような人が十二人程あり、その中二人は余白があつたので書き入れたが、残りの人達は後日（多分来年四月頃）追加記入することを委員会で決定していただいた。この点該遺族の方々はどうか御安心を願いたい。

五月二十日頃、いよいよ銅板（実は真鍮板）が私の家に持ち込まれた。横二メートル、縦一メートル、厚さ三ミリ、重さ五一キロ。大人二人で漸う運べる程の大きなもので、卓上に置いて坐りながら書くなど到底思ひもよらない。仕方なく応接室の机を片付けて床に平らに置き、その上に乗って書くことにした。先ず洗滌で表面の油を取り、これに鉛筆で線を引いたが、板が大きいので中々真直な線が引けない。五〇センチの定規を買って来て、一日がかりで漸う線を引きあげた。

扱て今度は字を書く番だが、油のとり方が不充分だったためか、墨がうまく板面にのつてくれない。松岡氏に電話で相談しながら、書き損じては消し、そのあとをペンジンで拭いて又書く。うっかりして一人書き落すと、苦心して書いた字を十人も二十人も消さねばならない。こんなふうで一段を書くのに丸一日かかったこともある。連日書き続けて五月末に漸う書き上げたが、長い間左肘を硬い板の上についたためか、肘が腫れて（粘液囊炎）熱を出すやら切開するやら、二カ月余りかかってどうやら風呂につけることが出来るようになった。

字を書上げると、すぐに重い真鍮板を喜々津の松岡氏宅に運び、昼夜兼行で彫刻にかかっていた。何分約九〇〇人分、三六〇〇字以上あるので、これを二カ月間で彫り上げるのは苦勞だったろうと思うが、大変几帳面な人で、方眼紙にx軸（目附け）とy軸（人数）をとり、 $y=15x$ になるよう線を引きながら、キチンキチンと彫って行かれたのには感心した。而も昼間は会社の仕事があるので、彫刻は早朝（五時から七時まで）と夜間（八時頃から夜半まで）にやられたそう。全く敬服の外はない。

彫刻のすんだ真鍮板は、約束通り七月三十一日に医学部に搬入されたが、板面を綺麗にするために、九州化学工業社で二、三日間磨きをかけ、大学工務課の岩永君ほか数人で木の枠をはめ、これを脚台にのせて、八月九日早朝、除幕式用の白布をかけ、グピロが丘の慰霊碑前に安置した次第である。

この名碑は、初めは慰霊碑の後に立っているブロック塀にとりつける予定であったが、盗難にあつたり、悪童に傷つけられる虞があるので、後日教授会の決議を待つ

て、何処か建物の壁にでも設置して戴くことにしている。

碑の製作費並に建設費には、学徒遺族会に集った寄付金を当てる積りであったが、学生ばかりでなく、先生方や看護婦達、事務職員などもこれにはいっている云う理由から、医学部及び薬学部同窓会や、生残りの同窓生達、現職の看護婦諸姉、並びに職員遺族の方々から多額の御寄贈を戴いたので、専らそれを以て当てることにした。

碑の製作費は意外に少額で事足りた。それは松岡氏が「自分は奉仕の積りでしたのでから」と云って彫刻代を固辞されたからである。然しお言葉に甘えてばかりも居られないので、金一封に次のような感謝状を添えて同氏に贈った。

感謝状

松岡 国 一 殿

あなたは私達が予て企画していた長崎医科大学の原爆死亡職員並に学生の名碑建設に当り、有力な助言を与えられると共に、死者八百七十四名の氏名彫刻に際しては盛夏中にも拘らず早朝より深夜に至るまで、全霊を傾注して卓越した技術を十二分に駆使され、茲に見事な名碑を完成されました。遺族の喜びはいうまでもなく、地下に眠る犠牲者達も定めて満悦のことと思います。この名碑は永久に長崎大学医学部構内に掲げられて、必ずや慰霊の使命を全うするものと固く信じます。本日碑の除幕式が挙行されるに当り、あなたの多日に亘る御労苦に対し、甚深の感謝を捧げて敬意を表します

昭和四十五年八月九日

長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会代表 調 来 助 (印)

名碑の写真は口絵に掲げておいたが、字が小さくて皆様にはおわかり難いだろうと思つたので、次の頁に活版ずりの表を掲載することとした。この人名表は名碑の写真と全く同じなので、人名の誤りは本誌の第八頁を参照の上、訂正して戴きたい。

原爆死亡学生の靖国神社合祀と 遺族の援護請願に関する陳情経過

調 来 助

今年行つた一連の事業の基本をなすものは、表題に示す原爆死亡学生の靖国神社合祀と、遺族援護の請願であつた。このことは既に過ぎ去つた旧聞に属するが、長崎在住の遺族代表者達が多年に亘つて苦勞して來た事実を皆様に知つて戴くために、本年六月、学生の遺族だけに配布した報告書をここに再録することとした。

報 告 書

爽やかだつた初夏も過ぎ、日中は真夏のような暑さを覚える今日この頃でございますが、皆様には恙なく健やかにお過しでございましょうか。お伺い申し上げます。

扱へ、皆様も既に新聞やテレビで御承知のことは存じますが、私共長崎在住の遺族達が多年に亘つて續けて参りました請願運動が漸く実を結び、去る二月二十七日、長崎医大の原爆犠牲学徒（医大、医専、薬専を含む）の遺族に対しては、昭和四十二年度の文部省予算から、それぞれ七万円宛の見舞金を下付されることが決定し、併せて犠牲学徒の靖国神社合祀のこともほぼ確実となりました。まことに同慶の至りに存じます。

顧りみますと、以上のような成果があるまでには幾多の迂余曲折があつて、本県選出の国会議員の方々には一方ならぬ御尽力を辱うしましたので、ここに甚深の謝意を表すると共に、これまでの経過を簡単に御報告申し上げたいと存じます。

「長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会」が初めて結成されたのは、終戦後間もない頃のことと、初代会長の鍛先清太郎様には、時局混乱の折にも拘らず種々お骨折り戴きました。三十二年七月九日御逝去の後、吉村安雄様が事務を引継がれ、吉村様の御老後は調が代つて理事長となり、今日に至つております。

毎年八月九日の原爆記念日が参りますと、長崎大学医学部で原爆犠牲者の慰霊祭が行なわれますが、その日は先ずグピロが丘にある慰霊碑の前に遺族一同が集つて、十一時二分のサイレンを合図に敬虔な黙禱をささげ、それがすむと同窓会館二階の会議室にくつろいで、当時の思い出話などかわしつつ、互に慰め合うのが慣例となつております。

ところが三十三年の慰霊祭では、わが国に国家総動員法による犠牲学徒の慰霊措置が制定されたにも拘らず、長崎医大の学生はその選に洩れて、何等の思典に浴しなかつたことが問題となり、一同はやるせない不満を叫びながら、悲嘆にくれたのであります。

その頃から二、三の遺族の間に、彼等が犬死に終らぬよう政府に陳情したいという氣運が昂まり、三十七年の慰霊祭では、全遺族が一丸となり、せめて靖国神社合祀だけでも請願しようということに衆議が一決致しました。それでこれを実行するために調は遺族名簿の整備を担当し、田吉その他は起草委員となつて一切の關係書類を作り同年十二月に吉村、滝川、田吉、大桶の四人が上京して国会及び衆参両院議長に請願書を提出し、更に倉成代議士の御斡旋によつて、靖国神社にも合祀の件を懇願しましたが、「長崎医大の学生は本質的に出征学徒や動員学徒と異っている」という政府当局の見解により、遺憾ながら取り上げて貰えず、一同は涙をのんで帰郷のやむなきに至つたのであります。

その後中沢元医学部長や後藤前医学部長からも、度々文部省並びに厚生省に対し折衝を重ねて戴きましたが、どうしても解決の糸口をつかむことが出来ず、三十八年の慰霊祭の日には、倉成代議士から懇々と本件の難かしさについてお話を承つた次第であります。

しかしその後も私達は本件を寸時も忘れることなく、三十八年十二月にも、全遺族の陳情署名などを集めて再度請願書を提出致しましたが、矢張り効果はありませんでした。

ところが四十年四月以降は、自民、社会両党代議士の超党派の運動を辱うすること

となり、併せて長崎原爆遺族会長、長崎県援護課長、長崎市民生部長の方々の援助もあつて、四十一年一月及び三月の陳情（医大学生遺族会からは滝川、田吉、大楠等が参加）が効を奏したためか、五月には文部省から調査官が長崎に來られ、つぶさに當時の状況を調査されることとなりました。

それでもなお事態はなかなか好転せず、全く予断を許さない状態でありましたので失礼とは思いましたが、四十一年夏の慰靈祭の際に、お集りの遺族の方々に御相談申し上げ、請願運動強化のため、一口千円宛の御寄付を仰ぐこととなり、昨年八月には遠隔地の方々にもその趣意書をお送りした次第であります。

幸に皆様の御賛同を得て、寄付金が次々に集まりましたので、昨年八月下旬（調、田吉、大楠、有富）、十二月下旬（滝川、蒲原、大楠、有富）、本年二月下旬（調、滝川、田吉、大楠）など頻繁に上京して陳情することが出来、前にも申し上げたように、芽出度く初志を貫徹することが出来たのであります。

この間衆議院の倉成、田口、中村、西岡各議員の方々、参議院の久保議員、厚生省援護局並びに文部省大学々術局の方々、その他地元では県、市の関係当局の方々や杉本亀吉様方に一方ならぬ温い御援助を戴きました。皆様と共に心から感謝申し上げます。

以上が見舞金下付決定に至るまでの経過で、当地の遺族の方々には、去る三月二十一日に原爆福祉会館にお集りいただき、一応詳しく御報告申し上げましたが、遠隔地の方々には遺族会名簿と一緒に届けたいと思つてゐるうちに、次々に新しい遺族が判明したため、つい遅延致しました。どうか悪しからず御諒承のほどお願い申し上げます。

尚、私共長崎在住の遺族達は唯今長崎大学医学部と提携して、原爆の犠牲となられた医大職員並びに学生達八百七十余名の氏名を真鍮板に刻んで、慰靈碑の傍に建立することを計画しております。名前は既に五月末に調が真鍮板に書き上げましたので、唯今松岡国一様が昼夜兼行で彫刻中であります。七月二十日頃には完了するそうでありますから、至急取付工事をすませ、八月九日の慰靈祭の日には、医学部主催で盛大

な除幕式を挙行したいと考えております。その節は是非お参り下さいますようお願い申し上げます。

以上甚だ遅延して申訳ございませんが、御報告を兼ね近況をお知らせ申し上げます。

昭和四十二年六月十五日

長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会

理事長	調	來	助
理事	吉村	安	雄
同	滝川	勝	
同	蒲原	盛	男
同	鎌	先	アサキ
同	田吉	チ	エ
同	大楠	琴	子
同	有富	玉	与

靖国神社靈璽奉安祭に参列して

滝川 勝

大祭は十月十七日から十九日まで三日間に亘って行なわれましたが、この度は原爆で死んだ長崎医大の学生も二百四十五名合祀されたので、私は県援護課の親心からか、長崎県代表者の一人に選ばれ、十七日正午東京都九段会館に馳せ参じて、各県代表約百二十名と行を共にしました。

十七日は夜八時から靖国神社で靈璽奉安祭が行なわれましたので、私たち各県代表者だけこれに参列しましたが、先ず初めに北白川宮殿下の御璽をあいぞの神殿からお移し申し、今回合祀される御璽二一、二四九柱（陸軍八、六七五柱、海軍四、四〇三

柱、長崎医大学生を含む準軍属八、一七二柱」と共にお祀りして、これらの御霊に対し、宮司約二十五名の「オーオー」と低く静かに呼ぶ淋しい声が身にしみ渡り、奥山のその又奥山より我が子の名を呼ぶ声、幼い子供が母の膝の上で父の名を呼ぶ声にも似て、嗚咽の声があたりの静寂に流れ、真に厳肅なものがありません。

翌十八日は大祭式典の日で、午前七時半神社差廻しのバスに乗って神社に行き、拝殿の椅子にかけて拝むことになりましたが、さすがに広い拝殿も、八百乃至千人の参拝者で一杯埋まっております。

式典は午前九時から秋雨降りしきる中を厳かに進められ、陸上自衛隊奏楽のうちに献饌の儀が終ると、池田権宮司の祝詞が奏上されましたが、二万余柱の祭神の中に我が長崎医大の原爆犠牲学徒も含まれていると思うと、自ら身の引きしまる思いがしました。

次いで雨の中を高倉掌典ほか二名が勅使として参内され、恭しく参拝の後又雨の中を下向されました。その後玉串奉献その他の行事が続きましたが、その間に武蔵野音楽大学生の大合唱「鎮魂抄」や陸上自衛隊中央音楽隊の吹奏楽「国の鎮め」などが奏せられ、荘厳なうちに和やかな空気が流れて、十時半頃式典は滞りなく無事に終了しました。

それから参拝者は次々に神殿に上って礼拝し、帰りの廊下でお神酒を戴いて九段会館に引返しました。大祭の頃は十月十六日から十一月十五日まで、中門前花壇で奉納菊花大会が催され、奉納生花展も十六日から二十日まで拝殿前南側で開かれ、十八日午前十時半からは、富山県下山獅子舞もここで行なわれることになっていましたが、私達は団体行動をとらねばならないし、又雨の為ゆくり見ること出来ませんでした。尚十七、十八、十九日の三日間は、神社の能楽堂で音楽、能、詩吟、雅楽、琵琶、奇術、日本舞踊、浪曲、歌謡曲、民謡と民舞など、多彩な奉納芸能大会が朝十時半から夜七時まであったようですが、これも見物する暇がありませんでした。

十八日午後は神社境内で記念写真撮影の後、五時から神社の大広間で懇親会が催され、宮司筑藤麿氏の挨拶の後酒宴に移り、最後に謝辞を述べる代表者が選ばれること

になりましたが、突然私が指名されたのはすっかり面喰ってしまいました。仕方がないので一同のお許しを得て、大体次のような御挨拶を致しました。

「私達は郷里出発当時から今日に至るまで、唯々感謝感激あるのみで、皆感涙にむせております。これまで闇路に迷っていた我が子が我が兄弟の御霊が、昨夜と今朝の御鎮齋で立派に護国の神となり、この靖国神社に神鎮まりましたことを目の前に見せて頂いて、私共一同これ程嬉しいことはございません。御霊たちも定めて草葉の蔭で喜んでいることと思います。私達は事情の許す限り参拝致したいと思っておりますので、どうか今後ともよろしくお願い申し上げます。」

十九日は市内見物に続いて羽田空港を見学し、午後一時半皇居に参内して両陛下から、「遺族の皆様の元気な顔を見て嬉しく思います。どうか持場々々の仕事に全力を尽し、身体を大切に暮すように。」との有難いお言葉を頂き、午後四時まで皇居内を拝観して、五時発特急「さくら」で長崎に帰って参りました。

この度の靖国神社参拝は、私が終生忘ることの出来ない感激でございました。そして今度は皆様と一緒に参拝して、あの子達の冥福を祈りたいと思っております。

【調 補記】 私も急遽東上して十八日朝の大祭式典に参列し、滝川氏と同じような感激にひたって参りました。帰途新大阪駅で遺族の一人である津和氏御夫妻にお目にかかりましたが、その他多数の遺族の方々も御参拝になったことと思います。

滝川氏の文中に「長崎医大の学生二百四十五名が合祀された云々」とあるのは、今年の大祭に間に合った人数を示すもので、その大多数は遺族代表者が、父か母であった人達であります。両親が他界されている場合は、文部省の審査が遅れて、今年の秋季大祭には間に合いませんでしたが、下付金申請者が死亡学生の三親等以内であれば、必ず受理される筈でありますから、今暫らくお待ちを願います。来年の大祭には必ず合祀されることと思います。

(昭和四二、一〇、三〇記)

原爆思い出の手記集

「忘れな草」の出版について

調 来 助

長崎医科大学職員及び学生の原爆被爆状況については、昭和三十年十月に出版された「追憶」の中に詳細に報告されているが、これは主として生残りの職員（看護婦を含む）及び学生によって書かれたもので、遺族の人達が我が子を想い、我が兄弟を偲んで書いた身近かなものは極めて少ない。被爆後二十二年を経過した今日、悲嘆にくれつつ淋しく他界された御両親も沢山あって、時期既に遅しの感がないではないが、名碑建設記念事業の一端として、茲に原爆思い出の手記集「忘れな草」の出版を敢て企てた次第である。

去る九月上旬、私は遺族の方々に一筆つつ書いて戴くよう葉書でお願いしたが、集ったのは僅か二百編足らずで、甚だ残念ではあったが、十二月中に是非出版したかったので、予定通り十月末で締切り、十一月初めから早速編集にとりかかった。尚、予算の都合上便箋二、三枚程度の原稿をお願いしたところ、中には五、六枚以上にも及ぶ長いものもあって、嬉しい悲鳴をあげている。従って私や遺族会幹部達へ対する謝辞は一切削除させて戴き、又原爆そのものを非難攻撃するような文章も勝手ながら省略させて戴いたので、その点どうか悪しからず御諒承の程お願い致したい。

手記の配列は大よそ名碑の順によることとし、冒頭に遭難の顛末を古い記録から抜萃して略記した。何も書いてないのは、講堂などで倒壊家屋の下敷となり、そのまま焼け死んだか、或いは被爆後全く行方不明となったものである。

因みに、八月九日の当日は早朝七時に空襲警報が発令され、九時解除、その間学生は各自受持の部署にっていたが、空襲警報が解除されて警戒警報にはいると、一、二年生は直ちに講堂に集合して、軍医になるための速成教育の講義をきき、三、四年生は病院にかけつけて各科の臨床実習に従事していた。講義は医大二年が病理学（梅

田教授）、医大一年が生理学（清原教授）、医専二年が衛生学（大倉教授）、医専一年が解剖学（小野教授）で、遭難顛末の記載のないものはすべて、講堂内で圧死、又は焼死したものと思われる。

尚、遭難顛末に特記すべき事項もなく、又、遺族から思い出の手記も届かなかった学生の名は、この手記集から省略させて戴いたので、五頁の名碑人名表及び巻末の名簿によって、遭難の事実を了解して戴きたい。

名碑の人名には二、三の誤字がある。それは遺族不明のため「追憶」記載の人名をそのまま転載したために生じた誤りである。

(一) 第一段中央の相川清隆は、相川清澄の誤り
(二) 第一段中央左寄りの徳山達夫は、徳山達人の誤り
(三) 第二段中央左寄りの五十嵐国人の医大一年生は、医大二年生の誤りで、荒木宗雄と生駒晋助の中間に入れるのが真実のようである

(四) 第三段中央の伊藤・国光は、伊東・国光の誤り
(五) 第四段左端の大塚彦史は、大塚彦夫の誤り
(六) 第六段右端の丸田修造は、丸田修造の誤り
(七) 第九段中央左寄りの福田穂美子は、福田穂美子の誤り
以上の外は大体に於て誤りないものと考え。

次に大学に遺っている古記録及び「追憶」に洩れていた死亡者が多数発見された。それは殆んどが医専一年生で、恐らく七月一日に入学したのち僅か一カ月余りで死亡したため、生残り学生の記憶から洩れた為だろうと思われる。その学生達は次の通りである。

(一) 医大一年 古坂 光毅	(二) 医専一年 阿部 琢磨
(三) 医専一年 浦上 康則	(四) 医専一年 秀島 克己
(五) 医専一年 藤田 正義	(六) 医専一年 古田 弘久
(七) 医専一年 宮本 幸弘	(八) 医専一年 森山 晃二
(九) 医専一年 山口 明次	(一〇) 医専一年 山下 繁
(一一) 医専一年 吉田 和郎	(一二) 医専一年 米 精一

- (三) 医専一年 力武 豊和 (四) 医専一年 中山 昭之
- (五) 医専一年 小森 巖 (六) 医専一年 高崎 倬佑
- (七) 医専一年 橋本 良平 (八) 医専一年 浜口 恭三
- (九) 医専一年 平山 勝康 (一〇) 医専一年 平山 真之
- (二) 医専一年 山之内正信 (三) 薬専三年 池田 敏明
- (三) 薬専一年 竹本 典国

以上二十三名で、十五番の小森君までは名碑製作の間に合ったが、十六番以下は間に合わず残念であった。然しこれをそのまま放棄するのは我々の本意でないので、新発見者の出揃うのを待って、必ず来年の四、五月頃には追加彫刻する積りである。

原爆記念誌「追憶」について

調 来 助

本誌「忘れな草」の中に、度々「追憶」という名前が出て来るので、このことについて簡単に一言述べておきたい。

これは昭和三十年十月、長崎大学医学部で出版されたもので、当時の長崎大学長古屋野先生の企画により、箴島教授の指揮の下に、各教室・学生・看護婦・其他から資料が集められ、長い時日と弛まざる努力の下に編纂された、貴重な旧長崎医科大学の原爆記念誌である。

表紙には古屋野先生の麗筆になる「追憶」の二字の外に、「長崎医科大学原子爆弾犠牲者の霊に捧ぐ」の添え書きがあり、既に御覧になった方や、現在御手持ちの方があられるかも知れないが、僅かに五百部しか出版されなかったので、各方面に分配された今日では、余分のものは一冊もなく、しかも絶版となっているので、容易に手に入れることも出来ない、まことに惜しい極みである。

その中には原爆の犠牲となられた各教授方のお写真や、被爆前の医大の建物、被爆直後の生々しい廃墟の写真、復興途上にある新築校舎の写真などが納められ、記事と

しては、生き残りの教授・助教授・助手・看護婦・学生たちの詳細な体験記を初め、故人を偲んだ涙ぐましい追憶の記、その他被爆死亡者の名前などが、事こまかに記されている。

この書は被爆記録を、医科大学、附属医専、附属薬専、事務関係の四部に大別し、医科大学の部では各教室を単位に、教授以下職員の前死亡者名、死亡状況、故人の追憶などが記載され、学生関係のところには、遺族や友人の思い出の手記が集められているが、遺族の手記は極めて少なく、僅かに次に掲げる二十六人に過ぎない。参考のために死亡者名及び手記執筆者名を記すと、(敬称略、括弧内は執筆者)

教 授	内藤 達男	(長女 内藤久美子)
教 授	山根 浩	(次男 山根 孝夫)
教 授	祖父江勘文	(妻 祖父江辰子)
教 授	小野 直治	(妻 小野 寿子)
助 手	伊賀由喜友	(母 伊賀 久子)
助 手	矢野 明	(妻 増田 綾子)
事務官	山木 武俊	(妻 山木 節子)
医大四年	土肥 達一	(母 土肥 トク)
医大四年	服巻 勝之	(母 服巻 光子)
医大四年	日高 和郎	(友 瀬戸口孝夫)
医大三年	片山 道生	(友 海江田芳春)
医大二年	加藤 良明	(母 加藤 梓)
医大二年	田中 淳一	(父 田中 淳直)
医大二年	溝口 哲郎	(父 溝口 陽介)
医大二年	百崎知次郎	(父 百崎 欽一)
医大一年	山田 敏夫	(父 山田 義夫)
医専三年	有富 重康	(父 有富 星葉)
医専二年	首藤 洋三	(母 首藤 きく)
医専二年	村田 由之	(父 村田 四郎)
医専一年	川上 允	(母 川上 クニ)
医専一年	調 弘治	(父 調 来助)

医専一年 関家 雅俊 (母 関家 花子)
 医専一年 隆杉 悟郎 (父 隆杉 正孝)
 医専一年 長谷 茂 (母 長谷 コト)
 医専一年 待山 俊 (母 待山 嘉子)
 葉専二年 郡家 淑郎 (父 郡家 政治)

以上の遺族の方々の中には、追憶出版以来十二年を経過した今日、既に故人となられた方が八人もあり、何故もつと早く記名碑の建設や、死亡学生の靖国神社合祀の請願運動をやらなかったかと、悔まれてならないが、どうか幸に御存命の方々は、一日も長く長生きされて、御夫君や御子息の御供養をねんごろに営まれるよう、念願してやまない。

追 憶 記

長崎大学名誉教授 古屋野 宏 平

かつて世界大戦の戦跡を巡礼して、ベルダンを訪ねた際、塹壕に銃剣の尖を連ねてそのまま爆弾の下一瞬に埋れ死んだ悲惨な光景を吊ったことがある。しかしそれは戦場であり、戦士である。無防備都市の学府で、五百有余の学徒が、講堂に教授を囲んで並殺された例が、古今東西どこかにあったであろうか。これは最初の慰霊祭に於ける祭主としての私の弔詞の一節であり、今に変らぬ感慨である。

あれから二十二年の歳月がたった。そして関係各位のお骨折りで、漸く弔慰賜金、靖国神社合祀と、それぞれ納まるべき所に安居されたのは有難いことである。当時犠牲となられ、お骨を拾った同僚並びに学徒諸君の傍は、彷彿として消えない。どうか安らかに眠り下さい。

合 掌

原爆犠牲者名碑によせて

山口県徳山市一番町四一五五 清 木 美 徳

私も日頃原爆犠牲者の有意義な記念碑が欲しいと念願していたが、それがこの度名碑の形で建立され、永久に学内に遺されると聞き洵に喜びにたえない。又近く記念誌が出版されると聞いたので、思い出すままに、断片的に、当時の有様の一部を書いてみることにした。

毎年廻りくる炎暑の原爆記念日には、死体の焦げる光景や、その臭が生々と浮び上ってくるのである。

○ 原爆を思い重ねていく年か 峯雲さへもきのこ雲かど人の世の浅ましく、憎しみの劫火に何もかも焼きつくされた原爆の日、受爆直後のことである。生臭い風にあふれながら、永井さんが額から出る血（これは調先生が止血されたとか）でテールブルクロスに目の丸を染め抜いたものが、大学本部を示す旗として、穴弘法の丘に翻っていた。

○ 血の旗や焦熱地獄の穴弘法
 自分も壕の中にいる手の施しようもない葉学生への救援隊依頼のため、その旗のもとに馳せ登った。そのところには痛ましい学長の姿もあった。その時調先生の一行は急に餓を覚えられたか、まだよく入ってもいない生藪を掘って、しきりに食べて居られた。自分も早速それをまねた。

○ 学園の劫火の煙にむせつつも 生いも食みて餓をしのぎし
 その光景は、外から見たら鬼気迫るものがあつたと思われる。

被爆後最初に迎えた夜、壕の中に学生たちと抱き合つて暖を取っていた自分は、手に足に身体に、学生の一人一人が冷たく死んでゆくのを感じた。

○ はらからの冷くなれば我肌で 温め継げり息かえさむと
 ○ 学友を動物籠に火葬する 臭は今も胸を刺し来る

次の日もこのような日が続いて、三日目に、自分は負傷した学生が山間の村に居ると聞き、三山の方へ向った。

今の薬学部近くの、川添いの女学校？まで来ると、一昨日までうやうやしく礼拝していた奉安殿が、爆風で大破し、その石段に原爆で狂ったうら若い乙女が、髪をおどろに、ずたずたに裂けた着物を着て、何か判らないことを絶叫している。それを砂ほこりを通す赤い落陽が、惨憺に照していた。

○ 夕陽あび奉安殿の崩垣に 乙女おどろに般若と狂へる

陽はようやく落ち、道明りもないまま、焼け材木や黒焦げの幾人かの死体につまずきながら更に進むと、路傍にうずくまった真黒の女の人が、私を見ると突然叫んだ。「私は稲佐に帰りたいのですが、帰れるでしょうか。そこには餓に泣く小さい四人の子供が私を待っているのです。私は死んでもそこへ行かねばなりません」。私は行ける見当は勿論つかないが、「行ける、行ける、元氣を出して頑張りなさい。」と云わざるを得なかった。しかし浦上天主堂までも行かないうちに死んだと思う。

このような哀れな地獄絵は、到るところに充ち充ちていた。ポーランドの民族学者マリノフスキーは次のようなことを云っている。百万年を越える人類の歩みのうちに、屢々種の絶滅を招くような「危険な曲り角」が現われた。人類はその都度賢く、しかも積極的に危険に打ち勝って、地球上に繁栄をもたらしたのである。人類が危険な曲り角をかわしたのは、その貧弱な生物としての能力や本能に依るのではなくて、人間自らが後天的に築き上げた「文化」に負うところが大きいと云う。曲り角の第一は火の発見、第二は一万年前に起った地球上の気候の変化、第三は宗教聖職者と支配者の結合による神の民衆からの離脱、第四の曲り角が今日の科学文明の乱用である。

生物は自分で自分を亡ぼす、いわゆる自壊作用を秘めていると云われる。人類もその例に洩れないと思う。人の世の科学の智慧も、用法を誤ると人類を全滅させる。第二の火といわれる原子力も、文化良識に従って敬虔な気持で運用しないで、若し原爆などに用いるようなことがあったら、今日の精鋭なものがどのような悲惨をもたらすか、被爆体験が身にしみるのである。

先に書いたのは唯一端に過ぎないが、あのような原爆の惨状の中に死んで行った人々は、人類がこの「危険な曲り角」に直面していることを身を以て知らせてくれた貴重な犠牲者である。残された吾々は、人類の栄光ある文化の智慧によって、何とかこの「曲り角」を切り抜けなければならない。そのすがとして此の銅板に刻まれた犠牲者を見つめながら、この人類の念願を達成すべきであると思う。

○ 自らを亡ぼす智慧のきのこ雲 払へと叫ぶはらからの声

(当時薬学専門部教授、現広島大学名誉教授)

原爆前後の思い出

元長崎医科大学附属薬学専門部教授 横 山 復 次

二十年の昔のこととて、日時がハッキリしない。ただ悲しい思い出のみがこみ上げて来る。

× × ×

長崎が原爆を受ける一カ月前から、薬学の一年生を引率して、水俣の日室工場に学徒動員として出動した。激しい爆撃で工場の生産も半身不随になり、学生は生産に従事するというより、跡かたづけに追われる状態であった。これでは仕事にならぬので、学生だけを工場にあずけて、私は大学に帰ることにした。ところが帰る予定日の前夜にまたまた大爆撃に会い、防空壕附近に落ちた爆弾で学生の一人が負傷し、水俣から少し離れた温泉宿(会社の寮)で看護していた。突如昼頃海を隔てた天草方面で、大閃光をともなった大爆音が宿の硝子をふるわせた。

天草か島原あたりの爆撃であろうと思っていたが、会社からの電話で、軍からの電話によると「特殊爆弾により長崎全滅」とのこと、急ぎ帰任すべく用意をした。用意するといつても前夜の爆撃で着換等は全くなくなり、手もとに置いた洋書が数冊残っ

ているだけである。会社の厚意で配給の着換え数枚と、米、梅干、塩、ハンゴウも貰い、リュックにつめて水俣駅に行く。数日前から鹿児島線は熊本まで不通、止むなく線路すたいに八代經由で熊本に向けて歩く。炎熱の昼間はとても歩けぬので、昼は樹蔭に野宿し、夜星の光をたよりに歩く。食料は持参した米を粥にして、梅干で生命をつなぐ。三日三晩歩き通して、熊本にたどりつく。その間不要の荷物を一つ一つ捨てた。最後に愛用の洋書も線路わきに涙と共に捨てた。

熊本にたどりつき、佐賀行き電車が出ること、ホームに寝て夜明けを待った。その間長崎爆撃の話題に耳をかたむける。市民の殆んど全部が死傷し、生き残りの怪我人は半裸の血みどろの姿で、博多方面に移動しているとのこと。佐賀につき、長崎行きの汽車を待つ。駅は長崎からの負傷者であふれている。防空壕で汽車を待つ数時間、負傷者の看護しながら話を聞くと、予想以上の被害である。大学附近には一軒の家も残っていないとのこと。弟や友人や教え子のこと、気がかりである。

道尾止りの汽車から下車して、大学へ走るように急ぐ。話に聞いた通り、道には死人があふれ、三日目というのに、道ばたの防空壕で生き残りが水を要求している。病院前の店もあとかたなく焼けている。用正薬局の人はどうなったであろうか。病院への坂道に馬が横たわって死んでいる。外科病棟の焼跡が本部とのこと、ここにかける。職員の死者名簿が張り出されている。基礎の教授の殆んど全員死亡、祖父江教授は着任二ヵ月、共に下宿で談笑していたが、死亡されたとのこと。薬学では江口、清水教授は無事とのこと、本部には古屋野院長が頭に綱帯を巻き、こわれかかった椅子にかけて、患者の治療を若い医局員と一緒にしておられる。基礎で殊に親しかった国房教授は無事で、防空壕に避難しておられるとのこと、早速見舞う。比較的元気だが、「身体がだるい、早くうちに帰って養生をしたい」と駄々をこねられる。元気な数人の学生を集め、タンカに乗せて市内の先生の下宿に運ぶ。下宿で数日間苦しんでなくなられた。角尾学長は道尾のお宮に避難して、調先生の治療を受けておられるとのこと。

患者は続々と運ばれて来るが、治療する薬品もベットの少ない。焼けくずれた病棟を

掃除して収容する。薬品がないので私の記憶をたどり、地下室や防空壕に貯蔵してある薬品を捜し出す。アルコールやベンゼン等は石油缶で相当数が発見されたが、これも後に一つ一つ盗難でなくなった。米は眼科の地下にあるとのこと、捜しに行く。爆風で米が散乱し、その上に大きな馬が死んでいる。あまりよくない部分を集めて本部にかつぎ込む。この米と塩で我々は生命を二ヵ月つないだ。

死者を片づけぬと臭くてやり切れぬ。学生を集めて、死体を結核病棟の南の空地に運び、腐材をつみ上げて焼く。頭や手足は早く焼けるが、胴部は黒くなるだけで焼けぬ。こうして我々は何百体を焼いたことであろう。国房教授も死去され、我々の手で焼く。草花一本も供えてあげられない。淋しい葬式である。

山里町の私の下宿も跡かたもない。私の鉄の寝台が道路をへだて、紙くずのようにクシャクシャになって、百米の先にくらがっている。私を可愛がってくれた下宿のオカミさんは、かまどの前で小さくなって死んでいる。その娘も女学校に入ったばかりであるが、母の横で黒くなって死んでいる。

私の研究員は一名も行方が分らぬ。助手の伊丹君、酒や煙草を運んでくれた酒屋の娘、運送屋の娘、歯医者娘等々、全然消息が分らない。生きていてくれることを切に念じる。数日後に歯医者娘の内野女史が生存し、螢茶屋の別宅で寝ていることが分り、急ぎ見舞に行く。薬がないとのこと、せめてブドウ糖の注射でもして元気をつけてやりたいと、病院に引返す。往復とも歩くので四時間歩き通し、薬を持って帰ると今息を引き取ったとのこと。苦しみ通して死んだそうであるが、死顔は笑さえ浮べて、きれいな乙女の死顔であった。ああ可哀想に！

知人の千馬町の藤原さん宅を見舞う。活水の下防空壕生活をしておられ、全員無事、御馳走ぶりに取っておきのハムと握りめしを出されたが、死人ばかり取り扱っている、ハムが死臭を思わせる匂いがして、咽を通らぬ。お嬢さん（後に調先生の仲人で小生の女房になる）から兵器の技師の消息を聞く。生き残りの傷者全員は、諫早の病院に収容されているとのこと、後十日程の間に知人の全員が死亡したと聞く。見舞にも行けず、今も心残りである。

病院でも、収容されている患者は、赤痢様の症状で苦しみながら死んで行く。私はこれ等の人を焼くのが任務になって了った。もう何百体焼いたか知れぬ。

角尾学長の収容されていた道尾のお宮に見舞う。調教授がつき切りで看護しておられる。外傷は大したことはないのに、苦しんでおられる。果物が食べたいといわれるので、近くの知人の酒造屋さんに行き、トマトと梨をもらって差し上げる。よろこんで食べて戴く。病状は刻々と悪化する。私が代れるものなら代って上げたい気持。私なんかこれから長生きしても大した仕事は出来ぬが、一代の名医といわれた角尾先生は、これから世界に活躍される人だのに。死去された後に病院に運び、古屋野委員長の下でささやかな学葬を行う。御供えする花もない。焼跡の草花を集めて御供えする。ローソクの光の下で焼跡の階段下でお通夜をする。さびしくめいるような気持、涙が止めどなく流れる。

× × ×

当時の思い出を書いていると、つぎつぎに地獄絵図が目に見え、きりが無い。この間に終戦の詔勅を焼跡で聞き、古屋野学長等居合せたものと共に泣いたが、「ああ、これで生命は助かった」という思いを持ったのは、いつわらざる気持であった。当時を回顧し、生きているよろこびを感じると共に、原爆で犠牲になられ、死んでいかれた方々の冥福を祈る。

亡き友の御遺族にお会いして

長崎大学医学部教授 西 森 一 正

八月九日は毎年申し合わせたようによく晴れて、二十二年前の焼きつくような暑さの中で、この世の終りかと悶え、怒り、天をも怨んだあの日のことを思い出します。亡き師、帰らぬ友の名が刻み込まれた記念碑が、調先生の御尽力で今年の記念日に

完成したことは、ほんとうに嬉しいことでした。

「あの子の名前が」、「主人の名が」と記念碑の前に集った人々、これが私の学友のお母さんであり、奥さん達でした。鹿児島から遙々参列された青木君、新名君、昇君、肥後君の遺族の方々と、私にとっては初めてお目にかかる方々でしたが、新名君の奥さんには、一度新婚間もない頃お会いしたように記憶します。

生き残りの少ない吾々同級では、大学にとどまるものも僅かで、現在は小児科の久野君、外科の正君と私の三名だけです。が、ともかくも相連れだつてグビロが丘を下り、私の部屋に来ていただきました。短かい時間でしたが、色々の思い出話に時のたつのを惜しむ程でした。「私の息子も生きていればあなたのようになっていたでしょうに」という老母の言葉は、私が生きているのがすまないようにさえ感じました。

戦況も不利となり、諸物資がますます欠乏の頃、実習グループの一人新名君が結婚しました。食料など集めて彼に持たせ、新婚を祝福してやった思い出がありますが、わずかの結婚生活で亡くなられた新名君に、御令息のあられたことは全くの驚きでした。而も今既に医学部に学んでおられる由、特にヒューマニストであつた新名君に代つて、立派な医師になつてくれることと思います。

私の遺骨を探しに郷里の土佐から長崎に来る途中、私の生存を知って夢かと喜んでくれた父母も、最近他界してしまいました。亡き友の御遺族の方々、どうか御自愛して下さい、と祈らずにはいられません。

昭和十七年秋、長崎医大に入学した吾々同期は、あのような悲劇に見舞われる運命にあつたためでしょうか、本土空襲の繰返される中にあつても、友情と人生の機微に満ちた学生生活を送ることが出来、これが亡き友々のなごやかな人間性のたまものであつたように思われます。

今私は母校で学生の面倒を見る立場になっていますが、この平和な時代に生きる現代の学生気質をみるにつけ、吾々の過した非常事態での学生生活をこの上なく懐しく思うとともに、清らかな青春を謳歌した亡き旧友達の顔が、人の幸福のための医学に精進せよと、私を激励しているように感じられます。

学友と原爆遭難の思い出

長崎市新大工町七一 浅 沼 桂

昭和十七年九月初旬、長崎医大入学式の日、遙々仙台から孤独を覚悟の上で来崎した私は、熊本中学時代の友人清崎裕之君を八十人の学友の中に見出した時、地獄で仏に会った程嬉しかった。

いきなりオス、フロンターレに始まった凡そ無味乾燥な医学部生活は、殊に高校文科出身の多かった吾が級では、勘なからぬ動揺のあったことは事実で、文学や哲学を生嚙りした連中の夢とは遙かに違って、勉強覚悟の充分出来ない医学部基礎時代の強行軍のもつ筈もなく、既に一年たたぬ間に幾人かの退学者や神経衰弱の落伍者を出したことは、何よりも之を雄弁に物語っている。意志薄弱では人後に落ちぬ私も、勿論御多分に洩れるものではなかった。勿論勉強覚悟で医学部生活を楽しんでいた(?)何人かの健気な連中の居たことも事実であったし、凡そ交友の狭い私には一々詳細にし得る由もなかったが、平井達也君がその数少ない一人であったことも事実であった。

入学して半年位した頃と記憶している。授業の合間に芝生の上で寝転んで解剖の本を見ていると、「解剖は面白いですな」と何のこだわりもなく、明るく話しかけて来たのが、平井達也君であった。如何にも五高龍南健児らしい豪快な風采と、物おじせぬ面魂に、何となく好感をもつて色々話すうち、彼が吾々意志薄弱組と明らかに異なる珍らしい勤勉型であることを知ったのも、当時の私には意外であった。彼の物するノートの字の美しいことは級中で定評があり、その恩恵に浴した者の多かったことは、知る人ぞ知るところであった。と云つても決して点取り虫のこちこちではなく、泥の香りのする掘り立ての蓮根その儘のような、誠に質朴そのものの好漢愛すべき男で、何人にも悪感情を抱かれることなく、その上剣術の達人で、謂わば文武両道の人であった。戦局も急迫して、昭和二十年の夏を迎えると、吾々四年生は九月が仮卒業とか

で、急に卒業試験に入り、連日B29が頭上を飛んで、何か慌しい空気が学校全体を支配していた。

八月九日の前夜は防空当直で、吾々のグループは本館に泊り、朝は九時迄で対空監視を終えたが、これが亡くなった学友と今生の別れとは、当時勿論知る由もなく、川町の下宿に歩いて帰ら着いたのが十時頃であった。朝食とも昼食ともつかぬ食事を済して、その日の新聞を拵けた途端、浦上原頭に閃光一閃、原子爆弾は炸裂した。二時頃から駅方面よりの多数の負傷者が、陸續として引きも切らず避難して来て、駅へ行くにも西山へ行くにも交通止めとなり、大学方面との連絡が全く絶え、初めて事態の容易でないことに気がついた。その夜は金比羅山中腹の農家の庭先に野宿し、翌十日朝初めて山越えて浦上平野に一步を踏み入れたが、一目見るや、アッと変り果てた姿に声を呑んだのであった。生き残った学生の話を頼りに、野に山に平井君と清崎君を一日中探して歩いた。日時ははつきりしないが、翌々日あたり変り果てた平井君の屍体を発見したのは、遙か穴弘法下方の農家前の道端であった。その屍体に「平井達也○日○時死亡」と、学友の手で書かれた紙片がはさんであったことをはつきり憶えている。そして今一人の学友清崎君を探しあぐね、若しやと下宿を訪ねてみたら、「一時間遅かった」と泣く下宿の小母さんの話に、茫然と言葉もなかった次第である。

あれから二十二年の歳月は流れ、すべては全く忘却の彼方に去って行つたが、忘れ得ぬものは友情であり、若き日の兄等の元氣な姿である。今生きていればと御両親のお嘆きの程も偲ばれて、うたた断腸の思いに堪えません。謹んで両君初め、亡き学友諸兄の在天の御霊の御冥福を衷心お祈り致します。

【御願ひ】 卷末の名簿を御覧の上、不明になっている遺族を御存じの方は、どうか左記宛にお知らせ下さいませよう、お願い申し上げます。

長崎市本原町一―二九 調 来 助

原爆死亡職員並に学生の遺族の手記

一、教授遺族の手記

(一) 内科教授兼学長 角 尾 晋



外来患者診察中に被爆、全身にガラス破片による無数の切創を受け、教室員に助けられて病院裏の丘の上で一夜を過され、翌十日朝丘を下って調理所裏の横穴防空壕に避難、十二日夜壕を出てトラックで滑石町岩屋クラブに行かれ、十三日早朝滑石太神宮拝殿に収容、種々治療の甲斐もなく、十六日頃から容態悪化し、二十二日午前十時、放射能症のため永眠さる。

遺族 東京都台東区谷中五丁目二―一四 角 尾 美 代 (妻)

八月九日グビロが丘で除幕されました名碑が、大学内に取付けられて永久に保存されます由、調先生初め皆様のお骨折りと承り、実に有難く嬉しい限りでございます。

「早くこの月日が過去って、すべてを昔語りにする日が来れば」としきりに念じつつ、ふと窓越しに見ると、故人の好物だった無花果に真夏の太陽がふりそそいで、緑の葉が目にしみました。あれから早くも二十二年経ちました。その間かたちこそ違っても、悲しみ苦しみは御遺族の皆様も一緒だったと思います。当時六人の子供を抱えていた私も、リュックを背負って買出しに、衣類の更生、乏しい食事のやりくりに追われ通しで、その後も自分の事にばかりかまけて過してしまったことを、申し訳なく思っています。

「お父様が生きていたら、責任者としてさぞつらかったろう。」という子供達の声を、何度か聞きました。私は毎年グビロが丘で皆様にお目にかかれることが嬉しくて、何となく心が安らぎました。そして黙禱を捧げた後はいつも碑文を読みました。「一九四五年八月九日午前十一時二分、我が師我が友八百五十余名は、平和の先駆者としてこの丘に散り給いぬ。」と心にくり返しながら、西山の家に帰るのが常でした

が、残念なことに三十七年からは、東京のこの家で、慰霊碑の写真の前で、御冥福をお祈りしている次第でございます。

眼を覆うあの惨状、拭い去ることの出来ないこの痛み悲しみを、平和の原動力となし得ますよう、民族も人種も超えてすべての人が平和を愛しつづけて、その上に築かれる繁栄の日を来らせ給えと、祈るばかりでございます。

【調 追記】 靖国神社秋季例大祭に詣でた翌十九日朝、私は久しぶりに奥様をお訪ねして、お健やかなお顔を拝見し、色々とお子様方の御成長振りを拝聴することが出来た。奥様に代ってお伝えすると、長男の道夫君は日本医大薬理学の助教授で、目下二度目のシカゴ大学留学中とのこと、大変アメリカが気に入られた御様子、次男の秀夫君は工学部を出られて唯今京阪急行電鉄にお勤めの由、お住居は西宮市とのこと、三男の澄夫君は長崎大学卒、諫早健保病院内科に勤務中で、私は毎週水曜日に親しくお目にかかっている。四男の貞夫君はサッポロビール川口工場勤務中であるが、近く東京本社勤めになられるとのこと、長女の綴子さんは東京医科歯科大学人類遺伝学教室の田中教授夫人、次女の愛子さんは長崎三菱造船所にお勤めの堀氏夫人、三女の紀子さんは理科学研究所勤務中の吉良氏夫人で、道夫君夫妻が外遊中の留守を守って、お母様と御一緒にお住い中であつた。唯今奥様にはお孫様が合計八人居られるようで、大変御幸福そうにお見受けした。

(二) 解剖学教授 池 田 吉 人 遺族不明



解剖学教室内で被爆、倒潰家屋から脱出して山里小学校校庭に辿りつき、翌十日言伝をもって医大に救助を求められたが、探しに行った時は既に行方不明で、その後杳として消息を断つておられた処、同年十一月二日、図らずも医大の殉難者慰霊祭の日に、半ばミイラ化した頭部顔面の遺骨とズボンのベルトが山里小学校上手の墓地で発見され、慰霊祭の式場に持ち込まれ

た。聞くところによると、夫人と幼児は自宅で即死、令嬢も一週間後死亡とのこと。

(三) 病理学教授 梅田 薫

遺族不明



医大二年生に病理学各論を講義中被爆、即死、その儘倒潰家屋と共に焼死されたが、平素愛用の煙草の罐が発見され、それによって遺骨が確認された由。家族は大草に疎開中だったので、災禍を逃れられたと思われるが、その御住所は判っていない。

(四) 衛生学教授 大倉 玄一

遺族不明



教授室内で被爆、焼死、それと確認出来る白骨で発見されたとのこと。

(五) 東亜風土病研究所 病理学教授 金子 直

直



金比羅山入口江平町に教室の疎開家を建設中被爆、家の下敷となり漸く脱出、翌十日朝本原町の神学校附近に避難中との情報を聞き、人を遣って探させたが行方不明、夫人も買物に出たまま行方不明とのこと。
遺族 佐世保市白南風町二〇一一

金子 みさを(姉)

(前略) 私は金子直の実姉でございますが、此度御通知により少しばかり思い出を

書いてみたいと思います。

直は子供の時からお医者様がすきで、九大卒業後は附属病院に勤め、新しい家庭を持って両親と一緒に春日町に住んでおりました。やがて長崎医大の教授に迎えられ、城山町に住んで、子供は男二人に女一人、幸福な家庭を作っていました。文部省の命令でドイツへ三年間留学し、戦争が益々ひどくなったので帰国しました。

それから山里町に移り、原爆に当って親子五人全滅、唯今は友義(私の孫)を直の後継ぎに致して居ります。私は今年八十才です。

(六) 生理学教授 清原 寛一

生理学教室内で被爆、その儘焼死、家族も城山町で全滅の由。



遺族 福岡市清水本町

清原 たけ(兄の妻)

(七) 法医学教授 国房 二三

遺族不明



山本事務官室で会談中被爆、漸く脱出して一夜を附近の防空壕内で明かし、後皮膚科(或いは小児科?)地下室に移り、十一日学生の担架で自宅に帰り、佐野教授の治療を受けつつ十五日死亡とのこと。

(八) 薬理学教授 祖父江 勘文

薬理学教授室のソファア上で被爆、脱出して穴弘法下の畑の土手に倒れているとこ



るを助けられ、民家附近の平地に横たわって二晩過され、後病院焼跡に移り、十一日頃佐野教授宅に引取られて手厚い治療を受けられたが、十六日午後一時死亡。

遺族 東京都練馬区下石神井

二丁目二八九

祖父江辰子(妻)

(九) 解剖学教授 高木純五郎

兼医学専門部長



解剖学教授室で被爆、脱出して運動場を横ぎり、天主堂下の川岸に倒れていたところを学生に助けられ、九日午後病院東側の丘の上に連行され、角尾学長と同じ蒲団で一夜を明かされ、十日朝調理所裏の横穴防空壕に移り、十一日午後急に症状悪化して午後七時死亡する。

遺族 岡山県井原市井原町 船石方 高木福子(妻)

(前略) 突然ながら私は元解剖の高木純五郎の家内でございます。この度は原爆犠牲者の名碑が出来、八月九日にその除幕式が行われますので、御丁寧な御案内を頂きありがたく存じます。(中略) 私戦後は生家に帰りましたが、まだ両親も居りました。又長兄と弟が満洲で生死も分りませんでしたのが、兄(奉天医大眼科)は二十二年に病院船で、弟はハルビンから中共に引っぱられ、満鉄の人と共に抑留されて二十八年に帰宅開業、当時は一同揃っていましたが両親も兄も他界いたし、今は弟が眼科を開業しています。同居家族として大した病氣もせず、田舎のことでのんびりと過していますから他事ながら御放念下さいませ。この度は是非参りたい気もしますが、何分今年の暑気の厳しさにその元氣が出ませず、二十六年学校内敷地整理の時に仮埋

葬の主人の遺骨を取りに参りまして以来、長い間御無沙汰し、今春九州に序のありました機を得て久し振りに長崎に参り、グビロが丘へだけ参りました。学校の趣きもすっかり変わり、あの丘が小さくなって建物の陰になってしまい、碑の前もさびれた感じでした。時間を急いだのと町の有様が変わって分らぬまま、花も買わずにお参りして心残りの思いを致しました。(中略) 今の学長様を存じ上げませず、解剖の先生方にも御無沙汰していますので、どうかよろしくお伝えの程お願い申し上げます。

(四二、八、六)

(一〇) 産婦人科教授 内藤勝利



八月一日の爆撃で破損した文献を図書室で整理中被爆、急いで退避のため廊下を走っている時、梁が頭上に落ち即死されたものと思われる。遺体は焼けないまま十一日午後発見された。

遺族 東京都杉並区永福町三三九

内藤幸子(妻)

光陰矢の如しとか、早いもので主人の死後二十三年目を迎えました。当時小さかった子供達も成人して、長女博子は病理の奥平雅彦に嫁し、小学五年生の男児と一年生の女兒の母親に、次女の享子は小学一年生と幼稚園児の母親となり、長崎で生れた行雄も早や二十五才、サラリーマン三年生となりました。

私も月給生活十七年、よくぞ働いて来たと思います。四人のおばあちゃまでですが、元氣一杯で、小さいながらも永福町に我が城も出来ました。毎年正月元旦には皆集って賑やかに私を慰めてくれます。「目に入れても痛くないよ」と申して可愛がっていた主人も、どこかで子供達の成長振りを眺めていて、口癖の「上出来、上出来」を連発していると信じます。行雄の動作が余りに父親に似て来たので、幼くて全然記憶のなかったのにと驚くこともあります。今通信関係の会社に勤務していますが、好きな仕事なので夢中で働いております。気だてのよい優しいお嬢さんをお嫁に迎えたいと

そののみ念願しております。幸に三人の子供達も私の苦勞を知ってか、実によくしてくれます。わが子ながら三人に助けられ、守られている唯今を有難く感謝しております。婿達二人もやさしくして呉れますので、屹度勝利が心配してこうして呉れたものと、遙かの人に感謝しております。私もこの六月に会社定年となりましたが、またこれから先やりたいことが一杯ありますので、頑張っております。

何万辺繰り返しても返らぬ過去ですが、八月九日の朝はいつもの通り元気に、私達親子に送り出されたのですが、振り返って手を振ったのが一生の別れとなってしまいました。まだまだ勉強もしたかったですし、生きていたかったと思います。長崎大学教授で大勢の学徒や職員と一緒に殉職したのは、私にとつて余りにも大きな犠牲でした。唯々「私が責任を立派に果して後からいくまで待っていて下さい」と思うのみです。待ちくたびれない内に、私も早く責任を果したいと念願しています。

奥平博子(長女)

昨年の秋のお彼岸に、私共親子四人は多摩墓地の父の墓にお参りに出かけました。掃除をすませ揃ってお線香をあげ、腰をおろして一休みした時、長男が「内藤のおじいちゃんやまはガムを食べたことある? お供えしようか。」と云って、ガムとチョコレートを墓前に供えました。何気ない子供の言葉に私は胸がつまりました。

僅か十三才までの記憶の中の父は、優しくまじめで勉強家、清潔でお酒も煙草も飲まず、子供心にも聖人のように見えました。真白な手でお得意の手品をする時は本当にこやかで、喜ぶ私達に得意氣に見せてくれました。

東京にいた頃は日曜毎に家族で連れ立って出かけました。ポパイの漫画やニュースは殆んど欠かさず見たように覚えております。そして、瘦せていた父は、ポパイのように強くなりたいとよく申しております。

昭和十六年春、長崎へ行くことが決った時、私はお友達と別れるのがいやで、半分駄々をこねたようでした。でも戦争が激化するまでは、長崎での生活も楽しい日々で、空気はよいし、食べ物も新鮮で、父は入浴の度にお腹をたいて、「太ったよ」とにこにこしていました。しかし平和な生活も、八月一日には父の部屋近くに爆弾が

落ち、原稿も図書も、研究資料も実験室もすべて一瞬の中に灰燼と化してしまって、長い間の研究が水の泡となった時、父は学者としてどんなにつらかったことなのでしょう。広島に続いて訪れたあの運命の日も、父はいつものようにカーキ色の国民服にゲートルを巻き、鉄カブトを背に出動しましたが、長い石段を降り、坂を下って振り振り返り行つたのを、見えなくなるまで見送ったのが最後でございました。

この二十年余り、九日という日は、父を偲び、父に語りかけ、父に訴え、喜びにつけ、悲しみにつけ、父を思う日でございます。私にとつて、父の姿は理想の男性像でございます。

今日まで強く生き抜き、私達を育て上げてくれた母には、感謝の氣持で一杯でございます。今後は父の分までも幸せな日々を送れますように、私共努力致したいと思っております。

本多享子(次女)

(前略) 父と一緒に過したのは生れてたった十年間、やっと物心がついた私には父の面影もおぼろでございます。もっと甘えておけばよかった、もっといたづらをして思い切り我儘を云って、叱られた思い出を残しておけばよかったと、今更ながら悔まれてなりません。やさしくて清潔な感じ、そして真面目なかたまりのような父、きちんと着、静かに正座をして机に向えばペンを走らせていた父、話しかたもどこか静かさを感じさせる父だったと記憶しております。

そんな父でもたった一度だけ叱られた記憶がございます。三才位でしたでしょうか、長袖のシャツの袖口が仲々下ろせなくて泣き出した私を叱った事を……。それ以来泣くことを止めました。

長崎に参りましてから、上京の際にはよく私がお供をしました。狭い寝台車で、父にしがみついて寝た楽しい思い出もございます。

だんだん戦争が厳しくなつて、私たちは大学の近くから離れた処に引越しました。若しかしたら海軍にでも召集されるのではないかと申し、細い腕で広い長い廊下を、甲板拭きの練習と云って雑巾がけした姿を思いますと、心から戦争を憎まずにはいら

れません。八月六日広島に原子爆弾が投下された日、父は国民服の肩の荷物を下しながら、新型爆弾の恐ろしさを夢中で話してくれました。まさか三日後に同じ爆弾で悲劇が起ころうとは、夢にも思いませんでした。

あの悲しい、そして恐ろしい最後の日、父は「患者は逃げない」と申しながら警戒警報中なのに出て行きましたが、それっきりとうとう帰って参りませんでした。

子供の時人並みに思い切り甘えたかった父はもういないのです。絶対にあり得ないことと解つていながら、あと何処かに生きていてくれたら——と昔の面影を偲んでおります。(後略)

(一一) 細菌学教授 内藤達男



細菌学教室の隣の図書室で被爆、その儘
焼死、遺骨は十五日に発見された由。

遺族 長崎市泉町六〇一

内藤昌子(妻)

とうとう当地に住みついてしまひまして
早や二十二年、老と共に記憶も霞んで参ります。(中略)

あの朝、「今明日が危いから善処せよ云々」との走り書きを幸便に託してくれました夫、前夜は当直で、八日朝、学徒動員で三菱兵器工場へ行く娘と共に家を出た切りでございました。もう電車にも乗れず、毎日南山手町から歩いておりました。

夕方負傷して無慚な姿で帰宅いたしました娘から、大学も駅も何もないことや、道中の悲惨な有様など聞きましたが、夫の死などは考えもせず、何処処理のためとのみ思つて居りました。

翌日も帰らず、十一日夜、壕から暗闇の玄関に入った時靴があり、若しやと思ひましたが、それは佐賀高等学校から帰つて来た息子でございまして、翌日から父探しに方々歩きまわりました。

十五日に当時学生だった尾崎様(現弘前大学教授)が、遺骨発見の由おしらせ下さ

いましたので、十六日皆で細菌学教室焼跡へ参り、焼けた所持品と共に遺骨を頂いて参りました。

夫は当時四十九才、先生方の御停年のことなど伺いますと、今生きていたらなど考えたり致します。未だに重傷の方々の多いことを聞きますと、一人の犠牲者ですみまして幸と思えるようになりました。

どうか真の平和が永く続きますよう、日々祈つて居ります。

【調 追記】 文中に息子とあるのは、唯今長崎大学細菌学教室の内藤達郎助教授のことで、三年間のアメリカ留学を終え、去る八月帰朝、娘とあるのは長崎大学医学部を卒業し、現在は嵯島内科出身の綿田紀孝博士夫人久美子さんのことです。

(一二) 眼科教授 山根 浩



眼科病棟で被爆、顔面及び下顎部に大きなガラス破片創を受け、精神科下の防空壕で一夜を過し、十日午前十時頃発見され、外科病棟裏の防空壕に収容、十二日夜角尾学長と共に岩屋クラブに運ばれ、十三日滑石太神宮拜殿に移る。同日より破傷風の症状現われ、十五日午後七時死亡。

遺族 島根県出雲市稗原町 山根登美(妻)

(前略) 八月九日に原爆犠牲者名碑の除幕式が行われました由、皆様も万感胸に迫る思だったことと存じます。私参列も致しませんが、大変残念に思つて居ります。

昭和二十年六月末、心ならずも子供二人連れて郷里へ参ります折に送つてくれた主人は、「この次長崎へ来た時は見違えるような町になっているだろう」と話していました。それから間もなくあの無慚な姿になって、誠に夢のようでございました。当時母が健在でしたので何かと慰め合い、たすけられて無中で過した二十年で御座います。

お蔭様で子供達は元気で、それぞれ家庭を持つようになりました。これも皆主人の蔭の力と、ただ感謝いたして暮して居ります。(下略)

【調 追記】 聞くところによると、山根教授には五人の子女があり、長男は京都

大学卒業、現在は彦根市で眼科開業中とのこと、次男は原爆当時海軍兵学校一年生、後長崎大学医学部に入学して内科学を修め、唯今は長崎市幸町にて内科胃腸科を開業中。令嬢三人はそれぞれ幸福な家庭を持たれている由。

(二二二) 医專解剖学教授 小野直治
兼学生主事

医專一年生の解剖学講義中被爆、そのまま倒壊家屋と共に焼死、教壇のあった場所の遺骨を小野教授のものと考え、大学より夫人にお届けした由。

遺族 東京都北多摩郡久留米町小山三五一 小野寿子(妻)

小野教授には三人の遺児が居られるそうで、未亡人は子供の教育のため昭和二十七年三月に四国から上京されたとのことである。今では皆さん立派に成人されていることと思う。(調記)

(二三三) 医專病理学教授 保野正之

病氣のため下宿先の永井隆助教授宅で静養中爆死。

遺族 長崎市岡町一〇一九 深井弘方 保野浩之(長男)

日本海が見える海岸端に、波の音を聞きながら父は眠っている。(島根県)

背が高く、がっちりして、色浅黒く、どんぐり目で、顎がはっていたので、学生時代「将棋」というのが父に与えられた綽名だったそう。済々登、五高、長崎医大と過した学生時代に、かなり色々と手を出したらしく、旅行、登山、馬術、バスケット。写真は特に好きだったようだ。体に似合わず酒は全く駄目だったようで、一口で顔を真赤にして横になったとか。麻雀も好きの一つで、夕食が済むとそわそわと首を長くして、誘いがかかるのを待っていたとか。

医大を卒業した父は、祖母の開業の願いを聞かずに、病理学教室で研究生生活が続けた。と言っても勉強の方はそれ程好きでなかったらしく、家に帰るところと寝ころび、「キング」とか何とかの三文雑誌に読み耽けり、又自分で料理するのを楽しみにしており、たまには「御馳走してやる」と言っ、野菜であれ、魚であれ、全く砂糖

の味しかしない御馳走なるものをふるまって呉れたと聞く。

父は話が上手く、話題も豊富で、相手の気分を害するようなことは一言も言わなかったそうだが、講義の方はどうであったか僕は知らない。従軍中の便りの中に、南京虫を押し潰したのもや、数丁の拳銃を肩や腰にぶら下げた写真などがはいっていたが、いたずら好きであったのだなど、何か楽しくなる。

太平洋戦争が始まった時から、日本は負けるとよく言っていたとか。負けると思いながら戦争に巻き込まれた父が可哀そうでならない。原爆当日父は学校に出いたとの話で、骨が学校に納められてあったが、後に、胸を患っていた父は下宿先の永井先生のお宅に帰っており、「新聞を取りに出たのを見かけた人がある」との永井先生の証言で、別の骨であることが確認された。

家族の中で、二才足らずであった僕だけが父を知らない。

(五二四) 薬専教授 杉浦孝 遺族不明

薬専の温室の窓を開き、手を差込んだ途端に被爆、窓枠に手を挟まれたまま死亡。

(五二五) 薬専教授 山下次郎

精神科に入院中病室で被爆、そのまま死亡。

遺族 東京都渋谷区西原三三四 山下太郎(兄)

二、助教授・講師遺族の手記

(一三) 生理学助教授 芦塚陽

生理学教室内で被爆、そのまま焼死。

遺族 長崎県諫早市原口町一〇五四 芦塚ウタ(母)

(一四) 古屋野外科助教授 石崎成

古屋野外科助教授室で被爆、顔面その他にひどい火傷を受け、漸く逃れ出て裏の丘で野宿、翌日古屋野外科裏の壕に収容され、治療を受けたが十一日に死亡。

遺族 愛媛県松山市湊町二二一一 石崎徳正(弟)

(前略) 兄は母の住んでいる徳山が爆撃されたのを聞き、安否を気遣って徳山にや

つて来たが、無事を知ると母のとめるのも聞かず、九日の講義に間に合うように長崎へ引返した。

その後何の便りもないので元気でやっていると思っていた処、九月初めに一通の手紙を受取った。読んでいるうちに顔から血の気の引くのを覚えた。兄一家は全滅したらしいとの知人からの連絡である。終戦直後の事とて切符がどうしても手に入らず、困って手紙を駅長に見せると貨物列車に乗れる証明をくれたので、母と二人ムシロをかぶり、途中何回もおろされてやっと長崎に着いた。

古屋野先生にお会いしてお話を聞くと、兄は被爆後四日程壕の中で手当を受けた後他界したとのこと、その間どんなに苦しかったことかなど――次から次へと頭をかすめる。先生にお暇を告げ、廃墟化した病院の焼跡をさまよい歩いている中に、いつしか兄の収容されていた壕の前に立っていた。あたりに人氣もなく、崩れかかったガラシとした建物、黒く裸になった樹木、静寂そのものの中にカラスが無気味に鳴いている。全く死の世界に一人で立っているようで気味が悪かった。何かに引かれるように壕にはいると、薄暗い中にポツンポツンと雫の音が大きく耳につく。よく見ると靴が片方ずつ脱ぎ捨てられ、ベッドや椅子が横倒しになり、アンプルや注射器が散乱している。何か当時の凄さを物語っているようである。

足下にばんやり白いものが見えたので、恐る恐る拾い上げてみるとそれは上衣で、胸の所に「石崎」と書いた名札がついていた。「兄のダッ」と叫びながらよく見ると、肩から胸にかけてベツトリと血のりがついている。暫らくは茫然とその場に立ちすくんだ。不思議な奇縁に、私はそれを抱きしめて帰ろうとしたが、老いた母の嘆きを思い、名札だけむしり取って帰った。今でもその時のことが、脳裏に焼付いてはなれない。

それから嫂と子供のいた坂本町へ行ったが、焼跡には最早何も見当らなかった。後髪を引かれる思いで、戸泉様に安置して頂いていた兄の遺骨だけを胸に抱いて、一応帰途についた。

終戦後二年、私は松山赤十字病院に勤務していたが、ある時内科勤務中の中浦先生

(長崎医大出身、兄と松山高校同期) から次の様な話があった。「長崎医大に出張した時坂本町の焼跡に立寄った処、畑にするために耕していた地主の人から、石崎さんの奥さんと子供さんのお骨らしいのが出たのでお祀りしてある。遺族の方に届けて欲しいと頼まれた。大学病院に預けて帰ったから至急受取りに行つて貰いたい。」私は早速徳山に連絡し、当時復員していた次兄に受取りに行つてもらった。

このようにして兄の一家三人は、バラバラになることなく、揃つて郷里松山に埋葬されることが出来た。さぞ地下で喜んでいることと思う。

古屋野先生、辻村先生、平井先生、中浦先生、また戸泉様には大変お世話になりました。何とお礼を申し上げてよいかな言葉もございません。

大学だけでも、八百余名の方が犠牲になられたと聞き、驚くと共に、その方々の御冥福を祈り、二度とこの様な悲惨なことが起らないようにと願いながら、私の思い出の一部を綴りました。

(二六) 古屋野外科講師 大和田野 浩 一

外来診察室で被爆、金比羅神社附近の民家に逃れ、二日後歩いて長与に出で、汽車で十一日夜彼岸の自宅に帰る。放射能障害が強く、医療の甲斐なく九月六日死亡。

遺族 佐世保市福石町四一 藤井友市方 藤井 剛(子)

(二七) 影浦内科助教授 菊 野 晴二 郎

出勤後、所用のため竹之久保町の自宅に帰り、爆死。消息全く不明。

遺族 広島県佐伯郡五日市町中町八九七 菊 野 美代子(妻)

(前略) 丁度酷暑の折であり、都合悪く、私は八月九日に行なわれた長崎大学原爆犠牲者の名碑除幕式には欠席致しましたが、去る九月中旬頃、原爆で死なれた長崎大学学生遺族に対して国から弔慰金の下賜されますことが、有線放送で私の住んでおりますこの瀬戸内海沿岸の静かな町へ流されるのを聞きまして、あたかも若くして散り逝かれた方々の悲しみを思いおこし、当町では該当学生の御遺族は一人の様でしたけれど、心からの感慨と喜びで一杯でございました。

昨年私は主人の恩師影浦先生の御病床お見舞に、長女を連れてお伺い致しましたけ

れど、長崎は大変美しく変わっておりました。そして竹之久保町へも行つて昔日の亡夫の面影を偲びましたが、あちらこちらには昔のままの影もあり、懐しく存じました。

長崎は歌に詩にございますように、人情細かな美しい町でございます。二十年あまりの歳月が流れまして、私も当時二才だった長女を本春結婚させ、胎内におりました長男は唯今東京の大学三年に在学中でございます。主人の遺業を継ぎ得なかつたことが残念でございますけれど、元気に健やかに成長致しましたことは、此上ない喜びでございます。

長崎大学の方々が国家総動員法外として国から戦歿者遺族として認めて戴けなかつたことを、いつも悲しく思っておりましたが、いつの日にか職員遺族もお認め戴くようお願いするものでございます。

遺族の方々の思出の手記記念号が出版されますに当り、つたない思出の一端を申述べました。益々遺族会の発展して参りますようお願い致します。

(一八) 生化学助教 齋藤圭一

内野教授が二十年春病死されたため教室を主宰しておられたが、教室内で爆死。

遺族 宮崎市大字瓜生野九四 齋藤恭子(妻)

(一九) 眼科助教 土江乾一

遺族不明

現職のまま応召、広島原爆にて死亡。

(二〇) 池田解剖助教 中村定八

遺族不明

外科医になる予定で休職中、山里町の自宅で被爆死亡。

(二一) 衛生学助教 福田秀信

学内で被爆死亡、但し遺体も遺骨も見当らず、全く行方不明。

遺族 高知市西町四〇 福田秀美(弟)

(前略) 八月九日グビロが丘の慰霊祭にも、母宛に御招待のはがきを頂戴し、又昨日は重ねて記念誌のために原稿を送るようにとの依頼状を賜わり、真に感慨深いものがあります。

小生三十八年十二月錦地を去り、岡山大学を経て四十一年一月下旬から高知大学の事務局長を勤めています。長崎在住時代は毎年八月九日の慰霊祭に参加しましたが、今や四国の辺地にあり、遙かに思いを山里町へ馳するのみ、しかも頂きましたお端書の名宛人は三十五年六月十三日病歿し、今や鬼籍の亡母です。母は三十四年の九月下旬長崎の拙宅を訪れし折、グビロが丘に案内し、涙を流して運の薄かった長男秀信兄を悼みましたものです。時移り、その母も八十二才で死し、七年経つて案内状が来ようとは——。当時小生は遠く南方のビルマに出征し、全然内地の状況を知らぬまま帰国し、悲惨な現実と直面したものです。

長兄秀信は親孝行で、本当に子煩悩で、円満な人物と思っていました。六年前も外地に在った小生とは、当時の本人への思い出話を書く資格も無いし、母は亡く、折角の御依頼に副い得ないのを申し訳なく存じます。先は近況を申し上げお詫びまで。

三、助手・副手遺族の手記

(二三) 薬理学助手 伊賀由喜友

薬理学教室内で被爆、そのまま死亡。

遺族 愛媛県松山市南立花町一丁目一四 伊賀久子(母)

(前略) 今年の慰霊祭は盛大に行われましたそうで、且又名碑除幕式も行われし由、遺族の一員として大変嬉しく存じます。私も一人息子原爆で亡くして後、主人、老母と次々に失い、一人淋しく暮して居ります。

今年の記念日には是非長崎へ連れて行つて、と京都の養子に頼んで居りましたところ、去る五月三日に上京して四日に二階から落ち、大腿骨の骨折をおこして表記の所(京都第二日赤病院二病棟)に入院して居ります。半年間に及びベット上の生活で、それに貴殿よりのお端書の回送も遅れ、思い出の記などは書けませんから、取りあえず近況のみ御報告申し上げます。

私は唯今老人性白内障と診断され、京都で養生する積りで上京して来まして、こん

なことになりましたので、乱筆乱文御免下さい。

(二四) 産婦人科助手 菊 地 秀 夫

産婦人科手術室で手術中被爆、その儘死亡。

遺族 佐賀県伊万里市蓮池町 菊 地 俊 夫 (兄)

長崎医大同窓の内堀氏 (戦歿) が佐賀に帰るよう誘ったそうですが、手術があるからと残ったばかりに原爆でやられたようで、両親はこのことが残念でならなかったと云っています。父は二十一年死亡し、母 (よね) も今年八十四才で、最近病氣勝ちなので、筆をとることも思うに委せず、手記を書くことも出来ませんので、代って筆をとりました。何かの参考になれば幸に存じます。

(二五) 皮膚科副手補 黒 木 重 徳 遺族不明

皮膚科外来診察所で被爆、二十一年初め原子病で死亡。

(二八) 小児科助手 佐 藤 昇

疎開準備のため山里町の自宅に帰宅中被爆、死亡。

遺族 栃木県宇都宮市南町七一〇 佐 藤 ミ ツ (妻)

(二九) 東亜風土病研究所副手 才 津 芳 雄 遺族不明

大学近くの路上で爆死、行方不明。

(三〇) 池田解剖副手 高 木 直 也 遺族不明

竹之久保町の自宅で被爆、死亡。

(三一) 調外科助手 徳 永 等 遺族不明

現職のまま応召、広島原爆で被爆、死亡。

(三二) 皮膚科助手 中 山 善 敏

皮膚科治療室で被爆、火傷を負い、一週間後北松浦郡今福で死亡。

遺族 長崎市愛宕町四四 中山善勝方 中 山 浩 介 (子)

(三三) 影浦内科助手 古 川 一 郎 遺族不明

影浦内科教室内で被爆、脱出後死亡。

(三四) 細菌学助手 三 谷 秀 夫

細菌学教室内で被爆、そのまま死亡。

遺族 東京都大田区南馬込四一三五 三 谷 シツ子 (妻)

(三五) 生化学助手 矢 野 明 遺族不明

生化学教室内で爆死。

(三六) 細菌学副手 山 田 英 子 遺族不明

細菌学教室内で被爆、脱出したが片瀨町の下宿に辿り着いて死亡。

四、医学部学生遺族の手記

(三八) 医学部仮卒業生 大 嶽 乙 哉

遺族 愛知県安城市安城町寺田 大 嶽 庄 松 (父)

「天涯孤独となって朝鮮から引揚げたあの当時の思い出」

トトロとしていたうちに乙哉の夢を見た。哀れな姿で、ニコリ笑って消えた。

長崎の方に変ったことがなければよいがと、病床の妻が淋しげに語ったのは、八月九日正午のことである。

その日の中にラジオは、敵機が三日前に広島に落したのと同じ爆弾を長崎に落して相当の被害を受けたと報じた。そして十三日頃、乙哉の下宿先伊良林町の山口様からピカドンのため被害甚大なこと、医大生も沢山死亡したこと、乙哉の消息不明であること等を知らせて来た。それでも最後の勝利を信じ、竹鎗の稽古、負傷者手当の練習を十四日夕方に行った。然し十五日の敗戦の詔勅で、朝鮮の状態は忽ち一変したのである。

妻は腹膜炎で光州道立病院に八カ月余り入院し、十一月五日死亡したので私は遺骨を首にかけ、リュックサックを背負って団隊帰国に加わり、釜山から船で山口県仙崎に上陸したのが十一月十八日朝、今迄の緊張が俄かに弛んでグッタリしてしまったが、何より先ず長崎へ。関門海峡を渡る時吃驚したのは、沢山な船艦が或いは傾き、

半ば沈没し、中にはマストだけ見えるものもあり、悲惨極まりない有様であった。

長崎に着くと第一番に、乙哉の身許保証人永井博士を医大に訪ねたが、対面すると感極つて二人共暫くは言葉も出なかった。漸くにして博士から聞き得たことは、乙哉の死亡確実のこと、博士夫人爆死のこと、二人の子供は学校に行っていて助かったこと、博士は研究室にいたが、爆発の瞬間椅子から一問程はね飛ばされたこと等であった。翌日博士の家を訪れると、トタン板十五、六枚で造られ、小さくて犬小屋にも劣っている中に、家財道具が所狭く積み重ねられていた。

長崎のこの実状を見て、妻が入院後間もない四月頃、血まみれになってその夢枕に立った次男卓哉も、既に異国で護国の華と散つたものと諦めるより外はなかった。

(註)卓哉は早稲田大学から学徒入隊し、二十年三月に豊橋陸士校から出征したとの知らせを受けていた。)

妻きよ子と乙哉、卓哉の三人まで逝つて、私は天涯孤独の身となった。乙哉憤死のこの地に又いつの日に来ることがあろう。「さらば長崎よ」も口の中、発車の汽車の汽笛に息を静め、徐ろに眼を閉じるのであった。

後記——帰郷後、卓哉はフィリピンで戦死との公報があった。私は現在日本パイプ工業株式会社代表取締役、老人会々々長等を勤めている。

(三九) 医学部仮卒業生 柴田 清

遺族 大分県佐泊市船頭町二六三 柴田好右工門(兄)

(前略) 月日の経つのは早いもので、いつの間にか二十年以上経過してしまいました。長崎に原爆投下後本人から何の通信もないので、八月二十日過ぎに親族三人で様子を眼に参りました。

長崎浦上に着くと、見渡す限り焼野が原で、草木も何にもない有様なので愈々駄目と思いましたが、大学へ行き受付で本人の死を確認することが出来ました。当時まだ大学総長(角尾学長)の遺体がそのまま安置してありましたので、焼香お参りさせて戴きました。

清の遺体を捜すため校舎に入りますと、全く悲惨な状況で、校舎入口附近にはまだ

二十人位折り重なって死んで居り、或る校舎内では医療器具や薬品が焼け落ち、その中に屍体が骨計りとなって散乱していました。二階まで行つてみましたが、廊下にも屍体があり、地獄の状態で鬼気迫り、恐怖と疲労でこれ以上捜す勇氣もなく引揚げ、土地の様子も不明なため、駅前捨ててあるトラックの荷台に二夜過したような始末でした。嫁のツヨ子も爆死し、一度に二人失いました。

今はなき母も、本人の開業を一番楽しみにして居りましたが、この悲報を聞き落胆し、死ぬまで悲しんで亡くなりました。(後略)

(四〇) 医学部仮卒業生 鈴木 四郎

遺族 長崎市古川町七一〇 神林キン(実母)

鈴木四郎は当時大学病院の角尾内科に勤務して居りました。原爆落下後帰宅(愛宕町)致しませんので、医療活動の為だから大変だろうと思つて居りましたところ、医大は全滅したと聞き、八月十一日朝、娘と二人で途中の悲惨な様子を見ながら、やっと浦上の大学病院にたどりつきました。どこへ行つて見たらよいやら見当もつかず、焼跡で「角尾内科の——」と云つて尋ねても皆首を振るばかり、やっと或る人が「角尾内科は殆んど全滅したけど助かった人もあります。お名前は何？」との言葉に、墓にすがる気持で「鈴木四郎でございます」と申しますと、「鈴木さんなら裏の防空壕に寝ておられます」と案内されて行つた時の嬉しさ、火傷の跡は顔にもどこにも見えませんでした、ガラスの破片で怪我して歩けず、やっと家から担架を仕立てて迎えに行つたのが十三日の朝でした。

当時はまだ時々空襲警報が出ており、担架をかつぐ男の方々をお頼みするのも大変でしたが、やつとの思いで愛宕町の自宅に帰りました。そして其の後も際々警報が出ましたが、私と四郎は最後まで避難せず(動けず)、座敷で警報の解けるのを待ちました。傷の手当はただオキシフルで消毒して赤チンキをつけるだけでしたので、手持の若干の薬を自分で注射したりして、傷はだんだんよくなりました。これなら大丈夫と喜んで養生に努めました、その効なく二週間位たった頃から原爆病が出はじめ、遂に八月二十九日に、二十五才の若さで一生を閉じました。上の兄達も全部死し、思

い出しても涙がこぼれて参ります。

私は昭和三十六年に主人を亡くし、今年八十才になりますが、娘夫婦と元気に過しております。末筆ながら皆様方のこの度のお骨折りを心から感謝いたします。

(四二) 医学部仮卒業生 村上 吉作

遺族 愛媛県松山市永木町二丁目官有地 村上 慈光(妻)

(前略) 村上は学生のうちから三菱造船所稻佐寮の寮医を致し、私も共に寮の一隅に住んでおりました。八月一日の大空襲では、稻佐山に二五〇キロの爆弾が落ち、山は赤土山と化し、大きな穴が一面に出来ましたが、村上は大学の救護班で活躍し、日暮れてから無事に帰宅致しました。

八月九日は寮生の診療をすませ、朝早く出て行きましたが、間もなく空襲警報が出たので、私は三才の男の子(養子)を背負って、稻佐山の中腹にある寮の壕に退避致しました。やがて解除となり、壕を出て木の下で涼んでいみると、微かにブルンという音が聞えたので、急いで子供を壕内に抱き込み、私は遊んでいる子供達に注意しようと思ひ、壕を出た途端に眼前でピカッと光り、同時に退避の鐘が鳴り出しました。私が壕に駆け込むと西の入口から黒い煙が流れ込み、沢山な人が「ヤラレタ」と叫びながら壕にはいつて来ました。どの人も顔や手足に負傷して血が流れています。私は予て村上から教えられた通りにテント油を塗ってやり、自分の白い服を裂いて包帯してあげました。やれやれと思つたら今度は自分の顔が痛みます。草野班長にみて貰つたら、「奥さんも火傷していますよ。」と云われる。頭髮もちりちりに焦げていた。草野さんに薬を塗って貰う。幸に村上が疎開していた薬が沢山あったので、その為か壕の人は死なずに無事に帰られた。不幸中の幸といえよう。

暫らくして外に出てみると、大学のある浦上方面には所々に煙が上り、長崎駅附近は盛んに燃えていた。我家が焼けているのを見て泣く人、親兄弟を案じて騒ぐ者、さでは全身皮がはがれて血まみれになった人を担架に乗せて行く、壕の中では重傷者がウンウンうなっている。

日が暮れるとガス会社の破裂の音が物凄く、長崎の町々は赤々と燃え盛る。三才の

子は怯えて父の名を呼びながら切りに泣き、私の右耳は止め度もなく痛む。不安と焦躁の中に夜は次第に更けて行く。村上はまだ帰って来ない。私はたまらなくなつて、子供を寝かせつけると暗い夜道を大学へ向つて走った。大橋のところで誰かに足を取られバツタリ倒れた。すかして見ると血まみれの手がシッカリ握つて離さない。愚図愚図すると火が私達に燃え移りそうである。不憫であるが無理に離して走った。幾度か人や馬の屍体につまずいて転ぶ。道も川も屍体の山、坐つたものは坐つたまま、物を持つたものは持つたまま死んでいる。

漸く大学病院に辿りついたが、鉄筋コンクリートが熱くて入れない。病院の前の真黒焦げの屍体を調べたが判らない。裏山へ登つて捜してみた。判らない。そのうち夜が明けたので、子供のこと心配になり壕に帰った。

翌日も夜子供が寝てから大学病院に行つた。掲示板を見ると、村上先生行方不明と書いてある。私は茫然とした。然しじつとしては判らない。早や屍体を集めて焼いている。その火の中に髪ふり乱して飛込む人もいる。私も火に近づいて突きとばされた。

四、五日して病院の中にも入れるようになったので行つてみたが、綺麗に掃除してあつて誰もいなかった。基礎教室へも行つたが一面の焼野が原で、建物も何もなかった。復員された村上の友人の方々が探して下さつたが、とうとう見つからなかった。村上はいつちもベンチを持っていたので、それを目標に探して貰つたが駄目であつた。

(中略)

私達が終戦を知つたのは八月十九日であります。まだ村上の生死は確認出来なかつたが、子供と一緒に何も出来なかつたので、一応愛媛県に連れて帰り実の親に渡しました。子供は毎日私を尋ねて泣き、三日も御飯をたべなかつたそうです。この子も今では立派に成長して、会社で元気で勤め、幸せの日を送っています。

私は四十九日の葬式の後又長崎に帰り、各収容所を尋ね歩きました。道の尾、大村、佐賀、熊本まで尋ねましたが、遂に行方が判らず、大学の慰霊祭の時に初めて村上のいた教室の看護婦さんから、村上はあの瞬間治療室に居て、すぐに床の上に伏せ

たことを聞きました。しかしその後の行方は全く不明で、私の体は弱るし、生きるに耐えない焼野が原には、白骨が山のように所々に積まれてあるばかりでした。

長い骨

長い骨を持つて見た

これは夫の手であろうか

足であろうか

短い骨を持つて見た

これはあの先生の

お骨であろうか

平らな骨を持つて見た

これはあの学生さんの

お骨であろうか

白骨の中に坐つて

胸まで白骨にうずもれて

いつまでもいたい

白骨になるまで

暮れ行く空に

虫がしきりと鳴く

焼野が原

広い焼野が原

何もない

石も瓦も煉瓦も焼けてない

広い焼野が原

大きな声で泣いてみたが

涙のつきるまで泣いてみたが

大きな声で叫んでみたが

咽の破れるまで叫んでみたが

何もない誰もいない

答えてくれる人もない

広い焼野が原

煉瓦で飛んで失つたのか

粉々に碎けて失つたのか

影も形もない 何もない

広い焼野が原

小浜の海に身をなげ死のうと考え岸辺に立てば、真黒い屍体が沢山現れて「死んではいけない。生きていて。」とみんなが止める。しかし私は悲しい。雲仙に登って、ふつふつと湧く湯の池に身をなげようと、又も死を考える。程よく人が通り、「帰りませんか。自転車に乗せてあげましょう。」と云って下さったので、長崎に帰る。夜毎毎枕は涙に濡れて泣かぬ日はない。誰かが話しかけても涙が出る。こんなことで過去一切を忘れてしまった。昨日まで話し合った人も、今日は忘れていよう人間になつてしまった。二年目に大変な下痢をして寝ていたが、その頃健康で働いていた

被災者も、次から次へと死んで行くので、私も死ぬであろうと思ひながら寝ていた。そのうち故郷の母が死病で是非逢いたいと思ひが迎えに来たので、村上と同じく長崎の土になりたいと思ひていたが、親が許してくれず、甥と一緒に松山へ帰った。

四国に帰った私は病が重くなり、足が立たず、目が見えず、歯が悪くなる、頭髮が抜ける、肝臓、腎臓、胃腸、胆嚢、脳とあらゆる病氣をして、果ては脳病院に入院し、あれは狂人だと世の中の人に笑われて、社会福祉の世話になり、貧苦と病苦に責められて死の谷間をさまよい、生きた気持は致しませんでした。仏入してより心の安らぎから幸せの日を送るようになりましたが、病はいつこの身体から去ってくれるでしょう。三十八年に腎石の大手術をしてやっと治ったと思う頃、胃潰瘍から胃癌の疑ありと癌センターに通院し、現在赤血球も白血球も少なく、糖尿もあり、手や足の腹に黒い斑点があり、九月というのに、炬燵がないと足の先が冷えて眠れぬような状態ですが、精神的に動いております。故村上と共に、核兵器禁止と世界の平和を心から祈りたいと思います。

(四二) 医学部仮卒業生 村田千秋

遺族 長崎県西彼杵郡長与村嶺里郷五九五 村田直輝(父)

(前略) 愚老こと最近胸を病んで専心療養中ではありますが、恢復の兆なく、まことに申訳ない限りであります。記念誌発行の原稿など、現下の体力ではどうにも相叶わぬ次第でございますので、悪しからず御寛恕下さいますようお願い申し上げます。実は何とか駄文の一節でもと考えまして、つい御返事も延び延びになり、返す返すも申訳ございません。

【調 追記】 村田直輝老は今年八十五才で、永年教育家として一身を捧げられ、今日に至っている。原爆で亡くなった小曾根邦弘君(一三八頁)の父上邦治郎氏は、村田老を親子二代に亘る恩師として崇拜し、老が達筆で邦弘君の辞世の歌を書かれた短冊を見せて戴いた。一日も早く御快癒のほどお祈り申し上げます。

(四五) 医学部四年生 相羽 正

当日防空監視員で何処かで被爆、即死と思われる。但し暫らく前に裏門を出るのを

見たという人もある。

遺族 東京都品川区東大井五丁目九一七 相羽 有(父)

私の次男、相羽正は大正九年五月一日生れ、長崎医大在学中、昭和二十年八月九日午前十一時二分、長崎市浜口町にて原爆の犠牲となった。享年二十五才でした。

当時、私は東京航空株式会社社長として、軍用飛行機の生産責任者であったから、戦局の不利は米軍の九州上陸も予想されたので、七月下旬、旅費三千円也を送金し、妹たちの疎開先、栃木県今市市小代四八の郷里へ急遽帰宅せよと勧告した。既に山陽線、東海道線も交通不安が予見されたから、日本海に沿うて陸路を自転車を駆使してもよいと、いまの百五十万円位の相当額を送金したのも親心でした。

命運定めなきと申しましょうか、その旅費を使つて嬉野温泉に学友とともに遊び、原爆投下の朝、長崎に帰えり、寄寓先の浜口町にて遭難したらしい。その焼失地点からベルトのバックル金具が一個だけ発掘され、その遺品から推測する次第です。

かれ二十五才の半生を回想すると、成城高校(いまの成城学園)から、長崎医大へ志したのは、親元から遠くへ離れてみたいという同級生からの誘いであつたらしい。それが休日の二日間もあると、なんにも用事がないのに長距離を夜行列車で帰宅して、やっぱり親の家が居心地がよいと述懐しては、妹たちに笑われた。

半面、はなはだ要領がいい、私の機嫌のよい時を見はからつて、洋服をおねだりする。うまい具合にお小使をせしめたり、ちよつと小器用で派手なところもあり、他家のおじさま、おばさまに愛される青年であつた。この明朗な人気が、親よりも先に亡くなることは淋しい。この世を去るには、若きにすぎるとして悲しい、嘆いてもなげいても尽きない。

私は七十二才です。人生のほんとうの生き方というのは、みずから身边を清潔にせんと心がける。周囲の人々のことをわが身のこととして考える。美しい花の咲いているのを見て、ああ、美しい花ノと素直に感じる。綺麗な小鳥の声に耳を傾けて、ああ、綺麗な鳴き声ノと素朴に聞きはれる。この恬淡さ、そういう生き方こそ、老いの与えてくれる人生への思いを深めてみると、あまりに若くして人生の真実に生きる

ことを、静かに味う機会に恵まれずに終った。かれこそ、可憐な青年として、一掬の涙をそいでいただければ有難いことと思います。

(四六) 医学部四年生 青木 武

調外科東病棟二階で待機中被爆。正確な死亡時期不明。

遺族 鹿児島県始良郡始良町平松五九〇二 古賀方 青木 松代(母)

私は昭和二十年六月九日、武を一人残して佐賀市外鍋島村に疎開致しました。それはかねがね武が、自分は卒業したら直ぐ軍医を志願する積りだから、早く疎開するようにと申して居たからです。八月六日突然帰宅して、長崎の空襲の激しさを話し、色々注意してくれました。八月二十五日に試験がすんだらすぐ帰ると云つて、元氣に出かけたのが一生の別れになろうとは、誰が予想出来ましょう。

原爆の落ちた日の夕方、私は長崎空襲の噂を聞きましたが、武は多分負傷者の治療をして元氣でいるだろうと氣にもとめずにいましたところ、十五日朝佐賀市の服巻さん(武の友人)の家を訪ねて、初めて武が爆死したことを聞き、目の前が暗くなつてしまいました。服巻さんのお子さんも重傷とのこと、毎日長崎へ出かけておられましたので、武の遺骨を持つて帰つて戴きました。それに本家の勇さんの添書がつけてあり、武は角尾学長や教授の方々と、枕を並べて火葬されたとのことでした。その後服巻さんもうとうとう亡くなられて、本当にお氣の毒でした。今一人の親友久野さんは、ガラス破片で沢山の傷を負われ、佐賀に帰つてすぐ入院されましたが、熱が高く、うわ言に武の名を度々呼ばれたそうで、深く感謝致しました。幸によく頑張り通され、今では大学小児科の助教授になられましたとか、私も大変喜んでおります。

次男の勝は、十九年四月に陸士を卒業してすぐビルマに出征し、同年八月二十九日戦死致しましたが、武は「国の為に一身を捧げたのだから、悲しまないで賞めてやつて下さい」と、涙をのんで私を慰めてくれました。そして「まだ僕がいるから母さんは心配しないでいい」と云っていました。その武も原爆で死んでしまいました。

一人ぼっちになった私はよくよく考えた末、武が可愛がつっていた次女の子供を養子に迎えることにしました。当時三才だった孫を育てるのは大変だとは思いましたが、

早いもので今年二十四才になり、元気に長崎大学医学部に通っております。四年生の青木克己がその子でございます。

私は今年七十六才の老婆で、長い間には楽しいことや悲しいことも数々ございましたが、唯今は次女の家に同居して、何不自由ない日々を楽しく過して居ります。(中略)

八月九日の慰霊祭には、次女的美津子を代理として参列しましたが、除幕式の後で、同クラスだった西森先生、久野先生、正先生方にいろいろ思い出話を伺い、感慨無量だったと申して、私にも一部始終話してくれました。写真もとって参りましたので、嬉しく拝見致しました。

(四七) 医学部四年生 今 西 章

小児科研究室で被爆、重傷を受け、眼科防空壕にて治療を受け、十日死亡。

(四八) 医学部四年生 今 村 喜 人

小児科にて遭難、諫早海軍病院に収容され、のち久留米の姉の家に行き、九月一日久留米医専附属病院にて死亡(級友 江上毅君の語)

遺族 鹿児島県大口市大島一一六九 今 村 三喜男(兄)

当時の日記から

八月二十四日、喜人の被爆を初めて知る。瀬高町の母の里から、大口駅を通る復員の兵隊さんに頼んだ走書きの紙片が、駅長さんにリレーされて届けられた。すでに二週間も経っていて、家族の驚き一方ならず、わけでも母の悲しみは、その極に達した有様なり。

八月二十六日、やっと乗車券が手に入る。途中数回列車を乗りついで、夕方瀬高の駅に着く。喜人は火傷もきれいに治り、健康そうな姿になって、「また以前よりか良かニセ(美青年)になった」と、薩摩弁で朗らかに語るのを見、老父母の顔にも少し笑がさす。

八月三十日、容態急に悪化する。散歩に出た喜人が、突然悲鳴と共に鼻血を出して庭に倒れる。早速久留米医専病院に入院、治療を受けることにした。

九月一日、いよいよ危険状態となる。然し意識は少しも衰えず、今日までの御恩を父母に謝しているのが痛々しい。「大丈夫だから元氣を出して——」。はげます家族にも、「医者だから自分の体はよくわかる。あと直ぐだから、父さん、母さん、しっかり手を握って——」。あとは言葉にならず、急に息をひきとって、永遠の眠りについていた。

見も知らぬ多数の他人様の尊い輸血の甲斐もなく、喜人の希望に反して医学を強制した父母が、医者なるが故にすべてを知っている本人を、励ましてやれるだけの言葉を知らなかったせつなきが、目に見えて悲しい。以上日記を終る。」

十九年に次男(軍医中佐)を戦死させ、喜人を亡くし、三男(海軍参謀)は南方で消息不明と、次々の悲報に心身共に疲れ果てた母は、ついに病となり、すべては夢だったと叫びつづけ、気が狂って死んでゆきました。

(四九) 医学部四年生 岩 切 達

小児科控室で被爆、穴弘法の丘に逃れ、翌日大学に降り、救護隊により時津小学校の救護所に収容された。火傷と硝子破片創、一週間後辻女子看護員の好意により、時津村浦郷の辻氏宅に移り、手厚い看護を受けたが、八月二十六日午前一時頃死亡。

(五〇) 医学部四年生 上 原 利 之

当日城山寮で即死した模様、見かけたものがないので一切不明。

遺族 鹿児島市西田町七一 上 原 すみえ(母)

慰霊祭に参列して

「利ちゃん、やっと来ましたよ。悲しい、忘れることの出来ないこの思い出の日にね。そしてあなたが昔登ったこの道を、お母さんも今登りますよ。」と見えない我が子に呼びかけながら、私は一步一步ふみしめ踏みしめ、グビロが丘の山道を登っていきました。

この二十二年間、たった一人の男の子を失った悲しみ、一日として忘れることの出来ない子どもの帰が、八月九日を迎える度に新たに、どうしようもない程大きな悲しみとなって押し寄せて来るのです。だけど今年には慰霊祭に参加して、本当によかった

と思います。このように同じ思いの方々が、大勢いらしたことを、ともすれば忘れ勝ちの私でした。

また除幕されたばかりの美しい光り輝く記念の碑、その中に丁寧に書かれた犠牲者の名前を見せただきました時の感激、筆舌に表わし得ません。

じりじりと照りつける太陽の下で、もだえながら若い命をすてた薄幸の子ども達です。平和の礎石となりながら、戦後二十二年、その平和の陰にやがて人々に忘れ去られようとしていた子ども達が、再び記念の碑の中に生き返っているのを見ました。

碑の中の子ども達は、私たちのいなくなった世の中でも、永久に大学の一隅に残ることだと思えます。そして子ども達の名前を見てくださいる方々に、再び戦争のない、平和を願う親の気持ちを読みとっていただきたいと思います。そしてこのような立派な碑の設立に努力して下さった方々へ感謝しながら、長崎を去りました。

(五一) 医学部四年生 梅原正幹

内科病棟二階で即死、級友江上毅君が同室にいて死亡確認。

遺族 兵庫県加古川市別府町別府四四一 梅原こいと(母)

昭和四十二年八月十三日、私の長男梅原正幹は、銅板にその名を刻まれた写真になつて、懐かしの我家へ、なつかしの母の許へ、歟先あさき刀自のお心づくしにより帰って参りました。二十二年振ります。

五尺七寸もある大男、二十五才で死にましたから、今は四十七才のグレースマン、医者としての働き盛りです。八月二十四日生れ、我家の正しき幹になれかしと願いをかけて名づけ、この日は両親の一生の中の一歩よろこばしい日であり、八月九日は両親の一番悲しい日です。

先に徳島医大の弟が二十二才で空襲により死亡、丁度私共は結婚してから三十六年、刻苦勉勵努力してやっと子供を教育し、一人前にして原爆と空襲で死亡、財産はすべて封鎖、財産は一切空、主人は老医となり、三十六年間働いて何を得たかと申しますと、腹立たしいことと悲しい事のみが残りました。誰を恨んでよいのか、ただ悲運と諦めるより仕方ありません。主人も二人の頼みをかけた息子を失い、淋しい晩年

で、三年前死亡し、今は私一人で三人の佛を偲びつつ、淋しく暮して居ります。七十才です。

今から思いますと、十年近い戦争で国力は衰微し、物資は欠乏して、牛馬雞犬の食べるようなものを食い、粗衣をまとい、まるで乞食のようで、今の若人から見れば想像もつかぬ見苦しい生活でした。まして戦場にある方の辛苦は思うだに胸痛み、我々一代は戦場で死なれた方々のことを思い、浮いた浮いたの心持で暮しては申し訳ないといつも思つて居ましたところ、思いもかけず我子等が一瞬にして白骨になるといふ、有史以来かつてない二千度からの高熱の世紀の新兵器で死に、また弟は空襲、戦場よりも国内の方が戦禍の巷となり、空襲に原爆に、無辜の国民が凄惨な姿で惨死し、国土は廢墟と化しましたが、西洋の独乙国民魂と並び、高く評価される東洋の日本国民は、戦前に優る復活で、若人は美衣をまとい、美化して恋愛も自由、音楽にスポーツに、大いに青春を楽しまれて、僅かの歳月でかくも復興したかと感謝すると共に、この青春の甘味に酔わずに死んだ人達を、傷ましゅう思います。

青年よ、美酒に酔うばかりでなく、その蔭に幾多の貴き傷ましい犠牲者のあることを忘れず、他日国家の中堅となられた暁には、正しい義憤に燃ゆる人となつて、益々国威を發揚して下さい、これらこの世紀の人の死を無為にしないで下さい。お願いします。

○ 小鳥さへ父母の懐家あるに 原爆の子ら父母なく悲し

○ 立ち寄らん二本若木打ち枯れて 残る老の身何に頼らん
この建碑にあたり、多数の方々の御尽力を感謝致します。

【調 追記】 梅原刀自からは度々お手紙を戴きましたが、五月十九日付のお手紙には、次のような詩が添えてありました。

長崎 医大 哀歌

世の終りかと思ふ豪音に

校舍はすべて廢墟と崩れ

学徒みな白骨化しぬ おそろしのあの

原爆落ちし日は巡り来ぬ

世界の進歩目ざましくして

生きをよるこぶこど多くあれ

グピロが丘に立つ姿なく

学びにいそしむ真摯の姿見るよしもなし

戦をなし何を待たりや」

恨みと悲しみを待たるのみなり
あとに残りし親のかなしみ
鐘の音と共に永久にたたかむ

【調 補記】 八月三日付のお手紙には、「老齡且つ炎暑のため、九日の慰靈祭には参拝出来ないから、この写真を鍛先刀自にお渡しの上参列させて戴きたい」と云つて、御自分の近影を送つてよこされた。手記の頭初に「正幹が銅板にその名を刻まれた写真となつて帰つて来た」とあるのは、鍛先刀自が銅板に刻まれている梅原正幹君の名を写真にとつて、送られたことを指すのだろうと思う。尚その手紙には、次の様な和歌四首が添えてあつた。

長崎医大名碑除幕式の日に招かれし折の母の心をよめる

- 古いぬれば遠き筑紫路訪ねかぬ 母を待たずに祭りを受けよ
- 生きてあればつくしの国もいとほねど 悲しき思ひに倒れやはせん
- テレビにて祭りの様を母は見む テレビ対面かなしからずや
- 天国でよき入めとり楽しめよ 孫に逢ふ日を母はたのしむ

(五二) 医学部四年生 大津 昇久

精神科病棟で被爆、顔面両手に火傷、十一日西山町の下宿に収容、江上毅、中野与八郎(学部三年)両君が治療したが、十五日午前十一時十八分死亡。

遺族 福岡県柳川市奥州町一六 大津 昇雲(父)

昇久の遺稿中より

- ノチレン青に染色されし空中菌 顕微鏡下に美しく見いつつ
- 重爆機轟き過ぎしあとしばし ひとときわ高く朝蟬の声
- 外科診察室朝はひそけく包帯が 庭に真白く乾されあるのみ
- 忠霊塔光らぬ空に聳えいて 一面の原にこぼろぎはなく
- キタイスカヤ街行きずりに会いしロシヤ娘 ふとも悲しきまなざしを見す
- 外はたけり狂う嵐ぞ病院船の 手術室にメスとる心冴えいむ

- 夕焼の雲映しいる水の面を 乱しつつ白く家鴨らの群
- 朝風ジャックの島に戎克の影浮ぶ 我は大連に着きにけるかも
- アカシヤの花添え来たる故郷の 母の手紙の清き香にそむ
- 雲の海の青空に切るる果て遙か 白煙浮ぶ阿蘇の頂いただき
- 風呂後はしばし落着く試験中 この頃しきり母が恋しき
- 虜われの英米人にクリスマス 許せし皇軍はまこと気高し
- 八紘の文字を刻りたるこの塔よ 肇国に連なる大東亜戦
- 我居ねば淋しどのらす父上の 此の頃とみに老い給うらし
- ひたすらに貫かむ意慾ひしひと 湧きつつ対う赤きガーベラ
- ある時の心弱りはベートヴェンの 強き意欲を深く恋いいつ

(五三) 医学部四年生 奥 和夫

精神科病棟で被爆。直後意識不明だったが、級友の尾立源和君が裏の丘にかつき上げ、調教授の手厚き看護を受けし由、翌々日ひよつこ山を下つて学友と話していたが、元氣なく、次の日調外科病棟にて死亡。

遺族 東京都杉並区荻窪一―一四八 奥 和子(母)

故奥和夫の母として、この度名碑が建立されたことを、心からお喜び申し上げます。除幕式と共に慰靈祭に御案内下され、何をさておきましても伺いたく存じますが、家の者はそれぞれ仕事を持っておりませう故、老人の私一人ではとても難かしいようにごさいますこととて、残念に存じますがこの度も失礼させて頂きます。何卒御一同様によりしく御伝え遊ばして下さいませ。

(五四) 医学部四年生 鬼塚 正英

防空待機中に被爆、自宅(長崎県北高来郡田結村)に帰つて死亡。

遺族 長崎市若竹町一七―一〇 鬼塚 正信(兄)

(前略) 弟正英の名も碑の最上段中央に刻まれることとなります由、完成の晩には私も参拝させて頂きたいと思つています。母は今年四月十日、七十才で病死致しました。父はやはり原爆で八月九日山里町の自宅で爆死して居ります。あの時末弟の隆三

郎と母は田舎に疎開して助かり、私は軍隊に行つて居りました。(後略)

(昭和四二、六、一九)

(五五) 医学部四年生 清 崎 裕 之

精神科別館の学生控室で学友大津、奥、久保君等と共に勉強中に被爆。全身に火傷を負い、その夜深更西山の下宿に帰宅、医師及び下宿の小母さんの看護も空しく、十一日午前十一時死亡。

遺族 熊本県池田町神田二二〇二 清 崎 万 代(母)

ああ二十二年前の追憶、万感胸にみちて筆も運びません。唯々在りし日を偲んで――。最後に別れましたのは七月十五日でした。自宅全焼の者は、学校から一週間の帰宅が許され帰宅しましたが、熊本の家は空襲で全焼しましたので、今は亡き父の家熊本県下益城郡豊田村へ疎開しておりました先で会い、種々とお話をし、翌日は「何かと不自由でしょう」と焼跡を見、「哀れなものですな」と云つて半焼けの食器などリュックに入れて帰りました。二三日過す中、別に変つたこともないので「いよいよ明日は長崎に帰らねばなりません」と申し、一緒に墓参りをしながら色々と話し合いました。これが儚ない人生の別れとは、神ならぬ身の知るよしもなく、永久の別れとなつてしまいました。

父は熊本市の診療所勤務でしたので、帰途父に会つて長崎に帰り、無事帰崎のことを知らせてくれました。その父に生前よく筆まめに手紙を書き、「お母さん不自由でしょうが頑張つて下さい。私は一人ですから大丈夫ですよ」と云つていたそうです。その後学友の方からお便りを頂きましたが、八月六日か七日頃、何かの当番だった時、かねておとなしい裕之が大変はしやぎ、星のかがやく夜空の下で、共に楽しく賑やかに過ごしたそうです。

翌日はあの恐ろしい原爆に遭い、よくも西山町の下宿まで歩いたことと思いましたが、あの時なればこそ勇気が出たのであらうと思われまふ。下宿では熊本へ帰りたい帰りたいと云つたそうですが、宿の小母さんから親身に介抱され、又隣家の方々の御厚意の許に永久の眠りについた由です。いろいろと書きたいことは沢山ありますが、

何もかも涙のたねのみです。

折にふれてよみしもの

- 長崎の平和の鐘はひびくとも 心のいたでいかに忘れじ
- めぐり来し今日の記念の鐘の音に 涙あらたに昔偲びて
- うれし悲しにつけいとし子の 水茎のあといつもなつかし
- 長崎の平和の記念像ながめつつ 幾万の霊よやすかれと祈る

【調 附記】 清崎君のことは、浅沼桂君の追憶文(一四頁)にも、いろいろ書かれています。

(五六) 医学部四年生 久 保 哲 雄

精神科別館で被爆、頭部に外傷を受け即死、数分後尾立(註・学友尾立源和君)が駆けつけた時は既に絶息していた。尾立君はこれを見て悲嘆その極に達す。

(五七) 医学部四年生 古 賀 典 志

小児科附近の廊下で被爆、火傷を受け、金比羅山を越えて下宿に帰り――。

遺族 福岡県大牟田市平原町二六一 古 賀 静 開(父)

典志は終戦の前々年でした。親兄弟のいる南国鹿児島に帰つて来ました。その正月は家族全員揃つての楽しい団欒でしたが、それが典志との別れになるとは、夢にも思わないことでした。

黒潮が寄せる海岸に弟達を連れて行き、潮風にふかれ、海の色を眺めながら、その平和さに心やすまる思いだったでしょう。

被爆時は医大構内で試験中であつたとか、廊下を通行中突然の閃光、思わずうつぶせになつたそうです。しかし上半身は背中が焼けただけ、倒壊した建物から這い出して、一キロほど離れた下宿先に、やつとのことで這い帰つたとのこと。そして寝ころんだまま一週間、ただ「水が飲みたい」の連続だったとのこと。以上生前の典志のことにつき一寸記しました。

(五九) 医学部四年生 園 田 哲 郎

内科三階の学生控室で被爆、全身に火傷を受け、片渕町の下宿に帰り、学友大島

(現在は浅沼)、尾立両君の看護治療を受けたが、下痢其の他の原子症を発し、最後まで妻及び叔父の名を呼びつつ、十六日午前六時頃死亡。

(六四) 医学部四年生 中尾 守男

中央廊下を歩いていたら時に被爆。級友古賀典志君の話によると、絶叫しながらバツタリ倒れたという。古賀君も今は亡きため詳細不明。

遺族 山口県大津郡黒村古市 中尾 トク子(母)

本年は大変な暑さで御座いましたが、ここ二、三日めっきり涼しくなり、そぞろ秋を思わせる頃となりました。過ぐる八月九日の原爆慰霊祭には、唯々感激の涙のみでございました。あの日の感激を心のままに

○ 平和への礎きすくいとし子よ 永久に幸あれグビロが丘に

○ 原爆で世界平和の礎を 築きし吾子に涙あふるる

○ 原爆の犠牲となりしとし子よ 鐘はひびけりグビロが丘に

○ 安らかに眠り給えよ吾子達よ グビロが丘に幸あれかしと

私は昭和二十年六月八日に、初めて長崎の土を踏んだので御座います。十日が日曜でしたので、下宿の皆さんと茂木の枇杷狩りに行きまして、一日楽しく過しました。少しばかり持って帰りましたところ、庭に一本芽が出ましたので、それを裏の畑に植替えましたが、大きくなりまして今では二メートル以上になって、毎年大きなのが実ります。それでこの木ばかりは長崎の形見だと思って、大切に育てております。

あれから二十二年、月日はどんどん流れて、最早や白髪を見るようになりましたが、元気で日暮し出来ることを朝夕感謝致して居ります。中学時代のお友達が立派な社会人として、幸福な家庭を営んで居られるのを見るにつけ、つい愚痴の出ることもあります。最早や帰らぬことであります。色々と思ひ出はつきないので御座います。すが、ひたすら冥福を祈るのみでございます。

(六六) 医学部四年生 新名 清隆

皮膚科研究室で被爆、穴弘法に避難、上半身の火傷、その後焼跡外来に収容され、十三日夜死亡、十四日妻君及び赤峰、尾立両君立合の上、火葬に付す。

遺族 鹿児島市樋ノ口町一〇一三六 新名 スミ(母)

(前略) 早速御返事と思いながら、最近手紙も書きなれませず、又そのうち風邪をひきますやら暮れになりますやらで、心ならずも遅くなつてしまいました。

あの時爆死した学生のために、いろいろお心をつかって下さいますこと、テレビや新聞などで拝見し、どんなにか力強く思っております。この度お手紙をいただき、清隆のことを、二十年にもなりますのに覚えていて下さいます由で、私は何とも感無量でございます。孫も嫁もいつも訪ねて来てくれております。

いろいろと諸願運動で御苦勞下さいます由、これで亡くなりました者の御霊も安まり、又残された家族の者も心が晴れることと存じます。どうか私共の代りによろしくお願い申し上げます。お蔭で孫も本年が成人式で、鹿児島大学医学部の専門課程一年生で勉強致しております。(昭和四二、一、二)

(六七) 医学部四年生 西 憲治

皮膚科病棟学生控室で被爆、頸部、背部、両腕に火傷を受け、一人で歩いて伊良林小学校へ行き、治療を受けた後下宿に帰ったが、その夜から高熱を発し、十六日午後十一時頃死亡。

遺族 佐世保市花園町五一六 西 トワ(母)

(前略) この度完成されました記念碑を一度参拝いたしとうございますが、私事一年前より歩行もかたないませんので、どうぞ皆様にもよろしくお伝え下さいませ。何卒よろしくお願い申し上げます。(四二、九、三〇)

(六八) 医学部四年生 昇 雅夫

皮膚科で遭難、鹿児島県牧園町の家族疎開先に帰死死亡。

遺族 鹿児島市上荒田町一〇一九 昇 マツ(母)

二人の子供を亡くした母の想い出

私は終戦当時二人の子供を長崎医大に在籍させ、長男は当時医学部四年、次男は医学部二年でしたが、在学中兄弟共に原爆の犠牲となりました。次男は校内で爆死し、その遺体さえ確認出来ぬ程でございました。どうかした時には「お母さん唯今」と云い

ながら、帰って来るような錯覚さえおぼえることがありました。兄弟共に軍医を希望して、お国の為に尽そうとよく手紙をよこしてくれました。この二人の子供を、どんなにか頼もしく思っていた愚かな母でした。

六月十六日鹿兒島が空襲を受け、焼野原になったことを心配しました長男は、弟を一週の手定で帰宅させました。「やられる時は何処にいてもやられるよ」と笑って、七月五日の一番の汽車で長崎に向いましたが、この短い一週間がこの子の最後だとはどうして思えましょう。心惜しくて胸をかきむしられるような思いが致すのです。

長男は当時校内警備中に原爆を受け、その後は現在御生存の医学部教授西森先生と裏山に逃避した様でございますが、当時のこととて放射能の恐ろしさを理解出来ないままに、弟の身を案じて校内や下宿先を隅々まで探し、併せて被爆者の手当まで致したそうで、すっかり衰弱し切った体で鹿兒島へ帰って参りました。当時鹿兒島では長崎に原爆の投下されたのも知らず、米軍が近々上陸する噂に人影もない鹿兒島を去り、私達家族は五〇キロ位離れた牧園町に疎開して、毎日食糧の買出しに一日を追われ、長崎に居ります二人の子供に、お腹の足しにもと小包を送るのが、苦しい中にも唯一一つの最上の楽しみで御座いました。こんな日々が続いていた八月十三日に、長男が生きた屍のようになって帰って参りました。その顔は原爆で黒く焼け、ガラスの破片が所狭しと云わんばかりに頭や顔に刺さり、何と云い現わしてよいか判らない位、凄惨な姿に、私も遠くなる思いでした。

次男昭二の行方を心配しながら、精神力でもって私のそばに帰って来た長男は、ドッと床についてしまいました。我が身に替えられるものならと夢中で看護いたしました。が、十八日昼頃から脈搏が遠くなって行く我が子は、自分でもわからしく、「お母さん泣くんじゃないよ、私が見守っているからね」と云い、四人の姉妹には「自分の分までお母さんを大事にしてね」と云い残し、午後五時に永遠に帰らぬ人となりました。昭和十九年四月父親が死亡する寸前、長崎から帰るや否やがついて、「お父さんしっかりして」と枕許で男泣きに泣いた長男、次男——、又ある時は角力やボール投げをして遊んでいた姿、次男を励ましながら夜遅くまで勉強していた二人の姿

が、今も私にはありありと想い出されるので御座います。

このような悲惨な戦争を起すことは大変な罪であることを、心の底から叫ばれずには居られません。雅夫よ、昭二よ、永遠に平和の守りとして、靖国の森に安らかに眠って下さい。

(六九) 医学部四年生 原田 清 己

防空当番で大煙突の下に立ち、監視中に被爆、眼科地下室で学友服巻君と一夜を明したらしいが、服巻君も死亡したので詳細不明、附近で火葬されたものと思われる。

(七〇) 医学部四年生 服巻 勝 之

大煙突下の見張所で被爆、眼科地下室に収容、佐賀から母堂、親戚がかけつけ、矢ノ平の深町家に移り、十三日午後六時半、肉親に看とられつつ死去。

遺族 佐賀市松原町中ノ小路八三 服巻 光子(母)

「死の縁無量」とは常々おきかせにあずかつて居りましたが、勝之が原爆で死ぬるなどとは夢にも思いませんでした。又その死骸をこの生みの母が自分の手で焼いて白骨になし、それを拾って家に帰らねばならないとは、全く予期せぬこととございました。

原爆というのは、生れてから見たことも聞いたこともなかったもので、それにあえば骨の髄まで腐って死ぬ残酷なものとは知るよしもなく、八月十三日に勝之の弟清をつれ、長大に面会に行ってみましたら、何万という人が折り重なって断末魔の苦しみにあえいでいました。足の踏み場もなく、其中を我子を探す一心で「勝之さん、勝之さん」と叫びながら、死体をとび越えたり踏みつけたりして、狂気のように探しあてました。今思えば二度と再びあんな所へは恐ろしくてよう行きません。その凄惨な有様は何に例えようもなく、

○ とつ国の人に見せばや生地獄 筆にかかれず云いもつくせずと詠みました。そして身も心も消え入るばかり、ふるえ上りました。

主人は、勝之が亡くなってから急に白髪がふえ、遂に十四年前に亡くなりました。来月は勝之が卒業して帰って来ると楽しんでいた矢先のこと、諸行無常は世の習い、

おきかせ頂いていた通り、本当に夢、夢、夢の人の世です。いくら悲しんでも悔んでも、過ぎ去ったことはかえりません。子の可愛さにおぼれている、私の愚かな迷いでした。何一つこの世で当てになるものはなく、ただ南無阿弥陀仏のおまこと一つが真実であることを、はつきり知らせて頂きました。

時の流れの賜ものでも申しましょうか、あれから二十二年の歳月が流れまして、いくらか心の落着きをとりのどしたようでございます。この悲惨事を通して、人生を正しく見る心の目を開かせて頂きましたことを、感謝いたして居ります。

原爆犠牲者の名碑も出来上り、その上靖国神社にも合祀される運びとなりましたこと、本人も犬死にならず、私共も身に余る光栄と深く感謝に堪えません。「どうぞ静かにお眠り下さって、後の世の平和の礎となって下さい」と、そのみ念じてやみません。 合掌

(七二) 医学部四年生 日 高 和 郎

内科外来で角尾学長と一緒に被爆、昏倒したが強心剤で意識回復、同日遅く鳴滝町の下宿に帰る。学友大島（現在浅沼）及び尾立両君の看護を受け、十二日帰宅、十七日従容として知人に礼を述べ永眠す。

遺族 福岡県田川市東区馬場 日 高 フジノ（母）

此度は靖国神社の合祀と交付金を戴き、子供の霊も喜んでいくことでしよう。毎年の御供養には何一つ出来ず、甚だ申し訳なく存じます。一度お訪ねしたく思っています、何分老令の体は意の思うにまかせず、失礼しています。何卒御容赦下さいませ。今後共よろしくお願い申し上げます。

(七三) 医学部四年生 肥 後 実

調外科病棟の何処かで被爆、午後二時頃全身火傷で伊良林校に到着、死亡していたのを学友大島君（現浅沼）が発見、その後数日して実兄が来崎し、遺骨を引取らる。

遺族 鹿児島市上之園町六九 肥 後 シギ（母）

私共の鹿児島は、長崎より先に悲惨極る戦災にあい途方にくれている所に、長崎に原爆（新型爆弾と云っていました）投下の報を聞き、夜も寝られず、我が子が無事で

あります様にと祈りながら、兄の勇が針尾海兵団に軍医として勤務していたので、何か便りがあるものと信じ、数日を過ぎて居りましたが、その当時は通信機関も絶え、如何とも致し難く、かねて知りあいの昇様（実と同期学友のお母様）を訪ね、その翌日危険だからと止める周囲の反対をおし切って、長崎へ旅立ちました。

鹿児島を出発したものの、汽車は途中線路が不通の所もあり大変でした。先ず針尾の海兵団まで辿り着き、実の兄勇を訪ねました所、医務課は診療応援のため、長崎に派遣されているとのことでした。針尾についたのが夕方でしたので、海兵団の方々が「長崎が初めてでしたら、危険だから明朝行くがよい」と教えられ、近くの旅館に泊って翌朝長崎に行き、仮診療所の新興善校に勇を訪ね、「実は如何に、元氣か」と聞いた瞬間、勇の顔を見て絶対絶望という気持がし、全身の血がひいて目の前が真暗になりました。暫らく仮診療所の一室で休ませて貰って気持を鎮めました、あとで勇の話を聞きますと、実は医大で監視中に遭難したそうですが、幸に即死をまぬかれ、裏の山を越えて伊良林国民学校にたどりつき、その防空壕の中で死んだとのことでした。当時大学生の服装をして、身に住所氏名を明記した貴重品袋をつけていたので、勇が八方手をつくして漸う遺体を探しあて、火葬にして最早骨になって居りました。私は泣く泣く勇と遺骨を抱いて鹿児島に帰り、祖先の墓地に葬りました。

その後も実の最後の地長崎を忘れることが出来ず過して居りましたところ、一昨年長崎旅行団が結成されましたので、それに参加して何度も夢に見た長崎を訪問し、一人で大学へ行つて慰霊碑のある丘に登り、小雨の中を二時間余りさまよって、心に秘めていたことを語ったり泣いたり致しました。あとで学校を訪ねましたが、日曜日のこととて誰にもお会い出来ず、そのまま鹿児島へ帰りました。今ではお墓参りすることが日課の一つになっております。

この度慰霊祭並びに名碑除幕式の御案内を受けましたので、早速鹿児島市内の方々と連絡をとり、四、五人の御遺族と一緒に七十五才の老体を孫に附添われ、グビロが丘の坂を孫に引かれたり押し上げられたりして、慰霊祭に参列させて頂きました。その後大学に残って居られる三人の同期生の先生方に、ありし日の想い出話など聞かせ

て頂き、あの子の人生を悲しく不憫に思いましたが、私達がこの慰霊祭に参列いたしましたことを、あの子も草葉の蔭から、きつと満足に思っていたことと思います。

(後略)

(七三) 医学部四年生 平井達也

大煙突下の見張所で被爆、当夜は穴弘法に避難、十一日下山の途中中学友山尾悟君に会い、墓地の上方一〇〇米余りの路傍で山尾君に護られつつ、同日午前十時死亡。

【調 附記】 平井君の思出は学友浅沼桂君の文中(一四頁)に述べられている。

(七四) 医学部四年生 穂坂純一

影浦内科四階で被爆、同日鳴滝町の自宅に帰る。割合に元気だったが、下痢、高熱が続き、八月二十日家人の手厚い看護を受けつつ死亡。

(七五) 医学部四年生 宮城美津次

内科図書室で被爆、左上下肢に火傷、外傷はない。翌日まで大学の壕に居て十一日岩屋クラブ収容、十二日吉田民造氏疎開先に移り、八月二十日同所で死亡。

(七六) 医学部四年生 宮本精一

外科外来治療室で被爆、自宅に帰って死亡した由。

遺族 香川県三豊郡仁尾町大字仁尾丁八六七 宮本文助(弟)

被爆後八月十二日午前十時頃、香川県の自宅に帰って来ました。「よく帰ったな」と云うと、「身体だけは帰ったが、生命はどうなるかわからない」と云います。余りの変り様にびっくりしました。やせて顔もほっそりと黒くなっていました。聞く途中国汽车の中で何を食べても嘔吐し、水を飲んでも吐いてしまったとのこと、帰宅しても同じ症状で、二人の医師に診てもらっていましたが、少しもよくならず、身体が衰弱して行くのみ、八月二十日頃より床にいたまま起上れず、八月二十三日午後十時ごろ家族を呼び、

○ 一富士に桜紅葉と散らんかな

○ 人生の目的は真理への道の美的探究にあり

の言葉を残し、漸次意識がうすれつつ、八月二十四日午前五時、遂に二十四才の若さで死亡致しました。思えば精神力だけで持ったものでしょう。

兄が生存中、焼けるといけないからと云って、昭和二十年初め頃送って来た荷物の中から、短歌とか随想などが出て参りました。多分昭和十七年から十九年頃に書いたものと思われます。

兄の遺稿中より

- 星こぼる夜半の大地の静けさは 人のいのちの尊かりけり
 - ひとすぢに生くるいのちの尊さを 思ひて我は堪へ行かんとす
 - 空母十ほふるといふに再襲す 敵の強大心せよいま
 - すめらぎとともに不滅と信念の 強きは云はず友は散りけり
 - 荒城の曲のラジオに聞きしづむ 月なき夜の秋は老ひたり
 - 三百余機自爆すといふわだつみは あかき夕日の深きしづもり
 - 紺碧の空の深さや白雲の 黄に移り行く秋冷えにけり
 - 思ふ人ありとは云はず故郷の 秋や白雲恋しかりけり
 - タさればさつきのみ空たまかよふ 心やすかれたらちねの上に
 - 数島の大和のくにの神つ代に かへりてぞをのこ国づくりせむ
 - 晩春のとばりを射ぬき西ひがし 照空燈は天かけり馳す
 - 更になき梅雨晴天を仰ぐごと 我が民草は風神に祈る
 - 冷たさは机につきし頬づえの 袖の汚れよしづけし我は
 - 餓えたりと心さみしも冬晴の 風の温さの思はるかな
 - 赤飯の白き湯気たちしのぼるる たらちねありて故郷菜し
- 【調 附記】 去る九月末、宮本文助氏から部厚い小包が届き、開いてみると精一君の遺稿でした。随筆や詩や短歌などで、故人を偲ぶには真にふさわしい水筆の跡でしたが、余り長くなるので、短歌三十首の中から十五首だけ抜萃させて戴きました。和歌の心得のない私が選んだのですから、適当であったかどうか、又秩序もなく並べましたから、どうかあしからずお宥し下さい。

(七七) 医学部四年生 毛利元次
遭難顛末調査書中に詳細な記載なし。

遺族 佐賀県佐賀郡大和町川上一 毛利良一(兄)

去る八月九日の慰霊祭に御案内状を戴き、参詣するの光栄を得まして、亡くなった弟も大変喜んで呉れたらうと、感激の極みで御座いました。

亡くなりました弟は私の一番末の弟で、旧佐賀中学及び佐賀高校時代から絵をかくことが好きで、よく水彩画をかくて居りました。私も油画をよく描きますが、描き出す度に何時も弟のことが思い出され、今も二階の部屋に水彩画が色あせながら、弟の帰りをボツ然と待ちくたびて居るかのような気が致して、感慨無量です。

(七九) 医学部四年生 脇川恭一
城山町の下宿で被爆、八月十一日朝帰郷。

(八三) 医学部三年生 大池未知生
北講堂で被爆、上半身皮膚剝離、外貌全く変る。学友西本に助けられ、金比羅山を越えて帰宅、諫早海軍病院に搬送され、学友新田に看守られつつ死亡(八月十日)。

(八四) 医学部三年生 大浦裕
当日は午前十時半まで学内にいたが、原爆は自宅で受けたらしい。詳細不明(学友大島正治記)

(八六) 医学部三年生 片山道生
外科外来予診室で被爆、硝子破片で腹部が切れ内臓露出、出血も強く、窓から跳び下りようとしたが及ばず、前のめりに地下薬品庫に通ずるコンクリート床上に顛落、そのまま絶命、被爆後約五分。

遺族 福岡県築上郡築城町安武 片山愛而(父)

敗戦の年七月十九日に道生が突然帰宅した。それは長男大(一軍医)の戦死の悲報を聞いたため、一家の愁傷を慰め、かつ私の医業を助けるためであった。

七月二十八日、長男の無言の凱旋と一緒に迎えたが、三十日には学校が気にかかる

と云って長崎へ旅立ち、途中九大加来教授宅に一泊して帰校したとのこと。八月十日には兄の村葬があるので、再び帰宅のため汽車の切符も既に手に入れ、友人もそのすばやきに驚いていたそうである。

八月九日は、下宿の人の話によると、十一時に調教授のポリクリがあるから、午後の汽車で帰省すると云い残して登校したとのことであった。外科患者予診中、轟然たる異様な爆音と共に閃光がひらめき、体に爆傷を受けながら玄関の方へ向い、窓から飛びおりて下の溝に落ち、そのままうずくまっていたのが彼の終焉だったらしい。

彼の郷里でも、八月七日の大空襲で小学校をやられ、死者三人、負傷者十数人を出し、私はその治療に多忙を極め、十二時過ぎ就床しようとした時、京都医大生の四男の則明が突然帰宅し、八月六日の広島島の惨状を初めて聞かされた。

八月十日の村葬には道生は帰宅せず、葬儀も空襲のためお経が断続し、行列もとぎれとぎれで辛うじて終ることが出来た。翌日次男の百禄が、長崎から何の便りもないのを心配して、行こうと云ったが、凄まじい空襲下でどうすることも出来ず、ただ寸暇なく苦悩が脳裏を襲うのみで、十五日の終戦を迎えた。

翌十六日は百禄と則明が午前二時に出発して長崎に向ったので、その後は淋しくて居ても立つてもおられず、臥しても眠れず、微睡めば長崎の夢におわれ、遂に深夜二時に隣人の谷口氏をかたらい長崎に向け出発した。当時椎田駅の切符入手は極めて困難だったが、長崎の原爆の話をすると思いが与えられ、五時二十分発で車中の人となつた。三時五十分長崎につき、下車して先ず驚いたのは、原子爆弾の威力の恐ろしさ凄惨さは全く想像もつかず、全建物は跡なく、一面焼野原と化し、至る所に髑髏、四肢骨が散在して居り、大学の玄関先には屍体が夏の日に曝され、火傷と腐爛で顔の原形も止めず、若い母は乳児を抱いたまま、又六才位の男の子は丸裸で眠るが如く伏せて、その惨状目もあてられず、頭にひらめくものは唯絶望あるのみ。

それから捜査にそうさが続けたが、道生の消息は全くわからず、くたくたになって満員の汽車にかりうじて飛び乗り、十八日午前八時に帰宅したところ、百禄達は未だ帰らず、一家慟哭してただ百禄兄弟の帰りを待つのみであった。

翌十九日九時頃、兄弟は骨を捧じて帰って来た。玄關を入ると同時に、家族一同は骨壺を囲み、皆抱き合って涙にくれるばかりであった。兄弟の話では、長崎に着いた十六日から一縷の望みにすぎり、不眠不休で原爆の焼野ケ原を歩き廻ったが見つからず、茫然自失、天を仰いで嘆息していた時、奇蹟的に足許の屍体の中に、見覚えのある五高の橘の手拭と、ウォルサムの時計（硝子は破れ、文字板はゆがみ、針は曲って十一時五分で止っていた）を確認し、変り果てた兄弟の対面となったのである。学友の海江田氏等と、大学講内の小高い丘で道生を茶毘の附し、遺骨を上衣に包んで一旦下宿に帰り、遺品と共に郷里に引揚げて来た。翌日道生の正服を前に涙を流していた妻を見て詰問したところ、一片の紙片を私に見せた。読んでみると、「諸君は戦時中学校の休みにも拘らず帰郷もせず、毎日銃後の活動にたずさわり云々」という挨拶の下書であった。

(八八) 医学部三年生 滝 口 薫

大学病院正門附近で被爆、僅かに負傷しただけで、約一カ月後自宅で死亡。

遺族 福岡県宗像郡宗像町稲元九六九 滝 口 文子（姉）

私達姉弟は、幼なくて両親兄弟と死別しましたが、叔母が福岡で刺繍店をしていましたので、叔母の許に引取られ養育されました。弟が福岡県立工業学校在学二年生の時、頼みにしていた叔母も黄泉の客となりました。その後私は主人を迎え、弟は卒業後黒崎三菱化成に入社しましたが、学歴なきを悔み、苦学する決心で長崎薬専に入学しました。しかし二年生の時、大東亜戦争勃発二カ月前に主人が応召しましたので、その後は幼児二人を抱え、弟の卒業を楽しみに学費を送り続けましたが、戦争が激しくなるにつれ、戦火の渦に巻込まれるのを恐れて、医科大学に進学させましたのに、余りにも世は無情、その弟が原爆の犠牲になろうとは――。

八月九日、弟は病院の庭に出て間もなくB29の爆音を聞き、急いで病院に引返す途中被爆、「しまった」と思ったが生きていたことに気付き、一旦裏山に逃れて教授様や学友達の手当をしていた処、自分の腕の傷が痛み、また睡が出ず苦しいので、十一日に帰宅しました。元気な姿に姉弟抱き合って嬉し泣きましたのも束の間、四、五

日後より下痢が始まり、鼻血が出てやまず、顔には火傷が現われましたので、九大病院に入院させました。私の命は半減しても、弟を助けない一心で看護しましたが、到頭駄目でした。その当時は思い出すと、いつも涙がこみ上げます。両親亡きため母子のように結ばれ、私に対しては絶対服従のやさしい弟でした。

最後の遺言は、「兄さん（出征中の私の主人）が帰るのを楽しみに、子供のため強く生きて呉れ、学校に行かせて貰い、看護までして貰って思い残すことは何もない。医者としての、解剖して今後の研究に役立てて欲しい」とのことでしたので、遺言通りに致しました。

主人も十月に戦死の公報がはいり、私達母子は、六月十九日の福岡の空襲で戦災に遭い、二十二年昔は悲しい苦しい思い出の数々でしたが、娘に婿を迎え、初孫が出来て、やっと幸福な春が訪れて参りました。弟も靖国神社に神として祭られるそうですから、安心して主人と語り合うことで御座いましょう。（後略）

(九〇) 医学部三年生 野 口 修

小児科予診室で被爆。顔面及び両腕に高度の火傷を受け、裏山に逃れ、翌日高南病院地下室に収容、八月十二日に岩屋クラブに転送され、治療を受けたが翌十三日午前四時半死亡。

(九一) 医学部三年生 花 田 紀

病院の中講堂で遭難、金比羅山を越えて下宿に帰り、その後郷里に帰って、九月十四日原子病で死亡。

遺族 福岡県嘉穂郡稲築町字鴨生三三一 花 田 静 江（母）

嗚呼、恐ろしい原爆の日から二十二年の月日が流れたが、その日のことを思うと、今でもぞつとする。

八月九日の異様なラジオ放送に、私は何となく胸騒ぎがした。落着かぬ五日間が過ぎ、八月十三日の朝を迎えたが、丁度九時頃病院の主人から電話がかかり、「紀が今長崎から帰って来たが、何も食わず大分疲れているようだから、お粥でも炊いておいで呉れ」とのことだった。私は取るものとりあえず、急いで病院に駆けつけた。院長

室を覗くと、紀は今外科で治療中とのこと、直ぐに外科の入口まで行ったら、後向きに頭から包帯を巻きつけて、丁度治療の終ったところだった。静かに近寄ると、こちらを振り向いたが、途端に胸に熱いものがこみあげて来た。

「母さん!!」。「紀さん!!」

紀の目にも涙が光っていた。母と子は抱くようにして吾が家へたどりついた。

「本当によかったね。お母さん、心配したでしょう。長崎では幾度か倒れて気が遠くなろうとしたが、いつもお母さんの姿に呼び覚まされて、ここまで生きのびて来た。戦地で兵士が、「天皇陛下万歳!!お母さん!!」と叫んで息を引きとる気持が、僕にはよくわかった。」と紀は云って、「よかった。よかった」と互に相擁して泣いた。

あの月光のさしてくる縁側で、私の大好きな千鳥の曲を、心ゆくまで吹いてくれた紀は、「最早尺八の友片山君も亡くなった。多くの友人も死んだ。あのお母さんにやさしかった加藤君も、きっと「お母さん!!」と呼んで息を引きとったことだろう。」とつぶやいて、澄みきった大空の月を、何時までもいつまでも見つめていた。

嗚呼、これが今生の別れの曲となろうとは。今頃でも月の夜はどこからとなく、千鳥の曲が聞えて来るような気がしてならない。

八月十五日、終戦の御詔勅が下った時、紀はこの未曾有の歴史の転回に、男泣きに泣いた。私達が色々と説き聞かせ、力づけ励ましたので、やっと希望を持ち直し、一日と進みゆく病苦ともよく闘ったが、遂に堪え得ず病勢急に革り、九月十四日夜、父母の目をじっと見つめつつ、いたいけにも静かに息を引きとって行った。「たとえ死んでも大死にはなりたくない。必ず世界平和の礎にならねば」と、苦しい息の中でつぶやきながら死んで行った。

本年八月九日、長崎医大グビロが丘で原爆記念追悼会がいとも懇ろに営まれ、犠牲者の名前が銅板に丁寧に彫りこまれた。「若人この下に眠る」の碑もこの日は美しき色とりどりの花に埋もれ、手向の香華はひねもす絶え間がなかった。私は暫しその中で祈りつつも立ち去り難く、グビロが丘に眠る若き人々のことを考えた。

今日も彼方の空に入道雲が湧いている。私はこの雲を見て、あの日の原爆雲を連想

した。この恐ろしい原爆禍を再び世界に与えてはならぬ!! 私は数百の若人の霊に、静かに黙禱を捧げつつ、グビロが丘を降りて行った。

○ 黙禱の眼上ぐれば雲の峰

○ 原爆忌吾子存りし日の学舎見ゆ

○ 黙禱のまなうらの子よ原爆忌

○ 原爆忌拭う汗とも涙とも

○ 黙禱の被爆の刻や鐘ひびく

【調 追記】 この文は十周年忌の追悼会から帰宅して書かれたものだそうで、最近のお手紙によると、御主人も二年後に急逝され、唯今は末娘の方と二人でお過しとのこと、この方が嫁がれたら、「残る生涯を、同じ思いの原爆御遺族の方々をお訪ねして、色々お話し合いながら、少しでも何かのお役に立つことが出来たらと、念願」して居られる由。

(九二) 医学部三年生 古川 一郎

皮膚科外来でポリクリ中に被爆、両腕に負傷、友人に助けられ裏山に逃れたが、翌十日午後四時遂に死亡。

遺族 水戸市西原町三三八八 古川 復一(兄)

私達は白い田舎道を歩いていた。それは終戦の年の八月の末だったと思う。私は妻と共に小田原の疎開先から、小学校三年を頭に四人の子供を連れ、私自身は肺結核で皆から多分死ぬであろうと云われながら、空襲の烈しくなる海軍病院から退院して、やみ切符でやっと目的地の、中国山脈に囲まれた田舎駅に降りた。東京の家は焼けたので、父母と妹が子供三人を連れて、先に疎開していた。

迎えに来てくれた妹に挨拶をして、二里の道をどう歩こうかと考えている途中、妹から「長崎の一郎が原爆で死んだってよ。大きい弟(当時長崎医大附属薬学専門部教授)は不思議に助かったんですって」と聞かされた。小田原をたつ時分から、特殊爆弾の威力は強烈だとは聞いたものの、何処か行ったことのある、当時としては立派なあの建物が全部吹き飛ぶなど、とても信じられなかった。だから心配にならぬではな

かったが、何分戦後のあの混乱した列車で、先方に着かない前に何処も乗替えをさせられ、岡山駅に着いた時は疲れ果てて、プラットホームに新聞紙をしき、何の見栄もなく汽車の出るまで寝ていた。薄情のようだけど、とても人のことまで考える余裕はなかった。一郎が死んだときいても、「やっぱりなあ」と思っただけで、それでも「大きい方の弟一人だけでも助かってよかった」と思った位である。

それから約一カ月位たって、助かった方の弟が、一郎の遺骨を持って様子を知らせてくれた。一郎は原爆の前日まで風邪で寝ていたのに、「学長の講義があるから出席しない」と云われて、登校したのだそうである。あの立派な建物の中に居て、死ぬなんて余程不運な奴だと思っていたが、後から聞くと、職員も随分なくなっただけで、大学の近くの浦上天主堂まで、殆んど跡かたもなく吹き飛んだのだから、やむを得ないとも思ったりした。多分放射能のためと思うが、外見は大した傷もなかったのに腰が立たないので、友達に支えられて大学の後の山に火を逃れ、原爆による灼熱で一面の火の海となった街を見て、弟は「敵ながら天晴な武器を作った」と感心していたと云う。翌日別に苦しみもせず死んだので、友達が火葬にしてくれたそうである。後に残った者の身として、特別の苦しみもせず、敵をはめて死んだことを、喜ばしい位に思っている。

その遺骨を持って帰って来た大きい弟が、一郎の下宿に行ったら、屋根はつぶれ、住む人もなくなつて居り、蒲団には一面にキノコがはえていたと云いつつ、雨ざらしになった弟の解剖の本など、持ち帰って来た。

一郎を全く可哀想な奴だと思つるのは、アメリカ生れでアメリカの籍を持つ人間が、アメリカの原爆で死に、日本生れの大きい弟が、学徒動員で列車がうまく遅れて、助かったことが、全く皮肉な運命だとか考えられないからである。私はこの時まで、運命は自分の手で切り開けると思っていたのに、どうにもならない巡り合せで、或る者は死に、或る者は生きる運命の不可思議さを信ぜざるを得ないのを悟った。浦上の教会も殆んど残っていないと話にきくと、原爆は世界を破滅させるものだと思う。而も今では当時の威力の何百倍もの偉力の水爆まで出来ているのである。

最近、広島、長崎の原爆映画がアメリカから帰って来て、公開、非公開が論ぜられている。広島も長崎の破壊も戦争中であつたし、広島程度の焼野原は東京、大阪でも体験しているから、本当の原爆の惨禍は世界中に知れ渡っていないが、アメリカを非難することとなく、原爆の本当の姿を見せて、将来の原爆戦争を防止すべきであると私は考えている。人間は自分が体験しないと、真の恐ろしさはわからないものらしいが、せめて映画を見せて、二度と惨禍を繰返さない警告にして頂きたい。これが原爆遺族の務であると思う。

(九三) 医学部三年生 三 島 俊 夫

九日午前十時半頃、影浦内科外来から玄関の方へ行つたのを見たものあり。何処で被爆したか不明。遺骸は自宅(城山)の焼跡でも発見されず。路上で爆死か?

(九四) 医学部三年生 山 崎 静 夫

角尾内科外来診察室で被爆、その他は全然不明。

(九五) 医学部二年生 荒 木 宗 雄

病理学講堂で被爆、脱出した模様がないのでそのまま焼死か?

(九六) 医学部二年生 生 駒 晋 助

病理学講堂から脱出して自宅に帰つたが、十五日頃から病状悪化し、十八日遂に死亡。尚死亡三日前に子供が生れたが、本人の死亡後にこれも亦世を去れりという。悲しむべし。

(九七) 医学部二年生 池 西 清

病理学講堂で被爆、一旦逃れ、汽車にて諫早中学校に送られ、手当中に赤痢を疑われて諫早伝染病院に移され、十五日午前四時頃死亡。(医学部三年 草野源一郎記)

(九八) 医学部二年生 糸 山 隼 人

病理学講堂で被爆、脱出して穴弘法へ行き救助を待っていたが、十二日母上が来られた時は既に永眠し、屍体の上に小犬が一匹うずくまっていたという。

遺族 佐賀市中ノ小路八一―二六 糸 山 綾 子(母)

私にとっては、二十二年前の長崎原爆は忘れることの出来ない最大の悲しみで、今また辿りたくない氣もありますが、亡き長男隼人の思い出として、涙ながら筆をとりました。

二十年八月十一日、医師会の方が「長崎は原爆で大変なことになりましたよ」と知らせて下さいましたので、次男を連れて服巻様と取る物も取りあえず長崎に向いました。夜半長与駅につくと、それから先は不通となっており、心ははやれどどうすることも出来ません。夜が白み初めるのも遅しと、無我夢中で歩きました。浦上に近づくにつれ、家々は倒れ、雷柱からは火をふいて燃え続けており、道端や田には、あちらにもこちらにも、目を覆いたいような悲惨な姿の亡骸が、ころがった儘です。私は心の中で念仏を唱えながら、やっと長崎医大に到着しました。

受付の方に尋ねて我が子の名前が生存者の中にあるのを知り、嬉し泣きに泣きながら「あの子は足が速いからきつと安全な場所におるに違いない」と思い、急に元氣が湧いて裏山の穴弘法の方へ駆けやるように登りました。そしてあちらこちら探しましたが、一向に見当りません。段々と不安にかられながら山を降りて来ました。すると丁度隼人のお友達の方が床の上に寝て居られたので尋ねますと、「糸山君は昨日まで私と一緒におりましたから、多分山の方です」と苦しい息の下から申されたので、勇氣を出して又山へ登りました。今度は山道にうずくまったり横たわったりした亡き方々を片っ端から覗き込みながら登って行きました。中腹あたりでやっとのことでは我が子の姿を見つけましたが、ああその時は息も絶えていたのです。肉親にも見とられず、ただ苦しみ続けた末、あたら二十才の生涯を終えてしまったのです。さぞかし熱かったです。淋しかったでしょうと、ただ茫然と氣も遠くなるばかり、炎天下の死骸を見つめておりました。枕元には白い子犬がぼんとうずくまっていたいました。

暫らくたってふと氣を取り戻してあたりを見ると、あちらこちらから白煙が立昇っており。よく見ると屍体を焼く火葬の煙でした。私も思い切って周辺の木片を拾い集め、丁度トタンがあったのでその上に隼人を寝かせ、木を積み重ねて火をつけました。長い時間かかってやっとお骨にし、それを私の防空頭巾に入れて泣く泣く山を

下って駅に向いました。本当にあたり一面地獄とはこのことと思いました。駅には一瞬に五人も家族を亡くされた方もおられました。やっと汽車にも乗れて、張りつめた心もぐったり放心したようになり、悲しみに沈みながら、子供に助けられて帰宅しました。

その後は毎日靴の音を聞いている、あの子がひょっこり帰宅したのではないかと待ち続けたりしました。いつも真先にレコードをかけて静かに耳を傾けていましたが、そのレコード盤の何百枚かも、未だに手も付けずにそっとしまっているのです。

あれから早や二十二年、今でも亡き隼人の年令を数え続けております。戦争というもの恐ろしさ、悲惨な地獄の姿をまざまざと見て、これは人間世界の何という不幸な運命だろうかと悲しみに堪えません。人類は日増しに進歩していながら、戦争だけはいつの世にも止むことなく繰返し、今日ベトナムでも未だに続いております。どうか長崎原爆のような悲しい出来事は再び繰り返さないように、一日も早く全世界が明るい平和に包まれますように、世界の皆様をお願いしたい氣持で一杯です。

(一〇〇) 医学部二年生 江 口 宏

病理講堂で被爆、脱出後病院に行き、十二日父君が来られたが、看護の甲斐なく、皮膚科地下室で死亡。

遺族 佐賀県神埼郡三田川町田手一五九〇 江 口 虎三郎(父)

長崎の原爆から既に二十二年の歳月が流れました。二十二年も経てば凡そ記憶も薄らぎ、忘却の中に消えて行くのが世の常でございますが、あの日あの時ばかりは、今も尚昨日の出来事のように、例えようもなく脳裏に痛々しく、悲しく、深刻に刻み込まれて、日毎に襲う心のうずき苦しみは、忘れ去る術もございません。(中略)

私が宏の所に辿り着いたのは八月十二日の早朝で、その時宏は高北病棟の地下室に収容されて居りました。ここには二、三十名の学生が収容されていて、中には既に息絶えている者もあり、全身火傷で誰であるか判別つかない者もあり、苦痛のため半狂乱の叫びをあげている者もあり、阿鼻叫喚の巷でありました。

宏は外傷は全然なく、一見大丈夫の如く私もほっとした氣持でしたが、体に触って

みますと、細かくひっきりなしにピリピリ震えています。これは唯事ではないとの恐れに頭はうずきました。それから容態は刻々悪化の方向を辿り、十二日晩頃から高熱が出、十三日になつては血液を混じったひどい下痢が起つて、翌十四日午後九時五十分息を引取つたのでございます。

「お父さん、アツという暇もなかったよ。お父さん、ロシヤも敵の方に参戦したのですか。あー」と云つて悲しむ宏でした。十三日夕方になつてもう駄目だと思われる状況になつた時、遺言せよとは云いきれず、「友人が佐賀に行かれるそうだが、お祖父さんやお母さんに何か言伝はないか」と聞きました処、「何もなし」と云うのでした。

十四日昼頃になつて本人も死の覚悟をしたのでしよう、「お父さん、永らく御世話になりました。心配ばかりかけてすみませんでした」と、父に袂別の言葉を述べるのでした。この時の私の心中、表現の言葉とてありません。今之をしたためながら、私は滂沱として落つる涙を止めることも出来ないで御座います。

十四日暮色迫ると共に、宏の死期の近しいことが感受されたので、「遺言はないか」と申しましたけれども、この時は最早応答はありませんでした。

私が今日でも何としても諦めきれぬことは、宏を郷里に連れて帰れぬことでした。十二日夕刻の汽車で帰ることにし、学長の証明書を貰つて駅へ行きましたが、駅は姪々長蛇の人の列、実に長い時間を要してやっと私の番になつたので、学長の証明書を出した処、これは駄目、市役所の証明書を持つて来いと云うのです。「子供の命が案ぜられる急場で、大学生でもあるから此の証明書で許して下さい」と拜まんばかりに頼みましたが、頑として聞入れて貰えず、詮方なく市役所の証明書を貰つて再び駅に行き切符を貰つた時は、汽車の時間がとうに過ぎ去つていて、帰ることは出来ませんでした。翌十三日は高熱とひどい下痢のため、動かせなくなつてしまいました。

十四日夜宏は息を引取り、私は涙も渫れ果てて唯茫然自失、宏の骸にすがりつき、しつかり抱いて一睡もせず、翌十五日、心配して来て頂いた海江田博士父子に手伝つて貰つて茶匙に付し、遺骨を携えて郷里に帰りました。

私宅では勿論長崎の斯る状況を知る由もありません。突然帰つて内の者の失神せんばかりの驚愕を想像すると矢も楯もたまず、予め知らせる方法はないかと考えましたが、電報も打てず電話をありません。詮方なく午後八時頃家に帰着しました。家族一同の眼は私の白布の包みに集中し、唯茫然と言葉もなく見つめるばかり、祖父はとうとう失神して倒れてしまいました。

長男宏は死にました。甥の一馬（私の妹の長男、薬学二年生）も、そして二十数名の薬専の学生諸君も亡くなりました。骨肉を分けた子、学生諸君も又私の子も同然、皆花なら蕾、開花の時期も遠からず、将来への夢、理想や希望が胸中に楽しく描かれていたろうに。親も子等の成人を喜び、行末に大きな期待を持ち、楽しく眺めていたものを。私は悲しう御座います。今も尚夢の中の出来事のように思えてなりません。宏が「只今」と云つて玄関に現われるような気がします。学生諸君が「先生遊びに来ました」と云つて、うちにはいつて来るような気がします。

はつと我に帰り、現実には最早私の前に現われることのない子等と知つては、涙で御座います。思い出さぬ日は一日とてなく、泣いて送つて来た二十二年で御座います。

私の余生幾何か、今後とも同じ思いの悲愁の中に、日を送ることでありましよう。

この度長崎医科大学の学生諸君が靖国神社に合祀されることとなり、併せて大学の山上に見事な記念碑が建立され、子供等も学び舎の中に一緒に相会する場を持つことが出来て、現世であつたように相集い、相興じているのではありますまいか。本当にありがたい御座いました。

【調 附記】 江口虎三郎氏は、当時長崎医科大学附属薬学専門部長でした。

(一〇一) 医学部二年生 小 川 三 郎

病理講堂で被爆。脱出して病院地下室に避難、十四日午後九時頃死亡。

遺族 大阪府八尾市東山本新町二二四 小 川 千 年（母）

昭和十九年九月中旬、大連駅を多くの友人親戚に見送られ、長崎医大に入学のため勇ましく旅立ちました。内地は初めての生活、風習、言語が異り、さぞ不自由であつたらうと思われれます。度々の便りに書いて居りました。

一年間は無事に過ぎ、学業が愈々身につく頃となって恐ろしい原爆に斃れました。哀れな子——三郎、大連にてラジオで知りました。内地との交通も通信も途絶え、どうにもならない状態になり、終戦後は流言飛語の乱れと暗黒の中に、内地引揚げの日を待ち続けました。

愈々二十一年二月に引揚命令が下り、貨物船に乗って佐世保に着きました。長崎に寄って様子を見たかったのですが、監督下にあつて身勝手な行動もとれないので、その儘専用列車で家へ帰りました。佐世保で医大学生さんの慰問を受けた時、原爆当時の模様を聞いてみましたが、二年生は殆んど駄目だったと聞き、前々から覚悟はしていました。また悲しみを新たに深くしました。

郷里の岡山に着きますと、仏壇に三郎の遺骨がまつられ、皆からお悔みを述べられたので、初めて死んだことを確認致しました。

その後、大病院の地下室で死亡直前にお会い下さった多田正様（註、葉専三年多田哲雄君の御遺族）から委しいお便りを頂きました。独り子の御子息の安否を気遣われ、約十五里の道、しかも炎天下を駆けつけて、三日三晩お捜しになつても見付からなかったそうで、三郎の居た地下室に行かれた時には、死んでいる人の側で目をパチクリさせている人、目もあてられぬ程苦悶している人、丸裸で息も絶え絶えに「お母さん!!」と叫びながら、お父さんの手を握りしめて死んで行く人、多くは丸裸でコンクリートの上に直かに、或いは菰包用の藁の上に猿又一つでころがっていて、三郎は幸に藁の上にシャツ、猿又をつけていたそうですが、全くこの世の地獄の有様だったとのこと。

その時三郎は多田様を呼びとめて、「あなたの持っている水筒の水を飲ませて下さい」とお願いしたそうで、すると多田様は「水をやることは止められているが、そんなに云われるなら——」と、一杯程の水を飲ませて下さったとのことでした。水を飲み終ると、二人の間に次のような会話が行なわれたそうです。

三郎「一言是非お願いがあります」。多田様「何ですか、云って御覧なさい」。三郎「僕は幼い頃父を亡くして母の手一つで育てられました。僕は一週間以内にきつと死

ぬから、それまで生きていた間、あなたをお父さんと呼ばして下さい。僕はお父さんに見守られながら死にたいんです」。多田様「それは易いことだが、あなたは元氣だから必ず治ります。充分静養なさい。お母さんは今何処ですか」。三郎「大連香月台一小川チトセ。私が死んだ後で母にこのことを知らせて下さい。そして達者で幸福にと書き添えて下さい」——。

多田様のお手紙には、「同じ地下室で親御に見守られながら死んで行く学生が、余程涙ましかつたと見えます」と結んでありましたが、これを読んだ時の私は、胸も張り裂けんばかりでした。

三郎は幼少の頃から親孝行者で、小学校の作文に自由題が出ると、必ず親孝行のことを書いて先生から五重丸を貰い、そつと私に見せていました。今では二十二年前の苦しみ悲しみを忘れ、安らかに靖国神社に祀られた三郎を幸福者と喜んで居ります。

愛知県海部郡七宝町大字徳美字郷四九 山田 妙子（姪）

（前略）生前哲学好きだった弟とは、よく「生とは何ぞや」、「死とは——」と、夜が更けるまで語り合ったものでした。「充実した価値ある人生を送り、死を無駄にしない」と云っていた弟の死が、これで決して無駄でなかったことが本当に嬉しゅうございました。日頃無神論者的なことを云っている私も、これでよかったのだ、弟もさぞかし喜んでくれたことだろうと信じております。被爆学生の死後、魂の居所までお与え下さいました皆様の御厚意に感謝いたします。

【調 補記】 千木松逸子女の手記（四三頁）中にも、小川三郎君のことが詳しく書かれている。

（一〇三） 医学部二年生 大 東 弘

病理講堂で遭難、夕方西山町の下宿まで生還、体には致命的外傷はないが、視力障害と全身倦怠を訴え、同宿の友人に看護を受け一時快方に向つたが、十七日午前七時十分死亡。

遺族 京都市中京区錦小路通烏丸東入 大 東 ふく江（母）
（前略）思い返せばあれから早くも二十二年の歳月を経て、八月九日の原爆記念日

には例年紙上にて御様子を拝見致しまして、當時を遙かに偲んで居ります。

弘は今年は休暇がないと云いながら、七月二十三日頃帰宅して、整理などしては旧友を訪れて三十一日に我家を出しましたが、これがこの世の別れになるとは知るよしもございませんでした。長崎まで三十二時間かかって無事に着いたとの便りが、最後となっていました。

八月一日に爆弾が投下されて休校となり、九日には講義に出席して倒壊家屋の下敷となりましたが、這い出して七時頃下宿に帰り、療養中遂に十七日に亡くなったと、同宿の方よりの知らせを受けました次第でございますが、今だに何処かに生きているように思われます。(後略)

(一〇五) 医学部二年生 奥 田 滉一郎

病理講堂で被爆、直ちに穴弘法に逃れ、十一日に小児科病棟横の水源地に移り、治療を受けたが十二日に同所の防空壕で死亡。

(一〇六) 医学部二年生 奥 村 巖

病理講堂で遭難、そのまま死亡。

遺族 京都府船井郡園部町南八田 奥 村 進(兄)

(前略) さてあのように非業の最後をとげたものの、決して大死ではありません。

広島、長崎と続く原爆により、平和の基を開いてくれた尊い人柱となったもので、決して大死ではないことを確信して居ります。たとえ靖国神社に祀られなくとも、神様はこのことをよく知って居ります。故人の霊は天に在って、母国の榮えんことを静かに見守って居てくれるでしょう。何もかも、所謂煩惱を超越して居ることでしょう。私は彼等の死が意味するところを、今一度国民全部が反省することが、一番大切であろうかと思えます。

前言の如く、神様は何もかも御存知です。それを私は家族ともども、亡き弟への慰めの言葉として居ります。弟が在学中に御世話になった永井先生も居られず、共に喜び勇んで行った高校の友達と、今頃は天上に在って、俗世の煩らわしさを眺めて居ることでしょう。

(一〇七) 医学部二年生 加 藤 良 明

病理講堂で被爆、その後脱出の様子なく、学友生駒君(脱出後死亡)の話によると、教室の端の方に坐ったまま、現場にて焼死せる模様。

遺族 東京都品川区旗ノ台三六―三 千本松 逸子(妹)

原爆投下後の阿鼻叫喚の様相を目撃し、又体験も致しましたので、当時病院焼跡の廃墟でめぐりあつた出来事を、書いてみたいと思います。

あの日から六日目の夜、私は兄のお骨を拾う目的で母と一緒に医大に行き、医大にお勤めの親戚の人の誘導で、石ころだらけの教室跡へ参りました。唯茫然と立ちつくし説明をお聞きした後、兄の坐っていた位置を見当つけて、そこらのお骨を拾って納めました。焼けつくような暑い静けさが異様な真昼の時刻でございました。

帰途兄と仲のよかった豊田さんが、病院跡の一隅に救護されていられると聞き、母と訪ねてみますと、壊れた建物の一隅にマットが畳かが運び込まれて、その上に幾人かの方が寝かされておられたように記憶します。豊田さんは数時間前まで生きていられたそうで、女物の浴衣を着せられ、仰向けに寝かされていらつしました。私は持っていたガーゼの布をお顔にかぶせ、胸元を合わせてあげて、夢中で合掌致しました。

そして立ち上りあたりを見廻わすと、真赤に充血した目で腹這いになり、ジーンとこちらを見ている方がありました。私は其処へ屈み「貴方は医大の方ですか」と尋ねますと、「そうです。二年の小川三郎です」。私は何となく懐しく、「私の兄も二年で加藤と申しますが、即死の模様なので、今日はお骨を拾いに参ったのですよ。」と申しますと、「あッ加藤君死んだんですか。確かに独り息子だったでしょう。」と申され、「残念だな」と大きな溜息を吐かれました。そして「医大というところとは思親切でね、僕等がこんなになっても誰も何にも手当てして呉れないですよ。」とおっしゃるのです。私はそれは不親切でなく、大学はおろか長崎中が目茶苦茶になって、病院の先生も殆んどの方が亡くなっていることを告げますと、「そうですか、そうですか」とおっしゃって、「電報は打たれるでしょうね、おふくろに電報を打ちたい

んだけど——でも「すぐ死す」の電報が届くと、おふくろが悲しむだけだから無駄ですね。然し一度会いたいなあ」と嘆息されました。

私もその時は原爆の恐ろしさがわかる筈もなく、生きて脱出されたのだから絶対大丈夫と思い、「しつかり頑張って下さいね。明日はどうにかしておいしい食事を作って持って来ますからね」と云いながら、背中をおさすりしてあげました。すると「有難う。有難う。明日になったら時津の方へ移されますから、此処にはいないのですよ。」と淋しそうにおっしゃいました。

やがて私達はお別れして帰途につきましたが、その方も時津でお亡くなりになったようにお聞きしました。私の兄も小さい時からやさしい性格でしたので、楽しいことも悲しいことなど事こまかに母に話し、泌みじみと語り合う方でしたので、あの瞬間きつと「お母さん」と叫んだに違いないと信じます。子に先立たれる程辛い事はないと存じます。私の母と同様に辛さを超越して、誇めと祈りでこの世を去った故人の御両親様方、未だ御健在の御両親様の御幸福を、切に御願ひして止みません。そして何時までも、多くの故人の方々の御冥福をお祈りし続けたいと思います。

(二〇九) 医学部二年生 川上平蔵

病理講堂より脱出、病院地下室に避難、十三日に岩屋クラブ（調外科臨時救護所）に送られ、十四日に死亡。

(二一〇) 医学部二年生 岐部謙治

病理講堂で被爆、脱出して病院に避難、十三日夜九時死亡、十四日火葬。

(二一一) 医学部二年生 小西淳

病理講堂より脱出し、当日は穴弘法宿泊、翌十日大橋より乗車して諫早に途中下車し、その夜は佐賀駅前で一泊、翌十一日学友高津八郎君の自宅（佐賀県佐賀郡西与賀村）に竹田君と共に来り、十五日十四時死亡。

(二一二) 医学部二年生 古賀洋一郎

病理講堂で被爆、そのまま死亡。

遺族 佐賀県杵島郡福富町一四二七 古賀説 一（父）

栄枯盛衰極りなき人類の歴史五千年、東洋の島国日本長崎の一角に原子爆弾が投下されて以来、世界の歴史は茲に一大変革の期を迎えた。昭和二十年八月九日、角尾学長以下恩師、学友と共に、一瞬にして私の長男洋一郎は影も形もなく消散した。

私は不安の中にも一縷の望みを抱いて、八月十一日の朝、肥前山口駅から長崎行の汽車に乗った。敵機は線路上を低空偵察して飛びまわり、汽車はトンネルの中に待避する。心は急げども、汽車は遅々として進まず、道尾駅まで先は不通である。炎天下を線路に沿ひ長崎まで歩いた。

修羅の巷という言葉だけは知っていたが、今現実には老若男女、罪なき民が、こちらの丘あちらの谷と死屍累々、中には母の死体に無心にすがる幼児、親子三人帯で結びあった死骸、防空壕の中には、まだ息も絶え絶えに苦しんでのたうち廻る学生、渴を覚えて水を求めて叫ぶ悲鳴、浦上一帯の焼野原の惨状を見て、私は人知の恐ろしさと科学の進歩を呪った。洋一郎は帰省する度に、「此の戦いは負けるかも知れない。学徒出陣で戦死はいとわれないが、民族の勝利だけは信じて逝きたい」と言っていたことなど思い出し、大和民族が地上より消えて行く日も遠くはあるまいと、胸つまる思いがした。然し親煩悩として、我が子のなきがらを学園の内外に探し求めている中に、既に十一日の太陽が沈んだ。

翌日は患者を収容している病院や学校を尋ね、みる影もなく焼けただれた顔付を入念に探した。患者名簿に目を通して、何等の手がかりもなかった。

「死は零である。空である。」然し私には、洋一郎は永久に真理探究の若き学徒として、私の命のある限り、二十一才の青年学徒として、微笑して生きている。

これまで佐賀県内の遺族の方々と語り合って、長崎大学の学生課に、学徒動員として何等かの待遇は出来ないものかと交渉していたが、未解決のまま父兄も次々に他界し、或いは老境に入り、最早私の存命中には浮ぶ瀬もあるまい。或いは永久に犬死に終るかと思っていた際、本年二月二十七日佐賀新聞の記事によって、長崎在住の遺族の方々の多年に亘るお骨折の結果、国より香華料をいただくことを承り、子供と共に感謝しつつ、仏前に報告して感激にむせています。

此の稿を終らんとする唯今ラジオの電波は、ベトナムの爆撃の惨状を伝えて来る。凡ての人類が平和に徹し、美しき文化の歴史が展開せられんことを祈って止まない。国よりの尊い見舞金は最も有意義に使いたいと思い、自宅の小庭の一隅にささやかな平和記念塔を建立し、将来いつの世にか、人類の平和に貢献せんとの意欲に燃える子孫が、一人でもよし、リーダーとして、点火する機縁とでもなれば幸いと、念願しています。

忘れ得ぬ吾子のために

古賀ます(母)

(前略) 洋一郎は男児に診らしい優しい児だった。動物がすきで伝書鳩も飼った。カナリヤも飼った。山羊も兎も可愛がつて遠くまで草をとりに行っていた。(中略) 佐賀高校に入ると、楽しいことをよく話して聞かせてくれた。東大に進みたいというのを、東京は空襲がこわいからと云って長崎に決定させた。神ならぬ身の知る由もなく、今思うと本当にすまない気がする。(中略) 齢七十を越すと身も心も弱り、時にふれ折につけ、一日として吾子の事を忘れ得ません。同年輩の方を見ますと、あの子ももうあんなになつてゐる筈なのに、嫁も持たずに散つてしまつたと愚痴をこぼし、しみじみ泣く日もございます。

駄作

- やわ肌にふれもせて散りしいとし子よ 靖国の神となるぞ嬉しき
- 掛けられし吾子の写真よ脈々と 温もりつたわる母のハートに
- 脱ぎゆきし浴衣の残り香いつまでも だきしめて嗅ぐこの母の在り
- 赤練をどこどこに引きてあり 吾子の努力のかたみのノート
- 還りくる日のいつ方よりかあらんとて この二十年を夢みて過せり

(一一六) 医学部二年生 後藤 祐 碩

病理講堂で被爆、脱出して病院に避難。十四日有田町の自宅に転送、十五日夜九時死亡。

遺族 佐賀県有田町二〇二二 後藤 タダ(母)
原爆犠牲者の名碑も出来、永久に学内に保存されますそうで、本人も先生方や学友

達と安らかに眠つて居ることをごさいます。被爆学生之母として、ありし日の思い出を書かせていただきます。

あの恐ろしい八月九日、若い者だからどこかに生きているだろうと、神仏に祈りながら幾日かを過しました。十五日の朝友達につれられ、見るかげもない姿で家までたどりつきました。死なせてなるものかとあれこれ尽しましたけれど、「有田のうちは水はおいしい。何も云うことはありません。お母さん、お母さん。」と云つてわからなくなり、妹や弟に見守られながら天国に行つてしまいました。冷たくなった大きな子を、一晚中抱きながら泣きあかしました。

あれから姿も声も、につこり笑つていた顔も、ただ私の頭に残るだけで、次から次に思ひ出しては自分の胸をかきむしり、血だらけになつたことも何百度もありました。眠られず泣きあかした夜もありました。

月日の流れるのは早いもので、二十二年の年月を過し、よくもこれまで生きていたと思います。どこにも行つたこともない子の写真を連れ、人目もなく東京よ、日光よ、京都よ、奈良よ、嵐山よと見物させました。北海道にも連れて行き、自分で眺めるより写真を出して見せるのが、私の慰めになるだけで、生ある限り一日でも忘れることは出来ません。二十一才で逝きし子に

○ 愛でる間もなく散りけり桜かな

【別便抜萃】 主人なき後あの子が居てくれたらと、今は病院も貸して、二十一年たった今も涙にくれて居ります。唯一人淋しく御仏様と暮して居ります。弟も一人居りますけど、電気の方ですので宅には居りません。でも時々帰つて慰めてくれます。

(一一七) 医学部二年生 酒井 克 次

病理講堂で被爆、脱出して諫早に赴き、それより小浜療養所に行ったが、十四日遂に他界す。

(一一八) 医学部二年生 坂 中 善 視

遺族 和歌山県伊都郡九度山町河根 坂 中 澄 晴(父)
涙の旅「呼子鳥」の一節(昭三〇・五)

この春三十五年の教員生活を終えて、ここ数年來妻にせがまれていた長崎の旅へ立った。長崎の街は殆んど復旧していたが、山手に一本脚で立っている危うげな鳥居だけが、十年前の記憶をよび起させた。その日はわが子の骨を拾いに來た日のように、かなり降っていた。舗装されないでこぼ道、車のはねとばす泥水をよけながら、大学にたどりついた。そして門衛から遭難記念碑の建っている処を教えられた。雨に濡れたポストンバックを預け、裏道を抜けて灌木に包まれた曲りくねった細道を、露を払い払い登って行つた。二人は雨にうたれたままつくねんと立って、一丈もある石碑を見上げた。それはこの地でわが子を偲ぶ唯一のものであった。

碑の前に蹲って二人はいつか哭いていた。ひとりっ子のわが子が、この地の場所で焼け爛れて悶え死んだ。幾山河離れた故郷の両親にも、さぞ会いたかつたであらう。死に水もとってほしかつたであらう。はふり落ちる涙はどうしようもなかつた。そして骨を拾いに來た當時がまざまざと浮んで來た。

『昭和二十年の九月二日、それは二百十日である。暦の通り猛烈な風雨が一日続いた。浦上に降りたが、バラックの駅は罹災者の家族でごつたがえしていた。駅前一带は慘憺たる焦土、南北に続いた山手は真赤に焦げていた。唯一基の石の鳥居と工場のゆがんだ鉄骨、それに遙か向うに大学の柱の残骸だけが立っていた。原爆の跡は七十五年草一本も生えない、白いものを着ていかねば危いとか聞かされていたが、ワイシャツがまっ黒になるほど大きな銀蠅がたかつた。街の跡には人一人居なかつた。こわれた瓦、ガラスの破片、釘、金屑など足のやり場もなかつた。ミイラのような脚が倒れた柱の間から見えていた。こうして余程の時間をかけて大学の跡についた。朽ちたような柱と壁が無惨な姿を残しているだけで、ガランとして空虚でしなかつた。谷一つ隔てて建っていたらしい病院は跡形もなかつた。わが子の骨が一体どこに——と途方にくれていると、天の助けか脚元に泥にまみれて一枚のビラが落ちていた——学生の遺骨は商工会議所で受けとって下さい——と。それから半時間余り、細長く続く荒廃した電車道を南へ南へと夢中で歩いた。雨はまた瀧のように降って來て、からだはびしょぬれになった。尋ね尋ねて漸う會議所について骨を受けとつた。リュックに入

れてそこを出た。雨は仲々やみそうもなかつた。歩く度に背中がゴトゴトとなつた。——今頃こんな処で悴の骨を背負うとは——と愚痴が出ると、雨の脚元に涙がポトポトと落ちた。(以下略)』

十年前のその日の様に、今日の雨もやみそうにない。丘の円いサンキラの葉は強くゆれていた。やがてものにつかれたような妻を促して立ち上り丘を下りた。

長崎の旅は二人にとって涙の旅であつた。

【調 附記】 この文は嘗て坂中氏が書かれ、親族知友の方々に進呈された小冊子「呼子鳥」の中の一節だそうである。括弧内は原爆直後、其他は十年後の思出のようである。尚、別に戴いた書翰に次のようなのがありました。

「家内も半身不随の病床に臥して八年目になります。病勢は進みもせずよくなりもせず、全く同様で一から十まで人手を煩わしていますが、朝夕善視にお経をあげ、自ら慰めているようです。六十七才と六十九才の老夫婦だけの生活も、時には厭世観の起ることもあります。それでは善視に相すまぬと、二人で励まし合っているような次第でございます。」(拔萃)

(一二) 医学部二年生 新開 常弘

病理講堂より脱出、下宿に帰つたが病状悪化したため、山里国民学校に赴き、のち大学外來本館に移り、十七、八日頃死亡せるも死体見当らず。

遺族 北九州市八幡区幸神町三丁目 村富芳雄方 新開 ヤスエ(母)

(前略) 常弘が死んだ翌年主人も亡くなりまして、私はず今六十四才で他家のお手伝いをして生活している有様でございます。世の中はこうも変わるものと、親孝行者の亡常弘が忘れられません。主人も当時常弘の安否を気づかつて長崎に行ったのが元で死亡しましたようなもので、ほんとに大事な二人を亡くしました。主人も他界いたします時、「お前の一生は心配なく暮せるから」と安心していたようですが、なかなか思うようには参りません。でも御世話様になって居ります村富様御夫婦が大変御立派な出来た良いお方で、とても優しくいたわって下さいますので、有難く思つて居ります。私も及ばずながら御親切に対し、少しでもこちら様の為になるようにと頑張

って、毎日を感じながら過ぎて頂いて居ります。

(一二二) 医学部二年生 須 沢 俊 吉

病理講堂より脱出、火災をきけて方々に逃れ、本原町二丁目の下宿にたどりついたが、原子病のため約二日後死亡。

(一二三) 医学部二年生 菅 道 之

病理講堂より脱出して穴弘法へ逃れ、翌十日山を下り浦山寮焼跡に行き、又山へ行くとしたが力尽き、グラウンド横の川端に倒る。十一日救助され、眼科地下室に運ばれ看護を受けたが、十一日午後十二時頃死亡。

遺族 香川県綾歌郡宇多津町二一七 菅 和人(父)

(一) 小生、道之とその姉の二人の子持ちで、姉は終戦後病死しました。今は両親のみ残存して居ります。

道之は県立丸尾中学校を卒業、大阪浪速高等学校(文科)に入学、卒業後浪高先輩の居る長崎医大に入学、軍医を志願し、町役場より小生の身元調査もありましたが、その当時已に我国は戦力を失って居た模様です。

道之の日記の一節に、「長崎は人情がよいので将来はこの地に住居したい」、又「海軍々医となり潜水艦に乗り、御国の為に御奉公したい」と記してありました。

(二) 原爆投下の当日の新聞では、従来の爆弾より強烈なもので、中心地は浦上となっており、彼は浦山寮に下宿して居たので、その身辺を気遣い、小生が病氣だったため、妻の弟に長崎にいつて貰いましたが、道之は已に死亡して居り、遺骨のみ持つて帰り、当時の悲惨の模様を話してくれました。

当時小生は六十才で、このショックで業務も手につかず、二カ月余も休診して居りましたが、親戚知人より健康上業務を開始せよと勧められ、色々の人と接触するにつれ気分も次第によくなり、今日に及んで居ります。

去る八月九日、二十二年振りに慰霊祭並びに名碑除幕式に参列し、全く感慨無量であります。本人の霊も冥福することでしょう。我々両親もこれで思に残すことはありません。

【附記】 終戦後、田辺市之妻氏(浪高出身、昭和二十年長崎医大卒)から詳細な

手紙を戴きましたが、それによると、道之は浦山寮附近の川べりに倒れていたのを、十日に田辺氏外一名が担架で医大眼科地下室に収容されたそうで、その日は「田辺さんですか」と談話もかわしたとか、然しその後は昏睡状態が続き、強心剤注射も反応なく、高熱を発して十一日午後十時頃永眠したとのことであります。田辺氏の手紙には、医薬品が少なく、充分な手当が出来なくて申し訳ない、と記されていました。

(二二五) 医学部二年生 鈴木 俊 夫

病理講堂より脱出、病院地下室に逃れ、十三日岩屋クラブの調外科救護所に転送されたが、翌十四日死亡、火葬、十八日東京より父上が来られ、遺骨を受取られた。

(二二六) 医学部二年生 田 中 喜八郎

病理講堂で被爆、脱出して翌日下宿にたどり着く。以下記載なし。

遺族 鹿児島市千日町一四一八 田 中 康 隆(甥)

(前略) 私は田中喜八郎の甥です。田中の長男宗三が戦死致しましたので、私が祖先の位牌を供養して居ります。思い出の手記が出版されましたら、一部お分ち下さいますようお願い申し上げます。(下略)

(二二七) 医学部二年生 田 中 淳 一

病理講堂より脱出して諫早方面に逃れ、警防団に連絡したが、団員の手落ちで行方不明となる。

遺族 佐賀県藤津郡嬉野町大字下野甲二六一九 田 中 淳 直(父)

淳一よ、御身と別れて既に二十二年、あの残酷極まる原爆の犠牲となつて、あたうら若き命を一時にして断たれた時、家には親兄弟打揃つて居ながら、誰一人御身の臨終の見届けも出来ず、例え多数の学友と一緒に居ても、如何に悲しく、さぞ寂しかったことであつたろうと想う。今私はやるせない、済まない想いで一杯である。

学校は小、中、高校、大学と極めて順調に進んでくれたし、私も精魂を打込んで、御身を立派な医人として大成させたき一念に燃え、只管に医業に精進しつつ前途を楽しんでいたのに、突如として御身を亡くした時は、急に谷底にでも突き落されたよう

に途方にくれるのみであった。

あの最後に帰宅した晩は、一同大悦びで晩食を共に賑やかな一夜だったが、お母さんや姉弟達が寝た後、お前が真裸で表の広間の電灯の下で往診靴の破れを縫っている間、私は横で二人ばつばつ話して、床についたのは十二時過ぎだったと思う。その頃お前は中学時代から既に剣道初段、佐高で更に練成の甲斐あつて筋骨隆々、我ながら立派な体になったものだと思つて末頼もしく、この時ほど悦んだことはなかった。

翌日お前は午前中に生き生きと制帽、ゲートル、地下足袋で長崎に出発した。それが最後の別れとは露知らず、本当に今となつても名残が惜しまれてならない。

私は毎年、特に差支えない限り大学の慰霊祭にお参りします。これが御身に対するせめてものお詫びであり、慰めでもあると思つて実行して来たのに、今年は体の具合で残念ながら行けなかった。代りに二人の弟達が参つてくれたので、悦んで貰つたことと思う。

家では弟典夫は嬉野温泉区に新築移転、私の業を継いで相当に盛業、本家は我々老夫婦と那子との三人、那子も明春結婚して名古屋に住むようになり、次弟の晋は永らく母校長大皮膚泌尿科教室で学究生活の後、一昨々年若葉町に医院新築、これまた精励中、三弟直樹は商学部を出て福岡在住、証券会社勤務、姉妹は何れも夫々良縁を得て他家に嫁している。

お前が生きて居たら四十一才だろう。匠人として将にこれからという所、何としても諦め切れない私と母さんだ。あの荒れ果てた校庭に、お前を探して巡り合うことの出来なかつた二人を許して戴きたい。来年の慰霊祭には、是非お参りする積りでいるが、もうその時は八十才、母さんは七十一才、相当頑張つて来たものの、流石に老いには勝てない。しかし晋も長崎に居るので、毎年お参りして御身と魂の語らいが出来るので、寂しがないで居て頂きたい。(中略)

私の知っている限りでは、佐高から長崎医大へ一緒に入学した学友百崎、後藤、藤井君等のお父様、樋渡君のお母様が次々に亡くなられたのも、最愛のお子様を失われたお力落しがその一因かと思う。私がここまで辿りつけたのは、偏に御先祖様初

め、諸霊と御身達の御加護のお蔭を蒙つての事と感銘しております。どうぞ何時までも親二人、姉弟妹達を護つて頂きたい。

最後に、憎むべき原爆のために、一瞬にしかけがえのない尊き、若き命を断たれた数多くの恩師、学友の御霊と共に、御身の御霊に合掌冥福をお祈りします。

(二二八) 医学部二年生 平 良 浩

病理講堂内で被爆、そのまま死亡。

遺族 大阪府貝塚市海塚三四一五 平 良 マツガマ(母)

昭和四十二年八月九日クビロが丘にて記す

○ 柩に積み重ねた俵の山も―倉に満て余る黄金の山も―人の産せる子宝にや競べ物にならん―競べ物にならん

○ 聳え立つ峯―堅固なる巖の如く心身共に末も広がれど―願いつつ苦勞の中にも微笑みて―育てしあの子は今は見えず―今は居らず

○ 学高め、人と成るよと、希望持ち、勇んで行きし我が子は今ここに亡き数に、名を連ねて、我が目に映る―我が目に映る―

○ 数知れぬ、幾多罪なき人命を、余りにも浅ましく破滅せしめた―血なき悪魔の原爆投下はだんじてゆるすまじき―あゝゆるすまじき―

○ 若しか、いつかは、どこかで逢えるかもと、今日は明日はと二十有余年涙を友に待ちわびたれど、碑に刻まれた名を見れば、やはり原爆に負けたかと、なほも悲憤の涙あふれ出る―あふれ出る―

○ あゝ夢にだに、思わざりし、惨事に逢いし我が子よ―押へ難く堪え難き、無念の涙にくれるとも、同じ犠牲になられた皆様と共に、平和を守る神となり、天が下に生あるすべてに、平和と幸を永久に―平和と幸を永久に―

帰宅してから記す

○ 二十五年前に、別れた子に逢えたらと、老母は旅に出かけました。似顔の人でも見えたらと、人ごみの中をかきわけかきわけ、目をキョロキョロと右見たり左ふりかえりふりかえり段々坂道登り降りし、汗を拭き拭き息絶えだえに―

○ 小高いグビロが丘に行つて見よと、教えられ、力無き足を踏みしめ踏みしめ、たどり着いて見れば、かた時も頭の中から離れぬ我が子の名前も碑に書き連ね、我が涙目に映る―我が涙目に映る―

○ 在りし日のあの時、あの頃の姿が、幻の如く浮ぶ老母は、眩む目を押えこらえ足はガクガク降りて来て、我が子ヤ―イと心に叫び、小石を、我が子の霊よと七ツ拾い抱きしめて―よばよば足どりで帰りました。あゝあゝグビロが丘―遠くて近いグビロが丘の碑―グビロが丘の碑―

○ 希望も夢も身諸共に破滅され、残る老い身らは、笑いを忘れ血の涙流し、西をば東―東を西と、道に迷う此の憤怒の涙を誰に訴えん、此の苦しき体験は此の老いの身共だけにとどめ、次の世代に又負わす事なきを―恐るべき戦争をせき止める聖者方が早く現われて、のどかなる光を放ち、常しなえに幸福の続く世になるを重ねて祈る―

○ 姿こそは見えねど、何億何方が口にした懐しの我が子の名も、碑に刻み永遠に残す、諸先生方の暖かきみ心を、無き子等のみ霊も浮び上り、悲しさと共に感謝いたし、涙と共に後の世の幸せに、次の世の平和を守るらん―

○ 覚めやらで―夜もすがら見る夢路にて、逝きし子の姿現われ母と呼べば―

(二二九) 医学部二年生 高 木 劉 一 郎
病理講堂内で被爆、そのまま死亡。

遺族 福岡県飯塚市西町二―五六 高 木 み ち (母)

(前略) 今夏は殊の外暑さきびしく、慰霊祭にもお参り出来ませんでした、除幕式の模様はテレビで拝見させて頂きました。(中略)

二十有二年を経た今日でも、数々の思い出で一杯でございますが、長くなりましては御迷惑でございますから、一言だけ述べさせて頂きます。

千代八千代までまさしくあれと祈りし我子でございましたが、修業半ばにつぼみのまま散り果てたことが、如何にも残念でございます。

敗戦のために数多くの前途有望の青年を、空に海に大陸に惜しげもなく散らしたか

と思う時、何とも云いようのない怒りがこみ上げて参ります。この多くの犠牲者を犬死させないよう、二度と戦争のない平和な世界が永久に続きますことを念願して止みません。今となりましては只々皆様の御冥福をお祈り申し上げるだけでございます。

(一三〇) 医学部二年生 竹 田 実

病理講堂を脱出、当夜は穴弘法で一泊、その後学友小西君と共に佐賀県佐賀郡西与賀村の級友高津君宅に行き(十一日)、小西君が十五日午後二時死亡せるため、同夕刻佐賀県立病院に入院、翌十六日朝午前三時死亡。

(一三一) 医学部二年生 津 和 恵 吉

病理講堂で下敷となりたるも、間隙より屋根を破つて同級生数名と共に脱出、大学構内を彷徨し、その夜は細菌教室附近で野宿、十日は九時頃より約一里半の距離にある長与村の山口房市なる知人宅に避難せんと思ひ、炎天下を半裸体にて杖を頼りに歩き始め、夜九時半、半死半生の態にて辿り着きたり。それまでは食物を一切取らず、唯口喝甚しく水を多量に飲みたりと。翌十一日、隣村の時津村に、長崎に於て同宿の学部三年秦野の居るを聞き連絡を取りたり。往きて診るに、食欲全くなく、腹痛を訴う。体表面には僅かに擦過傷あるのみにて他に異状なし。十二日も往診、疲労感を訴ふること甚し、連日ブドウ糖、強心剤等を四時間毎に注射す。十三日夕方両眼に充血を来し、視力障害起る。十四日朝に至り下痢が甚しく、僅かに血液様のものを混す。故に赤痢を疑い、秦野の診療中なりし時津万行寺の臨時救護所に運搬せしむ。赤痢の手当、及びブドウ糖、リンゲル等を与うるも、十五、十六両日共に下痢甚しく、中に血液を多量に混じ、裏急後重及び腹痛を訴え、十六日夜十時半頃急に症状悪化し、呼吸頻数となる。夜半十二時過には意識モウロウ状態となり、血便を頻りに排泄し、曉方四時頃より呼吸が中絶し始め、五時三十五分遂に永眠す。秦野は当日午後之を火葬に付し、遺骨を万行寺に預け、遺品を整理し、十八日帰郷の途中遺族に通知したる

処、遺族は二十九日時津村に來り、遺骨を受取りたる由なり。(学三 秦野滋記)

遺族 兵庫県西宮市大井手町九―三三 津 和 儀 市 (父)

悲しと云うも愚なり。惜しむと云うも又愚なり。人生の悲痛何んぞ限りあらんや。花ならば蕾に譬ふべき年齢を以て、嵐に散るが如く忽然として原爆の犠牲となりし事は、全く夢のよう、活気に満ちた吾息子の顔や形や声が、今猶眼につき耳に残つてまのあたり生きるが如く想はれて、遺憾の極であります。

将来偉大な抱負を持ち、京都三高卒業、直ちに長崎医科大学に入學、未來の成功を樂しみに勉學中、憎むべき彼の原爆の不幸に会い、空しく父母の膝下を去り、兄弟を後に醒めぬ眠りに就きし事は、感慨をぞろに禁ずることが出来ず、唯ありし日を忍びて感無量と謂うべきでしょう。

この度篤志の方々の御尽力に依り、追悼慰靈碑の建設、並に靖国神社合祀の名譽に接する御努力の至誠は、必ずや地下に眠れる遭難諸氏の靈に通じ、故人も嘸かし安らかに冥目致すことでありましょう。

亡き人の冥福を祈つて 合掌

(二三三) 医学部二年生 飛 沢 寛 治

病理講堂脱出後、藤井伊織と共に穴弘法に逃れる途中で同君を見失つたが、翌日正午頃父上が探しに來られ、藤井と共に山越しに帰宅、学部三年友広君の看護を受く。

(二三四) 医学部二年生 豊 田 正 倫

病理講堂で被爆、脱出して病院に逃れ、十五日夜死亡。十八日火葬。

遺族 東京都目黒区平町二丁目一一一八 豊 田 シツ(母)

(前略) この度犠牲者名碑建立並にその除幕式、慰靈祭など盛大に御挙行頂きました由、折角のお式にも、私は遠隔且つ老令のことと出席出来ませず、感無量の思いにて十時三十分、十一時二分に当方一同にて合掌黙禱をささげました。地下の諸御靈位もどんなにか感謝遊ばされ、又当方の正倫もお蔭様にて安らかに永久の眠りにつきましたことと、只々有難涙にくれて居ります。(中略)

あの当時私の疎開先の津山へ、長崎の見知らぬお方様から八月二十三日に速達が來まして、初めて御地の様子を知り、驚いて直ちに出發致し、三昼夜一食も摂らず、無

我無中の旅を続けまして、二十六日に漸く御地へ辿りつきました。ところがあの凄惨そのもの、全く地獄とはかくやと思うばかりの有様に、只呆然としてしまいました。それから後の悲しい種々の思い出は、今もなお昨日の出来事の様目に浮びまして、とてもペンが運びません。

ここに一つお願いがございます。当時倅正倫が廊下に倒れて居りました所を通りかかられた方に、「母が津山に疎開して居る故この由を知らせてくれ」とお願いしました由にて、御親切に速達を頂戴いたし、お蔭様にて私は御地へ参り、遺骨を頂くことが出来ました。そのお方の御姓名を、其後の混雑や疎開地からの引揚などで見失つてしまいました。若しその御本人或いは御知るべにて御記憶の方が居られましたら、御姓名を伺い度く、私の生ある内に御礼申上げたいと存じますので、お願い申上げる次第で御座います。

近況、私は今年満七十七才と相成り、当時兵学校に居りました末子の正治が、兄の遺志をつぎまして慶応大学医学部を卒業、唯今、嫁と男の孫一人と共に、平和に過させて頂いて居ります。

(二三六) 医学部二年生 中 山 謙 吉

遺族 東京都渋谷区松濤一丁目 二四一五 迎 朝 子(養母)

(前略) 今度犠牲者の氏名を刻んだ碑を建立し、永く記念とされる御企画は誠に有意義であり、双手をあげて賛意を表し、応分の御支援を申し上げたいと考えます。つきましては、故人中山謙吉は殊の外植物を愛好いたして居りましたので、慰靈のため碑の傍らに記念樹でも御寄付致したいものと考えておりますが、現地の模様が果して記念樹を植える余地があるものか。又植えるにふさわしい状況にあるものか、皆目判明いたしませんので、お教え願いたいものと思ひます。

本年十月には長崎に何う予定にいたしておりますが、貴方の御計画はそれより早く完了される御様子ですから、折返し御回報いただければ幸せに存じます。

(四二、五、二四)

【調 追記】 私はこの手紙に対し、「樹木は多く植っているが、花の咲く木がないので、出来たら桜やツツジなどを植えたい」と御返事致したところ、多額なお金を送って戴きましたが、大学の園丁に相談したところ、植樹は早春に行うのが最もよいとの事で、唯今保管させて戴き、来春植樹することに致して居ります。今年長崎地方は大変な旱魃でしたから、植樹を延期して却ってよかつたと思っております。

(一三九) 医学部二年生 林 喜保

遭難願末調査書には「市内伊勢町林田病院にて八月十五日死亡」とだけ記載。

遺族 大阪市北区若松町二三 林 重雄(父)

(前略) 犠牲者名碑の除幕式に御案内を受けましたが、私は高血圧症を伴う糖尿病で一月から五月まで入院し、今尚自宅で静養の傍ら、週二日宛通院加療を受けている有様で、歩行困難のため長途旅行は不可能ですから、或いはこの日欠席するかも知れません。その節は悪しからず御了承を願います。

何分一人子を突然失ったことでもあり、その前に大阪大空襲により拙宅は罹災、焼失、職業も変えざるを得なくなり、ひたすら愚息の冥福を祈り、静かに余生を送り居る次第です。

(一四〇) 医学部二年生 樋 渡 浩 二

病理講堂で被爆、十一日頃友人三人と共にありしを見たるものあり。但し誤認らしく、行方不明。

(一四一) 医学部二年生 東 秀 昭

遺族 福岡県大牟田市下池町二九 東 国造(父)

当時大牟田市は二回に亘り空襲を受け、全市が灰燼と化し、私の家屋も焼夷弾で半焼の状態となりました。あの頃は殆んど毎日の様に空襲警報あり、八月九日にも警報が出て、私は職業がら救護班に属し、東奔西走して居りました。

午後十二時半頃と思しき頃、班員二、三名が西方に妙な雲が上って居ると騒ぎましたので、私も飛び出して見ると、成る程まだ見た事のない異様な雲を見ました。あれ

は何だろうか一同話し合いましたが、数人があれば広島に落ちた新型爆弾ではないだろうかと想像し、皆賛成しました。次に何処だろうかと談合しましたが、長崎か大村か各論一致せず、長崎県人の二名の人が、方向は大村に間違いない、先日大村航空隊に爆弾が落ちたから、今度も必ず大村だと云うので、皆大村と話が決り、私も稍々安心しました。しかし大村であれば一両日中に秀昭が帰宅するものと待ちわびていましたが、一向に帰宅せず、愈々不安が募っていた処、四日振りに熊本五高に在学中の三男が急遽帰宅し、爆弾の落ちたのは長崎で、匿大など滅茶々だとの話を聞き、大いに驚き、取るものも取り敢えず、その日の夜行列車にとび乗りました。翌朝道ノ尾駅に着き、数人の負傷者が列車に乗せられるのを見た時、長崎は大変だと思いながら、列車の進行もどかしく浦上駅に着きました。

駅の建物は既になく、大学方面一帯も直立した家屋や樹木は一つもなく、一面焼野原と化していましたので、この有様では息子の生存など到底覚束なく、ただ呆然自失、どうしたものかと思いましたが、前方に病院の一部が残っているのを発見したので、早速かけつけてみました。そして其処に居た学生さんに聞くと、二年生は講義中全滅したとの事で、せめて子供の死場所なりと弔ってやろうと、学生さんに教えられた講堂の焼跡に行ってみると、建物は勿論なく、ただ基礎のみ残り、学生の遺骨はあちこちに山盛りになっていました。これを見て悲嘆やる方なく、涙ながらに皆様の遺骨各一片宛を頂戴することにしました。これは、私の子供の遺骨はどれか判らないので、皆同じ苦痛の下に死んだことをしみじみ心に感じながら、そうさせて戴いたのでした。かくして皆様の冥福を祈りつつ、後を振り返りながら泣く泣く帰途につきました。

翌日この遺骨で心許りの葬式を営み、祖先の墓地へ葬りました。今では当日長崎に爆弾の落ちたことを確かめもせず、一途に帰宅を待ちわびていた事の愚かさを後悔して居ります。

(一四三) 医学部二年生 藤 井 伊 織

病理講堂で被爆、山田竜夫君を助けて這い出し、飛沢寛治君と穴弘法へ逃れる途中

同君を見失い、一夜を山腹で明かし、翌日昼頃飛沢君の父上が探しに来られたのに出会い、山越しに同君宅に引取られ、友広義久君の看護を受け、十二日夜友広君に伴われて白石町の自宅に帰る。顔面、手指の火傷、十三日頃より下痢を伴い、十七日早朝死亡。

遺族 佐賀県杵島郡白石町廿治七六一一 藤井 かく(母)

(前略) 記念日には一度御詣りいたしましたきりで、何日も失礼いたして居ります。丁度その時は暑い盛りで、老人の身には御詣りと出来ませず、こちらから御詣り申して居ります。(後略)

(一四四) 医学部二年生 堀家 潤

病理講堂で被爆、脱出後佐賀県小城町に行き死亡。

遺族 京都府乙訓郡向日町森本天神ノ森六一五 山下 通(妹)

(前略) 私は故堀家潤の妹でございます。昭和二十年兄が死亡しましてから医学を志し、現在は結婚して当地に開業して居ります。父堀家沢太郎も当地にて一緒に暮して居りましたが、去る四月病死致しました。従って今後は私が遺族としての務めをしたいと思ひますので、宜敷くお願い申し上げます。(後略)

(一四六) 医学部二年生 三村 寛

遺族 岡山県新見市新見一八五八 三村 静子(母)

(前略) お蔭様にて多年の念願叶い、あえなく逝つた吾子の最後の地長崎を、二十有二年振りに初めて訪ね、ただ感無量、涙と共にやつと葬つてあげられたことを嬉しく存じます。あの子達も十萬億土の彼方から、完成された名碑をながめ、老いたる父母の慈愛の涙に、嘸かし感涙いたし居ることと思ひます。

私達老父母は、健康さえ許せば度々訪れて、名碑にももの言いかけ度い所存で居ります。亡き子寛の妹二人は、上は女専を、下は大学を卒業した後何れも嫁がせ、私達老夫婦はあの子の冥福を祈りつつ、余生を送つて居ります。

今更ながら、中学四年修了、六高突破をめざして猛勉強を続けて居たあの頃が懐しく、まぶたの底から消え去りません。五年卒業でゆつくりしていたら、あのいまわし

い目にも逢わずにすんだのではないかと、躁言を重ねながら、あとわずかの命を承らえる事でございましょう。

四十二年八月九日除幕式に参列して

○ 幾百の老いたる父の又母の 思ひは同じただ声もなく

○ 西の方グヒロが丘に灯はもえて 吾子の名ともめ消え入りたくも

○ 西方や弥陀の浄土にあそびます いとし子のかけしのぶ今日かな

下宿の跡をたずねて

○ 山里の地番もとめて佇ずめば 住む人もなく草むして悲し

(一四七) 医学部二年生 溝口 哲郎

遺族 下関市大字清末一二四三 溝口 陽介(父)

長男と云うものは、幼い時から弟妹と違つて、次代を継ぐ責任意識が自然に芽生えて来るのか、親に対しても、亦弟妹に対しても違つて感ぜられます。

昭和二十年三月、戦争は益々熾烈の度を加え、各方面の戦線も漸く敗色濃厚となりつつあった。或る日、突然休みを貰つたと歸つて来ました。意外のことながら家族一同無事を喜びあいました。そしてその時「これ」と云つて出したものは、救急処置用の止血剤、ビタミン等の薬品と、かなり多量の煙草の包みでした。

元来彼は煙草をのまぬのに「どうした」と聞くと、「煙草好きの父上と恩師のために、配給の度に買ったためたものです。但し半分は山口高校へ行つて米沢教授にあげるのです。先生の小さい坊ちゃん、雨の日も風の日も配給の度に行列に加わつて、煙草の配給を受けていられるのが気の毒でたまらぬ気持です。」と云います。私は本当に嬉しくて、感謝の気持で一杯でした。その後母校の山口高校、小学校、豊中にも行きました。暇乞いであつたかと思われまふ。

七月十四日、卒業寮生コンパのためとて、リュックに酒、油、其他の食糧品をぎつしり詰めて、日本刀を提げて勇躍、ほんとに勇躍して学校へ帰りました。まるで夢のようで、今でもはつきり眼に浮びます。どこかやさしい所のあつた子と思われまふ。

(一四八) 医学部二年生 簗 田 正 勝

遺族 福岡県大牟田市日ノ出町二一三四 簗 田 ヤス子(妹)

それは終戦後四、五日たった頃と思います。勤めていた軍需工場の課長さんのはかりで、切符を一枚都合して頂き、まず私が一人で長崎の様子を見に行きました。

浦上の二つ三つ前になると、車窓から見える山が半分だけ赤く焼けているのが、何だか不思議に思われました。改札係も居ない浦上駅を出ると、一面の焼土と化した長崎の街は昔の面影など何処にもありません。たしか曲った煙突のあたりが大学だったと思いながら歩いて行きました。その時は原爆がどんなにひどいものか想像もつかないまま、医大に行けば、兄が元気に負傷者の手当でもしているものとはばかり、思い込んでいたのです。

医大について、焼けた壁の貼り紙の行方不明者中に兄の名を見つけた時も、まだ兄は死んでいないとほっとしたものです。ところが其処に居た十人程の学生さんから、「あゝ、病理学教室に居た二年生は殆んど——」と絶望的な話を聞いた時、初めて目の前が真暗になって、体中の力がすーっとなくなり、耳の中に貝殻をすり合せるような、海鳴りに似た音が満ちて、一切の音が聞えなくなりました。ただ学生さんの口がぱくぱく動いているだけでした。

暫らくして気がついた後、学生さんから病理学教室は古い木造で、その中にいた二年生は一瞬のうちに全滅したこと、三人這い出してきた人も直ぐに亡くなられたことを聞かされました。そして粗末なハترون紙の封筒に、一握りの骨を兄の遺骨として渡されました。これが兄の、あの優しい頼もしい大好きだった兄の骨とは——。氣も狂いそうな氣持で受取書にサインしました。声をあげて泣きながら坂道を下って行くと、見知らぬ人が、「あなたは親兄弟があるからまだまだ幸せだ。力を落してはいけません。私など七人の家族が全部死に、たまたま向う岸に勤務していた自分だけ助かったので、毎日あちこち親兄弟の骨を集めて歩いている。くずれた防空壕の中に家族の骨を並べて暮しているが、今日弟の骨を医大から貰って帰ると全部揃うことになる。本当に泣くにも泣けない氣持ですよ」と慰めてくれました。

長崎の街には真青で抜けるような空に、B 29 が低空で大きな銀色の翼を光らせていました。それを悪魔のように無氣味に感じました。

あれから二十二年、その時二十才だった私も中年の坂を越えましたが、戦争というものがどんなに残酷で恐ろしいものか、興味本位で扱っている映画や本を見る度に、戦争を知らない若い人達にその恐ろしさを知らせるのが、私達の世代の義務だと思います。

毎年夏になると、ガラガラした太陽の下のムツと屍臭に満ちた長崎の街を、昨日の事のように思い出します。

(一四九) 医学部二年生 村 田 司

遺族 山口市大字荒高二六 山村方 村 田 梅 子(母)

二十二年後の今も尚、あの日のことを思うと、胸の底から悲しみがこみ上げて来ます。去るものは日々に疎しと申すことがありますが、私には今も泪の毎日です。司は私共にとり唯一つの光でございました。

短命のため小学校五年から中学へ入学、中学四年から山口高校理乙へ入学いたしました。学問が好き、文学が好きで、高校時代によく長崎へ行きました。長崎はよい、長崎は詩的だと何時も申して、長崎を愛していました。そのため大学も是非にと長崎へ入学いたしました。又大の私ファンで何事もよく打明けてくれ、長崎のお話もよくしてくれました。

あの子の思い出はつきませんが、死の前七月下旬に又学校へ行くと申しますので、皆でとめました。学校を守る責任があると申しまして皆に別れを告げ、一旦門の車の所まで出たそうです。当時私は病床についていましたので、又引返し、私のそばへ来て、「お母様、お互いに生きてさえいねば、たとえ日本が本州と九州と切斷されても必ず又逢えるから、早く元氣になつて下さいね」と、何時もと一寸も変らぬ笑顔を見せて、又長い廊下を足音をたてて出て行きました。それが最後、夢よりほかに逢うことの出来ない永い別れとなつたのです。あの時の顔、あの声が今も私の耳の底に悲しく残って、忘れことが出来ません。何事も宿命であるなら、好きな学問の庭、愛す

る長崎の地に散ったあの子は幸せだったかも知れないと、諦めきれない内にも諦めています。

八月九日には出席することが出来ませんでした。生ある内に必ず皆様の御尽力で出来ました名碑を拜ませて頂き、又あの子の青春を散らした長崎を、この目で見たいと思っております。私が子供の供養をするということも、前世からの宿業でございましょう。夫もなき今はただ一人で、命のあるその日まで、あの子の供養を続けて参ります。

誠に拙ない事を申し上げお恥かしいのですが、お言葉に甘えペンを執りました。

(一五〇) 医学部二年生 百崎 知次郎

病理講堂で被爆、脱出したことは明らかであるが、その後の経過は不明、十一日頃死亡。

遺族 佐賀市水ヶ江町横小路 岸川 つゆ子(姉)

原爆投下後の長崎に初めてお詣りしたのは、終戦の翌年であつたかと思ひます。今は亡き父に連れられて行つた長崎は、まだ鉄塔も曲つたままに聳えて、長崎医大跡は瓦礫のまま、弟の最後の場所の病理学教室跡には、まだ骨も残っている悲しさで、如何にも当時の悲惨さを物語っていました。父と共に焼野ヶ原と化した教室跡に線香を焚いて、ただ合掌するのみでした。当時の句帳に

○ 終焉の教室跡や草の花

○ 彼永久に大学生や墓参り

の句を書きとめてはいますけれど、事實はべんべん草さえ生えるかと思われるほど、文字通りの焦土でありました。

それから二十年以上の歳月が経ち、長崎は医大はもとより、街もすべてがすばらしい復興を見、この度は医大関係犠牲者の名碑さえも出来たのです。いろいろお骨折り頂いた中でも、名碑の建立は一番意義のあることではないかと思ひ、特にこれまでお運び頂いた方々の並々ならぬ御努力には、ただただ感謝の一語に尽きる思ひです。グピロが丘の土と化した学生達も、これ迄生き永らえることの出来なかつた遺族の方達

も、さぞ草葉の蔭で喜んでおられることと思ひます。

今年の慰霊祭には是非とも参詣したかったのですが、暑さと忙しさのため、子供達への約束も反古になつてしまつて、誠に残念でした。でも老母は八十二才の高齢ながら、元気で参付きもせず、八月九日午前十一時二分には西の方を向き、私達と共に黙禱を捧げることが出来ました。老母の氣持に代りまして、ここに二、三句書き添えました。

○ 吾子の名をきざみし名碑の原爆忌

○ 名碑建つ子の名友の名炎天下

○ 原爆忌グピロが丘の土一握

(一五一) 医学部二年生 森 芳信

病理講堂より脱出、夕刻下宿(浜口町九丸 岩永方)の壕より井樋之口停留所まで避難、その後不明、死亡したものと思われる。

(一二二) 医学部二年生 森 内 薫

病理講堂より脱出し、長与村に避難、治療を受けたが、原子病のため、一週間後に同村の親戚宅で死亡。

(一二四) 医学部二年生 山田 滝雄

病理講堂より脱出して裏山に逃れ、一夜を明かす。翌夕方諫早着、自宅まで步行出来ず、林病院で一泊、翌朝帰宅(諫早市東小路町)。早速治療を受けたが赤痢様となり、その手当を受けながら一週間後(十六日)遂に他界。(学部三年草野源一郎記)

(一二七) 医学部一年生 青山 賢治

生理学講堂で遭難、一時大学裏の丘にいたが、その後の動向不明。

遺族 神戸市長田区五位ノ池町三十四一八 青山 よし(母)

賢治が山形の高等学校を卒業して、帰つて来たのは二十年三月十五日でした。二日後の十七日は大空襲で、神戸は一面の焼ヶ野原となりましたが、私共の家は山裾にあつたため焼けずに、火の粉や爆弾のケースの落ちる音を、防空壕の中がかたくなつて

聞いておりました。そのあと死者や怪我人が沢山出たので、賢治は担架でそれらの人
を運び、手足をふるわせていたのが可哀そうでした。（中略）

その頃でした。神戸第三中学で同じクラスだった藤井さんが、賢治にいろいろ注意
やお話をして下さったようでした（註 恐らく長大学部二年の藤井純一君のことと思
われる）。

愈々長崎へ出発の前に、角帽をかぶり、父のオーバーを着て、手提カバンを左手に
持つて鏡の前に立ち、「お母さん、いいでしょう」と、色白の顔に白い糸切歯を出し
て、にっこり笑って見せました。私は嬉しいやらつらいやらで、泣きながらも一度
肩から背中まで撫でてやりました。

何一つ乗物のない焼野ヶ原の夜更けの街を、父と代わり代りに、重いリュックを背
負いながら神戸駅に着きましたが、見送人はプラットホームに入れてくれないので、
改札口で別れなければなりませんでした。白い顔と拳手の白い手が階段に消えて行く
のが、大学への晴れ姿でした。途中の無事を祈りながら、私達は淋しい物足りない気
持で、夜道をトボトボと帰宅しました。

その後会社は焼け、静かだった住宅地の私達の所にも爆弾が落ちたので、家を引越
しましたが、それを心配して賢治が突然帰って来ました。私は思わず賢坊ノと云って
抱きかかえ、お互の無事を喜び合いました。そして短い慌しい間にも、長崎で習った
と云ってお茶のお点前をして見せてくれたり、音楽が大好きだったので、中学時代か
らアコーディオン、クラリネット、小太鼓、ラップ等しておりましたが、今度は長崎
に行ってからピアノを始めたといつて、バッハの前奏曲や乙女の祈り等を聞かしてく
れ、この次帰った時は「月光の曲」をきかせてあげると私達を喜ばしてくれました。

七月十四日に再び長崎へ旅立ちましたが、この様な時だからお互にどうなるか判ら
ないと爪を切つて封筒に入れ、「賢治の爪」と書いて残して行きました。この爪が賢
治が残した唯一のものとなりました。そして白いリュックを背負つて街角に消えて
行った後姿が、この世の最後の別れでした。

その後七月三十日に、「学校の近くに下宿を变りました」という便りが届きました

が、それが最後の手紙でした。賢坊は学校へ帰って行く度に、讃美歌の「神ともに
まして、ゆく道をまもり」をアコーディオンで弾いていました。

【別便】 私達両親は暑さと老齢にかまけて、とうとう名碑の除幕式に出席するこ
とが出来ず、残念でございましたが、テレビでほんの少しでしたが見る事が出来ま
した。名碑が永久に保存されると思うと、七十五、六才までこうして揃って生きて来
られたことを、喜んでおります。

独り息子の賢治を我が瞳の如く愛し、芸術品でも仕上げる思いで大事にして来まし
ただけに、楽しみと失望で、私達二人は一日に一度は賢坊の話の出ない日としてはござ
いませんでしたが、こうして犠牲者が大死でなかったと思うと、皆様のお骨折りを
う一度深く感謝せずにはおられません。（後略）

（一五八） 医学部一年生 浅 井 明

遺族 名古屋市中村区名楽町五一五八 浅 井 文 子（母）

明は大変努力家でございました。中学四年の時、海軍兵学校を受験致しましたが不
合格となり、五年の時又受験しましたが、今度は身体の方で駄目でした（肺浸潤）。
兄が軍医でございましたので、自分も医学の方に進みましたが、原爆のために若い命
を奪われました。

明は八月九日の朝元気に家を出ました。明の父は長崎市内にある蚕糸会社に勤めて
おりましたが、父は十日の朝歩いて諫早の家へ帰って来ましたが、明は帰って来ま
せんでしたので、十一日に医大まで行ってみました。そして焼跡をあちらこちらと探
しましたが見つからず、帰ろうと致しますと、畑の方に学生さんが三人ばかり居ると
教えられましたので、行ってみましたら、そこに頭の毛は焼けただれ、ズボンはその
ままで死体となっておりまして。

その日は手続きだけすまし、翌日近所の方二人にお願いして、担架にのせて畑を下
り、校舎の焼跡で焼残りの木を積み重ね、持って行った石油をかけお骨にして帰りま
した。唯今もその悲しみは忘れることが出来ません。

でも比の度皆様の御尽力によりまして、靖国神社にお祀りして頂き、心安らかに眠

ることが出来たことと、嬉しく思つて居ります。

(二五九) 医学部一年生 浅山 明生

遺族 兵庫県西宮市(夙川) 菊谷町六四 浅山 富雄(父)

原爆当日より十日後、未知の而も焦土の長崎の地を初めて踏む

○ 吾子の死を聞けるたまゆら眼冥らみて 崩おれん妻を辛くも支ふ

○ 吾子既にこの世に在らず街上の たぎるはてりに妻と我と佇つ

○ 襲い来る大虚しさや亡骸を 焦土のいづこに求めんとする

子の最後、想ふだに堪へ難し

○ 絶え絶えの命の極み髪を焼き 皮膚焼く火焰襲ひ迫りつ

○ 一瞬に命断たれしか阿鼻叫喚に 数刻在りしかわが胸扶る

○ 静かなる夏のあしたの雨聴けば せめては吾子の骨清くあれ

二十二年振りに大学を訪ね、名碑に相對す

○ 正眼にして吾子の名読みぬはるばると 来し長崎大学医学部の碑に

○ 此処にして命断たれし子を憶へば 夏陽も寒しただに祈らむ

○ 永久にして消ゆること無けん吾子の名を 胸に彫みてわが去らんとす

愚痴とは思へど

○ 生あらば今年四十三才か医大生の 若き顔立頭ち来るものを

(二六〇) 医学部一年生 五十嵐 国 人 (実は二年生)

病理講堂で被爆。直ちに脱出、自宅に帰つたが十三日頃死亡。

遺族 長崎市東立神町九八 五十嵐 太一郎(父)

鶴首期待していたグビロが丘の記名碑も、全く想像以上に、大きく且つ美しく建設されているのを眼のあたりに見て、全く故人国人に再会したような気持ちになりました。経費等も全く不十分の中に、よくもこの様な立派な碑が出来たかと思うと、心から世話人の方々に感謝せずには居られません。

此のグビロが丘は、私の通学当時(長崎医大は私が五十七年前に卒業した母校です)は、全く松と藪の生い茂った丘であつて、読書或いは昼寝のトヤ(鳥屋)であつ

たことが想い出されますが、今や見事に清掃され、期待以上に見事な記名碑が建設されて居るのを見て、今昔の感に耐えず、生死は別つと雖も、親子二代この浦上の一角に寝ると思えば、感無量で、これも全く因縁と思ひました。

殊に式後に息子の姓名を名碑に見出した時は、思わず涙が出て止りませんでした。或いは声をかけたい様な気持で一杯でした。

お蔭で、何時でもグビロが丘に登れば故人にも会えると思つて、吾々(妻や兄弟)は気を安めて居ます。終りに臨み、重ねて世話人の方々の御尽力に、厚く感謝致します。(合掌)

(二六一) 医学部一年生 伊藤 裕 夫

遺族 鳥取県倉吉市下余戸 伊藤公雄方 伊藤 しげ子(母)

(前略) 過ぎ去ってしまったえば早いもの、裕夫と別れて二昔余りになります。昭和二十年七月一日、思いがけなくひょっこり帰つて参りました。「親に会つて来ようと思う者は帰つて来い」とのこと。「途中空襲に出あつて三日かかった」と申して居りました。

一週間の後又長崎に帰りましたが、汽車も沢山人で、掛ける席もなく立つて居りました。今もあの姿が目につきます。そしてその姿がこの世の別れになりました。その後暫らくは、プラットホーム等で角帽の学生さんを見かけますと、近く寄つて見直したものでした。やつぱりこの人も違つていたと、あの頃の気持は淋しいものでございましたが、年月はいつの間にか洗い流してくれました。

二十年十一月二日の慰霊祭(今の経済学部で行われた第一回慰霊祭)には、娘の子と二人で参列させて戴きました。その時一年生の教室の所にあつた骨だと云つて一つ戴きました。誰方様のお骨かは解りませんが、御縁があつて私共のお墓に埋めさせて貰いました。あの時戴きましたお蜜柑は仏前にお供えたままで、とうとう腐つてしまいました。長崎のお蜜柑は紀州のよりもお味がよいと聞いておりましたが、どうしても戴く気持になりませんでした。

でも私は靈魂不滅を信じて居ります。私がこの世の因縁がつきてあの世へ参りまし

たならば、必ず会えると思っております。そう信ずることの出来ます私は、自分で幸せ者だと喜んでおります。(後略)

(一六三) 医学部一年生 石井一徳

遺族 鹿児島市上龍尾町五 石井真一(父)

(前略) 私事も鹿児島県遺族会会長として就任して居り(妹戦死)、毎年四回東京日本遺族会に於て全国の協議が持たれ、色々と補助その他の事で上京して居ます。本月も二十八日から三十日まで理事会で上京致します。

長崎の件に付ても御加勢出来ることがあれば、御申付下されば御手伝い申上げたいと存じます。(後略) (昭四一、九、一二)

(一六五) 医学部一年生 石橋忠

生理学教室で被爆、脱出後片淵町二―四五の平山紀代方にて療養せるも、其後島原の親戚宅に行き、遂に死亡。死亡の日時不明。

遺族 長崎県南高来郡小浜町木場三一〇〇 石橋ながき(母)

昭和二十年八月九日、一生を通じて忘れ得ぬ日でございます。二十二年前の今日の地で、大望を抱き希望した長崎医大学生として学び、激しい戦禍と戦いつつ学徒の本分を守りながら、不幸にして爆撃を受け、学半ばで倒れ逝った大勢の若い命、唯今名碑の前に深く頭を垂れるだけ、嗚呼!! 千年万年待っても返らぬことを、充分承知はしているものの、何としても痛ましく、感無量、せき来る涙押え難きものがございます。この度お国の深い御理解によりまして、今日の盛典に逢わして戴き、又名碑も永久に学内に納め置かれます由、亡き学徒もこの上ない喜び且つ御冥福と存じ、一同心から感激致して居ります。

顧みますと、忠はたった一人の男の子でした。少年の頃から医師を志願し、中学、高校と進むにつれ、寝食を忘れ勉強一筋に学び、やっと医大に進学が出来ました時の喜び様、その顔が今尚私のまぶたに残っています。

実は私等一家は早くから渡鮮致し、主人は教職に在りました。大本営発表で西九州に新型爆弾投下、最少の損害ありとの報道がありました、まさか吾が子が原爆に遭

っているとは知る由もありません。朝鮮は全く音信不通になって居りました。

その後一カ年、帰国も許されぬままきびしい生活、翌二十一年九月、引揚者として一カ月の道中、命からがら愛し子に会える一心から、あらゆる苦勞に耐え、郷里の姉の家にとどり着きました。夢に見ていた大学生の忠が、「お父さん、お母さん、お帰らないかい」と出迎えてくれるものと信じきっていましたが、迎えてくれたのは悲しいお位牌でございました。私達は打ちのめされた様な失神状態、言葉もなくその場にぐず折れました。

あゝ人並以上の体格に、大きな望みを抱き、努力を続けたのに彼岸に達せぬままに倒れたかと思うと、余りにも可哀想で、せつなきままに変わり果てし姿を抱きしめました。当時は世の無情を呪いたくなりましたが、そのうち心も次第に落ちつき、今は七十才の坂を越え、夫とも死別し、皆運命と諦めて、親類はじめ近隣の人々の厚き情の内に、心静かに念仏に生き御冥福を祈りつつ、余生を送って居るのでございます。

(一六七) 医学部一年生 市川幸男

遺族 福岡県久留米市梅満町九二七 笠久恵(姉)

(前略) 私は終戦当時満州に居りまして、昭和二十一年九月福岡に引揚げて、初めて上の弟は戦死し、下の弟は長崎で原爆により死亡したと聞き、悲しみにくれたものでございます。

母よりの言い伝えによりますと、八月九日、弟は教室の窓ぎわの席に居りまして、警報にふと空を見上げると、B29の敵機が既に上空にあり、パツと光った閃光に思わす机の下にもぐり込んだそうです。そのために危く生命をとりとめ、天草の母の許に帰りましたが、如何せん原爆の洗礼を受けていたため、八月十六日に若き命を絶ちました。その一週間はどの間吐き下しが続き、全く衰弱したからで母に起してくれと云い、母の首に両手をかけ、「お母さん」と一言云って息絶えたそうです。

母はそれ以後、同じ年位の若い人を見ますと、幸男のことが思い出され、涙にくれて居りました。前途希望にあふれる幾百の若人が、一瞬の閃光に生命を断たれるこの悲惨さ、二度と永久に繰返されぬことを、ただただ祈るのみでございます。合掌

(二六八) 医学部一年生 植 田 泰 輔

遺族 神戸市須磨区潮見台町三一・二 植 田 マ サ (母)

(前略) 先日は慰霊祭に御案内頂きまして、是非参詣させて頂く積りで居りましたが、少々体を損じ、何分老人の身でございますれば、参詣も一人ではかたがたせず、残念ながら失礼いたしました。また機会もございましたと存じて居ります。

猶、当日の御様子など委しく御知らせ頂き、有難く御礼申し上げます。最早や長い年月も夢の間に過ぎ去ってしまいました。私事もあの当時長崎へかけつけましたが、あの恐ろしさは一生忘れることが出来ません。只々胸にこびりついて居ります。犠牲者の御宅の皆さまにも、御同様の御事と思うにつけ、涙でございます。何卒皆様にも御自愛のほど念じ上げます。

(二六九) 医学部一年生 上 野 弘 男

生理学講堂で被爆、その後裏山で見たものあり。郷里に帰って治療を受けたが遂に死亡。死亡の日時是不明。

(二七〇) 医学部一年生 大 西 欣 二

生理学講堂で被爆、梁の下敷となり即死。

(二七一) 医学部一年生 大 西 俊 夫

生理学講堂で被爆、梁の下敷となり即死。

遺族 神戸市東灘区本庄町西青木本町一六四 大 西 ヌ イ (母)

(前略) 八月九日の記念日には、島原に住んでおります兄に参列して貰いました。その時の模様を兄から知らせて貰いましたが、本当に心から感激して、涙ながらに思いを長崎に走らせてしまいました。

あのままでは可哀想といつも心に思っ居りました。二年前に亡くなった主人も、生存しておりましたらどんなにか喜んだことでしょう。私も一人子だった俊夫を亡くし、又主人を亡くして一人ぼっちになってしまい、心によりどころを失って淋しい日々でしたが、俊夫が立派に祭られて行くことを、唯一つの喜びとして行きます。何卒

この後ともよろしくお願い申し上げます。

(二七二) 医学部一年生 大 原 健

生理学講堂を脱出、宿舎なる榎津町弘心寮に帰寮の後死亡、日時不明。

(二七三) 医学部一年生 片 山 登

遺族 岡山県御津郡加茂川町下加茂 片 山 絢 子 (母)

(前略) その後、遺族会の方々には亡き子弟の為に御尽力頂き居ります趣き、感謝致し居ります。遠く離れていては毎年思うのみにて過して居りますが、若くして亡くなりました学徒たちに、御子孫はございません。せめて靖国神社に永く祀って頂きましたならば、本望でございます。

私も昨年より病院生活十カ月で、漸くこの頃は自宅に帰って居ります。七十五才になりましたがガンと戦うて居ります。今では全治したかに見えて居りますが、如何なものか、私の命のある限りは忘れられないあの当時の長崎、今は復興して居ります。う。一度お伺い致したいとは存じますが、今のところむづかしいことと存じます。

(後略)

(二七四) 医学部一年生 川 崎 正 之

生理学教室で被爆、伊良林国民学校にのがれ、校庭で死亡(十三日昼)。

遺族 鹿児島市郡元町真砂五区三班 川 崎 栄之丞 (父)

私は当時南満鉄道本社に奉職中で、正之は旅順高校を卒業、長崎医大の入試合格の通知を受け、二十年三月二十五日に大連を出発し、朝鮮経由で関釜連統船の最終便に乗り、勇躍長崎へ向いました。

私達は当時大連に住んでいて、内地とは音信不通のため、広島・長崎に爆弾の投下されたことは、風の便りに聞いた程度でした。二十二年四月、何にも知らずに原籍地の鹿児島市に引揚げ、初めて原爆による被害の甚大だったことを知りました。その頃、たまたま鹿児島市で九州医学会総会が開かれましたので、長崎医大議長(註、古屋野学長だったとのこと)に面談、吾子の生死調査方を御依頼致しました処、同郷の

若原先生に調査方を命ぜられ、同先生からの通信で、正之の死亡が確定となった時の一家の嘆きが如何許りであったか御想像下さい。尚遺骨の所在が判明したので、私は二十二年九月長崎に行き、大学にて確証を見届け、グビロが丘に眠る幾百の霊に拝礼し、お骨をいただいて鹿児島に帰りました。

長崎で聞いた話によると、正之は学内で被爆して重傷を負い、伊良林小学校に收容されましたが、此処で治療中に篤志家戸泉とし子様の御手厚き御看護を受けた由で、八月十五日の終戦の日も見舞に來られ、正午に重大放送があるからと申され、自宅に歸られる時も御手をしっかりと握りしめ、「おかあさん」と大声で泣き出したとか。そして放送が終り二時頃再度見舞われた時は、既に息が絶えていたそうです。被爆後約一週間、苦しい毎日であつたろうと、涙なくてはの感無量であります。（中略）

正之の死骸は、十七日に戸泉様御自身で火葬して頂き、遺骨は大学に渡さず、遺品と一緒に御自宅に保管されてありました。遺品としては、リュックサック・教科書・大学ノート・日誌・靴・帽子などが残されて居り、遺骨も真正正銘正之のもので、他の学生諸君より見れば、果報者だったとつくづく感じて居ります。これも全く戸泉とし子様の御芳志によるもので、何とお礼を申上げてよいやら、言葉もない程であります。

故正之通信の一部（二〇、六、二二日付け）

時局益々進展、毎日午後は病院や学校の勤務奉仕です。食事も益々逼迫、やがて昼飯抜きになるだろうと思います。街にうどんもなくなったので止むを得ません。毎晩々々敵サンの訪問でうるさくて寝られませんが、まだ落さんから御安心下さい。同宿の解剖学助教授の呂先生に御世話になっていきます。御父上様よりよろしくいって下さい。学年主任は解剖の池田吉人教授です。色々御世話になっていきます。よろしくお伝え下さい。

段々暑くなって来ます。御父上様、母上様、皆様お元氣でお暮し下さい。

正之の絶筆

八月九日、この日こそは余の人生觀をくつがえさんばかりの出来事を生じた。生理

学清原教授の時間が今しも終りし頃、警報の発令と共にピカリ、サー——と来て頭が熱い。タスケテ——タスケテ——。

（一八一） 医学部一年生 古賀 宏 次

生理講堂で被爆、脱出して薬専の防空壕に退避し、学友桃原君と共に十一日まで壕内に生存、その後は消息不明。

遺族 福岡市大字田島別府公団住宅七四二 古賀 竜次郎（弟）

（前略）今夏の除幕式には都合で出席できず、大変残念に思っております。あれから二十二年、短かくもあり、長くもあるように思えます。当時小学校六年だった私は、兄の記憶は余りさだかではありません。兄とは八つちがいでしたから、兄の高校時代の寮生活などを計算に入れると、家で一緒に生活したのは十年足らずです。長く病床にあった母が翌二十一年に、二十八年には父も死亡、全くあのころを考えると夢のようです。

父母は目の前でなくなりましたので、その感じはありませんが、兄の場合、今でもどこからかヒョコリ顔を出しそうな気がしてなりません。テレビなどを見ていて、フト兄に似た名の俳優が出て来ると、そうでないことは分っている、ホントはこれが兄ではないかと、思ったりします。

二十年八月の、たしか十二、三日だったと思います。伯父が長崎へ行き、骨をもらってきました。すぐ葬式をしましたが、駄菓子を入れるような紙袋に、サラサラと音がする位にしか入っていませんでした。二十一年に中学に入り、国語の時間にそのことを作文に書き、「感じが出ている」と先生に云われた記憶があります。兄の写真は、病気でねている母とユカタを着た兄、まもなく満州に嫁に行くようになっていた姉、小学校に上る前の弟と一緒に写った一枚しかありません。その場に私がいたのは覚えていますが、何故一緒に写らなかったのか記憶にありません——。

それもこれも、二十年の歳月はやはり長いものです。私も二兄の親となり、弟も今春一兄に恵まれました。満洲へ行った姉は、兄より一年早く病死しましたが、その子もことし二十三です。兄の年をとくに越して、何も出来ない自分をかえりみて、恥

しい思いにかられている昨今です。(後略)

(一八三) 医学部一年生 児 玉 望

生理講堂で被爆、前方の座席にいたため脱出が困難で、其の後誰も消息を知らず、収容された報告もないので、多分そのまま焼死したものと思われる。

遺族 東京都世田谷区弦巻町四一——一七 清水方 児 玉 信子(母)

長兄の児玉望が原爆のため亡くなりましてから、はや二十二年の年月が流れ、今更ながら過ぎ行く時の速さに驚かされて居ります。(妹 児玉幸世代筆)

当時私共は四国の愛媛県西条市に住んでおりまして、兄は松山高校から長崎医大に昭和二十年の春に進学致しました。幼時から医者志望(祖父が医者故か)で、戦争酷の一番苦しい時代でしたが、自分の志望した医者になれるのだと、非常に喜んで長崎に参りました。当時兄が家に出した手紙類は保存してありますが、書きつぶした紙を裏返して封筒に作って使用しており、如何に物資が欠乏していたか胸が痛みます。しかし文面は元氣よく、長崎は余り空襲もなく、のんびりした景色の美しい所だとはめたたえ、入学したばかりなのに、もう一人前の医者のような書きぶりで、病気の父の容態について、自分の所見など述べております。

当時は誰でも栄養不足で、兄もそのために少し健康を害し、夏の初め(七月下旬)から一カ月の静養をすめられましたので、休暇をいただき山口県にある親戚に養生に参りましたが、八月六日の講義には是非出たいと申して、病気休養中にも拘らず、親戚の者が留めるのを振り切って長崎に帰り、九日は講義中に原爆が落ちて死亡致しました。「休暇が残っていたのだから、もう一週間帰りを延していたら死ななかったのに」と母が悔みましたら、父が「学生が講義を受けるのは当然ではないか」と母を強くたしなめたそうでございます。母は兄の死後一カ月あまりも知らずに過したことが、何時までもたまらなかつた様でございます。

兄が死んだらしいということは、九月も半ば過ぎて聞きました。父が病気のため親戚の者が長崎に行ってくれ、大学の廃墟の中からお骨(誰のかわかりませんが)を拾って帰りました。そのお骨と兄の愛用の帽子とを、瀬戸内海の波静かな浜辺の墓地に

埋め、毎月命日にはお参りしましたが、聞えるものは松を渡る風の音のみ、あまりの平和な静けさに、却って兄の死を痛切に感じさせられるのでした。父は母や私共弟妹には、自分が強くなければと愚痴もこぼさず、泣顔さえ見せませんでした。山口県の親戚へ参りました時、「ここで泣かせてくれ」と申して、男泣きに泣いたそうでございます。母も兄の死後二年ばかりはどうしても兄の死が信じられぬ思いで、人の足音がすると兄が帰って来たのではないか、玄関の戸がいつもの通り勢いよく開いて「母さん、ただいま」と帰って来るような気がすると申して居りました。これは私共の思ひ出す事でもございますが、遺族の皆々様もそれぞれ思ひ出にひたって居られることでございます。

(一八六) 医学部一年生 篠 原 邦 夫

遺族 長崎市新中川町六一 篠 原 修 三(兄)

弟よ 安らかに

弟は被爆後、つぶされた教室から這い出して、いったん帰宅した。全身やけどの重傷の身を、矢上の親戚の家へ疎開した。そして十五日、終戦の日に息を引きとった。

自分で脈をみながら、「もう長くはないよ」と妹たちに云っていた。天皇のラジオ放送に周囲が騒いでいるのを、床の中からいぶかって、「何かあったとね?」と尋ねていたが、父は「いや、何でもない」と、長くはない命の弟に教えなかった。だから弟は終戦を知らずに死んだ。

弟は、もともと京城大学に学んでいた。それがその年の春、母が亡くなったので帰省した。葬儀などがすんだので帰校しようとしたが、関釜連絡船のキップが、当時のことだから中々手にはいらない。そうこうする内に、長崎医大へ転校したら、ということで、父の友人でもあつた角尾学長さんに頼んで、わざわざ一年おくらして転校した。

なんでも転校にかなり手間取ったらしく、やっと転校ができた原爆だった。そんなことで弟に関する記録が大学になく、僅かに、ある小冊子に名前が出ていたのを、調教授のお骨折りで探していただいた。

私は軍隊に行っていたし、父もすでに亡く、弟が転校入学した月日など皆目わからない。同級生の生存者もなければ調べようもない。

だが、グビロが丘の碑に、弟の名前もハッキリ刻んでいただいた。多くの同級生と一緒に、懐しい母校の庭に、永久にその名をとどめ得て、いま弟も喜んでいることであらう。

【調 補記】 篠原邦夫君の名は、学部連絡簿中にも、遭難顛末調査書にも記載がないが、三十年出版の「追憶」の中に明らかに記載されている。

(一八八) 医学部一年生 菅 原 寮 二

遺族 福岡県久留米市梅満町九六三 菅 原文彦(父)

二男寮二及び甥三善の遭難記

寮二は八月九日帰宅の予定で八日に切符を買い、荷物もリュックに詰めていました。九日は出発を午後延し、講義をうけるために大学に行きました。清原教授が生理学の講義を始められた途端に原爆が落され、寮二は親友の鶴田十四夫君と一緒に教室から這い出し、裏山の方に逃れました。然し暫らくして気がつく、彼に捉っていた鶴田君の姿が見えず、いつの間にか別れ別れになってしまいました。

仕方なく一人で山を登っていると、後から呼ぶ声がありました。見ると二人の中の一人は従弟の三善(医専二年)でした。寮二は腰を打って歩行が困難だったので、両側から二人に助けられて金比羅山に逃れました。山の中腹ではけしい暴雨に遭い、漸く峠に着いた頃には日も暮れ、その夜は山中の農家で過しました。三善は数日前母と姉のいる鹿児島に行きましたが、二人が大分県由布院に疎開した後だったので会えず、そのまま八日長崎に戻り、九日朝登校の途中病院下で電車を降りた途端に被爆し、友人と二人で山に逃れて来たことでした。

三人は翌朝山をおりて片渕町三丁目の三善の下宿に辿り着きました。寮二はそこで二人に別れ、同じ町内の大島恒次氏宅に身を寄せました。大島さんは同郷でしかも隣同士、私とは幼時からの親交の間柄で、当時三菱造船所の外業部長でした。寮二は同家の方々の親身も及ばぬ温い看護を受け、中学同窓の川原省三君(当時医専三年)に

も度々見舞って頂き、注射など手当を受けました。

当時は音信・交通共に甚だ困難で、八月十八日に初めて寮二の消息がおぼろげながら判ったので、早速三男を連れ、医薬品など用意して長崎に向いました。筑後川鉄橋が破壊されていたので、鳥栖まで自転車でのき、復員兵を満載した貨車に辛うじて乗り込み、十九日午後一時近くにやっと長崎駅に到着、大島氏宅に急ぎました。しかし寮二は既にその前夜十一時五分に、大島氏と令息勝君に手をしっかりと握られながら、二十一年の短い生涯を終っていました。

十九日夕刻、死体を高商グラウンドに運び、大島氏宅から運んだ薪を積みあげて茶毘に附し、翌二十日朝、骨を集めて箱に納め帰路につきました。

一方三善は重態のまま存命し、下宿のおばさんの温い看護を受けていたので、持参したリンゲル液やブドウ糖液を注射し、駆けつけて来た私の次兄(三善の叔父)に後事を託して久留米に帰りましたが、三日後の二十一日に、寮二のあとを追ってこの世を去りました。

寮二の葬送を済した後、三男は母と再び長崎に行き、寮二の下宿(紺屋町)から、寮二と鶴田君の遺品を持ち帰りましたが、その中に新聞紙に包んだ毛髪があり、それは寮二が缺でつんでやった、鶴田君の頭髪であることがあとで判りました。鶴田君の遺体は遂に全く判明せず、この毛髪が残された唯一の形見でありました。

鶴田君の郷里は熊本県阿蘇郡小国町でしたので、三男がこれを見つけるために出かけましたが、日田から杖立経由で行くバスが、前日の大雨で不通になったため、止むなく豊後中村から山越えで行くこととし、途中日が暮れたので見知らぬ家に泊めて貰って、翌日漸く鶴田家に到着しました。丁度その時鶴田家では、親類の方々が集まられて、鶴田君の法要が営まれているところでありました。

以上が私が直接に体験したり、又間接に確聞し得た寮二・三善・鶴田君三人の遭難顛末の記録であります。今も振り返って憶い起しますと、其間に生じた色々の偶然とは断じ難い、奇しき事態の跡に心を打たれます。此等のことは、人間の知恵を超えた大きな意志の中で運ばれたものと解します。而もこの大きな意志の永遠の計画の

中に、すべてのものは動き、その計画の成就に向って、あらゆるものが参加させられていると思惟されます。この故にすべての犠牲も空しからず、死も栄光にかがやいてゆくと想います。

(一八九) 医学部一年生 鈴木盛男

生理講堂で被爆。十日―十二日頃死亡。

遺族 横浜市港北区南綱島町六四四 鈴木はま(母)

今から二十二年前、大きな希望をいだいて松高から長崎へ向ったあの子は、あともなく消え去り、呼べども叫べども風の様に消えてしまった。原爆という恐ろしい爆弾にやられ、長崎は広島に次ぐ多い死傷者と新聞で見た時は、ただ茫然としてしまった。それに浦上を中心として落されたとのこと(盛男は浦上の学校の近くに下宿して居た)。私は居ても立っても居られぬ気持、汽車の切符は中々買えず、横浜から長崎までは余り遠いので、途方にくれてしまった。丁度その時、九州部隊が近所にいたので話をすると、隊長様が気の毒がり、すぐ部下に命じて切符を買って下さった。飛び立つ思いで漸く汽車に乗った。

その時はもう八月二十五日で、どこの駅も山の様な人、帰宅の兵隊、落ちつく先へ急ぐ人、出入口からはとても乗れず、窓から押し上げられてやっと乗った。客車から貨物と何度か乗りかえ、漸く長崎の駅に着いたのが二十九日の午前十時頃と思う。とても暑くて咽がひりつく様に乾くので、道端のこわれた水道管から水を飲み、重い足を引きずりながら学校についた。学校から出されたおにぎりを戴き、受付にいた上級生と思われる学生に話を聞くと、一年生は丁度非常警戒がとけたので教室に入り、勉強にいたばかりとのことであった。強い光に学校は焼かれ、学生は皆アツという間に灰となっていたようで、実に惨憺たる有様だったとの事であった。傍らに貼紙があり、見ると盛男は行方不明としてあった。

主人の兄(主人は当時北支済南に社用で勤務中)と、あてどもなく、病院という病院、学校、区役所などに収容されていないかと、くまなく探し廻った。しかし何処にも居ない。こうしていても死んだ者は浮かばれないと思い、心を後にして帰途につい

たのである。

あれから二十余年、来る年も来る年も、八月になるとテレビやラジオで原爆が報ぜられて、恐ろしかったこと、悲しかったことなど、忘れようとしても忘れられない呪わしい日がやって来たが、今年は長崎の遺族会の皆様のお骨折りで、靖国神社に祀れることになり、三年前にこの世を去った主人と共に、草葉の蔭で喜んでいることと思ひ、目頭があつくなるのを覚えます。私も独り息子を失ひ、主人にも先立たれて、淋しい日々を送っていましたが、今は少しでも多く長生きして、お線香をあげてやりたいと頑張つて居ります。

(一九三) 医学部一年生 立石和生

生理学講堂で被爆、同夜は医大裏山で過し、十日に治療を受け、友人に伴われて下山、医大正門前で一夜を過し、翌日下宿の人に迎えられて下宿に帰る。

(一九七) 医学部一年生 中川二郎

遺族 島根県簸川郡湖稜村字常楽寺六九二 中川ヨシノ(母)

昭和二十年八月十一日の夜半のことです。長崎にいる我が子のことを氣遣い、寝もやらずにいました折から、門を叩く音に若しや長崎から帰ったのではと、とび起き出て見ました。ところが其処に二郎が立っているではありませんか。「よく帰って来たね」。「お母さんヤラレタ」の一言を交わしました。よく見れば無帽、そして白晝だった顔が焦げ色に、服は泥にまみれ、足は素足のまま、片手には古ぼけた下駄を持っていました。随分疲れた様子で、余りの変貌に驚くと共に、惨禍の程も偲ばれ、胸のつぶれる思いを致しました。帰りたい一念で、この体でよくも長途の旅にたえられたものと、いとしさも一入、暗涙にむせびました。

被爆後何も食べていないと申しますので、急ぎ病人食を作つて進めましたが、二口余り食べ後、嘔下が難しかったのか戻しました。夜の明けるのを待つて医師の来診を乞いましたけれど、適当な治療も医薬もなく、顔と足の傷を手当して頂き、ひたすら疲労の回復を待ちました。食事はもとより薬も嘔下不能の状態、日に日に衰弱するばかりでした。でも精神はたしかで、被爆後の様子を話してくれたり、二学期の勉

強はどこであるのかなど申して居りました。痛むところはないか、気分はどうかと尋ねますと、平常の通りと申しまして、一度も苦痛を訴えませんでした。思うに体中の器官が犯されて、そのため苦痛を感じなかったのではないかと考えられます。

十五日朝から、緑色の水様便に臓器の破片と思われるようなものを混えた下痢が続き、医師も家人もただとまどう許りで、全く手の施し様もない状態になり、終戦を知ってか知らずか、十八日の未明に短い一生を閉じました。戦争とは云いながら余りの惨酷さに、私は悲憤の涙にくれました。

本人の話によれば、被爆後気を失い、我に返った時には重い煉瓦壁の下敷になっていて、中々出られず、あり丈の力をしぼってやっと這出した。時刻はさだかでないが夕方近くの様に思われ、学校の裏山に登って一夜を明かし、習十山下山して校庭の受付に帰省を申出で、漸く汽車に乗り、車中皆様の温いいたわりを頂き、辛うじて帰ったことでした。

思えば陽春四月、「笈を負うて鎮西に遊ぶ、又楽しからずや」と喜び勇んで西下したあの子が、半歳も経たない中に幽明を異にするなど、戦争を呪わずにはいられませんでした。以来二十年余り、一日として忘れる事なく、悶々の日を送って参りました。どうか二度とこの様な悲しみのないように、何日までも平和でありたいと希う一人でございます。

(一九八) 医学部一年生 中 瀬 博

生理講堂で被爆、脱出して其夜は医大裏山で過し、十日友人に伴われて下山、医大正門前で一泊、翌日下宿の人に迎えられて帰宅。

遺族 大阪府枚方市伊賀北町七ー七 中 瀬 佐武朗(父)

「長崎に特殊爆弾落つ、損害軽微」という記事が新聞の片隅に出た。これを見て、家内も私もまるで頭をなぐられた様な衝撃を受けた。それというのも、広島島の惨状がぼつぼつ風の便りに伝わって来ていたからである。遂に居たたまえず、家内が長崎へ行くことにした。

長崎の駅を出ると、そこへ丁度高槻工兵隊に入隊していた次男が偶然に現われ、

「兄ちゃんは無事で、病院にいる」と云ったので、家内は飛び上るほど喜び、急いで陸軍病院へ行つたところ、同病院では軍人の負傷者を収容しきれないので、諫早女学校に臨時病院をつくり、民間人は全部その方へ送つたとの話を聞くと、不安に思いながら諫早病院へ来てみると、仲はずでに終戦日の午後一時になくなっており、諫早の火葬場へ送つたとの事に腰をぬかささんばかり驚き、悲嘆の涙を押えながら火葬場に行き、遺骨を貰って再び長崎へと返した。

生き残った寮生の話によれば、博は当日講堂から逃れて、学校の裏山で一夜を明かし、翌日寮で寝ていたところへ寮生が帰って来て、かついで病院へ連れて行ってくれたとの事である。誰一人身内のない異郷で病床に呻吟し、そのまま亡くなったかと思うと、今でも胸のはりさける思いがする。

○ ひまあれば遺骨の前で鳴咽する 妻の姿に我もたまらず

丁度十七回忌を迎えようとする頃、学校からは何の便りもないので、名簿が全部焼けてなくなったのであろうか。せめて学校に席のあったことだけでも記録しておいて欲しい、と念願する気持ちがつのり、その年の八月十五日に学校を訪れた。学校では遺族の幹部の方々の御尽力により、裏山に立派な慰霊塔が十三回忌に建立されており、博の名も確かに名簿に残っているとの事で、安心と喜びに胸をおどらせながら、慰霊塔に参拝しました。

この度は又遺族会役員の御尽力により、政府より見舞金を戴き、靖国神社へ合祀されることになり、尚爆死者の名碑も建立して戴いて、遺族としてこんな嬉しい事はない、と大いに感謝して居ります。去る九日には盛大な除幕式と慰霊祭に参列出来、益々その感を深く致しました。(後略)

山陽特殊製鋼販売二課長 中 瀬 博 忠(弟)

最近大阪の松坂屋で原爆展が開かれ、戦後生れの青年男女の入場者で、会場は超満員でした。食い入る様に展示物を眺める彼等の脳裏に、果して原爆投下時の惨状が、どの程度実感として理解出来たか疑問です。

人間が産んだ「悪魔の子原爆」の恐ろしさは、矢張り筆舌に尽し難いものです。そ

れ故これを地球上から抹殺しない限り、人類には安心と幸福がもたらされ得ない様に思います。

昭和二十年六月、大学入学を前に一兵卒として工兵隊に入隊した私は、穴掘りと戦車に体当りする即席訓練を受け、間もなく九州防衛のため、極秘裡に大阪を出発しました。八月六日早朝の事です。広島の手前で原爆投下のためストップ。そのまま山陰線廻りで長崎に着いたのは、八月八日の夕方でした。駐屯地「土井の首」での一夜は、偶然にも遠い長崎で兄と会える喜びで、無性に目が冴えました。

翌八月九日、上半身裸になって到着、荷物を取りに長崎に向って行軍していた私達が、市山の裏山の裾近く来た時、一台の飛行機が真白の落下傘を投下しました。続いて又落下傘を投下、両者が同じ高さに並んだと思った瞬間、暗室で見る写真のフラッシュの様な烈しい閃光、思わず反射的に身を伏せました。同時に焼けつく様な熱気を背中に感じ、跳び起き様とする時、猛烈な爆風と爆発音に転がされました。無我夢中で見上げた空には、奇怪な黒煙が茸状に中天に舞上っていました。全身異常がないと判ると、我に返った私は、直観的に「原子爆弾」だと理解しました。大段博士が研究中殉職した時、中学校の物理の教師が原子爆弾の存在を教えてくれたのを思い出したのです。やがて無気味な黒雲は太陽を遮り、辺りは暗くなり始めましたが、その黒雲の下からメラメラと赤い焰が燃え上り、益々高く広く拡がって行く様で、云い知れぬ無気味さに促われました。私達は急遽完全武装して市内へ駆け足で向いました。逃げて来る人達は皆放心した様で、全身焼けただれ、皮がぶら下った有様は、まるで幽霊の行列です。市内に近づくにつれ、その惨状は此の世の生地獄、原爆特有の破壊力は正に人類の破滅を想わせました。

駅前から諫早までの国道の修復を下令された私は、目の前に残骸化した長崎医大を見、そこが爆心地と知った時の驚き、而も任務のため隊列を離れられない苦しさ、今想起しても胸が痛みます。三日間の作業を終え、土井の首に帰った私達は、十七、八日になって敗戦を知らされました。早速許可を得て長崎医大に行きましたところ、生存者名簿が貼り出してあり、その中に兄の名がありましたので、行方を探しましたが

分りませんでした。其の後再度長崎駅の整備に赴いた私は、偶然大阪から兄を探しに来た母と妹に駅前で会いました。驚く母に兄が生存している旨を話すと、母の目から涙がほとばしり出しました。母はすでに兄の死を確認していたのです。丁度敗戦の日に苦しみながら死んだ事、その頃私が軍務のためその近辺を往来していた事など、言葉交している中に別の行動が下令され、母は泣きながら去って行きました。

今日当時の悲劇を思い起して、まるで小説にも似た偶然に驚きますが、中でも不思議な事件があります。八月十五日、私達の部隊は長崎の西海岸から米軍上陸の報を得て、遺髪や遺書を残し、爆薬を担いで強行軍をしていました。その時私の体にしっかりと結びつけていたお護札が、二度に亘ってプツリ切れて落ちたのです。私はその時刻が恐らく兄が絶命した時間だと、人知れず信じています。家族から遠く離れた医学生の子が、不可解な病状で悶死するに際し、一番近くの私に知らせたのだと信じています。

戦後二十二年、何時も仏前で泣いていた母も数年前に亡くなり、七十才の盲人の父が年々の仏事を営んでいます。幸い遺族会代表の方々の長年の努力により、母校の庭に永眠出来るようになった事は、遺族にとり感謝の言葉もありません。盛大な慰霊祭に参列し得ました事は、生き残った者の慰めでもありました。

(二〇〇) 医学部一年生 中村 清 一

生理学講堂を脱出、医大裏山で見かけたが、三日後に市内片瀨町二丁目四五、平山紀代方にて、療養の甲斐なく死亡。

(二〇三) 医学部一年生 新田 寿 男

遺族 東京都杉並区下高井戸三三三五 新田 寿 恵(母)

当時私は香川県多度津町に住んで居りました。夫は昭和十八年二月に病死し、長男・長女・五男は幼い時に病死、次男は佐世保に徴用、三男(寿男)は学徒隊から解除されて長崎医大に、四男は松山高校在学中に学徒動員で満洲に出征、終戦の頃は高知県の須崎陸軍病院に負傷で入院中、家では私一人の生活でした。

呪わしい二十年八月九日、長崎が爆撃されたことをラジオや新聞で知り、驚き少し

も早く現地の様子を知らたいとあせって居る内、町内に長崎から帰られた人があると聞き、すぐにお目にかかって尋ねると、「自分はすぐ帰ったので、後の事は知らないが、中心地が大学あたりときいたから、お気の毒ですが多分駄目でしょう」との事、どうすればいいのか思案にくれ、菅様（註、学部二年菅道之君の父上和人氏）に御懇談するより他ないと思い、早速宇多津に行き、大学被災のお話を致しました処、菅様には早や道之様の叔父様が現地に行かれたとの事、菅様も唯お一人の御子息のこと故、御心配も一入とお察ししながら、一応家に引き取り、後日お伺いすると、道之様は被爆三日後に亡くなられ、御遺骨を持帰られ仏壇に祀られておりましたので、御冥福をお祈りして家へ帰りました。「これでは寿男も愈々駄目か知ら、否々そんなことはない」と頼みにならぬ頼みをして、学校よりの便りを待ちましたが、幾日たつても何の沙汰もなく、唯途方にくれていると、佐世保に居る筈の次男がヒョコリ帰って参り、長崎医大は全焼していたので、仕方なく教室のあたりから遺骨を拾って来たと思しします。寿男の骨とは思われませんが、誰のにしてもお祀りしてあげねばと思ひ、夫の墓碑の下に入れ、ずっとお祀りして居ります。

でも若しかすると寿男はショックで意識を失ひ、フラフラ彷徨っているのではないかという気もして、自分の目で確かめねばと長崎に参りました。不案内の土地ですが、懸命の思いで学校目ざして行きますと、肉片のついている犬か馬かの頭様のものや、人か動物かの骨片が路上に残されたままあるので、生きた心地も致しませんでした。大学に辿りついてみると、唯コンクリートの柱様のものが残っているだけなので、我が子の名を呼びながら焼跡を歩き廻りました。所々に遺骨がまだ片付けられずにあるのですが、息子の骨がわかる筈もなく、皆様の御冥福を祈って本部受付を訪ねました。係の方のお話では、当日学校に出ていた人は全部亡くなったとの事でしたので、致し方なく寿男の下宿へ参りました。此処は戸障子がとんだ程度だったそうで、寿男の荷物はその儘残って居りました。家を出る時、夫の形見の大島の着物上下を持たせたのですが、着物だけ残って本人が亡くなるとは、何という皮肉でございましょう。もう何の望みもないので、荷物をまとめ帰国致しました。

日夜あの子の最後の有様など想像して、苦しい日を過している内、四男も解除されて帰って参りました。二人の子供を送り出す時は涙一つこぼさず、君国のため尽す様にと励まして出した私ですが、今に寿男も帰るのではないかと、未練をもつて暮して居ります。もう後幾年も生きられない私ですから、この夢は破りたくありません。去る三十六年の原爆記念日に、四男と二人で参詣させて頂きましたが、昨年は四男が熊本に転任致しましたので、八月三日に大学に立ち寄り、慰霊碑にお参りし、銅板の記念碑のことなどお話を伺いました。これで寿男其他の皆様も浮ばれるのだと、感謝申上げました。

（二〇六） 医学部一年生 箱田 吉 清

遺族 広島県福山市金江町 箱田 稔（父）

（前略）私も広島島の原爆に遭ひ、現在松永市の原爆被害者の会長をしております。銀行支店長在職中に応召、被爆、男としては私と伴一人の処、二人とも被爆、一人は死亡（伴）、一人はやつと生き残り（私）、余生を信用組合のために、常勤として全責任を以て奉仕して居ります。（後略）（四一、一〇、二）

【別便】 靖国神社へまつられますと、亡き伴も喜ぶことと存じます。私も今春妻を喪ひ、あれこれとりまぎれ、御返事もののびのびとなり失礼致しました。今少し早ければ妻の死に間に合つて、喜んだらうと思ひます。（後略）（四二、七、九）

（二〇九） 医学部一年生 平 川 栄 一

生理学講堂で被爆、その後市内榎津町弘心寮に帰寮の後死亡、日時不明。

（二一五） 医学部一年生 松 浦 重 信

生理学講堂で被爆、一旦下宿に帰り、その後郷里の長崎県北松浦郡佐々村臼浦に帰り死亡、死亡の日時不明。

（二一七） 医学部一年生 溝 口 常 一

生理講堂で被爆、二、三日後大学病院本館前にて見受けたり。其後の動向不明。全身に負傷せり。

遺族 宮崎市上野町二丁目二一 溝口兵一(父)

この広い世界に唯二つ落ちた原爆、この犠牲者に唯一人の伴、私の家庭は全く破壊されました。この惨事のために愚妻も終いに病み、この世を去りました。

私も悩みは同じ、されど男子なるが故に、齒をくいしめて生きのびました。せめて故人の霊のためにと、静かにつくづくと老后を思う時、何の目的も、希望も、楽しみもなく、味気なく舵を失った小舟の如く、日々を送っています。

私生来庭いじりが好きなので、これをいじりながら気をまぎらわし、余生を送っている今日この頃です。

時に触れ、折に触れ、思出はつきぬことばかりです。あの無慚きわる原爆は、全世界平和のために抹消すべきだと叫びたい限りです。(本年満七十三才)

○ いとし子は医大の庭に散りにけり

○ 老眼鏡かけて行末思うなり

(二一八) 医学部一年生 嶺 脇 秀 雄

生理講堂より脱出、同夜は医大裏山で過し、十日些かの治療を受け、夕方友人に伴われ螢茶屋の下宿に帰る。その後不明。

(二一九) 医学部一年生 宮 地 義 信

生理学講堂にて被爆、即死。

遺族 東京都杉並区善福寺二丁目三七―一二 宮 地 ゆ き(母)

信義が私達の前から忽然と姿を消してから、二十二年の歳月が経ちました。狂はしう程に嘆き悲しんだ心も、次第に薄らいでは来たものの、その反面、中学や高校時代の友人が、立派になって社会に活躍しておられるのを見ると、一層の無念さに胸は疼きます。忘れもしない終戦の年の七月下旬、弟誠哉が間もなく入営するというので、その壮行会のため帰ったと言つて、佐賀の假住居にひよっこり姿を現しました。折悪しく病臥中だった誠哉を、信義は医者のお卯らしく、色々と心を砕いて注射をしてくれたり、主治医の島田先生を訪問して、病状を聞き自分の勉強の参考にしたり、リンゲルを打ってくれたりするその熱心な有様を、嬉しく見守っていたのです。

八月一日の入営を延期せねばならなくなり、その延期願を西郷村役場に持参しての帰り、借りた自転車が一時迄には入用という短い時間を、日頃お世話になった親戚のあちこちを廻つて来たというのも、最後の訣別に行つたのであろうか。

帰校の時は三年間療養をしたホームを訪ねたいという。福岡県津屋崎は長崎とは反対のコースだし、空襲も激しい折から一応はとめたが、どうしても行きたいというので意に任せた。午前三時五分の汽車だったので、手ぎりで準備を整え、二時半ごろ燈火管制の暗い夜道を、トボトボと出で行つたあの姿、玄関に立って暗闇の中に次第に遠ざかつて行く後姿を見送つたが、まさかこれが最後の見収めになろうとは、どうして想像出来たであらう。それっきり信義は母のもとへは帰ってくれなかった。

ほんとにいい子だった二十三年の短い生涯は、真面目と勉強と努力の連続だった。長い闘病生活にも勝抜き、病前にも増して健康になり、よく肥つた寝姿を見ては、肥えてるのか腫れてるのかと、その頬をつまんでは共に喜びあったことも再三だった。自分でも、「僕こんなに健康になる時が来ようとは思わなかったよ」と述懐しては、嬉しくてたまらぬという風だったのに。

前途に洋々たる希望をもつて、四月九日入学式のため二人で医大の門をくぐった。立派な校舎を見上げては、自慢らしく色々と説明してくれたり、帰りの道すがら、「長崎にはこんな大きな横穴壕があるから、空襲は佐賀より大丈夫よ」と母を安心させたのに。それから四カ月過ぎた八月九日、憎むべき原子爆弾のためについにこの世を去ってしまった。今更何を云つても詮ない事、ただ永遠の世界平和を願いつつ、ひたすら冥福を祈る外ありません。

○ 朝な夕な香焚き飯を供へつつ 吾子を拝みて二十年経ぬ

○ 若き日を勉学一途に生きし吾子 せめて娶りて死なせたかりし

○ 在りし日に吾子が好みしものなれば 精進ならぬ鮎を供へつ

○ 学友の二三は学位をとりしとふ 非命に果てし吾子の痛まし

○ 笑み浮べさびある声にて呼びかけし その面影の忘れ難なく

(二二〇) 医学部一年生 村 田 修 策

三日後大学病院正門に集れるのを見る。衰弱甚し。その後の動向不明。

(二二) 医学部一年生 桃原 敬太郎

生理講堂で被爆、古賀（宏次）、大西俊夫、島田秀三郎、時沢（医専一年）等と共に薬専防空壕に避難し、十一日午前、病院の正門の所で軍医の治療を受く。

(二三) 医学部一年生 山田 敏夫

生理講堂で被爆、大学裏山に逃れ、十一日父母に連れられて家に帰る。十六日自宅（新中川町六九）で死亡。

遺族 長崎市伊良林町一八三 山田 義夫（父）

ついこの間の様に思って居ますが、もうあれから二十二年の月日が経ちました。思い出せば今日の様に暑い日でした。私は妻や末娘と共に防空壕に居りました。ピカッと光った青い光に、部屋の窓に向ってミシン掛をしていた娘のスミ子が、暑いと叫びましたので、焼夷弾かと思いましたが、これが恐ろしい原子爆弾だったのです。壕から出て見ると、真向いの春徳寺の屋根瓦が全部なくなっており、附近の民家の屋根も同様でした。虫の知らせか敏夫が登校直前に、「今日は欠席したらどうか」と申しましたが、今日はよい講義があるからと云って元気に出て行きました。

諏訪神社の森の向うに高く昇る黒煙を見ては、医大に行っている敏夫のことが心配で、居ても立っても居られませんでした。午後五時頃になって大学からの伝令の学生が、「敏夫君は生きているが、疲れているので休息してから帰宅する」と伝えて呉れたので、一安心致しました。だがその日は遂に帰って来ませんでした。夜の明けるのを待ちかねて、娘の百合子と二人で探しに出かけました。曲った大学の大煙突を見ていると、牟田さんから裏山の穴弘法に怪我人が大勢居ると聞かされ、穴弘法に登りました。途中の畑の中には葉がなくなった南爪の実が、ゴロゴロ転って居たのが今も眼に残っています。穴弘法につくと穴の中は怪我人が一杯で、皆顔が焼けただれて見分けがつかず、一人一人よく調べてみましたが、見つかる事が出来ませんでした。

仕方なく山を下って再び大学に戻り、運動場の片隅で多くの怪我人の中に真裸で蹲っている敏夫を発見し、よく生きていてくれたと持参の着物を着せ、食欲が全くない

ので水筒の水をやりましたが、よく飲みました。車がないので娘と二人で抱えるようにして歩き、飛行機が飛んで来る度に身をかくしながら、やっと新中川の自宅に帰りました。床に寝かした時は真に安心し、「死んだ子供が帰って来た様な喜び」を心から味わい、一生涯を通じてこんなに嬉しいことはありませんでした。

幸に外傷も首と背中中に少しあっただけで、翌日は気分がよくなり、煙草など吸っておりませんでしたので、間もなく全快するものと思っただけで居りました。処が食欲が出ず、下痢が止らないので、本人は医学書をあれこれと調べて居りましたが、どうも原因がわからんと嘆いて居りました。そしてパイナップルの缶詰の汁だけ飲んで居りました。

八日十五日に玉音放送があると申しましたら、「日本が降伏したのだろう」と申しますので、落胆してはいけないと思い、真実を告げませんでした。翌十六日に死去致しましたので、こんなことなら云ってやればよかったと、今も心残りに思っただけです。意識は死亡直前まではつきりしていて、隣家の戸泉夫人に抱かれながら「もういかん、さよなら、さよなら」と父母や妹等に別れを告げ、夕方遂に息を引取り、二十一年の生涯を終りました。

この度皆様の御尽力で靖国神社に祀られる事となり、大学の銅板に名をとどめて後世の学徒に崇敬さる、以て冥すべきか。二十二年後の今日、在天の霊も初めて成仏出来たことと喜んで居ります。

(二二五) 医学部一年生 横山 嘉夫

生理講堂で被爆、大学裏山に逃れ、後大村海軍病院に収容されて死亡。

遺族 京都市北区衣笠高橋町三〇 城谷方 横山 豊恵（母）

私は子供が七年もなく、長崎の八坂町清水観音様の御開帳の時、お願いして生まれました子供で御座います。私には勿体ない位のいい子供で御座いました。幼い時より絵が好きで、幼稚園の時いつも貼り出されて居りました。小学校へ入学してからも、いつも総代で御座いましたので、私も学校へ参りますのを楽しみに致して居りました。主人が海上生活で留守勝でございましたけれども、嘉夫の成長を楽しみに過して居りました。

嘉夫は母にも優しく、おばあさんも大切に致し、少しの物でもよそから戴きますと「おばあさんが戴かないと自分も戴かない」と云って居りましたので、おばあさんが大変喜んで、子供より孫が可愛いと申して居りました。妹とも仲よく、喧嘩など致したことは御座いません。墓参りも「私が学校から帰るまで待っていて下さい」と申して居りました。

太平洋戦争がはじまり、ラジオで放送されました時も、「お父さんも戦地へ加わって居りますでしょう、どうか気をおちつけて下さい」と私を慰めておりました。その時のことをいつも思い出します。原爆の時も前夜八時頃宅を出ました。学校のお当番で御座いましたので、留守が女ばかりだから心にかかると申して居りました。翌朝十一時頃原爆が落ち、私宅も丸焼けになりましたから、陸軍病院の兵隊さんと私の妹が、穴弘法から嘉夫を陸軍病院へ運び、そこでお世話になりました。傷一つ致しておりませんでしたので、それは成田様のお守りのお蔭と喜んで居りましたところ、翌朝五時頃カンフル注射や輸血も空しく、二十一才の若桜で亡くなりました。最後に息を引き取ります前、「お母さん、怪我せずによかった」と申しました。最後まで親を思いましたこと、一生忘れる事は出来ません。

嘉夫が亡くなります一カ月前に主人も亡くなり、この戦争で主人と子供を一緒に失い、今日まで二十三年間、悲しい内にも道を開きますまで無事に過すことの出来たのも、御仏様の御加護と感謝致して居ります。お蔭様で老後も娘の処でお世話になり、四年生と二年生の二人の孫の成長を楽しみに過して居ります。嘉夫の霊も草葉のかけで喜んで居りますでしょう。霊魂不滅と私はいつも思います。この母を蔭ながら守って下さいますことを、有難く感謝致して居ります。

(二二八) 医学部一年生 米谷 襄

生理講堂で被爆、二、三日後学内で死亡せるものの如し。

遺族 三重県名賀郡青山町阿保六一〇 米谷 孜(父)

被爆死した米谷襄は、私の長男でありました。旧制の奈良県立畝傍中学から松江高校の文科乙類を経て長崎医大へ入学し、半歳もたたないうちに忽然と消えてしまった

のです。どこからか無事でいるという知らせが来るかと、爆撃の日からどんなに待つたことか。しかし遂にだめでした。松江高校時代の友人からも悲観の連絡をいただきました。妻と二人遺骨を取りに行ったのは、被爆の日から二週間ぐらい後で、すでに終戦になっていましたが、汽車の混乱はおどろくほどでありました。遺骨をまつて葬式はすませましたが、親しく遺骸を見たわけでもなく、二十数年を経た今日でも、時々、六尺近い巨軀をもったせがれが、帰って来たのではないかと思うことがあります。かわいそうに私の妻はそれからしばらく、人様に恐れられるほどやせ細っていました。

しかし本人は灰色浪人生活の苦しみもなく、待望の白線高校に入り、望み通り大学進学を達したのでから、はかない人生にしろ満足だろうと思って、今は私も妻もあきらめています。

幸に本人の姉が一人、弟が二人、それぞれ成長して、たくさんの孫にさえ恵まれています。私達老夫婦は、三人の子と孫の成育を楽しみながら、爆死したせがれの冥福をいのることに、余生をささげたいと思っています。

(二三〇) 医学部一年生 和田 正人

遭難顛末調査書に記載なし。

遺族 北九州市戸畑区小芝二丁目四一六 和田 ツマ(母)

(前略) 私は実子が二人とも死亡し、正人の姉は二十八年に病死しました。しかしこの度正人が靖国神社に合祀されますようで、私は嬉しくなりません。一人暮しの淋しさも、生きがいを感じる程になりました。(後略)

五、医専学生遺族の手記

(二三四) 医専仮卒業生 青木 伸夫

産婦人科の内藤勝利教授と共に、焼残りの図書文献整理中に被爆、殆んど即死の状態で、遺体が一階廊下で発見された。(「追憶」参照)

遺族 大分市米良七組 青 木 通(母)

昭和二十年八月を境に、あなたとの文通は完全に絶たれてしまいました。この悲しさ、この淋しさを誰に分つくもなく、唯々現世にある間は私の胸の中にあなたを抱きしめて、この二十年間を過しました。少くとも月二回は手紙の交換をして、どんなに希望にあふれた毎日でしたでしょう。生き残って帰って来た吉田さん(註、当時医専三年の吉田武郎君?)に行方不明と聞き、小さい弟妹が居なかったらあなたを探しにとんで行き、手や足の一本位なくなってもいい、馬鹿になっていてもいい、連れて帰らなかったのよ。帰って来い、帰って来いとひたすら念じ続けました。下り夜行の来る時間には、毎夜線路まで出迎えた幾日、悲しさに眠れず、泣きながら硝子戸越しに庭を眺めていた時、フラフラと裏庭に這入って来た人影に、びっくりあなただと走り出て、女の狂人に驚ろかされた悲しい思い出、山の開墾畑の大松の切株を抱いて、伸ちゃん、伸ちゃんとオイオイ泣いて満足しました。

最後に帰省した時、出征兵士の別宴に招かれましたね。二人で帰る途中で「母ちゃん、今長崎で流行している歌を教えてあげる」と、涼風吹く川端を私の肩を抱いて、「赤い花ならまんじゅしやげ」と、ほろよい機嫌にきれいな声で聞かせてくれた歌、思い出しては胸の中で一人唱えます。御飯が吹き上ると、この御飯をお腹一杯食べさせたかった。さぞひもじい思いをしながら死んで行ったことだろうと、涙をボロボロこぼしました。

あなたは小さい時から母思いの優しい子でした。二十年間私を楽しませてくれたあなたに感謝します。学校に帰る時、「今米国ではマッチ箱一個位で富士山をひっくり返すほど、強力な爆弾が発明されているそう」と聞かされ、「長崎はゆかりの地だから大丈夫、母ちゃん達がやられんように」と云ってくれたあなたが、この爆弾で死ぬとは――。

終戦と同時に慌しい世の変転、この明るい楽しい時代の雰囲気、せめて一カ月間でもあなたに味わわせたい。黒々とした長髪のあなたの姿を一目見たかった。二十年経った今日でも、こうしてペンを持ちながら涙が止めどもなく流れます。私も六十六

才になりました。耳も遠くなりました。いつの日か近き将来に、あなたのいる所に行くことも約束されております。あなたは「母ちゃん、もう来たん。そう早う来んでもいいのに」と悲しい顔して、両手を差出して迎えてくれるでしょう。

毎日の新聞やテレビに事故死々々と自らの不注意から人を殺し、自らも死ぬ人達のことを考えて、まあ伸夫はお国の犠牲になったのだから、とやと此の頃諦らめることが出来るようになりました。冥途の様子は現世に分らないように、こちらの様子もあなたには分らないでしょうが、伸ちゃんもう安心して下さい。小学一年生だった彦人も一児の父となり、やはりあなたのように「母ちゃん、母ちゃん」と大事にしてくれます。大学の構内にあなた達学徒の名碑が建てられ、永久に名の残ることに満足して冥福して下さいね。

(二三九) 医専三年生 青 木 茂

精神科にて遭難、死亡。

遺族 大阪市東住吉区田辺西の町六―二〇 青 木 益 三(父)
遺骨を求めて

(前略) 当時を回顧すると唯感無量の一言に尽きます。爆弾の投ぜられた翌日、大阪の新聞には「長崎に新型爆弾らしきもの投下さる」と至極簡単に掲載された。当時の事として大して気にもせずに居たが、その内おかしな噂がちらほらと耳に入り、終戦と同時に長崎の惨状が大々的に報ぜられた。本人初め長崎市内の親戚知人に打電したが、一通の返事も無い。心細く思っていると長崎の叔母から、「茂は岩屋クラブの大学救護所に収容され、熱は高いが元気にしている」という端書が届いたので安心した。暫らくすると嬉野に疎開している東京の叔父から、学生死亡者の中に茂の名が出ているという便りが来た。遂に長崎に行くことを決意、中学四年の次男と一年の三男を連れ、米四升、炒り大豆四升、大小十個の缶詰と飯盒を持って出発した。

九月二日午後二時、大阪駅で無蓋貨車に乗り込む。間もなく雨が降り出し寒いので三宮で下車、ホームで午前三時迄待つて有蓋貨車に乗車、三日は或いは客車、或いは貨車に乗りノロノロ走る。四日午前九時漸く道ノ尾着。早速岩屋クラブを訪ねたが、

既に「八月十八日時津に移転」と黒板に書いてある。近所にお住いの川本さん（大病院薬局勤務）から、救護所の治療は外科の調教授が主としてやられたことを聞き、次第に様子が判明して元気づく。

岩屋クラブから歩いて大学に向った。道端に牛とも馬とも分らぬ屍体が悪臭を放っている。屋敷跡と思われる所に五、六人分の白骨が散乱している。人家は一軒もなく大学も基礎は全焼、病院はコンクリートの外郭だけ残り無慚な姿である。坂の下で大豆と缶詰で中食をとっていたら、学生が十人許り下りて来て茂の死を教えてくれた。前から覚悟していたので、興奮のためか涙も出ない。

それから下筑後町の親戚朝長医院を訪ねたが、これも全焼、家族は大村に疎開し、叔父が一人近所に下宿して、新興善小學校に設けられた救護所に出ているとの事、下宿を探し出し荷物を預け、大学本部に当てられた商工会議所に行く。茂の死亡を知らされ、誰のものか分らぬ骨を「本人のものとして受取って下さい」と渡される。変な気持ちで受取り、次いで警察に行き死亡証明書を買ひ、叔父の下宿に帰り久し振りに入浴、やがて帰宅した叔父と食事しながら積る話をした。

五日、大浦の友人岡田保治君を訪ねた。家族も家も無事、次で調教授を訪ねたが、途中焼跡で屍体を焼いているのを見た。調教授は幸に御在宅（調註、私は原爆症で臥床中）、当時の模様を精しく聞かせて頂く。本人の病歴も保存されていて、被爆後の詳細な病状と、死亡は八月十八日午前五時ということまで知ることが出来た。而も遺骨はここから更に奥の農家に疎開中の北村（包彦）教授のお宅に安置されている事を聞かされ、実に安心且つ感謝する。つくづく有難いと思った。聞けば調教授の二人の御子息も爆死され、残るは三人の御嬢様のみとのこと、誠にお気の毒な話である。何ともお慰めの言葉もない。暫らくお邪魔して失礼する。六、七才位のお嬢様が北村教授のお宅に案内して下さる。田舎道を歩きながら「兄さんはあの工場で死にました。次の兄さんは大学で授業を受けながら死にました」と云って、小さな手で目頭を拭いて居られた。自分も涙が出て仕方なかったことを覚えている。あの可憐なお嬢様も、今は立派なお母様になって居られるだろう。

北村教授のお宅でカルシウム箱につめられた遺骨と、最後迄かけていた眼鏡及び聴診器を遺品として渡された。茂は被爆後裏山に逃れ、丁度通りかかった北村教授、看護婦、精神科助教授（註、松下兼知博士）と四人で山伝いに教授宅に向い、夕方漸く辿りついた。ここで四日間御世話になり、教授御夫妻に送られて岩屋の救護所に移ったとのことだった。

北村・調教授のお蔭で、被爆から死亡迄の詳細な行動が判明し、その上本人の本物の遺骨や遺品まで頂いたことは、誠に不幸中の幸で有難い極みと思っている。

六日は叔母の疎開先大村に行き、生前お世話になったお礼を述べ、二日間お邪魔した。八日は家内の実家（北松浦郡志佐町）を訪ね、家内の実母や兄弟達に会い、二日間御厄介になった。十日は私の母や妹一家の疎開している嬉野の親戚宅に行く。嬉野には東京から疎開した叔父夫妻も居て、十六日まで温泉につきり賑やかに過した。

十六日は愈々大阪へ向け出発の日、朝切符を買いくと女事務員が「大阪行の切符は一日一枚しか売れぬ」と云う。三人分で三日かかっても仕方がないと思っていると、今度は駅長が出て来て「大阪迄の切符はここでは売れぬ。長崎行って買え」とけんもほろろの挨拶。途方にくれたが嬉野海軍病院に長崎出身の軍医が居ると聞き、訪ねてみると一年後輩の中野義雄君だった（調註、私と朝倉中学同級生で、当時海軍々医大佐、嬉野海軍病院長）。地獄に仏とはこのことだろう。部下を駅に走らせてすぐ手に入れてくれた。

十六日午前十一時、バスで嬉野発、途中バスの故障やノロノロ列車で午後十時漸く門司着、大阪行がすぐ出るというので走って乗込んだが、翌十七日午前五時に漸く動き出した。ヤレこれで安心と思っていると、広島あたりから降り出した雨が次第に激しくなり、夕方からは風まで加わって暴風雨となった。汽車は愈々速度を落し、午後九時頃漸く停電のため真暗な岡山駅についたが、「この列車はここ迄、客は下車して下さい」と駅員が大声で叫ぶ。困ったことになったと思う。外は暴風雨で、ホームは横なぐりの風雨にさらされている。然しここ以外に行く所はない、地下道は水が膝までたまっている。遺骨を荷物から取出して腹にしかりくくりつけた。乗客一同はホ

ームで暴風雨にさらされながら、坐ったり荷物にもたれたりして、まんじりもしなかった。九時から夜明け迄は、一生忘れることの出来ない、恐怖苦難の長い長い一夜だった。

十八日は台風一過の好天気、濡れ物を干したりして列車の出発を待っていると、十一時頃「本日中出発の見込みはない。又何時出るか不明、お客は駅を出て下さい」とのこと、実に情ないと思った。駅を出ると一面の焼野原、人々は散乱した洗面器などの拾い飯を炊いている。私達は嬉野で貰った白米、醬油など沢山持っているので心強い。石を集めてかまどを造り、飯盒で飯を炊き、附近の芋畑から芋の茎など取って来ておかずを作った。昼食後早速今夜泊る場所を探す。駅は人が一杯である。幸い小さな土蔵を見つけ、先着の二三組と一緒に、その夜はコンクリートの床でごろ寝、夜中寒さと蚊に困った。

十九日も滞在を覚悟し、午後は早目に夕食の用意をしていると、同宿の若者が、三時十五分に大阪行が出発すると知らせしてくれた。出来上っていた食品を全部持ち、太急ぎで駅に駆けつけ列車に乗込む。例によってノロノロ運転、殊に台風後なので徐行々々で仲々はかどらぬ。翌二十日午前十時頃漸く大阪駅に辿りつく。思えば実に苦難の旅であった。

この様に苦心惨憺して持ち帰った遺骨も、今は大阪市設の瓜破霊園の我家の墓石の下に安置されている。

(二四一) 医専三年生 浅田 勝 孝

精神科で被爆、自宅にて死亡(長崎市大浦下町三)。

(二四三) 医専三年生 麻生 弘

精神科で被爆、頭部に大きな裂傷を受け、焼跡にて十六日まで治療を受けたが、十七日午前四時死亡(医専三年 長井道郎記)

(二四四) 医専三年生 足立 幸 男

精神科にて遭難。

遺族 鳥取県境港市福定町三〇二 足立 実(父)

(前略) あの戦という大きな壁にぶつかった私達遺族は、どうするすべもなく、二十有余年をじっとこらえて来ました。皆様の御尽力にて軍人なみにして頂けましたら、数多の御霊もきっと喜ばれます事と存じます。(後略)

(二四五) 医専三年生 有富 重 康

精神科にて遭難、自宅(市内弁天町)に帰り死亡す。

遺族 長崎市弁天町一〇一〇 有富 玉 与(母)

八月九日十一時を打った直後、空襲警報が解除になっているのに爆音がする。私は大声で「空襲ですよ。菓子ちゃんを下さい」と、ひたたくる様に抱いて自宅の防空壕にはいった。どこで遊んでいたのか、小学五年の四男と愛犬ルーズベルトは早くも壕にはいつていた。中学一年の三男は下痢で寝ていたし、長男は応召中、夫の星葉は来客と広島に落された新型爆弾の話をしていた。私に続いて防空壕にはいつて来た長女は、入口で熱い爆風に吹かれ、前頭部と左腕を火傷していた。二男の重康は本当なら今は夏休みなのに、今日も勉強や警備の任務があるといつて大学に行っている。

夫は稲佐地区の救護病院長という責任者だったので、スワとばかり救急カバンを肩にかけ、ゲートルを巻き国民帽を被って、救護病院に当てられていた稲佐小学校へと走り出した。その姿を見て、その昔武人が戦場に征くのを見送る妻の心にも似ていると、しみじみ思った。この時程夫に対する敬意と、残して行かれる寂しさ悲しみを感じた事はない。

重康は日頃元気で、柔道や空手をやっていたので、大学で人のお世話をしているに違いない、夜には帰るだろうと待ちましたが帰らず、翌十日の午後、頭を包帯で巻き顔は錆鉄色になり、白かったワイシャツは汚れ破れて血がつき、杖をついてトボトボと半倒壊の家に帰って来ました。

聞けば穴弘法を越えて伊良林小学校で手当を受け、そこで一泊した由、帰るや否や具合が悪いというのに医学生らしく医書を開いたり、リトマス試験紙を口にくわえてみたりしていた。敵機が来ると壕に入り、去ると出て来て寝ていたが、十日夜は夢に

うなされているので、耳をそばだてて聞くと、「すまん、すまん、もう駄目だ」と云っているの、どうしたのかと尋ねてみたら、「二人の友達は助けたが、あとはどうにもならなかった」と悲しみ嘆いているのです。其の顔の表情は全く凄惨そのもので、余程つらかったのでしょうか。

翌十一日朝、私は子供三人を連れてもとの疎開先時津に行きましたが、その時重康と一緒にいかないかと勤めたら、「傷の手当もあるし、疲れているので少しよくなったら行きましょう。」と気丈に云うので、死ぬとも思わず、夫や長女や看護婦に託して出かけました。

十五日長女が私を迎えに来て、「もう兄さんの看病は私に出来ないからすぐ帰って下さい」というので、又三人の子を連れ、臭気鼻をつく原爆中心地を歩いて家につくと、重康の容態は十一日に別れた時よりずっと悪く、唇は腫れ、白い菓をぬられてガーゼが貼ってあり、口の中は岩に牡蠣がついたようにガサガサで何も食べられず、その上一日三、四十回にも及ぶひっきりなしの下痢があつて、便の色は緑色を混えたビす黒い色で、臭気甚しく、塩酸を多量にまぜたような便でした。

その苦しい中から私を見て、「お母さんは元氣ですね、私の口が痛くなければ館のお婆さんの面白い口真似をして聞かせるのだけれど」とも云った。そんなにひどい状態なのに、夫は毎日早朝から夜遅くまで救護病院につめ、或いは方々の防空壕内の被爆者を往診して廻って、自分の子の治療も出来ない有様、医者姿を見るだけで有難がつて喜ぶ被爆者達をみては、帰るにも帰れない、これが医者というものの宿命だとつくづく感じました。

十六日朝、重康は「今夜は早く帰って下さい」とあえぎあえぎ小さい声で云いましたが、矢張り帰りません。異の方を向かせて下さいと云うのが最後で、あとは静かに安らかに息を引取りました。それは八月十七日午前三時三十分でした。

医学の道に専念していた息子は、国の為という名目で、勉学も中断して死なねばならなかったのです。平和の為に犠牲者となることには疑問があつても、先駆者であつたとなれば、霊も多少でも浮ばれるというものでありましょう。

(二四六) 医専三年生 伊 東 国 光

精神科で被爆、火傷及びガラス破片創が多く、医大裏山に避難後も元氣なく、しきりに水を欲しがった。十日昼頃本人の希望により、強心剤を注射したが、しきりに駄目だと云う。その後自宅に帰り死去されたと聞いた。日頃気の強い伊東君が、駄目だと云いながら言葉も態度もしっかりしていたのに、亡くなったと聞いた時は淋しかった。(筆者不明)

(二四八) 医専三年生 大 浦 治

当日熱があつたので十時頃帰宅し、弟に附添われて再び大学に來り、小児科外來で被爆、負傷はなかつた。十日裏山で背部に負傷せる父を発見、父を伴つて高北地下室にて看病、三日後西山に買物に行つていた母來る。直ちに山里の焼跡にて兄(医大三年生)の遺骨を取つて來た。その後は他の負傷者の救護に尽力しながら、暫らく高北地下室で生活していた。間もなく平戸に帰り、その頃から不明の発熱が起り、遂に死亡せる由。

(二四九) 医専三年生 大 島 喜八郎

学内で被爆、西彼杵郡瀬戸町の自宅で死亡。

遺族 長崎県西彼杵郡大瀬戸町板ノ浦八九二 大 島 マサ(母)
私は大島晶子、故喜八郎の実妹でございます。母は年老いてペンが握れず、私が代筆致します。

私は学徒動員で川南造船所に行っていました。体が弱かつたので大学で診療を受け、その結果では瀬戸町で休養した方がいだろうと兄に云われ、「空襲警報が解除になったら大学に來いよ」と氣楽に登校して行きました。私は兄との約束を破つて、大波止へ瀬戸行の船の切符を買に行き、難を免れました。

それとは知らない兄は、私が病院に來ている頃だと思つて随分心配したそうです。「同じ年頃の人を見ると皆晶子に見えて、大きな声で呼んだんだよ」と云っていました。その日は病院三階の耳鼻科にいたそうで「どうして下まで降りて來たか分らな

った」と話していました。夢中で西山の方へ登って行くと、家の下敷になった子供に「助けてー」と泣かれて助け出すと、今度は「母ちゃんもそこに居るから助けて」と必死になって頼むので、見捨てて行く訳にゆかず、「よし兄ちゃんに委しとけ」とは云ったものの、大きな梁の下敷になっている上に、背中に五寸釘が刺さっているのととても一人では動かす事が出来ず、通りすがりの人二、三人に手伝って貰って助け出したのですが、皆元気がないので随分時間がかかったと云っていました。やっと山を越えて諏訪神社の防空壕で一夜を過ごし、運よく病人運搬のバスに便乗して、自宅に帰ったのは十日の夕方でした。

私は十三日に、原爆後初めて運航する船で瀬戸に帰りましたが、その時兄は寝ていました。でも四、五日すると元氣になり、起きて遊んだり泳いだりしていました。今から考えると、それが無理だったのだらうと思われれます。兄の怪我は軽い硝子傷ぐらいだったので、兄も「もう少し大きな怪我をして、安静にしていればよかったのに——」と云っていました。

九月一日でした。「長崎へ行ってみよう。大学の方がどうなっているか心配だから」と切符を買いに行き、長い列を作ってやっと手に入れたのに、「頭が痛いから長崎行は止めた」と云って帰って来ました。すぐフトンを敷き寝かせましたが、その日は一寸しゃべっても頭にひびくと云っていました。翌日は頭痛は嘘のように治り、熱が出て来ましたが、それも一日きりで、三日目にはノドの痛みと血痰が起り、四日目からは頭髮が枕につく程度に抜け始めました。五日目は寝ている足に一寸きわつても痛いとい、無理してお手洗に起きると、腰の辺がバリバリと音を立てていました。兎に角毎日症状が変わるので大変でしたが、自分でも被爆したのが原因だと云っていました。六日目にはフルイがついて、その後は高熱が続き、翌日は四十一度近い熱にあえぎながら、「お母さん、晶子は私の様に手遅れにならない様に、病院に通って養生させて下さい」と云い、又「お母さん長生きしてね、僕もまだ死にたくない。もっともっと親孝行しようと思っていたのに」と云っては、手を合せてお念仏を何十回なく唱えていました。母が「喜いちゃん、お念仏はもうよかない」と云っても止めませ

ん。私が側で泣くと、「晶子、泣くのはまだ早か、泣くな」と云います。

夜中頃から苦しがつて「先生を呼んで来て」と云いましたが、先生は老人だから夜中は駄目です。「六時になったら来て貰うよ」と云いますと、時計の音を聞きながら「一時が鳴った、二時がなった」と数えて待っていました。六時が打つと「サア六時が鳴った。先生は、先生は」と云って待ってましたが、先生が玄關に入ってきた時は、もう意識がありませんでした。

以上が故喜八郎被爆後約一カ月間の状態でございます。

(二五〇) 医専三年生 香 月 健

耳鼻科外来で被爆、死亡は確実だが、その日時は不明。

遺族 山口県大津郡三隅町三隅下二〇三七 香 月 益 雄(父)

私は長崎原爆投下の日、召集軍医大尉として下関要塞重砲隊に勤務して居りました。丁度その頃にあなたの弟さんですか、調見習士官が一緒でした。その節先生の事も聞いて居りました。

「長崎がやられた」という情報を得ましたが、何分終戦前で任地を離れることが出来ず、下関に居た私の実兄に、三分位の軍隊の固パンを持たせて長崎に行って貰いました。その報告によれば、とても手のつけられない惨状で、息子の消息などとても判る所ではないとの事でした。

終戦となり、八月二十日頃私自身長崎に出かけました。一面の焼野原、僅かに大学の鉄筋建物と曲った煙突があるのみでした。種々探しましたが皆目息子のお消息もつかめず、県庁で大学関係者と会い、一片の骨と死亡診断書を貰って帰りました。後継者を亡くして、私は現在古稀の身を鞭打って、診療に従事して居ります。

昨年の事でした。私の義兄(九十三才)が

〇 世にあらば不惑の国手原爆忌

という一句を送ってくれました。その義兄が今年三月腸出血を来し、八月七日に他界しました。図らずも原爆忌と一致しましたが、何かの因縁だろうと思います。

何はともあれ、この世界から原爆というものを無くしなくてはなりません。核禁止

運動がそのイデオロギーにより二つも三つも行なわれるということは、馬鹿げた事と思います。我々は純なる心から、この世界から原爆を追放する運動に立ち上り度いと思います。

(二五二) 医専三年生 近 藤 金 一

医学部本館の階下情報室で被爆、当日は頭部に打撲傷を受け、穴弘法に逃れ、十二日朝長崎出発、道ノ尾駅より乗車、十四日大分県北海部郡上北鶴村末広の吉田武郎君宅に行き、下痢激しく、十六日より起つこと能わず、十八日死亡。

遺族 広島市第六基町中通り三組 近 藤 千鶴子(妹)

(前略) 兄の名前を名簿に見て又新たな涙があふれ、母と共に永遠に消える事なき名碑を、兄の名を一日も早く見たいものと存じます。(中略)

長崎の原爆当時は、何も知らずに異国上海で兄の無事を祈って居りました。終戦一カ年後に兄の待つ日本へ、兄に会える事のみを唯一の楽しみにして、引揚の苦勞も忘れ帰国致しましたが、待っていたものは変り果てた兄の姿だったのです。

兄は大分の吉田様(学友)宅にて十日間原爆魔と戦い、遂に八月十八日に他界したとか、当時の様子は、父母が帰国直後吉田様宅にお礼に参りました時に色々聞かされましたが、父母に会えずに死んで行くことが、一番心残りだったようでございます。

それから父母は生きて行く希望を失ったかの様に力を落し、ただ淡々と日を送って居りました。今はその父も死に、年老いた母が健在ではございますが、兄の思い出話を聞くとただ涙にくれて居ります。その様な理由で、思い出の手記も書く術を知りません。あしからずお許し下さいませ。(中略)

現在は母と私の二人、女ばかりの細々とした生活を致して居ります。(後略)

(二五三) 医専三年生 島 田 地香生

頭部、背部に負傷、翌日郷里天草(本渡町沼津)へ帰ったが、病状悪化して死亡。

(二五三) 医専三年生 高 木 邦 憲

遺族 長崎市小峰町一一一六県営アパートE八八 陽 奥 洋子(妹)

今年も焼けつくような暑さの中を、毎年平和公園の慰霊祭に出かけるのに、子供三人連れてグビロが丘に行った。戦後何年目だったか、未だ一人の時、無性に肉身が慄しく、松山の焼跡を訪ねたり、医大へ行ったり、穴弘法にも登り、グビロが丘に詣でたこともある。あの時はまだ家もちらほらで、夏草も生い茂っていたが、近頃はすっかり家が建ち並び、すっかり変って綺麗になっているのに驚いた。

あの時兄は二十一才、私は九才だったが、四月の新学期から田舎に疎開していたので、その日の長崎は知らない。でも写真や資料や、祖父初め多くの人々の話は想像出来る。兄は原爆で全身にやけどを受け、翌日苦しみながら水を求めつつ他界したという。きびしいけれど優しくかった兄、よく勉強していた兄、次々と思ひ出される兄の姿、でも年毎に薄れて行く姿を、いつまでも心に刻んでおこうと思う。

両親や兄、姉、妹達を原爆で失ない、祖父と私、六才の妹、四才の弟の四人が残され、その祖父も既に他界したが、あの戦後のどさくさをよくも生きて来たものだと、今更の如く感慨深いものがある。今では妹も私も結婚してそれぞれ子供も出来、幸せな日々を過しているが、折にふれ亡き人々のことを思わぬ日とでない。あゝみたまよ、この幸せをお守り下さい。そして安らかに眠り下さい。今まで墓標でみじめだったでしょう。来年こそはお兄さんのお見舞金と合せて、お墓を建てたいと弟達と話し合っております。

(二五六) 医専三年生 永 見 幸 夫

八月一日の空襲で大腿部に負傷(内科地下室に下りる階段にて)、同日調外科にて手術を受け、リンゲル注射、輸血を二回行ったが、出血多量と衰弱のため、翌二日午前二時頃死亡。

遺族 長崎市愛宕町二〇二 坂本方 永 見 ト 工(母)
愛する幸ちゃんへ

あれから最早二十二年の歳月を経て、お母さんも七十五才という高令に達しました。只生きていると云うだけの人間になってしまいました。

あゝ八月一日、あなたは午前七時に元気に学校へ出かけました。七月末頃から長崎

の上空は敵機におびやかされていましたが、一日は午前十時頃から激しい空襲でした。その時あなたは最早恐ろしい目にあっていたのです。私は夕方ホッと一息ついてあなたとお父さんの帰りを今かと待っていました。そこへ大学の腕章をつけた学生さんが自転車で駆けつけ、「永見君が大変です。すぐ大学へ来て下さい」と知らせて下さいました。私は走って今籠町の弟の所へ行き、「幸ちゃんが大変ですよ」と知らせ、姪と二人で走りながら大音寺前で出合ったトラックに頼み込み、主人の勤めていた商工会議所に行きました。会議所の方たちも大勢来て下さいましたので、一緒に大学にかけつけると、丁度手術中だったので、中へ入れて頂きました。

私達の顔を見ると、あなたは「お父さん、お母さん、当番だったものだからね」と顔をゆがめながら云いました。先生からは足の切断が止むを得ないと聞かされ、お友達方も暖い輸血をなさって下さったとか。

あなたは読書が好きで子でした。長崎中学の時から文学の方にと先生も奨められたのに、医学へ進んだばかりにこんなことになって——。これもあなたの運命でした。空襲警報になり、敵機来襲を知らせる半鐘を打つために屋上に登った時爆弾が落ち、初めの人は頭に破片を受け、次の人は首が飛んでしまったとか、あなたは大腿の怪我だから大丈夫だと思っていたのに、手術がすんで病室にはいったあなたは、さすがに医者らしく先生とドイツ語で自分の状態など話し合っていたのに、出血がひどく、十時頃になると「もう目が見えぬ」と云ったのが最後でした。何に怒りをぶちまけたらよいのか、言葉では云い表わすことが出来ませんでした。

八月六日、角尾学長は上京中でしたが、待ち切れずに三人合同の大学葬をして頂きました。皆悲しんで下され、皆の功績をたたえて下さいました。帰りには医専校長の高木先生がお骨を抱いて下され、あなたの成績をとて褒めて、「文部省に申請して医者の免許を取りますから、仏前に供えて下さい」と慰めて下さいました。ところがあの恐ろしい原爆、九日には葬式に参列して下さいました高木先生初め、諸先生やお友達も亡くなってしまいました。あの時大学でも水が止って無いので、あなたは「水、水」とせがみ、お友達が岩川町まで汲みに行つて飲ませて下さいました。お母さんは

その時のことを思い、今日迄あなたの仏前に水をあげる事を忘れません。

いくら云つてもあなたが戻つて来る訳ではないが、せめて靖国神社にお祀りして戴けたらと、それが私の心からの願いです。あなたが立派にお国の為に尽したのは、軍人の方と少しも異っていません。若き命をただお国の為と、純真な心のままに散ってしまったのです。

今世の中は大きく一変し、戦争のことも忘れられ勝です。お母さんはあなたの方の死を無駄にしたくないので、筆をとりました。どうか安らかに眠って下さい。母も真近かに貴方の側に行くことでしよう。

【調 補記】 永見幸夫君は大学葬の時に、左記の様な榮譽ある賞詞を貰っている。同様のものが医専二年の大野明君、益田良和君にも与えられた筈である。

賞 詞

第三医療隊 医専三年 永見 幸夫

右ハカネテ責任觀念旺盛ニシテ、最近病氣中ナリシニモ拘ラズ、学徒隊員ハ陛下ノ親兵ナリト称シ、敵機来襲相次グヲ以テ、連日病ヲオシテ登学中、タマタマ昭和二十年八月一日ノ空襲ニ際シ、待避警報員ヲ命ゼラルルヤ、全医院内ノ患者及ビ職員ノ待避ヲ誘導シ、全員待避終了後遂ニ影浦内科病棟階段ニ於テ右大腿部ニ爆弾破片創ヲ受ケ、同夜九時二十分遂ニ名譽ノ戦死ヲ遂ゲタリ。然リ而シテ院内患者ノ待避完全ナリシ為、一名ノ負傷者ヲモ生ゼザリシハ、全ク右警報員ノ敵襲下ニ於ケル誘導ニ負フ所ニシテ、其ノ功誠ニ大ナリト言フベク、一死以テ千命ヲ救ヒ、終ニ任務ニ仆レタルハ医療隊員ノ本分ニ殉ジタルモノ、医学徒ノ龜鑑ト認ム。依テ茲ニ賞詞ヲ与フ。

昭和二十年八月四日

長崎医科大学医療隊長 影浦 尚規 印

(二五七) 医専三年生 芳 賀 久

遺族 北九州市八幡区仙房町三八一 芳 賀 喬 (兄)

弟久が長崎医大附属医専に入りましたのが、昭和十六年で、入学後直ぐに腸結核にかかり、当時の外科教授三宅先生の御世話になり、入院を大分長くしたり休学したり

で卒業も遅れ、原爆の当時やっと三年生になっていました。

当時私は小倉陸軍病院に軍医として召集されていたので、広島原爆の話を書いていました。八月十二日の朝早く、ボロボロの兵隊シャツの着て、自宅まで帰りついた久の話では、皮膚科教室の窓側の机にいたそうですが、その晩は六弘法で一夜を明かし、諫早に出て小倉に帰りつきましたが、やっと聞きとれる位の声で、ボツボツその様子を話しました。

翌十三日に私が病院勤務を終り帰宅しますと、下痢をしたと申しましたが、何か胃散でも飲ませ、皮膚の露出部だけ火傷に肝油軟膏をつけて手当をしてやりました。その夜からは高熱があり、十五日の終戦の放送を聞くと、「残念だなー」といって息を引き取りました。

今でしたら充分の点滴注射で或いは助かったかも知れませんが、軍病院そのものにもロクな薬もない様な時で、医者の兄貴を持ちながら誠に哀れな、あつけない死で御座いました。それでも自宅のフトンの上で死んだだけは、他の多勢の方に較べて幸福だったと言えましょう。

学徒の皆々様の御冥福を祈ります。

(二五八) 医専三年生 深山 隆

古屋野外科ポリクリ中遭難。頭部に負傷したが裏山で学友達の看護に当り、十日まで頑張った。その間焼跡の薬品を探しに度々山を下り、附近にいたものの中で一番元気だった。十一日夕方影浦内科婦長等と汽車で道ノ尾に行き一泊、その後郷里へ帰り死亡した由を聞いた。

遺族 東京都渋谷区広尾一―七 深山 豊(叔父)

(前略) 兄の一家四名を一挙にして失い、今健在ならばと愚痴をこぼす事のみ多い日々でございます。この度皆様の御厚志にて、名碑まで御建立下さいます由にて、誠に心嬉しく、感激にむせております。甥の名前も二段目中央にお刻み下さいますとか、来る八月九日の除幕式には是非お詣り致さねばと存じますが、暇を得られますかどうか、若し不可能なれば遠地より御祈禱捧げる心算でございます。

(二六一) 医専三年生 渡 辺 雄 三

眼科予診室で被爆、傷はなく、翌日級友和田(政太郎?)君と共に西山町の親類宅へ逃る。当初より食欲全くなく、次第に全身衰弱が増強し、口内炎、下痢を来し、意識は終始明瞭のまま、遂に約二週間後、家人に見守られつつ死亡。

(二六三) 医専二年生 秋 月 栄

衛生学教室で被爆、桜馬場方面に避難、十三日父と共に大村の自宅に帰り、十六日死亡。傷は頭部外傷と腹部火傷、初めは比較的元気だった。

(二六四) 医専二年生 芦 沢 正 徳

遺族 長崎市十人町八四 芦 沢 ヒ サ(母)

二十二年前の八月九日を、又新しく思い出します。原爆投下時に正徳は皆の方々と一緒に教室にいて、左腕全部の火傷を受け、九日の夕暮近い頃、金比羅山越しに杖にすがって帰宅しましたが、変りはてた姿に涙が出て何も云えず、早く手当をと唯おろろするばかりでした。町会長さんから、西山地区の救護班が勝山小学校にいるときき、連れて行きましたがただ薬を塗るだけで大した手当もなく、これでは心配なので、家族一同で尋ねて廻りましたが見つからず、あの当時の事を考えるとひどい辛いことばかりでした。

正徳は八月十五日の天皇陛下のお言葉をラジオで聞いていましたが、生来勝気な子でしたから、「残念だ」と云って、それからは熱が高まる一方で、その為かお友達のお名前を大きな声で呼んでいました。「早う来い」なんて云い続けていました。医業もなく冷してやりたくても水もない。一升瓶に井戸水を入れて冷してやりましたが、熱はなかなか下りません。本当に情ないと思いました。

終戦後お友達がお見舞に来られ、楠本先生が疎開先から帰って居られると聞きましたので、早速診て頂くようお願いに行きました。すぐ診て頂きましたが、診察の結果は唯お気の毒ですとばかり、家族一同はあつと云って声さえ出ない位でした。正徳はいつまでもお友達の名を呼び続けていましたが、程なくだんだん声が細くなって、聞

えなくなった時息が絶えていました。父は可哀想なことをしたとただ一こと、あとは涙にむせんでいました。それは八月十八日の早朝で御座いました。

今だに忘れられないあの原爆の恐ろしさ、憎らしさ、悲しさ、八月九日が来る毎に毎年胸一杯で、ああ厭な日が来たと私は愚痴をこぼします。この度はグビロが丘に名碑まで建てて頂き、去る八月九日には参拝させて頂きました。本当にありがとう御座いました。

宅では終戦後に長男も引揚げて参りまして、今では私も無事に毎日を過しております。私はもともとと長生きして、毎年八月九日にはグビロが丘に参詣したいと思っております。

(二六六) 医専二年生 荒 牧 貴 敏

遺族 長崎市大浦相生町五一 荒 牧 タツ(母)

いつかは私の目の前に姿を見せてくれるだろうと思ひながら、夢から醒めてはがっかりした幾年も、早や二十二年経ちました。

主人に先立たれ、女手一つで育てていた長男の貴敏が、何万人に一人という全身麻痺(シビル脚気)にかかり、あちこちの医療の甲斐もなく遅々として進まず、死物狂いで神にすがってやっと杖を頼りに歩けるようになり、医学の道に進むことが出来た時は、この身は死んでもよいという絶頂の喜びでございました。しかしそれも束の間で、二年生になって原爆の恐ろしい呪いを受けようとは——。「あ、此の大学を落ちていればよかったのに」と、血を吐く思いで幾度叫んだ事でしよう。

翌十日から娘と二人で、夜明けと共に起き、日が暮れるまで、敵機来襲の警報におびやかされながら、走ったり隠れたり、今日こそは一刻も早く見つけ出さねばと、必死に現場附近を探し廻り、足の疲れも空腹も覚えず、あの修羅場を歩き通した一カ月間でした。とてもあの身体では逃げ切れるものではないと思ひながらも、諦めがつかず、今思えば狂気の沙汰の母の姿だったろうと存じます。

私も今やつと落ちついて老後を送られる状態になり、此処に貴敏の名も名碑に刻んでいただき、漸く日の目が見られるようになりまして、心に安らぎを感じるようになって

りました。八月九日の原爆の日、同じ悲しみを分ちあえる皆様とお会い出来るのも、楽しみの一つでございます。

昇天された方々の御冥福を、心からお祈り致しております。

(二六八) 医専二年生 井 水 信 夫

空襲警報解除の後警戒警報に入ったため、配置を離れて衛生学講堂に集合する時に被爆、数日後に家人が来崎し、友人太谷君の側にあったそれとおぼしき骨を拾って帰られた。

(二六九) 医専二年生 池 田 博 実

衛生学講堂で被爆、脱出して同日夜針尾に行き、八月十一日其処で死亡。

遺族 福岡県久留米市原古賀町六五—一〇 池 田 クニ(母)

私事、医学専門部二年に在学していた池田博実の母でございます。

顧みますに、あの筆舌につくせない世紀の一大悲慘事を生んだ原爆落下の日から、最早二十二年の歳月が経ちました。当時の怨怒も今では浄化されて、明るい心境でございます。けれども親心といえは聞えはよろしいが、母親の愚痴とでも申ししようか、嬉しいにつけ悲しいにつけ、折にふれては死んだ子に年をとらせて、想いに耽ることもございます。又忘れようとしても忘れられない八月九日には、毎年博実の終焉の地長崎を訪れて、慰霊祭に参列させていただき、この一日を亡き博実と二人で心ゆくまで、語り合い過ぎして貰っております。

十一才の長男博実を頭に、一男三女を遺して主人に先立たれ、その勤務地から郷里に帰って帰農はしたものの、幼い四人の子供をかかえ、その上に馴れない百姓仕事は先祖伝来の田畑の守りも思うにまかせず、途方にくれた歳月もありました。そしてとうとう生活の安定を求めて久留米の地に居を定め、生活の目途もたつうちに子供等も漸く成長して、博実は昭和十九年に念願の医学の道に進み、戦果は思わしからぬ時代でしたが、ホッと一息ついたような時でございました。

博実が被災した時の状況は知る由もありませんが、背部及び下肢の半身に大火傷を

負い、歩行もできない身体であつたろうと思われますのに、何処のどなたの御看護に因るのか存じ上げませんが、長崎県東彼杵郡宮村小島郷二七七番地の福田病院に収容されておられ、針尾海兵団の軍医様や看護婦様方の手厚い最善の治療看護を施して頂いた甲斐もなく、八月十一日午前十時五十分に永眠致しました。

お知らせを頂き、取るものも取りあえず現地に急行しましたが、敗戦間際で通信も交通も不如意な時代ではあり、最後のみとりには間に合いませんでした。けれども一瞬にして何物も残さず、場所さえも分らぬままに亡くなられた方もあることを思えば、この母の目で確めることが出来、最後の様子を伺いいただけでも、幸せだったと思つていきます。尚、この時にお世話して下さった方々に厚く御礼申し上げます。

今年は暑さが殊の外酷しくて、健康も不調でございましたので、次女と孫娘を代参させて頂きました。娘の語るところによれば、この度は立派な記念碑が建立され、除幕式もありましたとのこと、博実の名も霊の導きによるか、すぐ眼の前に発見することができましたとのこと、記念の写真も撮ってきて見せてくれました。御関係の皆様のお芳志、本当にありがとうございます。

博実の一生は僅か二十年の短命ではございましたが、あの非情な何物にも代えがたい大きな犠牲が、世界人類の平和をもたらす礎となるお役に立ちますならば、息子の死も無駄ではなかったと思います。私達は世界の平和が一日も早く迎えられるよう、努力しなければならぬと思います。またそれを祈念してやみません。

私の人生も長い苦難の道でございました。今なお苦勞は絶えませんが、慫を云つても限りがありません。今日では七人の孫もあり、皆様方の温い御指導と御鞭撻によりまして、感謝の日々を過ごさせていただいております。余命いくばくあるか知りませんが、私の命のある限り、来る年々の八月九日には錦地をお訪ねして、息子博実と語り合いたいと念願しています。

(二七〇) 医専二年生 池之子 肇

衛生講堂で被爆、即死、骨肉焼け去り、そこに一塊の灰を残すのみ。

遺族 広島県佐伯郡五日市町大字石内 池之子 盛登(父)

思うまいと思つても、胸に浮ぶ二十二年前の事、訃報を聞き急いで長崎へ行こうと思つたが、汽車の切符が買えずに困つていたら、親切な知人のお蔭で、漸う弟の英雄と二人で、汽車に乗り込むことが出来ました。

浦上駅につくと一面の焼野原、唯茫然と途方にくれていると、車中で知った親切な方が、肇の下宿先へ案内して下さいました。然しそこでは、洗濯竿にシャツと靴下が干してあるだけで、肇の姿は見えませんでした。間もなく肇の友人が二、三人来られ、「幾日経つても帰って来ないから、多分駄目でしょう。収容所も全部見たが池之子君は居なかった」と聞き、がっかりして涙も出ませんでした。それから医大に行き、肇の遭難したという講堂跡に行つてみたが、唯焼土の中に誰のとも分らぬお骨があるだけです。英雄の発案で、広島二中のバックルを目当てに探したが、それも見つかりませんでした。

諦めて帰ろうとした時、大学で「お骨を渡すから誰のかは分らないが持つて帰るよう」にいわれ、それを戴き、次いで市役所に行つて、火葬の手続きを済して帰ることにしました。この時万事のお世話をして下さった学生さんのお名前を聞くのを忘れ、唯佐世保のお方とだけ憶えています。若しこの手記をお読みになりましたら、私から感謝していることをどうかお酌みとり下さい。

下宿へ帰る途中「米軍が進駐するから早く立ち去れ」と書いた立札があつたので、肇の行方が分らぬまま、心を鬼にして立去ることにしました。方々で死体の山に火をつけて焼いていましたが、その中に肇がいるのではないかと思うと、泣けて泣けて涙が止りませんでした。思い返せば六月に家に帰り、空襲がひどいのもう二度と帰れないだろうと覚悟は出来ていた様子でしたが、こんな悲しい運命にめぐり逢うとは思いませんでした。二度と戦争のないよう、心から祈っております。(後略)

(二七四) 医専二年生 犬塚 喬二

衛生講堂で被爆、裏山の穴弘法で二、三日明かし、その後学友に担架で運ばれ、下宿(片瀾町二一四五 平山紀代方)にて一日療養、父上の手厚い看護の下に永眠。

遺族 佐世保市花園町六一一 犬塚 藤子(母)

今にして憶えば、最後の手紙を受取ったのは、丁度原爆の落ちた時刻でした。

「母さん、僕にも何時どんな事があるかわかりません。たとえ長崎の土になるような事があっても、決して悲しまないで下さい——」とありました。この日を予期していたのでしょうか。

九日夜医師会の命を受け、夫は救護団長として、十六名のお医者様と長崎へ参りました。救護団解散後K先生の援けを得、下宿のおば様も一緒に子供を探しにかけ、漸く十一日に大学裏山で巡り会う事が出来ました。

父に会えたその時の嬉しさはどんなでしたしょう。一緒に居られた同宿の川床様を青年団の方に頼み、夫は子供を背負って炎天下の山を下りたそうです。途中負われながら、「お父さん、すみません」と、熱い涙が父の肩をぬらしたそうです。下宿に着いてから機嫌がよかったです、段々に悪くなり、「母さん、母さん」と呼んだそうですけれど、私は会うことすら出来ませんでした。でも父の看病を受けたことは、この上もない幸せでした。

十二日、川床様が先に、喬二が後に逝ったそうです。十三日にK先生のお援けで、川床様と我が子の遺体を焼いたそうです。何というむごい事でしょう。遺骨を抱いて十三日夕方長崎をたつて佐世保へ帰ったのです。後日、夫は泣いて詳しく語ってくれました。

私は喬二が既に亡くなった十二日の夜、無事だから迎えに来るように、との言伝を受けました。三男に留守を頼み、十三日午後四時の汽車で、長男幹人（熊本大学）と一緒に長崎へ発ちました。途中色々の障害に逢い、十四日午前、下宿で子供の亡くなった事を聞かされました。夫達と何処かで摺れ違ったのです。漸く帰宅して、変りてた我が子の遺骨を抱いて思いきり泣きました。

翌十五日が終戦でした。悲しみは怒りとなって、忘れる事は出来ません。

二度とこの様な悲惨な事は起ってはなりません。世界のどこにも。

ここ四年余り夫は病って居ります。この日から既に二十二年、今では静かに子の冥福を祈りつつ祀って居ります。

被爆学生の御冥福を、重ね重ねお祈り致します。

合掌

(二七五) 医専二年生 妹 塚 道 俊

妹 塚 吉 野 (母)

映え咲く花のかぐわしく、みがかれて結ぶ智識の実りも、半ばにして断たれ、散りゆきし花のいたましくも、愛惜に堪えない。

華やかなる希望も喜びも、うたかたの夢と消え、千載の怨恨を絶世に残して、悲しくも医大の庭に逝かれし幾多有為の学徒を思う時、世の人の親として、切実なる思いに胸迫るのである。

木の間がくれの小鳥にも、花に憩いの小蝶にも、安息の恵みはあるものを、只のろわしきは、人の世の大自然に反する見にくき争奪の戦を、なげかずには居られないのである。

師に友にあなたは祝福され、長崎の医科大学に入るや、専ら結核の研究に注心し、意気旺盛、勉学に務め、その成果を期待されていたが、その労苦も報いられずして逝かれしことは、返す返すも愛惜に堪えない。今に至りては、尽し得なかった心のお詫びを繰り返すのみである。若竹の伸びゆく如く、すすくと成育されしあなたは、激刺として友の信頼厚く、何事にも真を以って成し、友は常に周辺を知らなかったのである。帰省の度毎に友は待ち詫びて、月傾くまでも互に語り合い、楽しきその様の今髣髴として追憶の涙にむせぶのである。無量の思い出を友の心に残し、あなたは仏の如くに忽然として逝かれた。

さりながら、友の心に刻まれしあなたは、不滅として友の心を知らないものである。ああ、高潔の士よ、熱情の君よ。おお私の妹塚君よと慕われし往時を想う時、悲しみに堪えず、合掌して冥福を祈るのみである。

○ 親思ふ心にまざる親ごころ 今日音づれ何ときくらむ

学窓に倚りて遠く東の空に思いを走せ、報恩と郷愁にあえぐやさしきそのお姿を想う時、愛惜に堪えないのである。人の世は流れゆく水の如くに、ゆきて再び還らず、果ない悲哀をのせて流れゆくのである。

竹野様、望月様、安日様、山田様、その他皆様の御哀悼を辱うし、皆様と共に只冥福を祈るのみである。

道俊様安らかに冥されよ

昭和二十年八月九日

【調 補記】 原爆思ひ出の手記集の原稿をすっかり書きあげ、印刷にまわした後久しくたつてこの原稿が届いたが、承れば御母堂が御生前に水茎のあとも美わしく書かれた弔辞とのことだったので、少し無理とは思ったが入れることにした。

(二七六) 医専二年生 岩 瀬 充

市内山里町にて被爆、八月十四日道ノ尾にて死亡。

遺族 長崎市文教区一七一市営アパート四一号 岩 瀬 磨瑛枝(母)

昭和二十年八月十五日、真夏の太陽は、今日も焦土と化した長崎の街をじりじりと照りつけていた。私共親子三人(私、長女、次女)は、疎開先の南高布津村へ一週間経っても帰って来ない次男充を探しに出崎したのである。

見渡せば一面の焼野原、瓦礫で埋まった道を辿って坂本町の医大へ行く。大学の構内には原爆でやられた大人、子供が何十人か薄いアンペラの上に横になっていた。一人の母親は水、水、と水を求めて、私のモンペの裾を握ってはなさない。くずれたコンクリート壁に、チョークで「医大生何名か滑石青年会館に行く」と書いてある。それを頼りに道ノ尾に向って歩く。途中馬がまだ半分ブスブスと動物的な異臭をただよわせていた。大八車に載せた大豆が何俵も車からずり落ち、破れた袋の口から大豆が道にこぼれていた。「時間よ止れ」と魔法使が魔法を使つたかの様に、何物もこわれたままの静止の状態の中で、放心した様な無表情な人間だけが、もうすぐアメリカ兵が上陸して来るという流言におびえて、三々五々少しばかりの着替らしい包を持って、道ノ尾方面へと続いて行った。

何人かの人に聞いて、滑石青年会館は漸くわかった。何十畳敷かの板の間に一かたまりづつ、寝ている人、起きて話している人、私の目は素早く皆の上に走った。いない、いない。若しや、いいえ、そんな筈はない。あのたくましい若者が――、あゝ神

様、神様、心臓の鼓動が聞える程である。

気を落ちつけて一人の学生に、名前と学年を告げて聞いた。「岩瀬君は昨日焼きました。其処へ案内しましょう。」と彼は気の毒そうに云った。一べんに力が抜けて、ヘタヘタと坐り込みそうで、背中の子供が重い。

青年会館から一寸行った所にある、雑草の茂った原っぱがその火葬場であった。

「昨日六体焼きました。この所が岩瀬君です」と云って彼は立ち去った。白骨化した六人の若者――涙も出ない。暫らく立っていた。白いハンカチを抜けて骨を拾った。背中の子供を草の上におろし、ハンカチの包を耳の側で振ってみる。カサカサ乾いた石灰質の音、母さん、母さん、母さんと私の耳に聞えて来る。二十二年たった現在、あの時私の耳にささやいた母さん、母さん、母さん、母さんと言う声を、私は生涯忘れないであろう。そして思い出しては涙を流している。

(二七九) 医専二年生 江 藤 久 国

遺族 福岡県飯塚市大字飯塚一七一 江 藤 ミチ子(母)

【前略】 又思ひ出も新たに原爆の日を迎える日が参りました。思っても帰らぬことではございますが、あの子が生きていてくれたらと、涙も新たに生前が偲べれます。

(中略)

是非今年こそ何とかして慰霊祭にお参りしたいと思いましたが、思うにまかせず、又失礼させて頂くはめになり、誠に申訳なく存じております。田中先生(田中祥生様の父君)にお誘い受けましたが、心ならずもお断り致しました。でも今年中には、何とかしてお参りさせて頂く積りでございます。(後略)

【調 附記】 江藤様はお言葉通り、十一月中旬に長崎に来られ、私の家にも立ち寄って戴きました。私は出張中でお目にかかれず、心から残念に思っております。

(二八〇) 医専二年生 小出石 行 夫

衛生学講堂で被爆、八月十四日勝山国民学校にて死亡。

(二八一) 医専二年生 大 谷 豊 治

遺族 大分県東国東郡国東町鶴川 広瀬方 大谷 折枝(母)

思えば二十二年の昔になりました。忘れることの出来ない八月九日、一瞬にして長男豊治の命を奪い去り、一家の幸福は忽ち涙の毎日となりました。

入学の当時は臼杵に居て、上級生や同級生が五、六人居りました。父は臼杵から別府に転任して居ましたので、原爆当日には臼杵の友人のお父さんから電話がかかり、爆弾が浦上に落ちて学校も生徒も全滅だそうだと聞かされ、驚きと悲しみで家族のものは食事を通らず、溜息をもらすのみでした。若しかしたら逃げて帰って来はしないかと、一週間ばかりは毎夜戸締りもしないで待つていましたが、豊治は帰って参りません。その内上級生の吉田武郎さんが来られて、詳しいお話を聞きました。

吉田さんはコンクリートの建物に居て、すぐに物陰に隠れたそうで、手を少し火傷した位で運よく山に逃れ、その時同級生の児玉さんに会ったので「大谷君はどうした」と聞かれたそうですが、児玉さんは「自分達は木造建講堂で講義中で、大谷君は中央に、自分は窓際にいたので知らない」と云って頻りに吐いていたそうです。児玉君は外傷もないので大丈夫と思い、別れて山で一夜を明かし、そのまま帰って来たとの事でした。一瞬にして火になったそうですから、逃れきれない運命だったのだでしょう。九日も午後から帰ると云って、切符を買っていたと聞き、一層残念に思われました。

二十日前に別府へ帰って来たのは、大方虫の知らせで私達に会いに来たのでしょう。講堂から逃れ出た児玉さんも、大分まで帰り病院で亡くなられたそうです。臼杵のお友達の中で、吉田さんは運よく助かりましたが、外の方々は学びの庭で、学校、先生、友人諸共に、天国に昇ったのだと思つて、今では諦らめて我子の冥福を祈り、日々を過しております。

(二八二) 医専三年生 大槻 秀雄

衛生学講堂で被爆、即死。

遺族 京都府乙訓郡長岡町今里字弘野二二二五 大槻 秀三郎(父)
(前略) 去る三日、NHKの「ある人生」にて貴方様の影像を拝見いたしました。

その終りに、遺族名簿の極く一部が写し出されました内に、「秀雄」の名を見出ししたので、家内中顔を見合せました。(後略) (四一、九、一三)

(二八三) 医専二年生 大野 明

八月一日待避警報中、内科病棟一階より地階に向う階段を下りつつあった時、爆風により左大腿の大裂傷を受け、殆んど即死。

遺族 東京都北多摩郡久留米町氷川台一―二一―一 大野 麟毅(父)
絶 筆

○ 古き壺に芍薬生けて古き床 明人

八月一日爆死した明(俳名は明人)は、七月二十日突然大阪池田の私の家に帰って来ました。きけば今年は夏休がなく、銘々都合の良い時に十日位旅行できるからとのこと。実は「大阪の北方やられた」とのニュースに、家を心配して帰ったのでした。

月末近く長崎へ行く際、彼は私の妻に、「お母さん、僕辞世の句を書いていくよ」と申ししたので、妻は「辞世の句なんていやです」と云いますと、彼は「是なら良いでしょう」と云って、画箋帳を引張り出して墨黒々と書いたのが、冒頭にかかった句でして、その後、彼からたよりのあろう筈もなく、これが絶筆となりました。

それから、八月一日頃よく蠅がなきますので、八月一日に毎年句会をやり、「蠅忌句会」と名づけています。次にかかげますのは、昭和四十年の二十年忌の時の私と妻のものです。

○ かなかな(蠅)の哀歌にのりて魂還る 父
○ 夏草や永久にはたちの旅の道 父
○ 二十年の月日流れて蠅忌 母
○ 思出ははたちの吾子の夏姿 母

(二八四) 医専二年生 岡 本 陽 一

遺族 神奈川県三浦郡葉山町下山口一〇八三 早川 みはる(妹)
兄の事と申しますと、原爆投下より原爆症で亡くなります迄十日間、ずっと傍に居

りまして、真ッ黒い思い出として、私の胸の奥深く刻み込まれて居ります。四つ違いでも、大人になったせいだったでしょうが、喧嘩するでもない読書専一の兄と妹でありました。図書館に行っては兄の名を借り、大人の本を読めるのが、何よりの楽しみでした。ある日、兄の机の上に橙色の固い表紙の本があり、それが小杉天外の魔風怒風であったことが、妙にあざやかな印象として残って居ります。兄の青春めいたものと云えば、私はそれしか知りません。

私も学徒動員で「長女報国隊」の腕章をつけ、大橋の三菱兵器で被爆、阿鼻叫喚の有様を見た後兄に会い、父母の死を聞かされた時は、ぼんやりして居りましたが、兄までが死ぬとは思ってもみず、初めて肉身の死に触れ、父母の死にも重なる悲しみ疲れ、眠くて眠くて困ったことが思い起されます。

両親には、一人息子の陽ちゃんがお医者さんになれば、軍属で前戦にも出ず、若しや死なずにすむのでは——とやりきれない切ない願いであったことが、私には痛い程わかって居りました。妹の私が羨ましい位に両親の愛を受け、人々に可愛がられた兄は、死ぬ時は苦しみながらも、矢張り幸運な方だったと思います。

父母の葬いや、竹の久保の家の焼跡で医書の運び出しなどして、体が段々弱り、間もなく寝こんでしまいました。親戚の伯母の厄介になり、死ぬ前日でしたか、急に「梨が食べたか」と云い出し、伯母の奔走で梨が手に入ると「おいしかです。おいしかです」と大変な喜び様でした。下痢をしたり吐いたり、口の中も外もすっかり荒れてしまい、「肺の中に水が入った様だから、注射器で取れば楽になるかも知れん」と云い始めました。本当にそうだったのかも知れませんが、私には兄が苦しむ姿に気が狂い始めたのではないかと怖くなりました。私は本を読めば気がまぎれるかも知れないと、手許にあったボオの黒猫を兄の目の前にかざして読んであげましたが、苦しくてどう仕様もなくなりました。その中に兄は、昔祖母に習ったお経の文句を、大きな声で唱え始めました。「ジーガートクブツダイ、ソーコーソーコーショ、ユーリーヒャクセンマン——」。私にはそう聞え、今もその声が耳にやきついていています。そして泣声だけで唱和するしか出来ませんでした。それから兄は弱々しい声で頼むよ

うに、「子守歌を唱ってくれんか」と申しました。あたりの空気がなくなった様な息苦しい兄と私。「ねんねんころりーよ、おころりーよ、ぼうやはよい子だーねんねーしな」。私は途中から泣き出してしまいました。然し兄は又「うたってくれ」と申しますので、泣き声のとぎれとぎれで唱いましたが、その中に兄がフッと息をしなくなりました。兄の息が止まってしまったのです。無口な兄はそれだけのことで、無口のまま死んでしまいました。あの当時の兄の心の裡は、どんなだったでしょうが、私には分かりません。まだ分かりません。今でも——。

(二八五) 医専二年生 沖 勲

衛生講堂で講師を待ち、長椅子に仰臥していた時に被爆、爆発の瞬間に意識を失ない、気がついた時は天井板の下敷になっていた。苦心の末倒壊家屋から這出し、裏山に逃れ、倦怠感のため二日間寝ていた。三日目に山を下り、友に助けられて十五日に帰宅（北松浦郡志佐村笛吹免）。十六日夜まで元気であったが突然死亡。この間倦怠感及び呼吸困難が強く、下痢、血便があり、皮膚は軽度に変色していた。

(二八六) 医専二年生 落 合 潔 水

遺族 宮崎県日南市油津町西町四八五 落 合 孝 幸

(前略) これまで二度長崎を訪れ、その度に医大の慰霊碑や、兄が下宿していた山里町を散歩し、兄を偲びました。この度名碑が出来たとか、又長崎を訪れる機会がございましたら、是非名碑の前に手を合せたいと思っています。

兄が爆死した当時、私は中学一年生だったので。兄はその年鹿児島の高を受験し、一次の学科試験にパスしたものの、二次試験の身体検査で、中学の教練が赤点の為不合格となり、長崎医専を受験したのでした。しかし七高を不合格になった当時の兄の落胆は非常なものでしたが、医専二年になる時の春休みには、夕飯を食べながら母に医専に進んだことを大喜びで語っていました。その春休みが両親との最後の面会となった訳ですが、亡くなる三日程前に墨書きの手紙が届き、一日に医大が敵機から機銃掃射を受け——云々とあり、近いうちに島原の親戚の家に三日間程遊びに行く

予定、と書いてありましたので、長崎に爆弾が落され、多数の市民が爆死したと新聞やラジオで報道された時、父母は「若し島原に行っておればよいが」と気にしていましたが、その望みもなく、死亡が明らかになった時は、余り感情を顔に出さない父が涙を浮べ、母は「最後の手紙が墨書きであつたのが、何かの知らせだつたのではなからうか」と、一人言のように云いました。二十二年前のことながら、まるで昨日の事のように思われます。

終戦になり、姉は一人で長崎の様子を見に行きました。然し何の得る所もありませんでした。

八月下旬だつたと記憶していますが、兄から小包が届きました。それは亡くなる二日前に、仕立直しを母にして貰うよう、三枚の絆の着物のはいった小包で、母はその包を抱きしめてすすり泣きました。

以上が当時の思い出です。父も母も既に亡くなりましたが、兄が靖国神社に祀られることを知ったら、どれ程喜ぶことでしょう。

(二八七) 医専二年生 賀 来 潮

衛生講堂で被爆、十日十時半頃病院裏で休んでいた。以後不明。

遺族 大分県宇佐郡安心院町佐田七三六 賀 来 ツル(母)

昭和二十年八月九日は、私にとって一生忘れることの出来ない悲しい日でございます。潮から近頃長崎にも度々爆弾が落ち、学校も休むのでお別れに二、三日帰省するというハガキが付き、何という縁起の事よと語り合いました。爆撃も益々激しくなるので、一日延しに引止めていましたが、余り長く学校を休んでもと、七月三十日両親の前に手をつき、何卒御機嫌ようと挨拶、父も母も涙をばおさえる。潮は好物のトマトをポケットや袋に入れて、いそいそと出て行きました。その後姿はまぎまぎと臉の内に残つて居ります。

毎日のように来る便り、我等も何卒無事でと祈らぬ日とてなく、広島に続いて長崎に原子爆弾が投下されたと聞くにつけ、身も細る思い、安否の手紙を出せど音信もなく、無条件終戦と聞き、十五日に手紙を出しましたが返って来ませんでした。その十五日は

潮の命終りし日でした。心落ちつかぬまま、保証人から何とか通知があるうかと待ちあぐんでいましたが、とうとう三女百合を連れて長崎へ行く決心をしました。野宿の覚悟、焼野原と聞いているはいたが、駅とは名のみの掘建小屋。汽車から降りたものの足すくみ一歩も歩けず、目の前に見る恐ろしさと心配でグニャグニャとなりました。

「母さん何のために此処に来たの、しっかりして」と娘に励まされ、足をさすり氣を落着けて先ず匠大の焼跡へ。四、五人の生存学生さんが受付におられ、当時のお話を伺い、分骨してあげようと申されたが、どうしても潮を探したく、「兄さんを見つけましょうね」と娘と心当りを尋ねる。倒れんばかり、防空壕にはまだ死人が一杯、そこも此処も煙立ち、ぼろぼろの衣類をまとい、白や黄色のお菓子を顔に塗り、焼けただれて男とも女ともつかぬ人がふらふらと歩いて行く。「母さん臭い、こわい」の連発でした。地獄とはかくあらんか。引取人なき死体は道ばたで火葬。まだ形の残っているものもありました。誰とも知らぬ人なれど、合掌、冥福を祈つてあげました。

大学本館では学長様の告別式があり、かげながらお参りを致しました。書いても書いてもつきぬ思い出、この時より二十二年、愈々靖国神社へ合祀されることになりまして、無上の喜びであります。兄は戦死、一足先に靖国神社に居ります故、兄弟久々に面会、共に護国の神と仰がれ、靖国の官居に永久に眠ることになり、先ず大死になりませんので有難うございました。

毎月の命日には欠かさず墓参りして、最後の水一口もやれなかったつぐないをしています。その母も今年は七十六才、いつまで続きましようか、保証人のおかげでお骨も拾っていただきました。その保証人賀来作一氏も、一昨年なくなられました。芋環おだまきの糸繰るように、思い出のつきませぬ拙文、これにてペンを納めましよう。潮よ、安らかに眠れ、と母は祈ります。

○ 我が涙ふけどふけどわき出でて 吾子いとしかる長崎のそら

(二八九) 医専二年生 梶 原 辰 巳

衛生学講堂で被爆、脱出後古町二の高尾八重方にて療養したがその甲斐なく、一週間後、八月十五日午後五時五分に死亡。

遺族 佐賀県武雄市中町 松尾 みさを（姉）

梶原辰巳——名碑銅板の、上から三段目に弟の懐しい名前を見出しました。八月九日、グピロが丘の名碑除幕式でございます。一瞬私の脳裡には、二十二年前の長崎医大校庭での、あの悲惨極まりない光景がくつきりと想い出されて、嗚咽にむせんたのでございます。

弟は身長一・八二米の立派な体格の持主で、中学時代には弓道部の主将として活躍し、医専に進んでもからも益々励んでおりました。一日も早く軍医としてお国の役に立つんだと張切って、久留米の聯隊に学校を代表して派遣されたりして、最早一流軍人としての総てを備えておりました。八月一日の空襲で、友達と二人居る所へ爆弾が落ち、「自分は防空壕にとび込んで助かったが、友は一足遅れて爆死してしまった」と大変残念がり、葬儀委員長をつとめて友の霊を弔ったが、何とも云えない気持ちだったと云っております。

でも八月九日には、遂に長崎は人類史上初の広島に続く原子爆弾に血ぬられてしまったのです。弟はあの巨体を焼けただれて、苦しみながら一週間目に霊界へと旅立ったのでございます。父は当時佐世保市三浦町の警防部長と町内副会長の要職にあり、脚部に機銃の散弾を受けてピッコを引いておりました。銃後の守りに個人を忘れて働いていた父には、弟の事も気にはかかっていました。弟は、あの子は運がよいから大丈夫だろうと、長崎の爆弾をよく知らないで過小評価していたように思います。

八月十五日朝、生存された上級生の方から、「梶原君は重傷です。早く下宿へ行って下さい」との知らせに驚いて、父母と私はあの終戦のどさくさの中を長崎へ向いました。漸く夜の九時半頃、古町の下宿高尾様宅へ辿り着きましたが、弟は夕方五時半に、母と私の名を呼びつづけて、最後の息を引きとったとの事でした。さぞ苦しかったろう。無念だったろう。どうしてもっと早く来なかったかと悔まれてなりません。高尾様の話によれば、弟は意識は確かだ、校庭の水槽の中で六時間を過し、その後山の方へ逃れ、穴弘法様で一夜を明かし、朝まだき金比羅山を歩き続け、途中倒れては起きながら下宿へ辿りつきましたそうです。全身傷つきながら本当に可哀想で

した。下痢が続き食欲もなく、やっと手に入れた牛乳を少量と梨を食べたとのこと、痛みに苦しみ、うわごとの中に葬儀委員長をした時の事を口走り、母が来た、姉が来た、と私達を待ちに待って、一人淋しく息を引取ったとのこと、誠に弟に申し訳なく、心からお詫び致しました。

十六日、伊良木小学校々庭で懇ろに私達の手でお骨に致し、一本の歯も残さぬで箱に納めました。母が余りに悲しみますので、十七日には大学まで歩いて行き、沿道のすさまじさ、又大学の庭での誰とも分らぬ遺体の多さに合掌をして、冥福を祈りました。弟は傷つき苦しみはしましたが、私達の手ではつきりと骨を持って帰ることが出来て、幸せだったと思います。母とも何度も何度も、その事を話しては慰め合いました。

十八日にはアメリカ兵が上陸するという大騒ぎの中を、私は弟の残した医書と遺品を前と後に振り分けにかつき、父母は骨を抱いて佐世保の家へ帰りました。二十五日、父はアメリカの兵の姿を見たくないと申して、疎開すべく手に入れていた武雄の田舎へ早々に引越しました。母は毎日々々弟の許へ早く行きたいと、口癖のように申し、遂に二十四年三月に他界してしまいました。父は淋しい老後を、敗戦と末っ子の弟の爆死とで希望もうすらぎ、又これも後を追うように二十八年に亡くなり、私達の一家は弟の死で火の消えたようになりました。今年終戦後二十二年目を迎え、漸くにして弟の死も準軍属として認められ、愈々靖国神社へも祀られることにとり、姉として、当時の事を知っている唯一人の肉親として、感無量の想いで一杯でございます。

お盆には父母と弟の墓前に、早速報告して喜んで頂きました。

私達は原爆遺族として全世界に呼びかけ、全人類の為に、再びこの様な事の起らないように、そして人類は皆兄弟姉妹であり、ともに神様に生かされている神の子であることを呼び、仲よく暮すようにありたいものだと思います。

(二九〇) 医専二年生 片伯部 勇

遺族 長崎市本原町三二〇 片伯部医院内 片伯部 ハル(母)
八月六日、広島原爆投下の翌々日、角尾学長様があらを御視察の上帰崎され、全

生徒を集めて広島の悲惨な有様をお話しになりましたとか、子供が内に帰って「大事な品物は穴を掘って埋めるのが一番よいですから、僕がやります。品物を出して下さい」と申しますので、私は「よしなさい。死ねば諸共ではありませんか」と申しましたら、「それでは参考書だけ埋めよう」と云って穴を掘っておりまして。その時鍬で足を怪我しましたらしく、救急袋から薬など出して手当をしておりました。翌日起きた時に本当に痛そうにしていたので、「今日は学校を休んだら」と申しますと、「どうせ治療をしなければいけないから学校に行くよ」と申して、二階に上って行きました。

暫らくして「お母さん、一寸見て下さい」と云って、新調して一度も手を通した事のない服を着て角帽をかぶり、「これで学生のようにしよう」とニコニコしていました。いつもは戦斗帽に菜葉服、巻ゲートルに地下足袋という出で立でしたので、「一体今日どうしたのですか」と申しますと、「今日は足が痛んで作業が出来ないから、新しい洋服姿をお母さんに見て貰いたかったのです」と云いながら、玄関まで下りて来ました。しかし如何にも痛そうでしたので、「お父さんのステッキをついて行きなさい」と云って出してやりますと、笑いながら「お父さんから支えられて行く様おかしいや」と云って、こつこつと坂を下りて行きました。

これが永遠の別離になろうとは、神ならぬ身の知る由もない事で御座いました。

それから運命の瞬間！矢張り帰って来ない。そわそわしているうちに、夜になってしまいました。明日は一体何処を探せばいいか、と考えながらうとうとしていますと、病臥中の姉娘が、「勇が今帰って来ましたよ。真黒い手を見せながら湯殿の方へ行きましたよ」と申しますので、急いでその方へ飛んで行ってみました。誰も居りません。「お前は夢を見たのでしょうか」と申しましたら、「いいえ、夢ではありません。」と申します。一体何ということで御座いましょうか、後は皆様の御想像にお任せいたします。

それから、来る日も来る日も、遺体を求めて歩き廻りましたが、何一つ見当りません。仕方なく当時脱いでいった服や、汗で汚れた帽子などを焼いて、お弔いをいたし

た次第で御座います。

それから二十二年余の今日では、住所や地形等も変り、現地の様相は変りはていますが、矢張りあの附近に立てば、別れた時の姿が幻の如くに目に浮び、やるせない思いで胸一杯で御座います。

忘れようとしても忘れられない想い出を、私と同じくお持ちの皆々様に、心から御同情の意を表しますとともに、子供と共に残られた数々の故人の御冥福を、衷心からお祈り申し上げます。

(二九三) 医専二年生 亀井 宏

遺族 福岡市今宿町西松原一六四 亀井 昂(父)

私は大正九年五月に徴兵保険会社(終戦後社名を東邦生命保険会社と改称)に入社し、福岡に二年、東京本社に二十年勤務して、昭和十七年四月に長崎支社が新設されたので、転任して来ました。城山町北三条に三年間住みましたが、二十年四月熊本市に九州分室が新設されたので、其の方へ転勤、家内と娘二人(女学生と小学生)も同時に熊本へ移転しました。長男宏は鎮西学院中学部卒業後、医専に入学、原爆当時は二年生でした。私共熊本移転後は、城山町の懇意の方宅に下宿させて戴き、毎日元気に通学して居りました。暑中休暇には帰省するものと、心待ち致して居りましたが、とうとう其儘になってしまいました。

長崎爆撃の事は新聞やラジオで詳しいことは報道されず、新型爆弾が落された後で知りました。当時郵便も遅れ勝で、学校気付で長男宛に書留郵便を出しましたが、受取人不明で戻って来ました。その後、稲佐町の方が熊本の会社にお出でになったので、その方にお会いして長崎市の模様など伺い、驚いて早速八月二十三日に家内と長崎へ行きましたが、余りの惨状に茫然自失しました。もと居りました城山町も全部消失して、誰一人尋ねる人もありません。長男の下宿先の部屋と思われる処に、見覚えのある黒眼鏡のふちがありましたので、形見として、医学部で分骨して戴いたお骨と一緒に、埋葬しました。

私共が長崎に行きました頃は、相当に時日が経過して居りましたので、取り片付け

られて、被爆当時の模様は分りませんでした、今度見せて戴いた映画でよく分り、涙を新たにしました。

八月九日の慰霊祭は、皆様のお世話で盛大に行なわれ、誠に有り難く感謝申し上げます。命日には毎年お参り致したいと思ひながらも、思うにまかせず失礼致して居ります。この度は立派な名碑が完成され、亡き宏に面会した様な思いが致しまして、感謝にたえません。

(二九五) 医専二年生 川野 正章

遺族 長崎市上小島町二四五 森 本 久 男 (養父)

医学専門部二年生川野正章、この子は七才の時母ユリオと私の結婚により同居、お互いになきぬ仲としての一片の暗い気持はなく、実の親子の様に暮して来たのでした。氣だて優しく、温和で、勉強好きな子でした。私の出征の時は、駅頭で別れてからも八千代町の木柵の処まで走って来て、木柵の間から額を出し、日の丸の小旗を振り、大声で私の方を見て叫び続けていた。この子の姿を今も忘れることが出来ません。而もこれが私との最後の別れとなったのでした。

私は二十年十二月一日に復員、初めて正章の骨のない仏壇の前で、男泣きに泣き続けました。翌日から妻ユリオと共に、医学部の原爆の跡を幾度となく徘徊、何か遺品はないかと探し求めた。見渡す限り瓦礫の原で、何処にこの子が居たかも知らない。二かかもある大木が、根元から鋸で切った様にもぎ取られたのが印象的で、如何に原爆の威力が想像を絶するものであるかを、見せつけられたのであります。妻ユリオの話によると、翌日も尚焼け落ちた家屋の残骸は煙り立つて居り、焼けただれた死屍は累々として横たわり、幾十人とも知れない断末魔の人の水を求める叫び声、全く地獄絵図を見る様で、この世の有様とも思えない空前絶後の惨劇であったという。

その後二十二年、否今後幾十年の後までも、幾十万人が理由なき苦悩と十字架を背負って行かねばならないことを思うと、やりばのない気持をどうすることも出来ない。私はこの時以来、神仏の存在を否定する無神論者の一人となった。そしてこの世界から戦争を絶対に無くさねばならないと心に誓った。戦争とは何か、その原因は

何か、人間が人間を殺戮する。而も民族の団を皆殺しにする大量虐殺が出来るということは、人類が人類を絶滅するということにも繋がる最大の悲劇である。人類が人類の幸福と進歩のために、幾百年に亘り全智の限りを發揮して積み重ねて来た科学と汗と油の結晶である最新の創作物が、逆に人類を消滅する悪魔の兵器となるという事は、我が地球上に於てこれ程の矛盾があるであろうか。人類の歴史は、この原爆の一瞬に於て一大転換を迫られているのではなからうか。愚かにも永い間、飽くことなく戦争を繰返して来た人類は、今後絶対に戦争をしてはならない。この一瞬以後、再びこの悪魔の兵器を使つてはならない。全人類をあげて戦争絶滅のため、献身の努力をしなければならぬ。これは人類が地上に永遠の生命と文化を保持しようとするために、是非とも断行せねばならぬ最大最高の道徳であらねばならない。この様な至高至聖な使命の第一歩は、全世界の人々に対し、原爆の暴威と悲惨さの实情を一刻も早く周知徹底させることであり、それによって戦争への批判を最高度に高め、戦争消滅への世論を導く事ではないかと、固く信ずるものであります。

○ 一瞬の光のもとにあわれなれ あまたの生命はたと消えゆく

大 虚

(三〇〇) 医専二年生 黒 井 啓

遺族 宮崎県宮崎郡田野町乙九四一三 黒 井 俊 一 (兄)

八月九日午前十一時、一瞬の閃光が数十万の生命を奪ったその時刻に、今年も亦長崎市平和記念公園は、戦争への怒りと平和への祈りに満たされて、二十二年目の原爆記念日を迎えました。この日弟を亡くした私も、長崎医大原爆遺族会員として案内を受け、参加することになりました。生ける弟に逢える様な衝動にかられながら、初めて見る医学部の門をくぐりました。

記念館の上部はグピロが丘でした。当時戦地にいた私は、幾度か君のくれた慰問文にその名を聞かされた事でしょう。嘗て級友の皆様と楽しく将来を語り、又戦争を語ったであろう事や、一人淋しく郷愁に浸った一瞬も、この丘の上ではなかったかと思ひますと、肉親の情、誠に耐え難きものがございます。

今そのグピロが丘で調先生を遺族会長として、医学部長先生や国会議員の方々、沢

山の遺族父兄と共に、慰霊祭が盛大に行われています。君達の氏名も真鍮板に克明に彫り込まれ、永久に医学部に保存されることとなりました。多くの遺族の皆様と一緒に、仏前にぬかずいて香を焚いていますと、君の顔と同じく、今は亡き両親の顔が髣髴として臉に浮んで来ました。父はそれから十三年、母は十七年の間、一日として君の事を忘れた事があつたでしょうか。嬉しい時、悲しい時、いつも君の写真に眼は注がれていたのです。

今待望の靖国神社合祀が、国会議員の方から報告されました。決して君の死は無駄ではなかったのです。立派に世界平和宣言への礎石となりました。そして君達の慰霊碑は、永久に長崎医大のグピロが丘にそそり立ったのです。恐ろしい歴史ではありましたが、これ程美しい歴史がありましょうか。宗教の世界では、来世があるとされています。二十二年を経過した現在、立派にその世界で医業に活躍している事を信じて筆を止めます。

(三〇一) 医専二年生 鋏 先 清四郎

遺族 長崎市万屋町六一二七 鋏 先 アサキ(母)

屋 顔 の 花

月日の経つのは早いもので、今年は二十二回目の原爆忌を迎えました。

振り返ってみますと、原爆投下後の大学は、教年間というものは人手も届かず、八月九日ともなれば、人文程の雑草が茂り放題でした。その中をかき分け、教室跡と思われる所を訪ね、草を折り敷き、今は亡き主人と二人で、毎年々々お詣りに来、二時間三時間も付ずむ事もありました。広い教室跡の土の上には、到る処に風雨にさらされた小さな白骨が散らかり、虫の声は子供達の声かと思ひ、草に咲きのぼっているうす桃色の美しい可憐な屋顔の花等々見えていますと、私の思ひを越えた自然の姿が目の前に拡がっていて、この世界に随順してゆくより外にない私であると、そんなに見える年々でした。

十二、三年前あたりから、着々と校内が整備され、今日の様な立派な大学が建設されました事を、嬉しく思いますと同時に、恐るべき核兵器の禁止を、心から叫ばずに

はいられません。

歴代の学長、教授の諸先生、遺族理事の方々には申すに及ばず、県下各代議士、その他の方々の深甚なる御努力に依りまして、被爆二十二年後の今日、原爆犠牲学徒の靖国神社合祀と、遺族援護措置が決定され、又学内に於ける原爆犠牲者全部の銅板の銘碑が出来、永久に保存される様になりましたことは、御同慶に堪えません。

私共は日に日に老いて行きますが、人々の住む何処の場所に於きましても、かかる惨事が再び惹起されませぬよう、心から念じて止みません。 合 掌

(三〇二) 医専二年生 古 賀 敬 賢

衛生学講堂で被爆、脱出して金比羅山を越え、片渕を経て八百屋町の下宿に帰り、翌日汽車にて佐賀県江北村の自宅に帰る。加療せるも効なく、発熱、悪心、嘔吐、頭痛激甚なり。死亡日時不詳。

(三〇四) 医専二年生 児 玉 進

衛生講堂で被爆、八月十日午前十時半、穴弘法の山で休んでいた。以後不明。

(三〇五) 医専二年生 児 玉 正 嘉

遺族 長崎市水ノ浦町二七五 児 玉 五 郎(父)

過ぐる昭和二十年八月九日午前十一時二分、私は三菱造船所の晩の勤務を終えて、自宅に着いた瞬間です。あの暑い暑い日中に、物凄い光と凄まじい強力な爆風に身を畳にすりつけましたが、起き上つて海岸を見ると、次々に浦上方面から三菱病院に運ばれて行く負傷者が一つ二つ三つ、何と悲惨な事でしょう。「あれが新型爆弾かな」と人々は云う。

その日息子正嘉は、衛生学受講のため九時頃家を出ましたが、私は浦上方面が、あまでひどいとは思わず、稲佐橋まで行つてはみましたが、附近は火の海で、この日は浦上へ行くのを止めました。

翌十日、朝早く妻と二人で出掛けましたが、途中道端に何十人何百人と、顔は黒く身はただれた人又人、茂里町から浦上天主堂、大学病院など灰と死体に埋まり、生残

った人は歩くことも出来ず、飲めば死ぬと判つていながら、しきりに水を求めていました。私達は十二日まで正嘉を探しましたが、我子の姿はわからず、木造教室の焼跡にあった黒焦げの死体何百人の中から、骨を壺に納めて供養致しました。

最早あれから二十二年、四十七才だった私も六十九才となりましたが、妻は二十七年十一月二十八日に、大学病院入院生活九カ月の後、子宮癌で亡くなりました。

今頃犠牲者の親兄弟のわからない人が多数おられると聞き、私共も残念に思います。早くこの度の明るい現実をお知らせしたいと思います。

(三〇六) 医専二年生 近 藤 忠 利

遺族 長崎県南高来郡西有家町甲一〇七八 近 藤 泉(兄)

忠利の壺にささぐ

君は近藤時男・マユの五男として生をうけ、父母の慈愛のもとにすくすく成長し、医師を志して長崎大学に学んだ。時あたかも大東亜戦争熾烈をきわめ、前線では幾多の将兵が、敵弾に斃れ傷ついていた時で、一刻も早く一人前の医師となり、治療の任に当らねばならぬ重大な使命を負わされていたので、暑中休暇も返上して、ひたすら医術の修得に懸命であつたと聞く。

当時の情況は、君もよく知っているであろう。君の四人の兄は、全部応召して前線にあつた。君が原爆によって貴い生命を奪われたことすら知らなかった。黙々として御国のために戦っていた。父は既に死去されていたので、君のしみじみな死を知ったのは、母と妹二人と中学二年の貞秋だけであつた。君の葬式は敗戦後物資の最も不足していた八月十五日に、女と子供だけで行われたとのことである。君は次の事は知らないだろう。長崎で五日間君の看病をし、君を郷里に連れて帰った弟貞秋は、原爆症のため十一月五日に君と同じ症状で死んでいる。又君のすぐ上の兄の太郎は、同じ年の一月八日に台湾沖航空戦で戦死している。近藤家にとって、昭和二十年は忘れることの出来ない最悪の年であつた。三人もの貴い若い生命が戦争の犠牲となっている。

母は健気にも、一年に三人の子供の葬式をしておられる。母の心中は如何であつたらう。今はその母も死去された。君達の分まで孝行しようと思つていたのに、残念な

ことである。君達の死後、母はひたすら君達の冥福を祈りつづけられた。君達三人はどうか父母のもとに集つて、ありし日の如く楽しく暮して下さい。

生き残つた兄弟姉妹は、戦後の苦しみに打勝つて、皆中流以上の生活をしている。子孫も益々繁栄している。医学博士や医学部在学中のものが数名いる。君の遺志をついでくれることでしょう。どうか安らかに眠つて下さい。御冥福をお祈り申します。

昭和四十二年八月九日、長崎大学の御厚意により、原爆記念碑除幕式には、私も参列して君達の冥福を祈つた。君の名前もはつきりと刻み込まれていた。この記念碑は長崎大学のある限り、永遠にのこるでしょう。どうか日本が平和であるよう御守り下さい。

(三〇七) 医専二年生 佐 藤 恕 一

衛生学講堂で被爆。十日十時半、病院裏にて治療を受く。その後帰省せるものの如し。

遺族 大分市六坊北四六 佐 藤 ひろ子(母)

昭和二十年七月二十日過でございましたでしょうか。十日間位の休みがございました、空襲下汽車の便の悪い中を帰宅致しました。私が長崎も空襲が激しうだから、待避に注意して怪我しないようにと申しましたら、僕もそう思うから実は水杯をしに帰った、などと冗談を云つておりました。お休の間思いがけない方の所まで訪ねたように、後に思いますと、暇乞いになってしまった様で御座います。父が不安がつて、診断書を書くから当分欠席するように申しましたが、何日果てる当てもございませんので、七月末日、講義が始まるからと急いで帰りました。あの時強く止めていたら、と悔んだことでございます。

去る八月九日、名碑の除幕式をテレビで初めて知り、息子の名が刻まれているか問合せ、初めて住所不明のまま皆様に御心配をかけている事が判り、大変申し訳なく思つております。これを機会に、当途中まで連れて帰つて下さった先輩の方にお目にかかり、当時の様子をお聞きしましたが、お話によると、その方が大学の防空壕の中で息子を発見され、郷里も近いので連れて帰ることにし、脈が悪いので二時間おきに

カンフル注射をされ、歩く時は肩をかして下さって、途中注射器が割れたため、親戚のある駅で一緒に下車され、伯父の家に運んで下さったそうで、知らせを受けたのですぐに駆けつけ、数日看病して亡くなりました。

私共が参りました時の症状は、上半身黒ずんで、三、四カ所に火傷様の傷があり、咽の渴きと下痢がひどく、右膊骨の骨折がありました。

多くの方々の中には、家族の知らない所で亡くなられた方もあると存じますが、息子は私共の目の前で、意識のはっきりした時は話も致し、最後に「いい両親を持って幸せだった」と云って亡くなりましたから、それをせめてもの慰めとしております。その先輩に逢わなかったらとても生きて逢われなかった事と、有難く心から感謝しております。

一時は悲しみで生きて行かれるかと思いましたが、戦後の不自由や弟三人の勉学などで悲しみもすれ、今は安らかに暮しております。時々在学中の來信書を読みますが、不自由の世の中で可哀想だったと思います。

終りに、御遺霊の御冥福を心からお祈り申し上げます。

(三〇八) 医専二年生 佐藤 直方

遺族 大分県大分郡野津原一七一九 佐藤 ナラオ(母)

(前略) 二十二年前の夏、新型強力爆弾落下の新聞報道を読み、一週間経っても子供から何等の沙汰もないので、段々心配になって参り、十一日目に急ぎ長崎に向って出発しました。途中鉄道が破壊されていたので、徒歩で向うに待っている汽車に乗り替え、やっと長崎に着きました。先ず子供の世話になっていた新大工町の林田医院に行きますと、当時電信電話が不通で、便りの来なかったのも当然と悟りました。すぐに林田様のお坊ちゃんのお案内で長崎医大へ出向きましたが、あの惨状では到底遺品一つも見つかる訳もなく、灼けつく様な炎天の下を校内あちこちと歩き廻って、真黒に焼け残った大木にとまって淋しく哀れに鳴く四、五羽の鴉の声や姿が、いつまでも未だに耳に残っております。

それから駅に行きましたが、いつ汽車が来るのやら駅員にもはっきりした事は分ら

ず、駅前で蚊にさされながら野宿いたしました。あの蚊やカラスはどうして生き残ったのでしょうか。帰るも貨車に乗ったり、一步誤れば目がまわって落ちそうな橋板のない仮橋を渡ったり、麦藁帽子にモンペ、リュック姿で、徒歩の行列の群の中を熱い日に照りつけられて、汗をふきふき歩きました。あれから早や二十二年過ぎた今、よくぞ倒れなかったと思います。

当時本人の兄は、フィリッピンのマインダオ島の戦いに、姉は嫁に行っており、一人でしたので、時たま帰った節は、永い戦争だそうだから逃げて行く場合があるかも知れないが、その時の行先は必ず父の墓の中に手紙を入れておく、と連絡しておいたり、当時切手、葉書、封筒など万事入手難の折でしたから、こちらで一々作って送ってやっておりましたが、週に一度は必ずまとめて日記を送ってくれた事や、下宿の林田様の皆様の御親切等々思い出されます。

兄はあの年の五月に戦死、我家には子供はとうとうなくなりましたが、幸に娘夫婦に孫が二人おり、理解ある先方の御両親のお計らいで、一家こぞって我家の者になりました。当時赤ん坊で、直方が帰省した時可愛がって抱っこした上の孫も、今は大学四年で東京に、次の孫も入学し福岡で、それぞれ勉強しております。先月のお盆には家族五人揃って、先祖初め医師だった私の主人や長男直方の墓に、香華を手向け参拝してくれる背の高い二人の孫や、娘夫婦の様子をそっと眺め、感無量、これからは家族一同の無事を祈るばかりで、安らかに暮しております。なお、いつかは名碑にもお参りしたいと思っております。

(三〇九) 医専二年生 坂本 博之

自宅竹久保にて爆死、一家全滅なるものの如し。詳細不明。

(三一〇) 医専二年生 里崎 永二郎

大学運動場にて遭難、八月十日死亡。

遺族 佐世保市福田町六一八 里崎 フク(母)

夏が来ると原爆で死んだ長男のことを思い出します。一人息子で、親の目からみる

と素直な子どもでした。

二十二年前の七月末に帰省し、翌日元気に長崎に帰りましたが、この時いつ空襲をうけるかわからないからと申して、本を風呂敷に一杯持つて帰りました。「大事な本だから防空壕にでも入れておいて」と申しておりましたが、これが唯一つの形見となつてしまいました。駅まで見送り、くれぐれも体につけるように、と云つて別れたのに、一週間後には原爆とは——。本当に思い出しても涙がにじんで参ります。暑い暑い日ざかり、長与、道尾と足を棒にして、負傷者の手当をしている救護所は全部探して廻りました。道尾駅付近で茶色に枯れてしまった芋の葉にびっくりして、こんなにひどい爆弾ならとてもと思う心の底に、是非一息のあるうちに会いたいと、夢中になって探し廻りました。とうとう分らず、家に帰るなりワッと泣き出し、家族のものに様子を話そうにも涙になり、とても言葉も出ない悲惨さでございました。この度関係の方々の御世話によりまして、名碑の完成、見舞金の下付、並びに靖国神社合祀の運びとなり、八十三才の今日まで長生きしてよかったと、感謝の気持ち一杯でございます。終りになりましたが、犠牲者の方々の御冥福を心からお祈り致しますと共に、御遺族の方々の御多幸を念じて筆をおきます。

(三三) 医専二年生 首 藤 洋 三

衛生学講堂で即死。

遺族 大分市津守字富岡 首 藤 キ ク (母)

洋ちゃん、あれからもう二十二年、二昔の歳月が流れました。長い長いようで、やはり母さんには昨日今日の様な気がしてなりません。お前の年を教えながら、入試の頃のお前の姿を思い浮べます。

仏教では生れ更り、丁度あの時と同じ年頃ですね、又どこかの大学に入って居ることでありましょうが、私はやはりあの時の姿が目によきついで忘れられません。

最後にお会いして、学校中をそこ此処と説明して、後になり先になり——後姿を見ながらあの幼なかつた、余り丈夫でなかつたこの子が、いつの間にこんなに成長してと、母さんは嬉しいやら頼もしいやらで胸が一杯でした。父さんもどんなに期待して

いたか——。その父も十五年前、お前の死に精も根もつきはてて、お前の所に行つてしまいました。

洋ちゃん、新聞で長崎に新型爆弾が落ちたとのみで、お前からの手紙も来ず、家では、医者のお卵だから何かと御手伝していること位に思っていました。まさか学校の上に落ちるなど思いもありませんでした。あゝ帰りを待ちました。今でも待つています。二十二年すぎた今でも、帰つて来るような気がして居ます。母さんも七十才を過ぎました。早くお前の所に行つて、洋ちゃん洋ちゃんと、お前の手をしっかりと握りたいと思います。

この度は皆様方の御尽力により、靖国神社に合祀して戴くようになり、お見舞金も戴くとのこと、洋ちゃん、大死でなくて本当によかつたね。この度の慰霊祭には、千代子姉さんとお墓参りをしましたのよ。寿美子姉さんは、十一年程前に兄さんと医学会の時にお参りして下さいました。その時記念の「追憶」を持つて帰りました。悲しい皆様方の思い出を、涙ながら読まして戴いております。

今年出来た犠牲者名碑に刻んである洋ちゃんの名前を、千代子姉さんが見つけ出して教えてくれました。久し振りに見た首藤洋三の文字が心の中に焼きつきました。亡き多数の方々の中にあなたの名が、あ——。

あなたの御手紙、母さんは大事にしまつております。あの世に行く時束にして持つて行き、あれこれと笑つて話し合ひましょう。

今生きて居れば四十二才、母はお前の年を教え重ねながら老いて行きます。日一日とお前の所に近ずいて居ります。洋ちゃん、待つていて下さい。お墓参りだけは出来ず間参りたいと思います。洋ちゃん、安らかに母の行くのを待つて下さい。涙ながらあなたの御冥福をただ祈るのみ——。

(三一六) 医専二年生 田 中 精

遺族 長崎県南高来郡瑞穂村古部 田 中 ク ニ (母)

(前略) 亡き長男のため、出来ますることなら御心配下さる皆様の御苦勞に対して、どんなにでも存じますが、あと五人子供を教育し、今七十にならんとする主人と、

年毎に八月九日の来る度に思い出ししては涙しております。(後略)

(三一七) 医専二年生 田 中 秀 雄

衛生講堂附近で被爆、直ちに穴弘法に避難、火傷を受け、翌十日同所にて死亡。

(三一八) 医専二年生 田 中 祥 生

遺族 福岡県飯塚市飯塚一九一― 田 中 豊 次 (父)

(前略) 先日お手紙を戴きました時は、二人の子供について積る思いを書き送ろうと思っておりましたが、実は八月九日の慰霊祭の時は、妻(二人の母)が病気で九大に入院中で、後幾日保てるかという状況でありました。今年は二十二年目であり、是非この慰霊祭にはお参りしたいと思っていましたし、病妻も行つて来てくれと申しますので、参上してお世話になりましたが、帰宅後数日で妻も永眠致しました。

八月十五日は長男祥生の命日でありましたが、妻もこの日に後を追いました。それにつけても二十二年前、十月十三日と十九日の二回、生死不明の次男清視を尋ねて、又被爆の現状を妻に見せておきたいと思ひ、長崎に行きました。それから約二十二年間、原爆症に関係なきやと多少不安もありましたが、大した異常もないと安心していました。妻の病死が癌か肉腫か判然せぬままに――何かの關係があつたのではなからうか、などと思つたりする次第です。

当時次男は全く不明でありましたが、長男は背中に無数の傷を負いながらも、十日夜半帰宅しましたので、原爆の恐ろしさも知らない私共は、長男を見て喜びました。しかし不明の次男を探しに行き、十五日朝帰った時には、長男もこの世の者ではなかったのです。去る八月九日、次男の友上村(輝人)君の母上と共に慰霊祭に参りました時、母上から初めて承りましたが、兄弟は下宿では喧嘩もしていたが、原爆の落ちた日に二人は近くに居たそうで、次男が兄ちゃん兄ちゃんと叫んだ二声を聞きながら、上村君は這い出て来て、清視君は駄目だがこれを両親に云つてくれると言われ

たそうで、二十二年後にこの事を承り、涙新たなものがありません。

八月十五日終戦の時、二人の死を見ながらも天皇の詔勅をラジオで承り、敗戦の事

実を知った時は、不覚にも全く虚脱の状態になりました。しかしこれではと思ひ返し、その後忘れられぬ長崎に、次女と三女の二人の娘を活水短大にやりました。

長男と次男を亡くした時、男の子が一人欲しいと思っていましたら、二十一年九月四日に男子出産、この子が現在二十一才、唯今熊本大学医学部三年生です。長男の祥生の祥と、次男の清視の視を取つて祥視という名をつけましたが、二人分のよい所をとつて立派な人間になる事を祈つて居ります。

母の四十九日の法事を数日後に控え、色々思ひ出をまとめる事が出来ませんので、今回はこれにて失礼致します。(後略)

(三一九) 医専二年生 田 辺 清 隆

浦上停留所附近の電車中にて被爆、初めは元気で広島に帰り、自宅(広島県山県郡本地村)にて八月十四日又は十五日に死亡したものと思われる。

遺族 広島県山県郡千代田町本地四〇七九 田 辺 辰 三 (父)

(前略) 何か手記をとの事で御座いますが、別段是というものも思い当りません。唯一言「同情心に篤い純情な倅」であつただけは、親の自慢でもなく、当地の小学校同級生諸氏、及び広島市の県立第二中学のクラスの諸氏の一致せる意見の様に、存ぜられます事を申上げる次第で御座います。(後略)

(三二四) 医専二年生 高 平 伸 吾

遺族 福岡市白金二丁目一〇一七 高 平 繁 一 (父)

(前略) 私も齢まさに七十三、年齢を加えると共に、長男を亡くして、この住み難い社会に、私自身今だに働き続けねばならない運命をフト想ひ浮べる時、何とも云い知れぬわびしさと悲しさと情なさ、胸の中にこみあげて来ます。特に原爆犠牲に全く關係のない土地柄だけに、猶更世の冷たさをしみじみと痛感いたします。(後略)

(三二五) 医専二年生 武 内 健

遺族 熊本県本渡市本渡町六八三 武 内 孝 彦 (兄)

(前略) 今般記念の小冊子を出版されると聞き、當時を回想し感無量です。私の拙

い文章ではうまく表現することが出来ませんので、俳句にことよせて駄句をものしてみました。

原爆で即死せる弟をさがし

- 炎天下即死の跡の石拾ふ
- 夏雲や原爆の跡ただ荒涼
- 炎天下死臭の街をさまよへる
- 夏雲をおしわけせまる原子雲^{げんしん}
- 原爆跡に佇てば声なし夏の雲

(三二六) 医専二年生 竹下 正七

衛生講堂で被爆、口辺に小創傷、腹部及び背部に熱傷を受け、三日後に南高来郡串山村の自宅に輸送さる。嘔吐、血便激しく、受傷後一週間目(八月十六日)に死亡。

(三三〇) 医専二年生 寺田 重治

衛生講堂で下敷となったが、脱出に成功、胸部に外傷、圧迫を受け、胸痛甚しく、心臓衰弱、強心剤でやや回復、市内坂本町附近で二日間過し、十三日早朝出発して、十四日自宅(広島県御調郡市村)に帰り、療養したがその効なく、八月十七日母の許にて死亡。

(三三一) 医専二年生 土岐 宗次

遺族 長崎市愛宕町九六 土岐 利吉(父)

パツと閃光が眼を射ると、建物がグラグラと揺れた。思わず傍の女事務員を抱込むように机の下にもぐり込んだ。やがて恐る恐る這出すと、窓ガラスは吹き飛び、壁は落ちて、書類は散乱していた。向側の家は跡形もなく、見なれた会楽園も吹き飛んでいた。浦上方面の被害の噂が段々伝って来た。駅のあたりに火の手が上った。前夜の角尾先生の広島の新爆弾の話が思い出された。家の事が気懸りになって会社を出たが、駅前通も金比羅越も通行禁止、西山水源地へ廻らねばならぬ。

途中怪我人や着物をはがれた真裸の人、顔一面火傷の人が段々にしげくなった。会

う人毎に被害の模様を尋ねながら、家族の安全を祈って坂道を急いだ。

真夏の太陽に照りつけられ、にじみ出る汗を拭いてもせず、本原町に辿りついて、眼前に繰り上げられた光景に思わず佇んだ。浦上一帯の平和郷の家々は全て吹飛び、或は倒壊して火の海と化していた。兵器製作所は濃い煙に閉ざれて、はつきり見る事が出来なかった。黒く焦げた死人や牛馬の死体にまじって、爆風に皮膚をはぎとられた人、全身の火傷に氣息奄々の人が転っていた。その中から「おじさん、水を飲ましてくれんのう」、「おじさん、寒かけん何か着せてくれんのう」と、弱いかすかな必死の声を聞いた。心の中で詫びながらこの声から逃れ、火の中を天主堂についた。

東洋一の尖塔は飛ばされ、盛んに陥をあげていた。眼の前に猛火に囲まれた我家を眺めても、今朝別れた家族の安否を気遣いながら、唯呆然と佇むより仕方がなかった。妻も長男もきつと避難していると思った。どうしても死んだ姿を想像することが出来なかった。ここに居れば今朝別れた時のあの姿で尋ねて来るに違いないと、や々と大地に坐った。

四、五人の浦上に愛着を感じる人々と話合って、天主堂の空地に仮住いすることに決めた。鍋、釜、拳銃など拾い集め、焼け残った畳や蚊帳を持ち寄って、大空を天井に乞食生活が始まった。次々に加入する人が多く、十二、三人となった。大世帯を確保するため、配給所焼跡に積まれた塩を貰い、家庭の防空壕から米を貰い集めたり、爆死した牛をとって塩漬にしたり、天主堂に焼残ったサージンを拾い集めて、当分の食料とした。死体の浮いた川で米を洗ったり、死体の傍で食事しても不気味を感じず、臭気も感じない様になった。

妻はきつと家の下敷になったに違いないと思い、日に幾度も我家の前に立ったが、全て焼つくしてくさる中に、妻のおいを感じながら、唯呆然と見つめるだけだった。

長男を求めて医大へも行った。コンクリートは吹き抜け、全ての校舎は倒壊し、焼跡にあらに一群、こちらに一群と、何十人もの人が重なり合って倒れている。重傷の身を互いに励まし合って、死んで行つた情景を想像した。その中の一人が長男だと

思うと、涙が溢れて、いつまでも去るに忍びなかった。

沢山な鴉が死体を漁るように飛交っていた。毎日嫌な夜が来て、天主堂の焼け落ちる音、狂乱の人の叫び声、病人のうめき声のほか、何一つ聞えない淋しい夜が来た。死体からの燐が焦土に何百と現われて戦慄を感じた。

天主堂の廢塔にお祈りするグループの敬虔な姿に、私も思わず十字を切って、称名を唱えた。

(三三三) 医専二年生 朝 長 和 夫

衛生講堂で被爆、八月十一日受付の生存者名中に、その名があったので極力捜査したが、手掛りなく今日に至る。恐らく講堂内で爆死したものだと思われる。

(三三八) 医専二年生 中 山 喜 昭

八月九日午前七時半登校したまま帰らず、学校かその附近で爆死したものと考えられる。

遺族 佐賀県三養基郡三根町大字寄人九九五 中 山 ふ く (母)

中山喜昭は、佐世保中学四年修了で長崎医大専門部へ入学致しました。夫は十九年十二月に死去致しましたので、母と子の二人きりとなりました。夫が「喜昭は下宿させず、お前が長崎へ行って世話をせよ」と遺言致しましたので、長崎へ移住する事になり、お世話する方があって、本原町二丁目の農家を一軒借り、二人で住みました。二十年の五月からでございます。二カ月あまりの間はとても楽しく過しました。この頃の事は忘れられません。

喜昭は六月一日から勤労動員で、千綿へ麦刈り奉仕に参りました。並木様、仁志川様、成松様と過したそうです。このお方々も爆死していらっしやいます。

帰りまして海軍軍医試験を受けました。よくお友達が遊びにお出になって、「自分達はお国のために戦死するのだ。それが本望だ」と若くけなげに談笑していました。側に聞いている母の心も知らないで、と恨めしく思ったことでした。

八月九日は、いつもなら風邪気味で登校しない筈でしたが、「空襲の時は我々は病院を護らなければならぬ」と申しまして、大急ぎで出かけました。これが帰らぬ旅に

立つとは、神ならぬ身の知る由もなく、遂に姿も見せず、一瞬にして散ってしまいました。幾年経ってもまだ死んだとはどうしても思われません。

私はその後掘立小屋を建てて戴きまして、雨露だけは凌ぎ、子供を待ち続けながら毎日々々学校や病院の焼跡、穴弘法と、さまよい歩き続けて死体を探しましたが、探し出すことは出来ませんでした。三十日余り経ちますと全く人影はなく、死骸を犬が食べていました。何と残酷な事でしょう。この世の様とも思われず、一人佇んで冥福を祈りました。

四十日を過ぎました頃、突然喜昭が夢枕に立ちまして、「お母さん、僕はいくら探してもいません。大きな木の下まで逃げた時、お母さんは？と思った瞬間煙になった。探さずに下さい」と申しました。正夢とはこの事でしょう。この時から霊は必ずこの世に存在するという確信を得ました。それで探すことをブツリ止めまして、丁度故郷から迎えが参りましたので、後髪を引かるる思いで、原爆の野を後に致しました。

夢で申しました大きな木は、教室から真向の方向で、私はいつも何かに引かるるように、その木の下へ足が向いていました。全く不思議だと思えます。それで十月の半ば頃また爆心地へ参りまして、木の下を探しましたら、嬉しい事に小さい骨を探しあてました。秋雨が物悲しくシトシトと降っていました。不毛の地といわれたのに朝顔が咲いたとみえて、種が実っていました。これこそ愛子の精だと、大切に持ち帰りまして播きました。毎年々々垣根には白い朝顔が、「お母さん」という様に咲いてくれます。幾年過ぎましても、私はただひとり写真に話しかけ、会える日を楽しみに仏の供養に専念し、冥福を祈り続けて暮しています。

(三三九) 医専二年生 永 井 正 一

衛生学講堂で被爆、古屋野外科で二十年八月十四日朝死亡。

遺族 熊本市池田町稗田一二四一 永 井 郁 子 (母)

昭和二十年八月九日、長崎に原爆投下、その当時私達は原爆など如何なる性能のものか、又どんな威力のあるものかよく分りませず、唯普通の爆弾位にしか思っ

ませんで、何卒あの子が無事でいてくれます様に、と祈りつづけました。

日にちが経つにつれて、その心配はつのるばかり、何の音沙汰もないところを見ると、吃度いけなかったのではないかしら、若しそうでなかったら、夢にでもいいから見せてほしいと、どれだけ願ったか分りませんでした。私の命は縮めてもいいから、出来れば子供の命を助けて下さい、と神仏に祈りました。その切ない願いも空しく、恐ろしい原爆に見舞われて、哀れ二十一才を一期として、あの世に召されてしまいました。何という悲惨なことでしょう。

多くの若人の命を、一瞬にして奪ってしまったあの原爆、今思い出しても胸の疼きを覚えます。主人が遺骨を持って帰りました時、唯茫然自失、涙も出ませず、や々と我に返り、我が子はもうこの世には居ないとわかって、初めて涙が止めどもなく流れ、本当に涙も枯れ果てるまで泣きました。三度の食事も味気なく、まるで砂をかむ様でございました。

その当時ずっと私は病床に在りまして、何も母らしい事もしてやれなかったのが、今でもあの子に済まなくて、唯それだけが心残りです。御座います。あの子が「ただ一目両親に会いたい」と云つて息を引きとつたと聞きました時、ぐっと胸をえぐられる思いが致しました。

あれから二十二年の歳月が流れて、生きていてくれたら四十三才と、毎年八月九日が来る度毎にその当時を思い起しては、善きにつけ悪しきにつけ、又新しい涙が出て参ります。それに先生方の並々な御骨折りでや々と浮ばれまして、あの子も地下で吃度喜んでいと思います。

(三四二) 医専二年生 永島 順三

衛生講堂で被爆、全身に熱傷、打撲傷あり、九日は山上で過し、翌日勝山小学校に収容され、次で諫早海軍病院に移り、十一日に死亡。

(三四五) 医専二年生 仁志川 禎一

衛生学講堂で被爆、そのまま焼死か、面影を止めず。

遺族 愛媛県宇和島市中町一三 仁志川 朝次(弟)

(前略) 兄の件につきましては、私が長崎に滞在して居りました期間は、慰霊祭に参列したり、時にグビロが丘に上ったりしては居りましたが、遺族会の方々でそんな運動等して居られることを知らなかったとは云え、何のお手伝いも出来ず過しましたことを、申訳なく思つて居ります。

丁度私達は入学はしたものの、長崎へ出て講義を受けるようになったのは七月で、それから原爆の日までの僅かの期間に、クラスメートの顔をや々と覚えていく中で、余り親しい人も少なく、今では級友の顔さえ覚えていない人はいませんが、調(弘治)君は丁度机が私の斜後隣りだったので、よく覚えていました。

思えば丁度中学を卒業した年ですから、今の高校生くらいの年頃だったのですが、その頃の我々はずっと年若く、もっと純情だった様に思います。先般先生がテレビに出られた時、先生の心情に感激すると共に、調君の未だ中学生の様な純情な顔を思い出して、懐しく思い出して居りました。

その後二十年、私もやっと開業する様になりましたが、その間知らぬとは云え、何のお手伝いもせず過しましたことを、重ねてお詫び致します。(後略)

(三四六) 医専二年生 西田 豊

遺族 福岡県嘉穂郡稲築町山野一六〇七 西田 フクミ(母)

(前略) 私は被爆により長男を亡くし、その涙の乾かぬ間に翌年主人を喪い、残されたのは、老母と何もわからぬ子供六人(三男三女)でした。その折は一家の主柱を失つて氣も狂わんばかりでしたが、一番末の子が五才になりましてから銀行に入社し、集金係十五年間、雨の日も風の日も、如何に苦しい事でも打ち勝つて、子供の養育と生活を双肩に担つて働いて参りました。

二十二年経つて、今日過去をふりかえつて見ますと、苦しかった生活も、今では昔話の様に美しく想い出されます。男の子二人は大学を出て就職、男の末っ子が九大四年在学中で、明年大学院に進学することになり、私もこの子が卒業すれば、一安心という処です。

女の子二人は嫁ぎ、孫が四人も居て本当に可愛いものです。今は女の末っ子と二人

平和な暮しをして居ります。

私の過去の生活は本当に、精神的にも物質的にも、苦しい事のみ多かった道程でしたが、子供が多かったので、生甲斐があった様に思えます。これから先は一日でも長く生きて、主人と子供の霊を守って行く積りです。

今後は絶対に、あの様な恐ろしい戦争が再び起りませ様に願うものです。

(三四八) 医専二年生 畑 原 睦 夫

衛生講堂で被爆、直後三菱グラウンド方面に避難、翌十日夕方、自宅(新中川町)に帰る。背中に火傷少々、頭部に裂傷あり、翌十一日午後四時半頃、自宅で死亡。

遺族 熊本市水前寺本町一八三 畑 原 恒 久(養父)

(前略) 原爆投下の当日は職場に出勤していましたが、投下後直ちに帰宅しました。住宅はすべて破壊されており、隣組の指示により、一緒に自宅附近の山中に避難一夜を明かしました。睦夫の事が心配になり、爆心地は浦上と聞いたので、駄目かと諦めていましたが、翌朝十時頃全身包帯に包まれ(火傷のため)、杖をついて帰って来ました。直ちに寝かせましたが、胸がつまって苦しいと申します。暫らく睡眠の後目をさまし、今度は水が欲しいと申しますのでお湯をやりました。暫らくして洗面器に二杯程青のり様のものを吐いて、そのまま息を取りました。

それで止むなくリヤカーを探し求め、焼場へ行って火葬を頼みましたが、オンボがどうしても承知しません。土下座して懇願しても相手にしてくれないので、又風頭から連れ帰り、市内の焼跡で火の氣をかき集め、火葬にした様な次第でした。同じ人間でありながら、こんな浅ましい人間もいるものかと、この時あきたものです。人間愛の美というものの片鱗だにありません。今当時の情況を書いていますと、何だか筆を運ぶのも怖くて仕様がありません。

当時同郷の人がクラスにもう一人居たのですが、当人はお盆のためと称して、早く帰省中だったので難を免れ、その後学校を卒業し、現在立派な医師として成長されています。人の運命の皮肉さを見せつけられた一駒であります。(後略)

(三五〇) 医専二年生 樋 口 匠 一

大学裏門附近の下宿(山里町前川方)にて死亡。即死と思わる。骨は下宿の娘が埋葬せるならん。場所は未だ知らず、近日中出崎、探索の予定(医専三年吉川記)

遺族 大分県佐伯市西谷区三九 樋 口 み と(母)

(前略) 早いもので、あの感激の記念式を迎えて早くも一月半を過ぎました。長い間の念願がかないまして、遺族の方々もさぞ満足なさっておられることと、御同慶に堪えません。

此の度愈々靖国神社に祀られることになりまして、あの子も大死にならなかったことを思うと、悲しい中にも嬉しさで一杯でございます。宇宙から見ますと人生は瞬時でございます。匠一も短い人生ではございましたが、地球のある限り永劫に祀られ、天皇・皇后兩陛下の御参拝を辱うし、これに過ぎた光栄はございません。これからは上京の都度靖国神社にお参りすることも、楽しみの一つになりました。

この度記念号が発行されますよし、楽しみにしております。何か思出を綴ってと思いましたが、拙い歌に託して原稿をお送り致します。二十二年前のあの当時の悲痛な歌もあります。もう二十二年も過ぎて、今更古傷をかきむしる様ですから、近作に致しました。除幕式の日の思い出で、発表する様なものでもありませんが、よろしくお願い致します。

- 弱りたる足いたわりて登りゆく グビロが丘に蟬の音しげし
- 花束に埋れて立ちし慰霊碑に 語りかけつつ吾れは香焚く
- 真乙女のやさしき手もて幕引けば 八百余人の名は刻まれて
- 銅板に刻まれし吾子の名を見出し 老いたる吾れの目頭あつし
- 靖国の宮に神とし祀られる 吾子のみ霊よ永久に安かれ
- 黙禱の一刻汝が在りし日の 面影^た顕ちて心切なし
- 医学の道遂げ得ず汝は逝きにしにしか グビロが丘に鐘の音を聞く
- 制服の吾子の通ひし道ならん 夾竹桃の花は目に泌^たむ
- 水しぶきあげて泳ぎし面影の 今も顕^たちくるプールに佇てば
- この嘆きいつの日消えん原爆に 匠一逝きて二十二年経つ

○ 吾子が死を無駄にはすまじ万国の 平和運動なほもつづけよ

○ 二十余年遺族がねがひかなへられ 合祀なりたりかたじけなければ

(三五五) 医専二年生 本多 四郎

衛生講堂で被爆、翌十日病院裏にて傷の治療を受く。持病の胆石病のため苦しむ。その後不明なるも、二、三日の命ありしとは思われず。

遺族 長崎県南高来郡西有家町甲一三一八 本多 好幸 (兄)

四郎は私の三番目の弟、十九年春京城高工土木科を受験した。私が同校卒業後総督府に勤めていたからである。試験の終った日、獅子山(頂上が獅子形の大石)に散歩に行ったまま、薄暗くなっても帰らないので心配していると、「獅子の頭上から京城を心ゆくまで眺め、首に記念の字を書いて遅くなった」と笑っていた。翌朝第一志望の長崎医専受験に出発したが、私は勤務のため見送りをしなかった。しかしこれが最後の別だった。高工合格を通知すると、医専に合格したからと断って来た。父母は子供の一人は医者にしたい念願だったので、四郎への期待は大したものであった。

戦争が熾烈になった二十年八月、四郎が病氣との通知を受けた母は、急遽出崎して看病した。そのため数日で全快したが、今度は母が病魔に倒れた。母は四郎に病後の休養旁々付添って帰ることを希望した。しかし四郎は病欠中の勉強もあり、たまたま学徒動員で出崎中の妹を呼んで、「卒業したら病人は全部引受けるから、今度は看病してくれ」と云って、妹を付添わせ母を帰した。翌日の原爆投下を神ならぬ身の誰が知ろう。教室から玄関前の坂道に這い出て救いを求めているとか、然し父と妹が探しに行った時は、何の手掛りも得られなかった。

四郎の原爆死と四郎の姉婿の戦死公報は母に知らせてなかったらしいが、日が経つにつれて感付いたらしく、ひどく落胆して病氣は悪化を辿るばかりであった。当時私は応召中で、原爆の詳細を知る由もなかったが、四郎は大丈夫と考えていた。召集解除、引揚げ、帰宅してみると火葬場からついたばかりの母の遺骨、私は初めて親兄弟の死に直面したのであった。

十数年過ぎた或る日、東彼の立石フサさんから書面が来た。見知らぬ方と思いなが

ら開封して見ると、学徒農業報国隊として一生懸命働いて下さったのにと、悔み旁々の四郎への礼状であった。墓に持って行った序にそとと四郎の骨壺を開いて見たら、本多四郎と書いた、油垢で汚れたコンサイス型の独和辞典が一冊入っていた。四郎は生きている。私は今でもどこかで生きている様な気がする。

二十年が過ぎた。その長い年月、遺族会の方々は薄幸な弟達のために、靖国神社合祀、慰霊塔の建立、遺家族への見舞金など、寝食を忘れての御尽力により、今日の成果を見るに至って、私は地下の弟と共に心から感謝しております。

(三五六) 医専二年生 間 野 千 春

遺族 佐世保市折橋町三一二〇 鴨 川 堯 子 (姉)

(前略) 九年前に長崎市で父が亡くなりましたのを最後に、私共一族は御地とも御縁が切れてしまいました。皆様方の一方ならぬ御尽力をとも知りませずに、過して参りました。石碑が建立されました事や、遺族援護の弔慰金まで下付されるようになりました事など、誠に感無量でございました。老父母が生きていましたら――。誠に淋しく死んで行きました。(後略)

(三五七) 医専二年生 前 川 泰 成

遺族 長崎県平戸市岩ノ上町三二三 前 川 熊 一 (父)

時は総てを遠い彼方へ押し流すとか、人は忘れる動物だとか言われるが、毎年八月九日が廻って来ると、あの日の嫌やな憶い出が、二十二年を経た今日忘れどころか尚昨日の出来事の様に思い出されてならない。一切の其の当時に於ける出来事は「見るな、聞くな、知らせるな」の異状圧制時代だったので、広島の被爆による惨状などは単に新型爆弾とのみで軽くあしらわれ、覆いかくされて国民は殆んど知らない儘、故に長崎の場合にしても、あの日の十一時以後の総てのものの急変貌ぶりについて、何が何やらさっぱり解らず、唯解らぬ儘にうろろするばかり、その内十七時頃に至り、突然「伝令」と一人の若者が五島町の九配へ走り込んで来た。「浦上愛電所から来ました。浦上駅から道ノ尾の間には一軒の家もあります」と言う。余りの事

にしばし呆然、然し静かであった町々のあちこちより火の手が上り、夜に入り見渡す限り火の海と化した。十日の一時頃漸く社屋の類焼を免れ安全となったので、身心共に疲れては居たが、暗い夜道を浦上辺まで辿り着いた時、本当に闇の中ながら焼け残った火の淡い光で見れば、目をさえぎるものは何もない。

まだ焼跡が余りにも熱いので、十一日に漸く山里町の我が家の焼跡に至り、家内のきれいに遺骨となっているのを収容、引続き、今の医大の校門より裏山の穴弘法に至る約一キロ位の間を、十四日迄毎日探し歩いたが、多くの同じ様な遺体ばかりなので、はつきり俸だと決める何ものもない儘、残念ながらあきらめ、後日学校より分骨して頂いた。今爆心地と言われる町々には、罪もない幼い子供から老人に至るまで、男女の多くの無慚にも焼けただれた遺体が転っていた。その状は戦場でもこれ程迄はと思われ、凄惨な風景だった。今日の平和で繁栄の途上にある長崎の人々には、このような事は想像もつかない事ばかりだが、二十二年余を経た現在、なお残酷な原爆の投下により原子症状に悩まされ、或いは病床に、或いは病臥迄に至らぬ迄も、被爆者として日々を不安の内に過している人々が、広島と共にどれ程居られることか、これ等を思えば、今日の平和と繁栄は、戦死者や被爆者の多くの犠牲の上に築き上げられつつある事を、瞬時忘れてはならないと思う。

(三五八) 医専二年生 益 田 良 和

調外科の裏手、古屋野外科寄りの角で、八月一日の爆弾で即死（直撃弾）、顔面剝離、右鎖骨部粉碎。

遺族 京都市伏見区深草大亀谷八島町八一二六 益 田 弓 江（母）

（前略）十月十日は亡き子の誕生日でございます。今頃涼しい風が吹きますと、生れた頃をいつも思い出します。小さい時は体が弱く、一人息子のため大事にし過ぎましたが、丁度学校に上る頃から大変丈夫になりました。ひどく心持が優しく、
「医者になったら施療の病院に行つて、不幸で病む人を世話したいから、そう思つて居て」と不断に申して居りました。手記をとの事でございますが、不束にてまとまりませんので、どうぞよろしくお願い致します。（後略）

【別便】 私の息子は八月一日午前十一時、米機の爆撃により外科教室前で即死いたしました。その時三年生一人（註、永見幸夫君）、二年生二人（註、大野明君、益田良和君）合せて三人の犠牲者があり、十人近くの方が怪我をされた、と聞き及んで居ります。私方（当時福岡在住）へ電報（マスダヨシカズジコネシス）が届きましたのが、四日午後五時でした。その頃主人が名古屋に居りました為、親類の者二人と私が、その夜の夜行列車で長崎へ参り、翌朝早く長崎着。私の長崎行がおそいので、学生さん二人が私の出発後に、家へ迎えに来られましたそうです。私が学校へ参りますと、「時季が悪く、薬（防衛剤）も充分無いため、心ならずもお骨にしたので悪しからず」との事でございました。

翌日学校にて校葬をして頂き、その夜先生三人とお友達二十人許りお出で頂き、悲しい送別会を開きまして、七日の朝帰宅致しました。その二日後、原子爆弾にて先生もお友達の方もお亡くなりになりました。

その年の十一月初め、慰霊祭がございました折に、爆弾死亡の学生も、原爆の学生と同様に取扱いたいとお話を伺い、丘の上の記念碑にも、名を刻んで頂いて居りました。（中略）この度特別支出金の申請書を文部省に出しました処、別紙の書類と一緒に返却されました。外の二人の方は如何でございましたでしょうか。（後略）

旧長崎医科大学原爆被爆学生遺族特別支出金について

さきに、貴殿から昭和四十二年九月十九日付けで、標記支出金に関する申請書を提出していただきましたが、誠に残念ながら、当方としては左記理由により、この申請書は受理できませんので、ご返送いたします。

① このたびの「特別支出金」の支給対象者は、「昭和二十年八月九日、旧長崎医科大学において原子爆弾に被爆したことにより死亡した学生の遺族」となっており、その他の事由により死亡した学生の遺族は、含まれないことになっております。

② したがって、昭和二十年八月九日以前の死亡者、および昭和二十年八月九日以後の死亡者であっても、上記①の要件に該当しない死亡者の遺族は、このたびの遺族の範囲には含まれません。

以上の主旨をご理解いただき、ご了承くださいるようお願いいたします。

(文部省大学術局学生課)

【調 附記】 昭和二十年十一月初めの慰霊祭で、「八月一日の爆撃で死んだ学生を原爆死亡の学生と同じに取扱いたい」と述べられたのは、当時の学長古屋野先生でしたが、長崎大学としての方針は今も変わりがなく、そのため「長崎医科大学原爆死亡学生名簿」にもその名が記載され、「原爆犠牲者名碑」にもその名が刻まれています。

然しこの度死亡学生の遺族に下付される特別交付金は、前記の文部省通牒を見ても明らかなように、「原爆死亡学生」だけに限られておりますので、私共遺族会の役員達は、上京の都度当局の方々に、特例をお願い致しましたが、結局徒労に終わってしまい、上記三人の御遺族に対しては、洵に申し訳ない結果となりました。

文部省当局のお話を伺いますと、この件は国会で決ったことで、その条文に「原爆」ということが明記されているので、勝手に変更することが出来ないのと、今一つは、若しこれを許せば全国各地で爆死した学生も考慮せねばならないので、それは出来ないと大変気の毒そうに申して居りました。

然し、私達はあくまで遺族会の一員と考えておりますので、この手記集にもお書き戴き、何か事があれば同じように御連絡申上げたいと思っておりますので、どうかあしからず御諒承の程お願い申し上げます。

(三五九) 医専二年生 松 尾 宏

遺族 長崎市伊良林町一七九 松 尾 タカ子(母)

一人娘の私に授かった長男宏は、掌中の珠とも育てられた愛し児、医専に入学の出来た喜び、続いて二組総代に任命されたという夢の様な喜びは、周囲の皆々からもその将来を嘱望され、立派な軍医さんになって——と切迫する時局に、御奉公の決意に燃えていた二十才のたくましい若者でありました。

その頃は片瀨町山手の家、六月の或る日、近所の方々と共に防空壕を掘りに出て、イガ栗頭にランニングパンツ、流るる汗を拭きつつ、「お母さん、今日はお爺さんや奥さんばかりで、僕はとても喜んで頂いた。しっかりと頑張つて来たよ」と帰宅しての

言葉、尚続いて「僕の留守中には、あの大きな包にしている大切な医学書とノートを、待避壕の中に持って行つてね」と、真剣そのものの顔で頼む子でありました。

今にして思えば、「自分達は必ず軍医として戦線に送られ、御奉公の誠をつくす日本男子也」と、夜を日に次いで浦上の工場地帯に通っていたのであります。丁度その頃、父は不惑の年で軍衣をまとい出征中でしたが、自分が爆死する十日前に送った書信には、「我々学生は予て国家のため命により召集を受け、医学を勉強しているものと信ずる。九月からは救護の任に当ることになりそう。父上も敵のヘボ弾にては決して死なぬ様だのむ」など、書き送っていました。

私の夢の記

時々明け方に見る夢の中の、この子の姿ほどこみじめなものはない。私は暁の床の中で、何という可哀想なこの子の姿よ／＼と、全く茫然となり、瞳は焦点を見失い、起き上って坐った身体もくず折れる暫しの自分を見るのである。その夢は矢張り、この目に焼付いたあの焼け爛れた浦上の風景かと思う。一緒に歩いている列から、あの子は一瞬離れて先へ先へと歩く。アラ宏さん待つて——と私も走るけれども、その足は土に釘付けされている幽痒さ。この子は段々遠くなって行くのに振り返りもしない。待つてよ、待つてよ——と追いますが、遂に瓦礫の広野を向うへ向うへと歩みゆく黒い洋服の子、そして半ば倒壊した建物の見えるくずれた塀の中へ消えて行つてしまった。その姿もブーツと霞んで灰色の煙の中へ——、その先は地獄かと思う気味の悪い彼方の奥へ——。

又ある時の夢は、この子の赤ちゃんの姿、昔長崎で赤ちゃんコンクールの時(第三回かと思う)に、優良健康児として第二席に入り、指定の本館町為政写真真館で大写真した額入りを頂いたものである。

この写真の赤ちゃんそのままに丸々と肥った宏を、私は頗ずりしながら水辺の家の出縁で、立ちながらあやしていた。お誕生前の子である。この縁の真下はゆっくり流れる川であった様子、フツと油断した間に、この子はスポリと私の腕からにがり落ち、下の川の中へ——アッと驚く私の瞳に写る時、両手を下げて垂直の形でドンドン深く

落ちて行く姿よ。その姿は水の中で真白であった。どう仕様も助けようもない。アゴのくくれた可愛い丸いあの赤ちゃんの顔、私は流るる涙、転倒する心、あゝ又こんな夢を見た、私の夢の中の宏は、いつもいつもこういう悲しい姿、何とも手の届かぬ有様で、私からドンドン離れて行ってしまう子供なのである。いつもいつも、真黒い暗闇の修羅の姿なのである。

此の度五百余名の学生一同は、援護法の適用を受け、靖国神社に合祀されましたとのこと、老年となりし母の喜び、これ以上のものは絶無、と絶叫いたすものであります。この事によりまして、今迄冥福出来ずにいるかと思う私の心は、暁の修羅道の夢となつて――。

何故に焼けた土をも掘り続け、我身は死すとも宏の骨を拾わなかったかと、自責の念に堪え難き朝夜を目覚め、悲しむ日も少しはなぐむかと思ふ次第でございます。(後略)

(三六一) 医専二年生 松元武紀

衛生学講堂で被爆、行方不明(即死?)

遺族 鹿児島県日置郡日吉町麓四〇三 松元静子(母)

昭和二十年八月九日、武ちゃん、あなたはこの日を限り、母の手の届かない所へ逝ってしまいました。父上の死後この世に生を受け、母の手一つで育つて来たあなたは、お祖父様の母校長崎医大へ、十九年四月に入学を許可されました。今もあの時の感激を忘れません。しかし戦争という現実には巻込まれ、母と子は離れていても心は一つと、御国の為に励まし合つて来ましたね。あなたは一生懸命勉強し、強く正しく優しく成人して呉れました。段々戦争が激しくなり、医学徒として、又武門の子として、御国に殉ぜし明治維新の志士の如く、心身共に成長して呉れました。最後のお別れに墓参をかねて、あなたは軍刀を取りに二十一年七月初旬帰って来ました。その頃、叔父様叔母様いとこ達も戦災のため、大阪や鹿児島市から来ていらつしやいました。兵隊さんも八人寄宿されていて、正に十七人家族、勝つ日まで、いや必勝を期して御国に殉ずる覚悟はしていても、不安な現状をどうする事も出来ず、勵し頑張りまし

た。そしてゆったりした気持ちにもならず、一週間後には長崎へ発つてゆきましたね。これが一生の別れになろうとは、神ならぬ身の誰が知りましょう。

一カ月後、広島・長崎へ原爆投下、そして終戦、嗚呼、遂に日本は敗戦の憂き目を見ました。この無念さ、皆で号泣しました。そして毎日帰つて来る兵隊さんや予科練の方を見ては、毎日あなたの姿を駅頭に探し求めました。原爆の威力を知らぬ母は、毎日日々待ちましたが、あなたは帰らず、広島も長崎も全滅とか、被害惨状耳目を掩わしむるものありと、悲しい声が聞えて来ました。失望と心労に母は疲れ果てて、御飯のどを通りませんでした。

○ 原爆に果てしと知らず幾度か 駅に待ちにき神ならぬ母

爆心地の様子が段々わかつて来て、母は立つても居てもおられず、二人の叔父上やお友達の今給惣さんと三人の御好意で、長崎へ行つて頂きました。焼土と化した屍の街を御苦労されて、あなたのお骨を缶詰の空缶に分骨され、帰つていらつしやいました。母はどんなに慟哭した事か、一縷の望みも消え果てました。生きる望みもなくなりました。

○ 世のなべて母の願ひもくだかれて 原爆の地に散りし一人子

○ 玉の緒の絶えなむとせし瞬間に お母さんとのどもさけてさげびしか

去る八月九日に、長崎医大原爆犠牲者名碑除幕式並に慰霊祭を挙行なさる、との御通知を頂き、母も八年振りに取るものも取り敢えず、グビロが丘での名碑除幕式に参列させて頂き、感無量でした。(中略)

○ 吾子果てし長崎の街近づきぬ 母よと呼びて子よすがり来よ

○ ざつしりと彫られし学徒の名を追ひつ 松元武紀を確かめし一瞬

○ 順番に焼香はじまり不覚にも 嗚咽と涙をぐつとのみこむ

○ 還り来ぬそなたを恋ひて二十年 母も老いにき細きむかはぎ

清純のまま日本再建の礎石となられた医学徒の方々、もう吾子にあらず神と祀られる、母はこの日をどんなに待ちました事か、あなたは母には過ぎた息子でした。どうか安らかに眠り下さい。

(三六二) 医専二年生 三宅 治 信

被爆直後は元気で、級友大塚君を背負って山上に避難したとのこと、傷は頭部に数カ所、切創及び割創があったが、火傷はなかった。

(三六三) 医専二年生 村田 玄 英

遺族 山口県下関市本町二丁目三番六―四〇五 村田 昭(弟)

私共の父は朝鮮で医者をしていたが、兄が七才、私が五才、弟が三才の時に、皆を残して病死した。その後、母子四人は日本に引揚げ、下関に移った。

兄は小学時代何時も首席で通した。母が沈んでいると、兄はよく「母さん、僕がしつかりしているから大丈夫だよ」と云って、母を励ましてくれたそうだ。

小学生の頃だったか、毛布にくるまってあぐらをかき、達磨大師だぞと云ったり、帯や敷布を体に巻きつけ、アラビヤ人の真似をして私達弟をよく笑わせ、何時も私達に片親の悲しみを感じさせなかった兄だった。

高学年の頃になると、スケッチブックに絵をかき、自分で作った話を私達に聞かせてくれた。小説は小さい時から好きで、本をよく読んでいたようだ。その頃兄は日本外史を読んで、先生達をびつくりさせていた。作文が好きで、よく校誌に小説を出していた。旧制中学に入っても、原稿用紙を沢山買い込んで、せっせと書いていた。兄は旧制高校の文科系統に進みたがっていたが、惜しくも松江高校に入学出来ず、母や叔父の希望する親代々の医者になる決心をした。

医専に入った頃の事、帰関した際「近頃は細菌の研究がとて面白いので勉強している」と私に話していた。昭和二十年七月末頃だったか、「母の顔が見たくなった」と云って、ふらっと私共の所へ帰って来、二日位居て又長崎へ帰って行った。それが最後の別れとなった。兄の帰って行く後姿が、何となくとても淋しそうだった、と叔母がよく云っていた。

頼みの綱である夫を亡くした母は、幼い私達を、あの戦時中の苦しい生活の中から立派な青年に育てあげ、今一步の所を原爆で兄を死なせ、その胸の内はどんなに悲し

かったであろうか。兄の死は母だけでなく、私達兄弟も一時は生きる希望を失った。当時満洲に行っていた弟も、母達は死んでいても兄だけは生きているだろうと、希望を持って引揚げて来たと話していた。

終戦後二十二年、ややもすれば忘れかけていた兄の死、皆様のお蔭でこのように供養が出来、母共々昔を思い出し、胸のつまる思いで一杯です。これも偏に皆様のお蔭だと、ありがたく存じております。

(三六四) 医専二年生 村田 由 之

衛生学講堂で被爆、脱出して早岐に赴き、早岐国民学校にて十三日死亡。

遺族 広島県尾道市土堂町九六八―三 村田 四郎(父)

(前略) 故人由之は長崎で学友と俳句の会を作り、雑誌「筍」を編輯していたらしい。青子は故人の号である。

○ 筍の一夜にのびし力哉

青子

○ 古里の山恋しかり月の頃

青子

の句作を残して居る。頑丈な体軀であつたから、校内で被爆後蘇生して家に帰るつもりで駅に辿りつき、そのまま運ばれて早岐小学校に収容されたけれど、十三日に空しく落命したのであつた。最後まで家のことを気にして、途中が危険だから父を呼んで呉れるな、と看護婦に断つたそうである。

○ 今にも父をかばひし一言は 涙なくして吾れ聞くべきや

○ あこと呼び父と言はれて二十年 語り足らはぬことの多かり

○ 識標に血の型Aと記しおへ 見守りしさまおもかげにして

○ 今にして消えしものとは思はず まぼろしのごと汝を待つなり

○ 身に堪へぬ業をなすそ母親を いたはりし児は先立ちてけり

○ 食餌はみな涙となりて流るらし 老いたる吾れは面細りゆく

○ 医とならば貧富親疎のへだてなく 吾が救はんと彼れは言へりき

○ 老の吾が今のは脈を診せんとて なれば薬師に育てしものを

○ 見れば涙見ねばいや増す吾が思ひ この写し絵を誰れにゆだねん

○ こころも亦彼れにゆかりの部屋なれや こづこに居なば思出のなき

○ 今を指す時計の針のうらめしや あこが消えにし時と思へば

老生は上海の東亜同文書院に学びました。今から五十余年前初めて長崎に参り、翠屋（？）に一泊して渡航した思出は深いのですが、今では長崎（汝が先）へ参る勇氣はありません。

（別便—七月十一日）

○ なまなかに目しひとならば角帽の 若き男の子と吾が会はなくに

（別便—九月二十三日）

今夜もふと目醒めて眠れぬままに、二十二年前の長崎の惨事を追憶した事でした。生きて居てくれたら不惑の齢ですのに——。

長崎の原爆碑

○ 投下をば落下などとおベッカ言ひ

○ 平和とは裸にされて雨晒し

○ 長崎が汝が先きとなる原爆死

御同感と存じます。親心御察し下さい（日記をくりて）。

（三六五）

医専二年生 森

猛

遺族 長崎市東長崎町名四三 森

サク（母）

連日不安の中を、其の日も元気で登校致しましたが、十一時頃になりますと、激しい爆弾の音に突然としながら、防空壕に飛び入りました。聞きますと、浦上方面一帯は、大きな建物や大木など全部倒れ、焼野が原と化して目もあてられぬ様相なので、長男猛の事を案じながら、早速医大の方へまいりますと、悲惨たる有様で、さながら生地獄と申しましようか、それはそれは本当に悲惨の極みでございました。

猛が生残っておりますように祈りながら、あちらこちら捜し歩いて見ましたが、どうしても見あたりませず、即死したことと思い、流れる涙を抑えながら帰宅致しました。

それから、明けの日も其の次の日も、五日間毎日大学方面を隈なく尋ね歩きました

が、とうとう見当りませず、情なくも諦めねばならぬ事になり、沢山な人の亡骸を見守りながら、残念でなりませんでした。二度とあの様な事のないように祈ります。

この度皆様方の御尽力によりまして、靖国神社に祀って頂きました事を、厚く厚く御礼申し上げます。皆様と御一緒に、安らかに眠っていることと思い、その冥福を祈っております。

（三六七） 医専二年生 横田 健

八月一日の爆撃の時に負傷した和田弘行君（古屋野外科病棟十号室入院中）に附添い、看病中に被爆、そのまま病室で死亡（八月九日）

（三六九） 医専二年生 和田 弘行

八月一日の空襲により負傷、古屋野外科に入院中に被爆、そのまま病室で死亡（八月九日）

遺族 神戸市灘区大石北町二—三三 和田 慶吾（父）

弘行さん、今日は九月二十四日、秋分の日で、父と母は阪神電車の初発で、伊勢太神宮様の近くのあなたのお墓に詣って来ました。道々栗や団栗の沢山なっているのを見て、楽しく遊んでいた姿を思い浮べました。

いつの間にか二十二年も過ぎ、父は七十二才、母は六十五才になりましたが、まだまだ元気で、父は民生委員保護司、神戸家庭裁判所調停委員、母は婦人会長等をして、地域社会の為に日々忙がしく過して居ります。そして一年に何回となく弘行さんのお墓に会いに行き、石碑に話しかけ、角帽姿を思い出し、あゝ健生であつてくれたらとやっぱり思い出します。父が墓石に煙草を吸わせている姿を見ると、涙があふれ出ます。この度遺族会の皆様方の御尽力によりまして、原爆犠牲学徒の記念碑の建設をしていただき、弘行さんの名前も書いていただきました。最近靖国神社に合祀のお話もきました。

紫色の長崎医大報国隊の腕章、生徒証、身分証明書（長崎医科大学長角尾晋）、金銭出納簿の中には、散髪代五十銭、皿うどん一円、授業料五十円、下宿賃五十円など

書いてあり、弘行さんが幼い時から人に好かれ、何事にも几帳面だった様子がわかりました。これ等は皆、大切に仏壇の中に形見としてしまつて居ります。そして当時仲よしのお友達、お世話になりました丸木建様、梁瀬和正様、下宿屋の皆様、私達は死ぬまで御恩を忘れないで居ります。

弘行さん、両親を草葉の蔭から守つて下さい。そして遺族会の皆様方に深く感謝して下さい。私達は心からあなたの冥福を祈つて居ります。(母代筆)

(三七〇) 医専二年生 渡辺正守

病院の南講堂で被爆、外傷並に出血多量のため、八月十日南講堂の上の広場に死亡。

遺族 愛媛県北宇和郡広見町出目 渡辺正恵(母)

あの恐ろしい悲しい日から早や二十二年を迎えました。悲しみは自分一人でないことを知りながら、吾子が生前の思出を書いてみましょう。

あの年は山桃が豊作で、正守は姉の家に山桃を取りに行き、「もう食べじまいかも知れないので沢山食べて来た。さあ皆も食べてよ」と、もぎ取った山桃を出し、「母さん一寸来て」と自分の部屋に私を連れて行き、自分や友人の写真を沢山私の前に並べ、「これ母さんへ形見にあげる」と申しました時、私は云い知れぬ不安と不吉な感じが全身を走りぬけるのを覚え、「では母さんも一枚あげよう」と、親子で写したのを彼に与えました。

予てから軍医を志望し、軍刀が欲しいと云っていたので、彼の身体に合った刀を買っていました。突然それを刀掛から取り、腰にさして部屋中を歩き廻ったあの得意気な姿、そして又父が町の救護班長をしていたので、毎日親子で救急箱を肩にして、町民に救急処置の指導に出かけたあの白衣の姿、空襲警報に真暗な中を父の手を引き私を背負つて、防空壕に避難した時の肌の温かさ、思出は何につけても尽きません。

夏休みも終りに近い日、何か思いつめた様な面持ちで、「母さん暫らく休校したい」と思いがけない事を云い出しました時、私は戦地で戦っている人達の苦勞を話し、尚お前達学生は学校を護り、市民を守る責任のある事を準々と諭し、七月三十一日午前

四時半、食料をぎつしり詰めたリュックを背負わせ、門まで送り出しましたのに二度も引返し、「母さんの手をもう一度握らせてよ」としつかり私の手を握り、「母さん日本は必ず勝つ、どんな事が起つても決して死なないで、喜びの日を待つて下さい。死んではいけない」と繰返し繰返し申し残して出発しました。今思えばあの時が親子の別れ、世に云う虫の知らせであつたろうと思います。

長崎に帰つて一週間目に、恐ろしい原爆の犠牲となつたことを知り、あゝ出発前に吾子の云うままに休校させていたらと、吾子にすまない気持が私をさいなみ、自分も生きる望みを失いました。その頃正守の友人で幸い怪我をなさぬ方から、「正守君は私がかつぎ出し、学校の上の丘に運んだが、瀕死の重傷で、母さん、水を水をとかすかに云いながら死んで行き、遺体はどうにか火葬にした」との便りを頂き、取るものも取りあえず長崎に馳せつけ、やっと丘の上にとどろつき、焼けただれた死体のバンドが中学時代のもので、学校名入りの金具を見つけ、遺体の一部を持ち帰つて葬儀をすませ、唯呆然と気ぬけた毎日を送ります内に、次々に県内の犠牲者のお宅から、遺骨どころか爆心地の焼土やコンクリートの破片を持ち帰ったとお便りを聞き、吾子是不幸中の幸で、骨を親の許に持ち帰れたのは何よりと、せめてもの慰めとして落ち着きを取り戻し、吾子の霊と共に必勝を期して、銃後を護り抜こうと決心しました。しかしそれも束の間、敗戦の日を迎えました事をどう云い表わしてよいか、筆舌に尽せぬ程無念でございました。

毎年の記念日には当時を思い起しつつ、全国民の祈りを有難く、又此度は立派な名碑を建てられ、尚又文部省への御配慮を勿体なく、人生のたそがれ近き身ながら吾子の分までと、今尚聴心器を持つ主人と、いたわり合いながら生きて居ります。

(三七二) 医専一年生 阿部琢磨

遺族 長崎県北松浦郡小値賀町笛吹一三九五 阿部 策(父)

昭和二十年八月六日、広島市に新型爆弾なるものが投下され、続いて九日には長崎市に同じく投下された。然るに其の当時は新型爆弾とのみ称せられて、普通の爆弾よりも幾分偉力があるものにしか考へて居らず、又一般国民も、原子力に依り人類の

絶滅を来す如き非人道極まる原子爆弾であるという事も、恐らく知らなかったのではないかとさえ思われた位であった。なぜならば、国民は近海戦法といって、竹槍訓練に夢中になっていた時代だからである。

当時唯一の報道機関であったラジオでは、被害は僅少とのみ報ぜられるばかりで、小値賀の如き離島では、新聞も郵便も来るではなし、汽船さえも就航停止、全く音信不通の状態で、長崎の模様など知る由もなかったのである。漸く十七日になって、漁船の便船が佐世保相之浦港から入港し、初めて長崎の惨状を知ることが出来た。

長崎医大附属医専に在学中の二男琢磨は、被爆後麴屋町の三宅医院で診療を受けている事を知ることが出来たので、早速十七日の晩に発動船を借り受け、翌早朝長崎に着、市内の惨状をまざまざと見る事が出来たのであった。三宅医院に辿り着いた時は、琢磨は既に十六日午后四時頃死亡、白骨となっているのを見て、何とも云えない気持で胸が一杯であった。

琢磨は授業中何かピカッと光るものを感じたので、これはきっと爆弾に違いないと直感して、素早く机の下に身を潜めると同時に、校舎は潰れ落ち、其の下敷となったが、机に支えられて命は助かり、左手に擦過傷を受けたのみで、やっとの事で外に這い出し、二、三十米走って後を振り返った時は、校舎は火に包まれていたので、助かったのは恐らく自分一人ではなからうかと思いつつ、市内は何処を見ても火の海と化していたので、山伝いに逃れて漸く麴屋町下村眼科老先生宅に着いたのは、夕方近くであったそうである。皆さんから命拾いをしたと喜ばれ、夕食を御馳走になって一夜を明かし、一兩日は別に体に異常もなかったが、次第に口腔粘膜が腫脹し、下痢を伴い、遂に急激な下痢症状を起し、十六日午后四時頃死亡した由である。(後略)

(三七二) 医専一年生 青木 昭三

遺族 神奈川県鎌倉市梶原山二九三二八 青木 勇(父)

原爆で一人息子の昭三を失った。これで私達夫婦は子供なしの晩年を送るのかと、淋しい思いをしていたのですが、三年後の八月六日、思いがけなく死んだ昭三そっくりの今の子供(研)が生まれて、その子供が十九才になるので、原爆の思い出

も一昔前のことになりました。

原爆投下の時、私は長崎港外の小ヶ倉に住んでいて、偶然B二九からの投下、爆発の瞬間をこの眼で見て、その直後子供を探しに浦上の大学の学に駆けつけ、子供が駄目だとわかってからは、父(大勇)や兄(義勇)の關係で、知り合の大学の教職員、学生の救助作業に当たったのですから、私は原爆について、ひと一倍強い印象を持っております。

その印象も、最近では強烈な部分だけが断片的に頭に焼きついていて、客観的に記述することができなくなってきました。

今度は、皆さん方の御尽力により、被爆学生の遺族に対して、国から特別支給金を下さるそうですが、もし戴いたらこれを一部にして、少し立派な仏壇を買って、昭三の霊を慰めてやりたいと、家内と話合っております。

(三七四) 医専一年生 秋吉 敏郎

遺族 福岡県筑紫郡筑紫野町塔原三八九一九 秋吉 俊藏(父)

(前略)かねて念願の靖国神社合祀及び見舞金下付の御通知を頂き、心から皆様方の御尽力に感謝申上げ、合せて成就の暁は、永年の犠牲者の不満も、諦めにかわる日が来る事と存じます。例年の慰霊祭には、老令のため参加の機会に恵まれず、申訳もない事と思っております。

本年は是非にと思っておりますのに、本月二十一日、私の母が九十一才の高令にて死去致し、悲しみと喜びを一緒に味った心境でございます。

何卒本年も重ねて八月九日の記念日には、当地より被災の地長崎の空をみつめて、冥福の黙禱をささげさせて頂くようにお願い申し上げます。(四二、七、二五)

(三七八) 医専一年生 井上 政治

解剖学講堂で被爆、九日夕刻友人に会い、翌十日、道ノ尾辻田寅次郎氏宅に連れて行かれ、種々治療を受けたがその甲斐なく、十二日夕刻死亡。

遺族 長崎市宝町六一八 井上 満治(兄)

(前略)原爆の犠牲となった数多くの肉親の憶い出は、いつまでも残されるもので

あり、語りつがれることはあっても、いつか忘れられるものであります。記録として残されることは、遺族にとって又とない機会であり、実にすばらしい試みであると思います。

私の弟は昭和二年の生れで、二人の兄の後を追って長崎県立瓊浦中学に入学したのが、昭和十五年の春でした。未だ第二次大戦こそ始まっていませんでしたが、戦時体制下にあり、物資の欠乏もぼつぼつ現われておりました。中学一年という食べ盛りの頃なのに、今店頭に飾られている様な食物は全く姿を消し、厳しさの中に成長して来ました。その頃予科練を受けたいと突然言ったことがあります。私は当時医大の学生でしたが、厳しく叱りつけました。「お国の役に立つのは何も予科練に行つて職業軍人になることだけではない。もっと若い時には勉強して、苦しさに耐える様にすべきだ。それでどうしても成功しなければお前の勝手にしてよいが、それをしない内に容易な道を遠ぶことには絶対に反対である」と申しました。

幸い私等の言い分を聞いてくれて、その話は立ち消えとなり、学徒動員に精出しながら、一生懸命に勉強していたようでした。私は昭和十九年の春から軍医の見習生として長崎を離れ、又その間既に敗戦の徴が一層強く、サイパン陥落後の初めての大空襲も、軍医学校の時に経験しました。当時敗戦という考えは私共若い者の頭にはなく、最後まで全力を尽せば道は開けるものと確信していました。恐らく弟達も全くその気持であつたと思います。

弟が医大の附属医専に入学したとの知らせを受けたのは、私が六師団軍医部の部員として、熊本で勤務していた時のことでした。血気にはやる気持をおさえて、素直に兄の意見に従つて呉れた事が大変嬉しかったので、早速お祝の品を送ると同時に、熊本に呼んで一晚御馳走することを約束しました。六月にはいって弟を呼び、一夜を共に過すことが出来、その時々々と母校の先生方の話も聞きました。医専に入学してからは、兄として何一つしてやる事は出来ませんでした。その時の事がせめてもの慰めと思っております。

その次に会つたのは、原爆が落ちて遺骨となつた弟の姿でした。弟の友人やその御

家族の話によりますと、解剖学教室で小野直治教授の講義中に原爆が落ち、幸い傷一つ負わないで大学の構内を脱出、当時父が開業していた銭座町、母が疎開していた大橋町等を、家族を求めて探し歩いたらしいが、遂に探し得ず、下川の橋の下で一夜を明かし、放射能障害のため衰弱が強かつたので、ふらふらの状態で道ノ尾の辻田氏（昭和閣社長）の別荘に辿り着いたそうです。辻田氏の話によると、父に一目会いたいと口ばししていたとの事で、その情にはだされ、辻田氏御一同が全力を尽して傷ついた父を探し求め、道ノ尾までリヤカーで引張つて来て、父子の対面を遂げさせて戴いたそうで、弟も父の手を握つて喜んで息を引取つたとの事でした。この時ほど人の情に打たれたことはありませんでした。

当時は母を初め七名の弟妹を同時に原爆で失い、大変なショックを受けましたが、早いもので日が経つと全く夢のようです。幸いこの度遺族会の皆様の御尽力により、グビロが丘に立派な名碑が完成し、犠牲者の名が刻まれましたことは、遺族の一人一人にとりまして、全く仏に魂を入れたとも云う様な感を抱くもので、この上もないすばらしい行事だつたと思います。今年は例年にまして参列者の多かつたことが、何よりもその事を強く物語っていると思います。

最後に若くして逝つた人も、妻や子を残して逝つた人も、安らかに御冥福なさいますよう、心からお祈り申し上げます。

（三八〇） 医専 一年生 池 崎 雅 裕

遺族 熊本県天草郡五和町鬼池一一六二 池 崎 生 喜（父）
私は当時佐世保市で開業していたので、八月九日夜、佐世保救護班に加わつて長崎に向つた。諫早を過ぎる頃から、暗夜に避難者らしい人の列を見ながら、日見トンネルに差しかかると、異様なクスブリの臭が感じられるので、長崎の惨状を想像しながら、市の救護本部に着いた。様子を尋ねても、県庁から先は一面焼野原となり、大学も全滅というだけで、詳細は全く不明だつた。

夜明を待ち、割当てられた救護所の稲佐小学校へ赴く。途中は一望焼土と化して、燃えるべき一物も残さず、路上に焼け死んだ数人の人を見ては胸が痛む。

午後は救護処置が大方済んだので、大学病院へ行ってみると、病院の廊下には白衣姿の女の死体があり、庭には大学生の死体が三つ四つ、病院の大煙突は曲り、惨状の恐ろしさには息も詰まるばかり、更に学部へ行くと、建物は跡形もなく、講堂と思しき所には、数十体の白骨が整然として並んだ様が痛ましく、更に尋ねんにも人影もないので、裏山を探すと、西山に通ずる路傍に大学制服姿が十余、何れも焼けぬ前に脱出はしたものの、力尽きて倒れたものと思われる。

折角探した恵息の死体は見つからず、一応帰宅した。六日後、再び大学焼跡から裏山を探したが、先日の死体はそのまま、一人も収容された模様はない。皮膚は腐爛し、蛆さえ認められる状態を見ては、唯胸のつまるのを覚えた。

被爆時の恵息の講堂は判ったが、誰の骨とも判らぬままに白骨化している皆さんの骨を一つまみ宛頂き、同級生のもと思つて持ち帰り、終戦と共に郷土へ埋葬した。

星霜移り二十二年、今や復興の今日、往時を偲ぶすがもないが、唯々戦争の惨めさ恐しさを追憶し、二度と戦争の起らぬことを念じるのみ。

(三八二) 医専一年生 出田 昭二郎

遺族 福岡県筑紫郡春日町下白水川久保七九一 出田 静馬(兄)

二十二年前の四月、千葉県館山市で八丈島行き輸送船を待っている時、弟昭二郎からの便りを手にした。「海軍兵学校と長崎医専に合格した。自分としては海兵に行きたいが、父親の意見は医専へ行つて欲しいとの事で迷っている。兄さんはどう思うか」と、意見を求めた便りだった。

兄弟三人も戦地に出征しており、戦局愈々急を告げる時、明日の生命も図り知れない自分の身を顧みて、「弟だけは生きて欲しい」という気持から、両親のためにも長崎医専を選んで欲しい、と云う意見を、走り書きして汽船に乗り込んだ。

終戦!! 八月三十日復員!! 丸四年振りに見る故郷の土に足がはずんだ。門に貼られた「忌」の文字をいぶかりながら戸に手をかけた時、迎えた父親の第一声は「お前達軍人は帰って来なくてもよかった」と云う言葉であった。死ぬべき軍人が無事で帰り、死ぬべくもない学生が原爆の犠牲になった事が、父親としてたまらなく悲しい事

だったに違いなかった。

九月一日、父親と二人で亡き弟の遺品を探しに長崎へ出掛けた。心の片隅には、何処かに避難していて呉れば、と僥倖を念じながら――。

浦上駅に降り立った時、万一を願う気持は絶望に変った。原爆の翌日から飲まず食わずで、子供の消息を訪ね歩いた父親の顔には、諦めの色が現われていた。

解剖学講堂で受講中だったという情報を得て、壁土とも骨とも見わけのつかぬ遺骨らしいものを一片づつ拾った。幾十からの遺骨の中に、一片でも昭二郎の遺骨があれば、と願いながら――。翌年七月、父親も原爆病であつたろうと思われるが、何等なすすべもなく淋しく死んで行った。

故郷の庭は丁度夾竹桃の花ざかりであつた。その花の紅は、若くて死んで行った弟の若い血の色のように、鮮やかであつた。

毎日々々、「弟を死の運命に追いやったのは自分である」との自責の念にかられながら、夾竹桃の花を見て過したことを、昨日のように思います。

○ 夾竹桃原爆の日も紅かりし

原爆犠牲学徒遺族会の方々の御努力のお蔭で、犠牲学徒の死が報いられるようになった通知を受け、二十二年振りに自責の念から解放された気持ちになりました。

(三八六) 医専一年生 岩 永 功

遺族 福岡市赤坂三丁目八四〇 岩 永 宝 作(父)

嗚呼、八月九日は、吾生のある限り、忘れることの出来ない痛恨の日であります。

あの原爆投下の日、私が住んでいた諫早市には、汽車やトラックで、凄惨そのものの様子をした被爆者が運ばれました。その人々は数知れず、半数以上は体中焼け爛れ、目も当てられぬ惨状を呈し、「水をくれ」、「どうかして」と、苦しそうに弱々しく叫ぶのみ。はたまた不安と憤りとに破裂しそうな胸をかかえ、道行けばブンと鼻をつく異臭、赤い血、髪は焼け乱れ、うつろな目、余りの凄さに振り向けば、背に肩に衣服はなく、筋肉ははがされぶら下ったまま、それでも歩ける人は素足のままヒタヒタと歩き、担架で覆いをして運ばれる人はもう駄目だろうか、地獄はかくやあらんと思

うのでした。

その夜吾が子功は帰宅せず、不安の余り十日の一番列車で浦上へ、駅に着くのももどかしく医大へ急ぎましたが、沿道には死屍累々、それを踏み分けて医大につくと、大木は吹きさらされ、大煙突は傾き、鳥居は片方の柱を残すのみ。子供は？、功は？、とはやる心で探し求めましたが、辺りは変り果てた人、人、人、功は居ないのだろうか、見落したのだろうか、おそい来る絶望感、でも若しやと思ひ直して引きずる足許には、もう夕陽が迫っていました。「ここに立つ父の姿が功には見えないのか」。後髪を引かれる思いで、「功待っていない、又来るぞ」と一旦諫早の自宅へ。

翌十一日再び焼野ヶ原に立ち、兄の孝から譲り受けて日頃愛用していたベルトのバックル（秋田鉾専のマーク入り）を手懸りとして、今日は穴弘法あたり一帯を探し廻ったが、途中死者や重傷者十数人あり、家の下敷になっている人がいると聞いても、助け出す人もない有様、尋ねあぐねて病院に辿りつくと、生存者の名前が掲示されていたので、喰い入る様に手を合せ神に祈りながら探したが、求める功の字は何処にもありません。でも其処に功の学友松鶴君の名を見出しましたので、尋ね尋ねて翌日やつと松鶴君に面会。功のことを尋ねようとしたら、向うから先に「岩永君は？」と聞かれる始末、しかし原爆投下時の様子を委しく話してくれました。松鶴君は直ぐに倒潰した講堂から脱出し、肩の辺に一寸火傷を受けた程度、両親へは未だ連絡していないとの事、早速八女町の御両親へ電報で知らせました。

功は大学にも市内の救護所のどこにもいないので、翌日からは佐賀県の鹿島、嬉野、その翌日は南風崎、大村と、聞き及ぶ限り探しましたが、すべて徒労に終わりました。その後松鶴君の御両親から聞きますと、早々に馳けつけたが死に目にはあわれなかったとのこと、原爆の異常な恐ろしさにふるえました。

家では妻が「どうしても死んだとは思われない」と云うので、十七日は又一日中ベルトの金具を目当てに探しましたが、矢張り駄目、妻も漸く諦めた様子、肩を落し、涙と共に長崎を後にしました。

日を経て親族一同にて懇ろに埋葬致しました。妻は来る日も来る日も仏前にて涙す

るのみ。故に住居を替えて悲しみをまぎらわそうと努力しました。しかし妻はいまはの時まで、功、功と名をよびつつ他界致しました。それで後日、京都東本願寺へこの二人を納骨、今はもう安らぎを得ておりましょうか。

不肖私も既に八十を越える老境にいたりました。今もって功の最後を見とどけ得なかったもどかしさ、悲しみ、怒りが日と共に蓄積される思いですが、幾多の希望を抱きながら、十九才でこの世を去ったあの子に代って、父が聊かの社会奉仕と考え、当赤坂校区の公民館長として数年来元気に勤め、青年層や婦人層の指導に当り、余生を豊かにしようとして一生懸命努力致しております。（後略）

（三八七） 医専一年生 岩 永 八 洲

遺族 長崎市鴨瀧町九三五 岩 永 福太郎（父）

木の墓標

息子は今日も帰って来なかった。帰って来なくても万々承知しながら、夜になると足音に耳をすます習慣がついてしまった。

妻が大学の構内から誰のものとも知れぬ骨を拾って来たので、それを息子の骨にすることに記っていたが、それは全然方角違いの箇所のものであることが分った。

医専一年の此の世の最後の授業は解剖学で、階段教室だったことが分った。

どうせ代用品の骨を配るにしても、これじゃあまり縁遠い気がするの、階段教室跡に骨探しに出掛けた。処が考えてみれば分り切ったことながら、人間死んでしまえば誰の骨も変りはなかった。そこで又どの人のものとも分らぬ骨を拾って来て配ることにした。

もうグビロが丘に夕陽が迫っていた。妻ととぼとぼ歩くグビロが丘は、鬼哭啾々として背筋に寒気をおぼえた。

原は焼けただれて、一草一木の生色もなく、あちこちに屍体がころがったままだった。

○ この仏に手向けん程の夏草もなく

野犬が群れて屍体をむさぼり食っている。腕を食いちぎって足で押えて――。

亡国と云うか、地獄絵とか、こんな人間の最後もあったのか。

○ 骨拾ふ傍へに犬ら死屍食らう 山郎

骨董なんて気の利いたものはありやしない。一番上等の蓋茶碗に、どこのお方ものか分らぬが、二人分の、或は三人分の骨をていねいに洗って埋葬した。五寸角の木を削って墓標とした。墓標に曰く

○ 父も母もやがて落合ふ辻じやもの 山郎

—南無—

(三八九) 医専一年生 梅 木 敏 郎

十日自宅(西彼杵郡茂木町寺下)に帰り、治療を受けたが、十二日午前一時半に死亡。

(三九〇) 医専一年生 浦 上 康 則

遺族 長崎県松浦市志佐町笛吹七二四 浦 上 幸 夫 (父)

(前略) 元の長崎医大原爆被爆学徒浦上康則に対してお見舞金、本日文部省より頂きました。唯今墓前に詣で、御礼の供養をすました次第で御座います。(中略) 地下に眠る伴も、さぞかし御厚情にお答え申上げて居ること存じます。(後略)

(三九一) 医専一年生 浦 川 幸 弘

遺族 長崎市西山町四丁目七四一 浦 川 福次郎 (父)

(前略) 思えば今から二十二年前、倅を医学専門部にやり、将来杖とも柱とも便りとして居りました処、二十年八月九日のあの原爆で死亡して以来、今日まで一日も忘れる事の出来ないままに過して居り、一時は最早大死だったと諦めて居りましたが、この度皆様方の絶大なる御努力の賜で、地下の霊も定めて満足して居る事と、私は思つて居ります。

尚近く待望の靖国神社合祀も実現する模様ですが、その時は私も参詣させて貰いたく、今より楽しみにして居ります。(中略)

私は本年八月お盆に墓参に行つて、故幸弘へ「お前も決して大死ではなかった。地

下で喜んでくれ」と、生ある者に云う様に申し、思わず涙が湧き出しました。就てはこの度いただいた特別支出金を足して、永久に残るよう石碑を建立する予定で、目下注文して居りますので、出来れば私も愈々安心する事と思ひます。(後略)

(三九三) 医専一年生 尾 崎 雅 男

遺族 佐世保市早苗町一〇九 尾 崎 保 寿 (父)

思ひも新たに八月九日、原爆記念日の慰霊祭に参列した。長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会役員各位の並々な御努力によつて、医学部構内グビロが丘の上に厳然として慰霊碑が聳えている。その前に今年新たに、原爆の犠牲になつた医大の職員並に学生の名が大きな真鍮板に刻まれ、その名碑除幕式がおそかに行われた。除幕が終ると遺族達は真新しい名碑に向つて足を運んだ。そして我が子、我が兄弟の記名を確かめて、皆感慨無量であつたと思う。尾崎雅男の名も上から五段目にありありと彫刻され、懐しさと悲しみとで思はず新たな涙を催した。

嗚呼思ひ出のグビロが丘、過ぎし二十二年前、我が肉親の安否を気遣ひ、炎天下熱気漲る中を、破れて噴出する水道管の水に咽を潤しつつ、附近に転がる死体を改めながら歩いた心境、又過ぎし四月、一年生の我が子が真新しい制帽を被つて、希望に満ちた笑顔で家を出たあの日の面影など、次々の思ひ出や、時折病院に行つて診察を受ける際など、我が子も生存していたら、何処かであのお医者さんのように、聴診器を手にかけているであらうと、返らぬ年寄の愚痴が出る。我が子への愛執交々である。しかし今となつては返らぬ過去、不運であつたと断念する他はない。この上は永久にのこる名碑も出来、又靖国神社に合祀される運びとなつた事を感謝して、犠牲者の冥福を只管に祈る次第である。

(三九四) 医専一年生 大 久 保 彰

遺族 長崎県西彼杵郡長与村高田郷二五八 大 久 保 イツ子 (母)

容易に遭遇し難い奇蹟とも云ふべきものに、思いがけもなくめぐりあつた幸運の遺族の一人でございます。地獄絵図さながらの悲惨な焼跡を探し歩くこと数日、遂に何の手がかりもなく、そのうちに生化学講堂(註、解剖学講堂の誤りか)で講義中だっ

たことがわかり、その焼跡に参りました。

敷地一杯に重なり合つてうす高くなつた白骨を、目のあたりに見ました時は、唯茫然と致しました。草履をぬぎ捨て、足袋はだしで中に這入りますと、足許でぞくりぞくりと骨が砕ける音、その感触がいまだにはつきり残っているようです。

焼けただれた鉄帽、鞆の金具、万年筆のキャップ、弁当箱など散乱していたので、もしか遺品でもとあさり廻りましたが、それらしいものも見当りませず、せめて出身校の制服の金ボタン（当時はボタンにさえ不自由な時で、服の上部に医専のボタン、下部二つを長崎中学のボタンにしていました）四、五個拾い、それに骨を少々いただいて持ち帰りました。そしてどきどきの中に、形ばかりの先別式をすませました。このとき初めて、永遠に帰らぬ実感が湧き、とどめもなく涙がこぼれました。

混乱のうちに年は明け、翌二十一年一月十八日に、金比羅山の中腹、高圧線の鉄塔のそば（間道から十米ほど奥まつた場所）で、落葉枯草に半ば埋もれ、肱をまげ爪先を揃え、うつ伏の姿で見事な骸骨になっている、まごうかたなき彰の遺体にめぐり合いました。これが奇蹟というものでございましょう。確認の証拠は、ゲートルの裏に白布に書いて縫いつけた名札でした。当時は記名を非常にやかましく云われていましたが、この時ほど記名の有り難さをしみじみ感じたことはありません。

遺骨を発見して下さいました変電所の職員のお方の奇特な御行為に對しましては、今も尚忘れられないことで、深く感謝致しております。

（三九五） 医専一年生 大楠 泰 正

遺族 長崎市矢ノ平町七一四 大楠 夢子（母）

別れの赤飯

「大楠君」という声に玄關に出た泰正は、戻つて来て「お母さん、隆杉君が誘ひに来たから学校に行つて来ます」と云いました。私が「アラ西郷へは」と云うと、「帰つてから一人で行きますから、先に行つていて下さい」。この一言を残して、あの子は永久に私の前から姿を消して終いました。この日は学校を休んで、物資を取りに疎開先の西郷へ、私と一緒に行くことになっていましたのに、何という運命の冷酷さでし

よう。

前日私が持つて帰つた米と小豆でお赤飯を炊き、一同喜んで食べながら語り合つて朝飯を終えました。その上この赤飯を弁当に入れて持ち、元氣にお友達と登校しました。小さい弟妹達も全部私と一緒に帰つて居ましたが、この赤飯が兄さんとお別れの食事になろうとは、夢にも思いませんでした。一度も疎開先から帰つたことのなかった弟達が、私と一緒に帰つて兄さんと食事を共にしたのは、虫の知らせだったのでしようか。彼は好物の赤飯を最後の食事にして、且又お弁当に持つて永の旅へ旅立ちました。まるでこの旅立をお祝ひした様なものになって、今更ながら赤飯がうらめしくなりました。その後は赤飯を炊く事をすっかり禁止しましたが、他処でみて涙の種となり思い出されます。何人子供があつても一番よい子であつたと考えるのは、誰しも親の愚痴なのでしょう。しかしどう考えても秀才で親孝行者であつた事は、私一人の喜びとして忘れることが出来ません。あの時休んでいたら、私と西郷へ行つていたら——と返す返すも残念に思います。生き永らえて開業医として幸福に暮していられるお友達を目の辺り見ては、どうしても悔まれて返らぬ愚痴が出ます。

幾日も幾日も焼跡に立つて、何処からか出て来ないかと通ひ続けましたのに、遂に見付かりませんでした。駄目と知りつつも行かざるを得なかつた親の氣持、地下の子供達もきつとわかつてくれる事でしょう。世の親ならば皆同じだと思ひます。

あちこちに立ちつくして、涙流して呆然として居られるお父様、「毎日午後一時此処にて父待つ」という立札を残して、スゴスゴと立ち去られました。私も身を切られる思いでした。親なればこそ——こんなにまで悲しんで居られるのです。駄目と知りつつ通ひつづけた一週間、七面山に、道ノ尾に、などあらぬ噂に迷わされ、根も力も尽き果て、食も通らぬ日々でした。まだ他に五人の子供も居るのに、どうしてこんなに氣狂の様にならねばならなかつたのかと思へば、悲しみは最上のものでした。

青春の喜びを味うことなく散つて逝つた彼等、せめても大死であつてはならないと思ひ返して、同志の方々と老身に鞭打つて請願運動に乗り出し、やつと靖国神社の今年の秋季大祭に合祀がなつたことを、せめて我が子達へのお詫びとよろこびとなつ

て、安らかに眠ることを祈って筆を擱きます。

(三九六) 医専一年生 大 隈 亨

長崎市八坂町五八、南疊寮に於て死亡。恐らく解剖講堂より脱出、帰寮したものと
思われる。死亡日時不明。

(三九七) 医専一年生 太 田 和 男

遺族 佐世保市黒髪町六八九一 吉田内 太 田 久(姉)

朝五時過ぎ、机の前に腰を下ろした弟に、「和男さん、買出しに行つて来ますよ」と声をけると、「うん行つておいで」と云う返事を聞きながら、日見の方に出かけたのでしたが、その日午前十一時過ぎ、一瞬の閃光と共に若き生命は原爆の野に散つて了つたのでした。そして翌日より死体累々たる焼土の中を、名前を呼びながら探し求めた十日余りでしたが、遂に弟のそれらしき物は何一の見出すことが出来ないます、長崎医大から髭の一片を分けて戴き、弔いを済ませました。

あの残酷な歴史の一ページノ 私は何かに向い、あらん限りの声で弟を返してくれと叫びたい思ひでした。この悲しみは救い様ありませんでした。

あの日から早や二十二年の歳月が流れ去りました。私は毎日裏庭でゴミを焼きながら、燃える炎を眺める時、なまなましい爆心地の惨状と、弟の事が想い出されてならないのです。生きていてくれたらどんなに心強い存在であつたかと、今更ながら感無量なものが御座います。

女ばかりの姉妹の中に一人だけの弟でしたが、医師であつた亡夫の後を継ぐ者と、家中期待しておりました。当時長崎中学卒業生(四年卒)の総代として、卒業証書を戴きに行く時の小柄な姿を、私はどんなに頼母しく、また嬉しく眺めたことでした。当時病院にあつた母も、大変な喜びようでしたが、弟の死が大きなショックとなり、翌二十一年に他界してしまいました。戦時中のことと総てが満されないます、一心に勉強にいそしむ態度は、実に立派なものでした。毎朝のように誘いに來られるお友達(故浅田様)と、母の手作りの角帽を被つて登校する当時の弟の姿が、未だに彷彿といたします。

やがて終戦、誰もが生きることのみに懸命であつた灰燼の街々には、目ざましい復興への努力が実を結び、今日このような平和な時代となりましたことは、まことに感慨の極みに存じます。この平和の大きな捨石となつた多くの若い魂の御冥福を、衷心よりお祈りいたします。そして更びこのような惨事が起らないことを、切望して止みません。

弟よ!! 安らかに靖国の森に眠れかしと、ひたすらにお祈りしています。(後略)

(三九八) 医専一年生 奥 野 昭

遺族 佐世保市中里町四四九 奥 野 ワカ(母)

総ての学生は休暇に入つたというのに、医学徒だけが休みを返上して勉強にいそむことの幸福と、満足に充ち充ちた感激で出崎したのでした。本人はもとより私も嬉しくて、颯爽と出て行くその後姿をじつと見送つたのでした。それは七月十日頃だつたと思います。恐ろしい原爆が、やがて頭上に落ちようとは露知らず、嬉々として家を出たのです。

親類のある人が、「こんなに空襲がひどくても長崎の学校におやりですか」と申されました時、「でも学校はちゃんとあつて、授業も変りなく行われますから、医学生は皆行くのですよ」と私は申しました。

入学が決定しました時、「お母さん、酒を一升持つて来たら、革靴の古いのを一足やると、友達のお父さんが云つたよ」と申します。でもお酒はやつと五合だけ手に入りましたので、お金をいくらかあげて古靴を一足貰ひ、嬉しそうに帰つて来ました。

出発にはそのドタ靴をはき、帽子は卒業間近かの方から角帽を買つて、得意そうに出て行きました。十日位たつて土曜日に一寸帰つて来ましたが、「お母さん、お金は月に四十五円も送つてくれたらいいよ。手帳も本も買うものがないし、学生さんは皆ハダシタビをはいてるよ。でもやつと医学の古本二、三冊を買つたよ」と云いました。この古本は原爆当日休んでいて、生残られた上級生の方が持つて来て下さいましたが、その中に塵紙に沢山ノートして居ました。今もそれはその儘にしています。捨て得ないのです。

その頃ですので、下宿では食器にお粥様のもの一杯きりだったので、大きな大きなおにぎりを作り、お友達にもあげるように持たせましたら、大喜びで持って行きました。

私が出崎したのは終戦後直ぐでしたが、学校跡に行きますと異様な臭気、それに目をおおうような悲惨たる有様でした。この下に沢山な命が失われていると思っても、どうにもなりませんでした。

八月八日夜は、病院の当番になっていたとか、同宿の上級生の方が、「奥野、今晚当番に行くのはよせよ、危いぞ」と云われましたそうですが、行ったかどうか、死人口なしで知る由もありません。

被爆後一カ月位は、彼が足の先から頭まで、包帯姿で帰って来るのではないかと、毎夜外に出てみて、闇の中に声がすればハッと思ったりもしたのです。

今考えてみますと、入学することに全身全霊を傾けて勉強し、入学が出来たのです。被爆はしたものの、今先生方のお蔭で靖国神社にも合祀され、グビロが丘の慰霊碑のみならず、学園にも名碑として永久に名前を残されます由、ありがたいことです。しかし、世界のどこにもかかる悲惨なことが再び起りません様に、祈ってやみません。

昭ノ 昭ノ あのだで最も望んでいた学園を眺めつつ、永久に眠っておくれ。

(三九九) 医専一年生 甲 斐 靖 敏

九日は解剖講堂脱出後、裏山で一夜を過ごし、翌十日警防団に救助され、伊良林国民学校にて下宿の家族と会い、翌十一日午後一時半頃逝去す。

(四〇〇) 医専一年生 片 岡 哲 夫

遺族 北九州市門司区大里別院通三丁目 片 岡 アヤ(母)

(前略) 片岡哲夫の老母で御座います。お蔭にて昨十八日、哲夫へのお見舞金七万円をたしかに受取りました。(中略)

このお金のおかげにて、一人暮らしの私どんなにありがたいか、お察し下さいませ。子供の世話になり、其日々は過しておりますものの、不自由にかまけ、心ならずも

迷惑かけておりました方々にも、やっとおかえしも出来、本当に気楽になりました。

(後略)

(四〇二) 医専一年生 角 川 肇

遺族 長崎市新大工町七三 角 川 すみ子(姉)

早いもので、弟が原爆で逝ってから、もう二十三年忌を迎えました。生きていればもう四十才なのに、何年経っても、私達きょうだいの中に甦って来る弟は、いつも頭をいがぐりにした、清潔な少年の姿をしています。優しくて誰よりも親思いだった弟は、防空壕掘りの作業などが回って来ると、試験勉強の最中でも、母に代って一生懸命に働くような子供でしたが、医専の一年生になって僅か一カ月で、私達の前から永久に姿を消してしまいました。

その頃既に父は亡くなっていましたので、弟を何よりの生き甲斐にしていた母の嘆きは大変なもので、その力落しが母の命を短かめたような気がします。生きていればもう中堅の医師になっていますように、数え年僅か十九才で逝ってしまった弟が哀れでなりません。

あの日弟と同じく、一瞬の間に亡くなられた八百七十余名の方々のことを思うと、今も胸が痛みますが、この度グビロが丘に記名碑が建立されましたことを、心から嬉しく思っています。弟達の御霊もどれ程か、慰められますことでしょう。尊い犠牲者の方々の死を無駄にしないよう、残された者も立派に生きていかなければならないと考えております。

(四〇四) 医専一年生 兼 信 光 世

遺族 大分県別府市北浜二丁目二―三五 兼 信 佳子(妹)

終戦より二十二年、兄は生きていれば三十九才、医業を事とし、妻や子供に囲まれて幸せに暮している事だろうと思うと、青春もなく若くして散った兄が可哀想でたまらなく思えます。そしてあの優しくった兄が生きていてくれたら、私達の良き相談相手として、弟も妹ももっと立派に育ってくれたであらうと思ひ残念でなりません。

思い起せば忌わしい八月九日、あの日大村市にあった我家から、兄は元気な姿で家

を出しました。懶け者で学校をさぼる様な兄だったら、助かっていたのではないかと思うのも、肉親の欲というものかも知れません。

私もその日は学徒動員で、山へ測量に行っており、原爆の落ちた時は、身近かに爆弾が落ちたのかと慌てて地面に這らばったのですが、まさかその時兄が死んだことなど知る由もありません。長崎の上空が真赤に燃え上っているのを見て、兄のことが少し気にかかりましたが、八月一日の爆撃の時ですら、無傷で帰って来た運の強い兄だから、今に「ただ今」と元氣な声で帰って来るだろうと、淡い望みに縋って強いて安心しようと努めました。然しその夜とうとう兄は帰りませんでした。二日過ぎてても帰らないので、父は三日目にあの惨憺たる長崎に兄を捜しに出掛けました。その夜疲れて帰った父から、「兄は教室で机の下にでも隠れていたのか、それとも逃げる暇もなかったのか、兎に角全員教室の中で白骨化していて、誰が誰だかさっぱり判らず、廊下を走る姿のまま死んでいた人もあった」との話を聞き、胸がつまりながらも、まだ何処かに兄だけは生きている様な気がしてなりません。父は出来る限りの平静さを装ってはいいましたが、兄の死と大学での悲惨な光景にショックを受けたのか、第二次放射能症の様な状態で亡くなりました。

母は当時末の妹を産んで産褥にありましたが、兄の死を聞かされ、その後永い間頭痛に悩まされ、賑やかで明るかった家の中が、急に暗い家になって仕舞いました。

母は口癖のように兄を誉め、小学生の頃から級長で通し、その上大変な親思いで、私達にはとても優しくかったので、兄を失った母の心痛は想像に余りあるものがあつたと思います。父は兄の死後間もなく病の床につき、二年後に兄の後を追うようにして亡くなりましたが、母は父の死後もよく兄が生きていてくれたらと、愚痴をこぼして申しておりまして。頼りにしている者を次々に失い、母と私は五人の弟妹を抱えて、唯茫然とするのみでした。

それから十幾年、今振り返ってみても、生きて来られたのが不思議な様な生活を続けて来ました。その甲斐あつてか、小さかった弟妹も立派に成人してくれて、次々に元氣に巣立つて行きました。

母と二人で苦しかった昔話も、笑って出来る様になった今日、思いがけず弔慰金がかかるという知らせを頂き、又改めて兄の死を悲しみ、原爆の恐ろしさを思い出しています。原水爆反対運動が盛んに行われているにも拘らず、原水爆実験が行われている今日の世界情勢ですが、私達原爆の恐ろしさを知っている者が、心から反対を叫ばなくては、死んだ父や兄や其他大勢の方々の死を、無駄にさせる事になるのではないのでしょうか。こんな悲劇は私達だけで沢山です。未だに原爆症で苦しんでおられる方が、大勢居られるのです。私達は心から原爆反対を叫び、そして皆が平和に暮せる様な世界にしたいと、願ひ続けております。

(四〇九) 医専一年生 川 原 俊 吾

解剖講堂で被爆後、一時生存と報告されたが、探しても見当らず、消息不明。

(四一〇) 医専一年生 河 野 明

解剖学講堂で被爆、行方不明、数日後父親と現場を探したが、遺骨も不明。

遺族 宮崎県日南市油津町二二一 河 野 英 一(父)

(前略) 原爆が投下されて五日目位に大学に参りました。学校内で学生のバックルを探して持ち帰りました。どなたのものであったのでしょうか、若しか息子のものと、今でも誰かの遺品として大事に致しております。毎月九日の法事には、母がバックルに煩ずりしたり、手の中で温めたりしております。今では唯、彼等の死を無駄にしたくない一心で一杯でございます。(中略)

いつかきくと、八月九日に長崎へも行きたいと思います。(後略)

(四一一) 医専一年生 北 野 陽 一

遺族 下関市長府町中六波中国電力社宅 北 野 光 子(姉)

(前略) 八月九日の慰霊祭には、色々とお骨折りだったことと思います。母も二十二年振りの長崎行きに暑さといわず出かけ、長い間の念願が叶えられた様な思いで帰って参りました。集られた親御様達があの日を思い起されて、今更ながら涙されたことだろうと思います。母から長崎でのお話を聞くのさえ、悲しみをそえられる気

が致します。近く靖国神社へ合祀させて頂きますそうで、昨年亡くなりました父が生きていてくれたらと、寂しい気も致しますが、今更どうしようも御座いません。

原爆の後の長崎を、弟と探しまわって帰って来た時の父の姿、毎晩母と声を出して泣き明かしていましたあの頃のこと、昨日の事の様に思い出されて参ります。でも他処様のもっともつと不幸な方の話を聞いたりして、諦めようと努めて来た二十二年でございました。

今更思い出しても仕方のない事を考えるのも、親の愛ではないかと思う程、父と母とが弟のことを話し合って居ましたが、私にはそんな思出の他に、私だけしか知らない弟の思い出がございます。

私が挺身隊で、弟が学徒動員で、どちらも家から離れた軍の工場で働いていました時、電車で三十分位の所に寮がありましたので、二、三回逢いに行ったことがありました。十九年の暮から二十年の春にかけてでしたから、とても寒い中を、火の気もない部屋で夜勉強しておりました。昼間外出の序に寄ってみましたら、油によれた服を着て、指に包帯をしておりました。その工場は魚雷を作っておりましたから、多分怪我をしたのでございましょう。あの頃の事です。皆が味った事ながら、寒さとひもじさを我慢していたことが、一番印象に残って忘れられません。楽しい青春時代のなかったことなど、考えると切なくて、誰にも分らないだろうと一人で泣けて参ります。先日下関市内の御遺族の方、桑原様と溝口様にお会いする折がございまして、同じ悲しみを味った者同志、語り合うことが出来ました。(後略)

(四一九) 医専一年生 古 味 房 雄

解剖学講堂で被爆、行方不明となり今日に至る。

遺族 高知市南越前町三七 古 味 信 房(父)

(前略) 房雄のこと運命と諦めながらも、いつそのこと軍隊に入って戦死でもして居ればよかったものをと、既に二十余年の歳月を経た今日まで、一抹消えざるものがあります。然るに今回靖国神社合祀の事、少し何うかと思われましますけれど、思い寄らざる有難き思召と存じ、感謝に堪えません。遠隔のため、直き直き皆様にお目にかか

って御礼を申上げる事も出来ず、遺憾至極に存じます。

猶、名碑も立派に建設されたる趣き、愚生老齢なれども健康と機会を得次第、一度御地を訪ね、八月九日の記念日に加わり、且つ名碑に接するを得ば、これに過ぎたる喜びはないと存じます。(後略)

(四二三) 医専一年生 重 松 肇

解剖講堂より脱出後、同夜は野宿、十日帰宅したが、十一日午前四時頃、鹿島町織田病院にて死亡。(註、織田病院長の御厚意で、御遺族が判明しました)

(四二六) 医専一年生 柴 田 正 人

遺族 長崎県諫早市八天町三八一 柴 田 正 義(父)

二十二年ピカドン落下の時の惨状は、誠に目もあてられぬもので、此世の地獄でありました。其中を子供の遺体を探して幾日も廻りましたが、何もありません。何とも諦めが付きませんでした。時が経るにつれ、これは戦争終結の為の貴い犠牲者であったと、思いかえすようになりました。

惟えば、あの被爆地一帯の地下からは、これ等多くの犠牲者の、戦争を憎み原爆を呪う声が聞えるようであります。これら原爆犠牲者の冥福を祈って、充分な追善供養が市でも国でも手厚く行われねばなりません。同時に平和を願うその声を、強く世に訴えねばならぬと思います。その為には、一宗派や一地区的なものでなく、もっと広大にすべての人々が等しく仰いで、心に平和を呼び起すもの、平和を与える平和塔(御仏舍利塔)が建立されることを念願致します。

(四二八) 医専一年生 嶋 田 博 之

解剖講堂で被爆、脱出して佐世保市の自宅(汐見町二二三)に帰り、海仁会病院に入院、数日後に死亡したが、日時不明。

(四二九) 医専一年生 嶋 村 治

遺族 熊本県鹿本郡植木町一一二 嶋 村 源 蔵(父)

(前略) 愚生も遺族の一人でありますが、遠く離れて居る関係と、これまで当地の

教育行政又は植木町の町行政に十二年間携わり、種々業務に忙殺され、何等の御手伝も出来ず誠に申訳ありませんでした。

拙宅も、丁度原爆の折は爆心地に近い城山町一丁目に住居し、住家も焼け、子供三名の内、長女すみ子は城山校に奉職、登校して職員会議中に爆死、二男治は医専に登校、解剖学講義中に先生と六十余名の生徒と一緒に爆死、何と申してよいか判りません。只管哀悼の意を表し、六十余名の遺骨を一つ一つ拾って、郷里熊本の方に持ち帰り、拙宅の墓地に埋葬、御一同の冥福を祈って居ります。二女久子は城山町共同防空壕で爆風に即死し、当時の悲哀が何かにつけて思い出される事ばかりです。

なお、現在遺族の為に御世話して戴いている杉本亀吉さんも、皆さんが原爆に遭遇されましたが、我が身を顧みず、終始一貫、献身的に城山町住民の為に並ならぬ御世話を戴いて居った事、今日に至るまで其の御高恩は忘却出来ません。

愚生は住む家もなく、子供三人は爆死致しましたので、世の哀れさを悲嘆し、涙をのんで郷里に引揚げの止むなきに立ち至った者であります。早や余生幾何もない七十才の老人となりましたので、これまで携った町政十二年間の議会議員も、本年四月二十八日の統一選挙で立候補せず、慙々隠居しましたが元気で過し、孫の守りなど致しています。

本月十五日は当地のお盆でありましたので、お墓に参り、一応御貴殿よりの通報を二男治外六十余名の霊前に報告致して置きました。御靈魂もさぞ喜んで感銘致し居られる事と思っています。尚また、原爆の犠牲となられた医大職員並に学生達八百七十余名の氏名を真鍮板に彫刻して、八月九日は除幕式を挙行致される由、愚生も是非出席させて戴きたいと思っています。

考えてみますと、今日まで政府当局にも取り上げて貰えず、軍人遺族や外地引揚者等と比べて、余りにも矛盾して居りましたが、今日所期の目的が達せられて、此上の喜びはありません。厚く感謝申し上げます。(後略)

(四三二) 医専一年生 調

弘 治

遺族 長崎市本原町一―二九 調 来 助(父)

運命、奇蹟、加護

【運命】 原爆で肉親を失った人達は、その不慮の死を運命と考え、不運と諦めておられるようである。当時多数の被爆者を治療・調査した私は、一層その感が強く、あの直後はすっかり運命論者になっていた。次男弘治の原爆死も、二重三重の運命に支配されて起ったとしたか思われない。

私は弘治が中学四年を終了したら、佐賀高校を受験させる積りであった。ところが受持のH先生が私の知らぬ間に、大丈夫だからと云って福岡高校に願書を出し、当時の採用方針に禍されて見事に落第した。仕方がないので附属医専に入れることとし、同僚の熊本医大勝屋教授に教育方を依頼しようと思ったが、当時は二年半で卒業する速成教育を行っていたので、手許に置いて叱咤激励してやろうと考え、長崎を受けさせることにしたのである。若し佐賀を受けて入学していたら、或は思い切って熊本にやっていたら、原爆で死なせなくてもよかったのではないかと思うのは、あながち親の欲目であろうか。

原爆投下の前夜私は防空当直で大学に泊った。その頃弘治は蚤にさされて化膿し、三十八度前後の熱さえあった。若し私が八日の晩家に帰っていたら、九日は休ませたかも知れないのにと悔まれたが、これも矢張り死ぬ運命にあったのであろう。

【奇蹟】 原爆から約三週間経った八月二十八日、被爆者の治療がほぼ一段落ついたので、私は生残りの子供三人と家内を連れて、弘治の遺骨探しに大学へ行った。一年生は解剖学の講義中だったと聞き、基礎教室の方へ行ってみたら、木造の建物は全部焼け落ちて、空には腐肉をあさる鴉が群をなして飛んでいた。解剖学講義跡には四、五カ所に白骨の小山があるだけで、遺品らしいものは何もない。仕方なく学友であれば誰のでもよいからと、各々の小山から骨を一つ二つ宛拾っていると、末娘の倅子が何かを発見したらしく、大声で家内を呼んだ。皆で部屋の中央に行ってみると、鉄の扉が倒れていて、それにズボンのホックの部分が裏返しにこびりついていて、白い裏布に「山本」と墨書きした字が見える。家内は咄嗟に「アッこれは弘治のズボンだわ」と叫んだ。それは私の長姉の一人息子山本文男(二十年三月九大医学部卒)か

ら弘治が貰つて着ていた服である。全く奇蹟と云うより外はない。

遺族の方々の手記を読むと、誰のとも判らぬ骨を大学から貰つたり、或は拾つたりして祀つておられる方が多いようであるが、その方々に比べると、本当に幸せだと思つた。しかしその反面、死亡が確認されて帰りを待つ希望がなくなり、何となく淋しい氣もした。

【加護】 私の長男精一も原爆で死んだ。三菱兵器大橋工場で製図中に被爆、上半身に火傷を受け、疎開先へ一応帰つては来たが、十六日正午に息を引きとつた。あとに残つたのは八十才の老母と私達夫婦、それに娘三人を合せて合計六人だけになったが、若し子供達が残つて私が死んでいたら、後はどうなつたであらう。「思つただけでもゾツとする」と家内は時々述懐している。考えてみると全くその通りで、子供達は自らを犠牲にして私達を護つてくれたようなもので、実際、私が近距離で被爆しながら生残つたのは、神の加護というよりも寧ろ、二人の子供達の加護と云つた方が至当であらう。

その後三人の娘達はすくすくと成長して、それぞれ幸福な家庭を持ち、孫も合計八人恵まれた。一番上は小学校六年生、下は生後四カ月半で、お蔭で皆健康であるが、それが揃いも揃つて全部男の子とは、一寸珍らしい現象である。私は時々この孫達を見て、原爆で死んだ二人の子供の化身ではないかと思うことさえある。

(四三三) 医専一年生 杉山克己

遺族 熊本市清水町津の浦三五四 杉山知陽(母)

(前略) 真鍮板に克己の名も刻んで頂き、八月九日の慰霊祭には盛大な除幕式を挙行なさいました由、有りがたく涙がこぼれました。早速仏壇に報告致しまして、重ねて厚く御礼申上げました。ただ今主人(克己の父)は動脈硬化症のためふせています、何事も出来ませんので、私が差出がましくお便り差上げました。来年の八月九日には、是非慰霊碑並びに名碑を拜みに参上致したく思っています。

(四三四) 医専一年生 関家雅俊

遺族 愛媛県松山市御幸町一四五 関家花子(母)

長崎原爆によつて吾子を失つた私は、胸に烙印をおされたようで、一生忘れる事が出来ない。雅俊は明日ない自分の命も知らず、最後の便り(八月八日朝発送)に「お互に身体を大切にしましょう」と書いていた。手紙を受取つた時に、本人もポストも失われていたとはどうしても信じられない。しかし其後便りがないので、不安のあまり学校へ行つてみた。

長崎につくと想像も及ばない惨事、全くの全滅だった。友人庄司友春様に色々当時の模様を聞き、雅俊の居たあたりの遺骨をつれて帰つた。

その後毎年天徳寺の和尚さんを迎えて供養をし、家族一同心を安らげている。慰霊祭にも度々出席して、当時の様子を話し合っている。今年(昭和四二・八・九)は名碑を作られたとのこと、特に御案内状を頂いたので、家族四人で出席した。

八日の夜は秀明館に宿をとつたが、長崎の夜は相変わらず美しい。山の手の民家の灯は、天から垂れ下つた星の樣だ。又は爆死者の靈の樣で、しばらく数えて見る。

八月九日、喪服に正装して式場に行く。調先生に御挨拶出来たことは何よりも嬉しい。和服姿の少女の手で一勢に除幕された。調先生の御筆蹟、松岡国一様が日夜刻まれた血のにじむ様な名碑(真鍮板)には、学長初め八百七十余名の名が、溶けんばかりの炎天に輝いている。人垣の隙間から一人一人の名を見てゆく。雅俊の名は丁度中央に記されていた。視力のにぶい私の目にもはつきりと見えた。

ああ関家雅俊と思わず叫んだ。前の人がちよつと私の顔をのぞく。「雅俊」、良い名よ、名附けてより二十年、今日遂に戦死者として記名されたのだ。その記名は当日のつらさを訴えるような顔、又あどけない赤ちゃん時代の顔となつて、私の目にうつる。写真屋が居たので、その名碑を撮つて送つて貰つた。これ又我が家の大切な遺物となりました。

何も知らない十才の佐恵子は、道中でアメリカ婦人に貰つた花一輪手向けて合掌していた。この子は今日のこの式を見て、又平和像を見て、戦争の恐ろしさ、平和への願いをしみじみ味わつたことと思う。平和の礎となつた英靈は、アメリカ人が花を手向けよという氣持を、喜んで受けて呉れたであらうか。

原爆の犠牲となった長崎医大の学生達は、近く靖国神社へ合祀して戴けるとの事、雅俊も早く軍医になってお国に尽したいと云っていたが、戦死者と共に靖国の御社深くで安らかに眠ることが出来、さぞ満足致していることと思う。

- 除幕されし爆死者の名碑赤々と 炎天にしてとけむが如く
 - よき名よとことさら選びし吾子の名も 名碑に深く刻まれにけり
 - 吾子の便り待ちし窓辺にほろほろと へちまの花の散りしを見つつ
 - 軍医となり国につくすとひたすらに 学び居しまま吾子爆死せり
 - 明日消えん命も知らで吾子の出しし 八月八日のスタンプ淡し
 - 爆死する前日出せし子の便り 魂となりて我家につきたり
 - 寸前の原爆のがれし文つけり 吾子のかたみはただ指紋のみ
 - 爆死せる吾子はとわに平和の神となり 靖国の宮深く鎮まる
 - いくばくの日もあらずして戦の 終るを知らで吾子爆死せり
 - 夕陽の靈碑を赤くそむる時 いずくともなくきりぎりす鳴く
- 【調 附記】 関家様は昭和三十年八月に「長崎旅行記」、昭和四十二年九月に「雅俊よりの手紙」という思出の小冊子を出版され、御知合いの方々へお頒ちになったそう、私も一部宛頂きましたが、全文を載せると、余り長くなるので、割愛させて頂きます。

(四三五) 医専一年生 摂津 定 昭

遺族 大阪府東大阪市友井九一 摂津 靖雄(兄)

昭和三十五年七月、復興著しい長崎市と、どのような深い縁しで結ばれているのでしょうか、十六年振りに証券会社の経営を委ねられ、長崎へ赴任致しました。以後二年間、短い在任期間ではありましたが、桜の春に紅葉の秋、四季折々の浦上の地に、亡き弟の霊と足跡を求めて散策し、思い出多い月日を送りました。

願みれば終戦の年の秋、最愛の末っ子を原爆で失い、悲しみに放心した母を伴って秋雨の降る廃墟の浦上を、弟の消息や遺品を求めて彷徨った時には、この様な地の果てに誰一人知る人もなく、亡くなった弟定昭が不憫でたまらず、母と二人全く耐えら

れない思いでした。然し十六年の歳月は、草木も美しい四百年の歴史の町長崎を再現し、本心に心なごむ思いでありました。

長崎在留中の事ですが、私の一人息子がよく高熱に悩まされました。その折、勝山町に住む巫子の様な老婆が、「ずつと奥まで続く座敷の見える家に住んでいた人で、お茶も水も飲まずに亡くなった血縁の人の霊が、この子供を通じて呼びかけているのだから、お茶や水や果実を供えて供養しておあげなさい」と親切に云ってくれたことや、三十六年の原爆記念日に新しく弟の位牌を作り、伊良林の臨濟宗の寺で法要を営み、その位牌を母が胸に抱いて故郷の四国へ旅立ったことなど、感慨深い想い出があります。

遺骨は勿論ありませんが、弟の霊はあの時母に連れられて帰り、今では武將にゆかりのある城山の麓の先祖の墓地で、安らかに眠っていることと思います。

「長崎は随分遠い処、でも爆撃がないのでよい処」と、入学早々の弟の最後の便りにありましたが、その遠い長崎も、今の私共一家にとりましては、第二の故郷のような近い町となって居ります。

故人の実兄であります私は、現在東大阪市に住み、保護司など致しておりますが、原爆の惨状や肉親の悲劇を顧み、戦争とは殺人行為であり、憲法の戦争放棄は無条件殺人否定であり、例え犯罪者に対する法による殺人(死刑)も、当然憲法の意志に反するものだと信じ、死刑廃止に何等かの微力を捧げたいと、日頃より意願して参っております。

故郷の老父盛徳が去る五月より脳軟化症で倒れ、今回の御芳志に副いかねますので兄の私が寄稿申上げた次第でございます。

(四三六) 医専一年生 田川 昭 義

遺族 長崎市浜町三一八 田川 義雄(父)

原爆死した昭義は私の次男であります。当時の中学は五年卒業が普通でありましたが、戦争が激しくなるにつれ、二十年から四年卒業となり、第一回四年卒業生になりました。

進学に際しましては、戦争が激しい故、何か御国の為に尽してはと、本人の勤勉さを生かして医学に進むことを私が勧めました。素直に承諾して、長崎医専と東京慈恵医大に、海星中学から推薦書を出して頂きました。幸い両校とも無事に通って、入学通知を受けました。そこで昭義は慈恵医大に進むことを強く希望したのですが、当時東京は毎日の様に爆撃が激しく、私としては東京へ行くことに反対し、中学の先生方にまでお願いして、長崎医専に入学することを勧め、本人にやっとな承諾させることが出来ました。

両校に推薦を頂いたことは、親の私から申し兼ねる事ですが、人一倍の努力家で、卒業に際しては総代の誉れを得て、優等生で卒業出来たお蔭と思つて居ります。二十二年前原爆死してからは、何か私が死亡させた様な気がして、一日として忘れることが出来ず、痛恨の念に耐えません。

非常に正確な性質で、何時も机の上や引出しの中もきちんと整頓し、すべての事に几帳面な性格でありました。近頃病院の先生や開業医の方を見るにつけ、ああ昭義が生きていたら、私達の一寸した病氣位は癒せるだろうにと、返らぬ事を繰返し、思いは尽きません。

昭義は親孝行で、毎日欠かさず学校から帰ると、必ず私の靴を磨いてから、自分の靴を磨く事を日課として居りました。服なども戦時中で買えないせいかも知れませんが、大切に自分で始末して居りました。

兄の出征の折、駅ではこれがおとなしい我が子かと思う位、兄の出征を励まして居りました。今思えばこれが兄弟の永遠の別れの言葉であつたかと、親として後日まで思出は尽きません。

あゝ原爆死した我が子よ、天主のお憐れみによりて安らかに憩わんことを――

(四三七) 医専一年生 田代 正

遺族 佐世保市福石町二〇―三 田代 春子(母)

昨日の様な、又はるかな昔であつた様な、二十二年前の當時を思い浮べ、昭和四十二年八月九日グビロが丘に佇んで、拭けども涙がこぼれるのです。

お蔭様で、達者で慰霊祭や名碑の除幕式に参列させて頂きました事を、有難く感謝申上げて居ります。承れば名碑も学校内に永久に御保存下さいませ由、亡き正も医学に進むことを自分の使命と思い、憧がれて入学出来たのですが、短い在学でありましたので、定めしどんなにか喜んで居ることと存じます。

家業を嗣ぐべき長男に生れ、私には誠に過ぎたる子であり、死亡せし当時、どうして医者之家に生れしや、どうして医学を修める氣になりしやと、悲惨な運命に亡くなりし子を歎き悲しんだので御座いますが、この度医学部や遺族会の皆様の並々ならぬ御配慮によつて、名碑に名を記して頂き、何とも御礼の言葉も御座いません。

年月は名葉に勝るとか、亡き正のことを思つたり話したりすれば、涙ばかり出て仕方がなかつたのですが、漸く二十年も過ぎて、唯今では笑つてお話も出来るようになりました。

どうか犠牲が無ならぬよう、二度と再びこの様な悲惨事の起らぬことを念願し、大勢の犠牲者の方々の御冥福を、心よりお祈り申し上げます。 合 掌

(四三八) 医専一年生 田尻 達郎

遺族 佐賀市中の館町二―二 田尻 ゆい(母)

九日原爆投下と聞いて達郎の死を覚悟し、十一日は仏壇にお祭りしていましたが、玄關で「唯今」という声に飛び上り迎えました。「何もかも無くしたよ」と云いますから、何にもいらぬ、生きて帰つて来てよかつた喜び、すぐ寝かしました。頭に深い傷を負い、服には肩のところにべっとり血がついていました。佐賀駅から兄の友人の自転車に乗せられて、連れて来て貰つたのです。

達郎には陸軍航空士官学校から合格の通知が来たため、六日にすぐ帰るよう打電しようとしても打電出来ず、仕方なく速達を出したがそれも遅れてつき、切符は買ったが移動証明の手續の關係で、九日午後五時の汽車で帰佐する予定のところ、僅か五時間余の差で原爆にあつたのです。丁度空襲警報が解除になつたので、帽子をとり下宿の二階の室に上つたところに原爆が落ち、爆風で二階から吹き飛ばされ、氣がついたら穴の中に入っていたので、穴から這い出し、浦上川の川岸に一晚寝ていたそう

で、切符も水に濡れていました。

翠朝城山町の下宿の小父さんが山から降りて来て、二駅おんぶして汽車に乗せて貰い、諫早駅で降されて小学校に収容され、そこに一晚泊ったそうです。

家では早速お粥を食べさせましたが、全く食欲なく、梅干の酸味さえ分らぬ程で、唯水ばかり食べていました。医師が傷の手当をしても少しも効果なく、一日に九本も注射しても駄目で、毎日五十回位下痢をし、その間にも防空壕に入ったり出たり、家族一同徹夜で看護しても効を奏せず、十七日午前八時、十七才の生涯を閉じてしまいました。

十五日終戦の詔勅を聞き、日本が敗ける筈はないと、如何にも残念そうに申しました。兄も海軍で第一線に行っている事だし、航空士官にならなければ、軍医少尉になって、一日も早くお国の為に役立ちたいと意気に燃えていました。毎日学校に行きかけに、主人や私、又姉弟たちに代るがわる便りをくれていましたから、初めて家を離れ、余程家族が懐かしいのだろうと話していました。家を離れて四十日、運命とは云え、打電出来たか或いは速達が今少し早くついていたら、難をのがれていたものかと返らぬ愚痴が出ますが、死体も分らぬものさえあるのに、小父さんのお蔭で家まで帰り、一週間余り看護が出来たのが、せめてもの慰めと諦めて居ります。

達郎は友人や姉弟からも一番親しまれ、主人もこの子には頭が下ると云っていた程で、その頃主人は病気が出ていて、達郎の死後めつきり体が弱り、翌年一月十日に他界してしまいました。私も半年の間に二人も亡くし、一年余り体が弱りましたが、戦死を覚悟の長男が無事に帰り、お蔭でこの頃は至って健康に恵まれ、花いじりのかたわら、亡主人と達郎の冥福を祈りながら、お寺参りを樂しみに、その日その日を暮して居ります。

(四四一) 医専一年生 田 吉 正 英

遺族 長崎市西山町一―九五 田 吉 チ 工 (母)

正英よ、二十二年來の願いが叶って、お友達と共に靖国神社に合祀される日が間近に來ました。夢多き青春を一瞬にして灰となったあなたを、私は一日として忘れま

せんでした。今生きていれば三十九才。大学生、或は立派な社会人として活躍している人々を見る毎に、私の胸をつと過ぎていく「悲痛」は、子を戦争で亡くした親というものの等しく感ずることだと思えます。そしてあなたが国の再建に協力しながら、一身を捧げつくした「あかし」を欲しいと希って來ました。こつそりと虫けらの様にどこかの土と化したとしては、どうしても相すまぬと思い続けて來ました。

あの当時のあなたは立派だった。書を読み、将来を語り、議論をたたかわしていたあなた方、そして警報と共に本をすてて防衛の持場に馳せ参じていた、国防服の甲斐々々しい姿は、今も目に焼きついていきます。それが昭和二十年八月九日を境にして、この世から居なくなつたなんて――。

果然自失から覚めて以來、毎日貴方の遺体を求めて、あなたの父と私は歩き回りました。然し遂に見当らず、他県から來た大学生がむなしい骸となつて、あちこちに在る姿を見、或はやつと辿り帰つた人たちが、数日の中に次々と放射能症のために死亡された事実を見て、やつと探し求めることを中止しました。然し毎夜の様に足音がすれば、父と私はとび起きて出てみるものが続きました。

あなたは希望していた五高の校歌をよく歌っていましたね。『武夫原頭に草萌えて――』。或夜高らかにそれが聞えた時、私はハッと思つてとび出しました。しかしそれはむなしい錯覚でした。

あなたを失つてから、父は人生観が變つたと云つて嘆きました。かねて無口な父が三十四年三月臨終のとき、「正英がいたら――」と一口洩らし、かねての事を何とかしてやらねばと云い残しました。それは医大生の死をこのまま放っておかぬこと、必ず取り上げて、祖国再建の礎となつた事を公に認めていただく様に、ということでした。それから私の遺族訪問が始められ、同志を求めました。会う人毎に、私も、私もと相集り、すべての親の心が一つであることを知つた時、涙を禁じ得ませんでした。

父の死後一家の生活を切り抜けるために、母は慣れぬ職場を求めて働きつつ、それでもあなた方を靖国神社へ祀る運動を片時も忘れませんでした。やがて遺族会代表に長大の調教授を迎え、昭和三十七年以來この運動は促進の一途を辿り、やつとこま

で参りました。この間多数の同志は云うに及ばず、先輩諸氏、各議員、官公庁の好意的な援助には全く頭が下りました。

私は嬉しい。正直のところホッとしました。父もあの世で喜んでいらっしゃるでしょう。あなたが愛していた末弟（当時二才）の隆夫も、京都大学の大学院に在学中です。兄の分までと頑張っています。

私は去る昭和三十九年四月から三カ月間、あなたの死を無駄にせぬという一念から調先生のお勤めもあって、世界平和巡礼団に参加致しました。もう一つの理由は、むごい長崎の惨状を有形・無形に世界中に知らせることが、原爆等の凶器使用を禁止する一助となると、私は信じたからでした。辛い旅でした。然しあなたが私の側にいると信じて、私はスライドと共に能弁を奮いました。人種を越えた人達の固い握手を感じつつ、無事に帰って来ました。

正英よ、今こそ静かに冥目して下さい。昭和四十二年八月九日に完成された原爆犠牲者名碑の中に、学長先生を初め八百七十余名の方達と並んで、貴方の名も輝いていますよ。

（四四四） 医専一年生 高 月 博

遺族 兵庫県三田市上野官舎 高 月 潔（弟）

十五夜のこの月を兄と並んで見た遠き頃がよみがえる。すみ切った鈴虫の声で我に返る。思えば二十余年前のあの日、八月九日、一瞬にして兄を失った。当時中学生だった私は、飛行機工場に動員されていたが、既に作る部品とでなく、ただ工場の疎開作業の毎日、屋根の上で一枚一枚瓦を取り外していた。その時あの光！あの爆発音！何でもはつきり思い出す。

体の弱い母はショックがひどく、父は矢も楯もたまらず、長崎迄の道のりを歩いたり車に乗りついだりしながら、燦る浦上へ、そして廃墟の医大へ、兄を求めて歩きまわったと云う。その父も二年前他界、後を追う様にして母も逝っていった。今折にふれ、ふっとこんな事が頭に浮ぶ。きっと三人はどこかで廻り合うことが出来て、今度の名碑完成のことも知り、ありし日の事など語り合っているのではなからうか。そし

て「おれの分まで頑張り抜くんだよ」と、今はなきただ一人の兄の励しの声が聞えてくる様である。

長崎在住中は毎年グビロが丘にも登ったけれど、兵庫県に移ってからは、これも意のままにならず、はるか彼方を偲ぶに過ぎない。来年こそは亡き両親のためにも、きつと記念碑の前に類いて、平和の礎を受けつぎたいと念願しています。（後略）

（四四五） 医専一年生 高比良 公 昭

解剖講堂より脱出後、八月十一日茂木町田上の叔父宅にて死亡。

（四四七） 医専一年生 滝 川 益 一

遺族 長崎市城山町四二一 滝 川 勝（父）

我兄に医専を選ばせたのは、私が一命を落す様な時に、手を握って貰って世を去りたかった為です。医専に入学させるには、妻が約一年間三度の食事を忘れ、熱心に激励して勉強に努めさせました。その結果入学が叶い、一家揃って祝ったのですが、戦争が激化するにつれ国家総動員法が施行され、医専の学生も朝早くから夜遅くまで巻ゲートルをつけ、戦闘準備で腕章も顔も真黒になり、目ばかりギョロギョロさせて帰宅する姿も勇ましく、暑中休暇を返上して働く事は、とりもなおさず日本国を護る心で、その気持が嬉しく、卒業の日を楽しみに一日千秋の思いで月日を送りました。

昭和二十年八月九日午前十一時頃、私は諫早市外小野村の海軍飛行場で軍属として働いていましたが、突然爆音が聞え、部下が地下室へとび込んで来て、「上官、敵機が来た」と大声で叫んだ、急いで外へ出て見ると、敵機が全速力で飛んでおり、その機の下三メートル程の所に白箱がぶら下っていた。不思議に思いついて見送っている内に、石鹼の泡みたいなのを噴き出し、そのうちに機も雲の中に消え去ったかのように見えなくなった。

昼食の時間には早すぎるので、上官会議室で談笑していると、外は暑くカンカンと照っていたが、急に見る見る中に暗くなり、その中に雷火の光が数十回となく吹き出す。方向を聞くと長崎の方との事、部隊長に帰宅の許可を受け、島原鉄道の線路を一直線に走り、諫早駅につくと新兵器爆弾が長崎に落ちたと聞き驚いた。諫早駅から長

与駅までは汽車に乗り、それから先は線路伝いに又走った。道の尾駅に来てみると、客車十台連結の上り列車があったが、負傷者で満員である。線路の両側は死者や負傷者の山、我家につくと街は一面の焼野原で家はなく、家具類は高くすぶっていて妻子の姿は見えない。油木町の横穴防空壕に行ってみたが、孫三人を見つけるのが一苦勞であった。五十人程しかはいれないのに百人以上詰めているのだから無理もない。妻子の姿が見当らないので孫に聞くと、「朝出たので知らない」と答えるだけでさっぱり埒があかない。駒場町を探したが見当らず、横穴の負傷者中にも姿を見ることが出来なかった。

幾日か過ぎ、益一のこと気がなつたので大学に行く、多数の学生が講義中に爆死した由で、益一も行方不明との事だったので、すっかり将来の希望を失い、一時は死をさえ決心した。然し若し長男が第一線から生きて帰った時、母、姉、弟は原爆死、父は悲観して自殺したことを知るとどうなるだろうと思ひ直し、長男の帰りを二年間淋しく待った。然し長男もとうとう姿を見せられなくなった。

其の後二十二年は空しく過ぎ、今年八月九日の慰霊祭の日、益一の名は大学の原爆犠牲者名碑に刻まれ、学徒遺族会の一員として洵に慶びに堪えません。今後は皆様と共に御霊の冥福を祈り、お互の安寧幸福を祈念してやみません。

(四五二) 医専一年生 土 橋 弘 基

遺族 長崎市愛宕町八四 土 橋 清 英(父)

原爆の日には家族五人で午餐中、閃光に続いて物凄い爆音と共に硝子戸は飛散し、天井は爆風で吹上げられ、夢中で屋外にとび出しました。愛宕山越しに浦上方面に、天に宙する大茸雲が魔物の様に聳え立っています。この一瞬、私は啞然として狐狸にそのままれた錯覚の俘となりました。

それからは毎日続々と、避難する人が茂木街道を登って来ます。知人縁故を頼って夫々落つく人は寧ろ幸運な方で、多くは道傍の叢に青天井で露営し、肉親の看護に夜を徹しています。勿論食料はなく、附近の井水を貰って、水だけで生命を辛うじて支えねばならないのです。この様にして、刻一刻貴重な人命が消えて行く惨憺さでし

た。夜の帷が降りる頃は、浦上一帯は火の海と化し、延々と燃え狂う猛火は、市街南部へ怒濤の如く推し寄せ、焰は天を焦す勢で、人間の力は無力同然、手を挟いて傍観するのみでした。

翌十日朝となつても、前日登校した二男弘基が帰りません。多分救護班として、被害者の救護に従事しているものと信じていました。然し不安でならないので、学校へ行ってみようと自宅を出ましたが、長崎駅から先は悲惨な被爆者が群をなし、助けを求むる瀕死の重傷者、身動きも出来ない人が水を欲しがらる哀呼声、紙幣束を大事に抱いた儘息が切れている人、数知れぬ屍、巨体で道を阻む死馬、思い出は涙をそそるばかりです。それから行先は愈々火の海ですから、止むを得ず山伝いに北進し、漸く県営墓地へ出ましたが、早速目についたのは大学病院の、中程から「く」の字型に彎曲した大煙突です。又墓地の石碑は殆んど倒れ、埋葬した遺骨の露出しているものもある始末です。

やっと学校裏手の丘で、神の慈悲により、弘基の哀れな姿に遭遇することが出来ました。眼鏡も帽子もありません。只破れたボロボロの被服を纏って居るのみです。歩行も不自由な程衰弱して居ましたから、援護して十日午后、愛宕町の自宅に収容する事が出来ました。

本人の話に依れば、階段教室で授業中、原爆の閃光と同時に建物に潰れ、全員その下敷となつて、一瞬其場は阿鼻叫喚の修羅場と化し、断末魔の唸り声が聞えた。けれども其後は人事不省に陥り、一切記憶はない。夕刻近く覚醒したので、全力をふり絞って頭上の障害物を押ししのけ、同僚四人が脱出に成功した。然し一帯は火の海で帰宅することも叶わず、既に日没後で山伝いに帰ることも出来ないのです、止むなく四人で裏山で一夜を明すことにした。非常な喝を覚え、空腹を訴えたが、勿論水も食糧もなく、仕方なく附近の畑にあった南瓜を生食して、飢を凌いだと云って居りました。

自宅では家族全員で看護に努めましたが、原爆症でしょうか、飲食物は嘔吐を催して受け付けません。日々衰弱の一端を辿り、一週間目の八月十六日、家族の見守る中に永眠致しました。

本人は中学卒業後文科系に進むことを志望していましたが、医学は長崎が発祥の地であり、医科に入学すれば自宅から通学も出来て安心だからと私が勧めた所、親思いの素直な弘基は私の意見を受入れて、長崎医専に入学した次第であります。文科系に進んでいれば原爆死を免れていたのに、私がそれを拒否して医科にやっただけに死んだのです。弘基は私が殺したようなもので、誠に申し訳ないと思い、毎月十六日（死亡の日）には必ず香を焚き灯明を点じて謝罪を続けて居ます。この精神的悩みは、私の生ある限り、永く尾を曳き続けることでありましょう。

（四五八） 医専一年生 朝 長 習 也

遺族 長崎市平和町三二〇 村 部 準（兄）

今年二月、会社の人事移動で、グビロが丘に近い平和町の社宅に移り、八月九日の慰霊祭にも出席させて戴き、休みの日には散歩をかねて、時々参拝させて戴いております。

弟の命日である八月九日が近づくにつれ、又グビロが丘にお参りする度に、母や弟と共に過した二十年八月九日以前の楽しい思い出が脳裏に浮んで、涙新たなものがあります。

当時私は京都大学に在学中でしたが、宇治の陸軍火薬廠の勤労奉仕を七月末でおわり、八月初めに大村の自宅に帰着して、久方振りに母兄弟三人で過した約一週間が、私の一生の忘れ難い思い出であります。又私は九月に京都へ帰る予定で、当日は習也が見送ってくれる筈でしたが、食糧難の京都の下宿生活がいやで出発を見合せたために、習也はいつもの通り、六時十分発の一番列車で長崎へ行くために家を出ました。しかし列車遅延の為一旦帰宅し、七時半頃再び元気な笑顔で出て行ったのが、一生の別れになるうとは、未だに断腸の思い入りのものがあります。

九日夕方から母と共に習也の帰りを待ちわび、十日は原爆負傷者の収容されそうな病院や学校、十一日は昭和十七年から約一年間在学したことのある長崎医大から、穴弘法を経て西山方面を隈なく探し求めた路々、未だに生き残っていた被災者の苦しみを見て、誠にこの世の生地獄の責め苦を思う時、むしろ原爆一発で即死した方が幸福

だったのではないかと母と慰め合い、十月に長崎医大より弟の骨の分骨を願って、その冥福を祈って居ります。

母も七年前に長崎の大学病院で死亡致しましたが、弟の死んだゆかりの大学病院で亡くなったことは、弟を思い続けた母にとって、せめてもの幸せではなかったかと考え、若し私も長崎医大にそのまま在学していたら、弟と共に被爆したであろうことを思い起して、生き残った者としてお参りするのが、亡き母や弟に対する唯一の供養であろうと考えております。

最後にグビロが丘に眠られる長崎医大で教えた教授の方々、同窓の人々、その他の方々の豊安らかならんことをお祈り申し上げます。

（四五九） 医専一年生 中 尾 泰 三

解剖学教室で被爆、午后三時半頃より友に救助され、裏山を越えて同日九時近く、片淵町二丁目の野上宅に帰宿、其後日赤長崎支部病院に入院、八月十七日死亡。

遺族 鹿児島県始良郡福山町二五八八 中 尾 ヨ ネ（母）

二十二年前のあの悲惨な長崎に長男は去りました。よき医者となる日を夢みつつ過していた私達には、突然の死になんと言葉をあらわしてよいから。

それから空白な毎日が続き、長崎の医学校を卒業した父親のあとを追って、大学も長崎に進学したのですが、原爆の犠牲者になろうとは夢にも考えていませんでした。

医者として働いていた父親も、急死して今はいません。幸にして三人の子供が残りの心のささえになっていますが、忘れることの出来ない長男の面影を、毎年の年忌には新たにしている次第でございます。

今度の慰霊祭には招待にあずかり、妹二人と一緒に参加することが出来、長男のほかに死亡された皆様の冥福を心からお祈り致しました。

お世話になっている調先生とも初めてお逢い出来、御子息を亡くされたにも拘らず遺族のために御活躍してくださることに頭がさかると共に、ありがたいことでございます。原爆犠牲者の名碑も立派に出来上り、学内のどこかに永久に保存される由にて

ありがたいことで御座います。

二度とこんな犠牲者が出ないような、平和な日が続きますことを、心からお祈り致します。

(四六一) 医専一年生 中 島 禎 三

学内にて遭難、八月十三日長崎戦災者収容所にて死亡。

遺族 鹿児島県贈弊郡大隅町坂元 中 島 きくえ(母)

(前略) 私事、故中島禎三の母でございます。昭和十五年、五男一女の子を残されて主人に病死されましたが、戦時戦後の混乱時を、数多い子供の教育や其の他の事に頑張って参りましたが、遂に私自身健康を害しました。現在は健康を取り戻し、又子供達もそれぞれ独立致しまして、私は一人のんびり隠居生活を致して居るので御座います。その為か世事にもうとく、この度の様な失態(註、永く大学との連絡がとれていなかった事)をいたしましたことを、深く恥入る次第でございます。

安らかに暮して居られるためか、尚更長崎で死んだ息子の事が忘れられず、戦後二十二年胸のうずく思いで過して参りました。数年前からは非長崎へ行き、原爆犠牲の故人の慰霊と共に、冥福を祈りたいと思ひ続けていましたが、実現出来ず誠に残念に存じておりました。この度立派に完成された名碑にも、禎三の名が刻まれて居ります由、故人も本望でございましょう。本当にありがとうございます。今年の靖国神社大祭の合祀祭に間に合いますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。(後略)

(四六二) 医専一年生 中 村 正 明

解剖学受講中被爆、八月十六日長与にて死亡。

遺族 福岡県新飯塚市新飯塚五―一七 三好看護婦会内 中 村 幸 子(母)

(前略) 私も主人と唯一人の息子を原爆で亡くしまして、一人ぼっちになっております。ただ今七十才と六カ月で、何と申しまでも寄る年なみ、いつまで働かれるか分りませんが、飯塚病院で附添をして働いて居ります。(後略)

(四六三) 医専一年生 中 山 三 郎

遺族 岐阜市梅ヶ枝町二丁目三四 中 山 福 富(父)

昭和二十年、戦争が激しくなった時、長崎県立中学四年在学当時、三郎の組では血判を押して予科練を志望し、一同打揃って福岡に行き、身体検査の結果三郎は不合格となったので、軍医として奉公すべく、医専に入学して原爆にあった次第です。

八月九日、あの恐ろしい原爆で、兄幹雄は医大内科で角尾学長の卒業試験中に頭部に重傷を受け、人事不省となって気がついた時は、あたりは火の海となり、助けを求め呻吟する被爆者の中で、二人の人事不省の学友をゆり起し、共に逃げ出して山を越え漸く帰宅しました。

第三郎は九日は行方不明でした。十日に医大の裏山に避難しているが重症との事を聞き、漸く探し出しました。周囲には多くの被爆者が倒れ、目もあてられぬ有様でありました。歩行困難な三郎を背負って、午後大学附属病院の内に収容しました。

本人にどうして裏山に避難したかと聞きましたら、記憶がないと答えました。夕方一里の道を歩いて食料と毛布を取りに帰宅しましたが、周囲は焼け野原で、電車、荷馬車、人馬が入り乱れて、その残骸をさらし、全く目もあてられぬ有様で、この世の地獄を思わせられました。持参したミルクを喜んで飲みましたが、思い出した様に母を呼んで来いと云いますので、自宅までは相当な時間がかかる、その間お前一人になるがよいかと云いますと、黙ってしまったのでそのままになり、母は臨終に間に合いませんでした。

それから暫らくすると気が遠くなると云って、「お父さん、長い間有難う御座いました」と遺言めいた事を云うので、「お前は元氣を出さねばならぬ、今死んでは駄目じゃないか」と元氣づけ、「父母は最後は岐阜に帰るから、お前もそれまでは父母と一緒にいて来て呉れ」と云い聞かせました。その後暫らしくて「天皇陛下萬歳」を叫びつつ臨終となりました。時に十一日午前四時四十分でした。遺骸を自宅に運びお通夜をしました。

十二日に簡単な告別式をすまし、度々発せられる空襲警報下に、西上町本蓮寺の境内で自らの手で吾が子の火葬をしました。遺骨を抱いて帰宅したのは、夕闇せまる頃でありました。多くの学友は遺骨すら見られないのに、私共は一夜でも語って臨終に

あったのを、せめてもの慰めとして居る次第であります。

(四六五) 医専一年生 長谷 茂

遺族 長崎市花園町一四一五 長谷 弘(兄)

先般来、長崎医科大学原爆遺族会の皆様の御尽力により、茂達が靖国神社に合祀され、本人も地下でさぞかし喜んで居り、又母コトは三十八年九月に死去しましたが、唯今存命なれば、定めて喜んで呉れることと思います。

本人に関する私の記憶は、只管勉学に打込んでいたこと、中学時代に両親から「たまには外で遊んで来い」と云われる様に、机の前にばかり坐っていたこと等です。当時の先生も勉強より体力作りだと話されて居り、卒業後海軍兵学校を受験しました。処、学術は通りましたが、身体検査で不合格になり、その為医者になって御国に御奉公すると医専を選んだ次第です。

市内新町一〇番地の家(原爆の時一切焼失)から通学して居りました。当時の家族は、母コト、姉孝子、弟茂、妹良子の四名で、私と弟肇は共に応召中でした。当日最も身近にいた孝子の想い出を左に記載致します。

當時を想い起して

内藤 孝子(姉)

ピカ!!一瞬の光の下、すべてのものが瓦解し、焼け尽されて二十二年余り、思い起すと、当日弟は勿論学校に、母は在宅、私は勤務地で防空関係の仕事をして居りましたが、一瞬家族は散りじりばらとなり、翌日私が帰ると母は大変喜びましたが、弟が帰らないので、二人でてくてく歩いて弟茂を捜しに参りました。

井樋の口、目覚町あたりまで来ると、段々悲惨な生地獄のような様相を現わし、目を覆うものばかり、大学病院の附近で、頭に包帯された方にお会いしましたが、たしかに古屋野先生で、お互によく生きられたものだと声も出ません。「大学の方は?」と聞きますと、恐らく駄目だろうとの事、でも弟だけは助かっていてと心に念じながら、又坂本町の坂を登り穴弘法の方まで捜しましたが、余りの凄惨さにどうしても基礎教室までは足がびませんでした。母はもつと行つて捜そうと申しましたが、異様な悪臭が鼻につき、人馬は倒れ、其の屍を乗り越える勇気がなく、泣く泣く引返し

した。今考えますと、矢張り母の愛は強く、同級の方で辛うじて火の中を抜けて帰った方を探し出し、消息を聞きますと、「長谷君はナで僕よりずっと後だから、多分駄目でしょう。僕は教室の入口だったので、這って夢中で此処まで来ました」との事でした。その方も、何日後苦しみぬいて亡くなりました。本当においたわしい事でした。

入学して一、二カ月の間、とても喜び勇んで通学していた姿が、今もありありと脳裏にこびりついて離れません。上級の人からドイツ語の辞書を譲って戴いたとか、臨床学の本が手に入ったとか、など云いながらも喜んでいたのも束の間、大学病院の渡り廊下の屋根剥ぎや、八月一日病院に爆弾が投下された時も、いち早く救急に当たったとか、当時学生として本当に祖国の為に働いた姿が、ありありと目に浮びます。八月九日が巡って来る度に想い出を新たにし、一層供養してあげねばと存じます。

それにしても四年前に亡くなった母は、今日の恩典をどれ程待っていたことか、でも墓の下で定めて喜んで居る事と思います。

(四六六) 医専一年生 西 大雲

遺族 福岡県築上郡新吉富村尻高 西 ブジ(母)

(前略) 私は西大雲の義兄で御座います。義弟を失ってから今日まで、母(妻の母)の涙を見る度に、慰める言葉もなかった私は、母と共に繰返して報告書(本誌五頁記載)を読みました。本当にありがとうございます。

因みに、私の父も長崎医専卒業後、故郷である当地で開業、昭和二十五年に七十才で死亡、その父が愛好した俳句の道を通じて、父と共に歟先先生御夫妻に親交を願って参りました。先生御夫妻は、父の死後昭和二十七年の秋に、私方と耶馬溪に各々一泊され、たまたま来宅の岳父と共に、一夜を語り明しました。

歟先先生の歿後いつか訪崎して、弟を初め犠牲になられた方々をお慰めし、又先生の霊前にお参りしたいと思つて居りますし、アサキ奥様からも、再三出崎を促されて居ります。来る八月九日の慰霊祭及び除幕式には、是非参列したいと母が申して居り

ますが、大分老いて来ましたので、私が同行したいと考えて居ります。先生には何卒御元気で、亡き坊ちゃんの分までお働き下さる様、遠くから祈っております。

最後に被爆後訪崎した母を思い、又弟を悼んだ私の拙作から、私の氣持を汲み取って戴いたら幸です。(昭四二、六、九)

○ 烈日を仰ぐ涙や原爆忌(朝日新聞選、以下同じ)

○ わが角帽を喜び受けて入学せし 君爆心に骨も残さざりし

○ 一片の子の骨もなき爆心に 母が拾ひし長崎の石

(四七〇) 医専一年生 野 口 陽 一

解剖学教室で被爆、行方不明。

遺族 佐賀市水ヶ江二丁目一三三 野 口 ムメ(母)

思い出すのも恐ろしい運命の日(八月九日)、思えば今から二十二年前に遡ります。が、去る二十年八月十四日に、亡陽一の下宿先から負傷との連絡がありましたので、少し位の負傷と思い、我家の庭先の防空壕も、陽一を連れて帰宅する積りで、広くしておく様に下の子供に云い聞かせ、二男と共に早速長崎へ参りました。その日はとても蒸暑く、まだ空襲中なので、防空頭巾に地下足袋はいて、我子を救う一心から、危険をおかして参りました。汽車が長崎駅まで通じないで、一駅手前で下車しました頃は、夕闇せまる頃でした。その駅には顔中包帯をした人や、目も開かない様に白い薬を顔中つけた人や、男とも女とも見分けのつかない様に変り果てた可憐そうな人、中には大きな荷物を背負ってソロソロ歩いて行く人、軒下は沢山の担架に横たわっている負傷者ばかりで、余りのむごたらしさに肝をつぶばかりで御座いました。遠くに見えるのは死人を焼く赤々と不気味に燃える炎、なまぐさい悪臭が鼻をつき、さながら生地獄の様な道中、夢中で歩いてやっとな陽一の下宿(片瀬町野上テル様方)に辿りつき、早速尋ねましたら未だ行方が分らないとの事、然し幾分の望みを得まして、翌日早朝、下宿の方と二男と三人で、負傷者を収容してある学校や市役所等に参り、貼紙に書いてある負傷者の氏名を探しましたが見当らず、学校では大勢の負傷者が治療を受けておりましたが、中には包帯の上までウシ虫が這上っている人、痛い痛いと

泣き叫ぶ子供、苦しさの余りウンウンうめく人、唯今思い出しても、身の毛もよだつばかりで御座います。学校の庭には、死体を焼いている方もおられました。

私達は一先ず下宿へ引揚げました処、螢茶屋の防護団の方から野上さんへ、下宿の人を焼いたから引取りに来てくれ、と連絡がありましたので、死体の人物や顔の色、顔形、特長など尋ねました処、陽一に間違いないものと思ひ、早速長大裏の穴弘法の麓へ参り、火葬してある骨の一部を拾って帰りました。本当にその時の氣持は、胸せまり只涙のみで、書き表わすことが出来ません。

陽一は五人兄弟の長男に生れ、中学一年の時に父を亡くし、その後は母一人の手で育てましたが、本当に親孝行な優しい子で御座いました。私も主人亡き後は陽一を杖とも柱とも思ひ、頼りにしておりましたのに、運命とは申しながら実に残念でなりません。然し日本は敗戦という悲しい運命に直面して、国民の皆様も大なり小なり、物質的或いは精神的な痛手を負われた事を思います時、私だけ悲しんではいられません。今後あの悲惨な戦争は、二度とこの地球上で繰返さない様に、心から祈って止みません。遙かに佐賀の空から、戦争犠牲者の方々の御冥福をお祈り申上げます。

(四七二) 医専一年生 長谷川 脩

遺族 長崎県杵岐郡郷ノ浦町本村舩六三一一一 長谷川 マト(母)

八月九日に長崎に恐ろしい爆弾が落されたと聞き、非常に驚いて十三日に主人が行ってみようと思いましたが、脩は学徒動員で大村に行った時も、ひどい空襲の中を運よく逃れましたので、今度は親戚の家に居ることではあり、大丈夫と思ってその儘寝みましたところ、脩が夢枕に立ったり、恐ろしい夢を見ましたので、これは唯事ではないと思ひ、行くことを決定しましたが、船もなく、その間に終戦となり、十八日に漸う帰還される兵隊さん方の船に便乗させて戴き、主人と共に長崎に着きました。

駅に降り立った時、あの目に余る悲惨な光景を見まして、脩はどんなだろうかと案じながら、親戚の家につきました。親戚は皆無事でしたが、脩が唯一人帰って来ないので、学校で亡くなったのではないかと聞いた時は、目の先が真暗になりました。

長崎では方々で火葬があつていましたので、火葬されてしまうと判らなくなると思

い、急いで先ず学校へ参りました。受付にあつた生存者の貼紙を見ますと、十番目に脩の名が記されていまして、其処に居られた先生に聞きますと、爆弾が投下されると同時に校舎が潰れ、その中から這い出したのが貼紙の人達で、其後の様子は分らないとの事でした。

それから校内は勿論、裏山まで八方探しましたが見当りません。医大裏の壕に今西草様の御遺体、又裏山の中腹に土肥達一様の墓標をお見受けしました。若しかしたら壱岐に帰っているのではないか、と思ひ帰宅しましたが、帰ってはいませんでしたので、又九月に長崎に参り、仮収容所の新興善小学校も訪ねましたが、子供の姿は見当りませんでした。

今度は生残りの同級生を探して尋ねることとし、先ず衛生課長中山様のお宅に伺いました。一年生のお坊ちゃんはお友達四、五人と裏の壕に避難されたそうですが、その晩に亡くなられたそうで、医大で診察中だった長男の方から、直後の状況を教えて戴きました。次には川頭琢磨様のお宅を訪ね、琢磨様は亡くなられたそうですが、お母様とお兄様から、当時の御様子をお聞きし、お写真も戴いて、子供と一緒に日記に致しております。

医専一年だった琢磨様の御生前のお話によりますと、空襲警報が解除されて警戒警報になると、解剖の講義が始まり、間もなく閃光と共に氣を失い、家が潰れ、氣がつくと友達が這い出しているので一緒に出られ、九時頃帰宅されて、その夜は家の壕で一夜を明されたそうで、翌日は家で寝ておられたが、夕方から下痢がひどく、病院に戸板で運ばれ、とうとう亡くなられたとの事です。

脩はどこを探しても見つからないので、或いは校舎と運命を共にしたのだろうと諦め、島原の方へ疎開しておりました衣類や参考書を受取りに行き、壱岐に帰り、九月二十六日に葬儀をすませました。脩が八月八日に出した手紙は、死亡後に受取りましたが、それには、角尾学長様が東京からの帰途広島で御覧になった、恐ろしい爆弾のことが書かれてありました。それと同じ爆弾で自分も死ぬなんて、夢にも思わなかっただろうと思います。(後略)

(四七五) 医専一年生 原 襄

解剖学教室で被爆、脱出してその夕方山里国民学校で手当を受け、十三日自宅(佐賀県神埼町四丁目)に帰り、翌朝未明死亡。

遺族 佐賀県神埼郡神埼町田道ケ里 原 和三郎(父)

(前略) 地方に居ります私共は、日頃何のお役にも立ちませず、相済まなく存じます。せめて八月九日の原爆記念日には、お詣りしたいと思いつつ、戦後をきびしく生きて参りまして、その意を得ず、今日まで過してしまいました。来年位は是非お詣りしたいと思っております。(後略) (四一、九、一六)

(四七六) 医専一年生 日 高 康 隆

遺族 宮崎県日南市油津材木町四二二 日 高 アヤ(母)

八月九日の慰霊祭並びに原爆犠牲者名碑の除幕式に案内を受け、二十二年間もあてがれていた長崎の地を初めて訪れようと、深く心に刻みつけた悲しみの胸を抱き、勇氣を出して参列することに決心して、宮崎の日南から出かけました。当日はとても炎暑のきびしい日でしたが、あのグビロが丘の広場狭しと参詣されて居ました。新しく除幕された犠牲者の氏名の刻まれた名碑の前には、生花やお供物と共に、線香の匂いも一入高く、代る代る焼香される遺族の方々が、当時の惨状を思い浮べてか、呆然として見つめておられ、私もしみじみと身にしみました。我にかえり慰霊碑の前にぬかずけば、万感胸にせまり、ただ冥福を祈るのみでした。キラキラ光る康隆の名前もすぐに目にうつり、あゝここに居たと無言のまま懐しい思いにふけり、これで二十二年間思いつめて居た我が子との対面も出来た様な気持で、ほっとしました。

今は原爆の地も復興されて居るのを見ますと、当時の悲惨な有様を想像して、新たに目頭の熱くなるのを覚え、又再びこんな事のない平和な国である事を祈りつつ、帰途につきました。

(四七八) 医専一年生 秀 島 克 巳

遺族 佐世保市須田尾町三六六 秀 島 ハマ(母)

思い起せば、あれから二十二年の月日が流れてしまいました。昭和二十年の春、克己は長崎医専と高等商船の試験を受けまして、どちらも合格致しましたが、あの子の父と叔母は、是非医学を勉強して祖父の後をついでくれと、拜まんばかりに頼みました。それに動かされてか、あの子は長崎医専に入学と決めました。

五月になっても、六月になっても、入学の通知はなく、やっと七月になって知らせがありました。私は佐世保の駅で娘と一緒に見送りました。その時は佐世保からの友人四、五人と一緒に、いかにも楽しそうに、汽車に乗って出発致しました。

戦火は益々烈しくなり、私達はその日その日を、防空に明け暮れました。八月九日長崎に原爆が投下され、私はあの子のことを案じながら、どうすることも出来ませんでした。

八月十日の夕ぐれ、白いシャツに数カ所血をにじませて、克己がしょんぼり帰って参りました。ああ克己は助かった、助かったと、家族みんな喜び合いました。近所の方々も、よかったです喜んで下さいました。

翌朝近所の方の輪タクに乗せて頂いて、共済病院に入院させましたが、ガラスの破片で受けた傷口は、あいたままふさがらず、身体は衰弱するばかりでした。

八月十五日、病院の先生から、今日の夕方頃までどうかと云われた時、それと前後して病院全体がざわめき立ち、先生方も看護婦さん達も集っていられた様でした。何事かと案じるうちに、誰からともなく日本無条件降伏との知らせで、私は居ても立っても居られず、あの子には知らせまいと廊下に出ました。命終ろうとする子に、我が国の敗戦を知らせたくありませんでした。私は愛別離苦の悲しみと、敗戦の悲しさがごっちゃになって、長い廊下を涙に顔をぬらしながら行きつ戻りつ致しました。あの時の気持を生涯忘れることは出来ません。私は思い直して病室にはいりましたが、その夕方一人の病室に移されました。あの子は命の終ることを知っていたようです。

あの子は小さい時から、仏教日曜学校に兄や妹達と通っていました。私もよくついて行って、みんなで恩徳贊をうたいながら、仏壇の扉を閉めていたあの子の姿が、今でも目に浮びます。その夜私はあの子の手を握って、お仏様のお話をしました。「先

に逝って仏様のお側で待っていてね。人生は短いもの、母さんもあとから参らせて頂くよ」。するとあの子は念仏を称えました。私も合掌致しました。その夜の零時五十分、敗戦も知らずに息を引き取りました。

あの子の魂は、如来様と共に永遠に私の胸に生きて居ります。

(四七九) 医専一年生 平 山 貢

遺族 長崎市立山町二五—二 平 山 ユキノ(母)
月日のたつのは早いもの、二十二年を経た今はこの様に平和で、犠牲者の冥福を祈る行事が行われ、子供達が犬死ではなかったと、思わず涙が出ます。

毎年八月が来る度にグビロが丘に登り、当時を顧みていつも泣きながらお詣りしています。若し今生きていたら——、その様なことを思い続けると、何時間でもきりがありません。

あの子は医大を卒業して軍医になり、お国の為に役に立ちたいと、一心に勉強していた姿が目につきます。その日も朝から元気に学校に出かけ、そのあとあの惨憺な出来事が起りました。そして時間がたつにつれて、浦上方面全滅、医大もそうだと色々のニュースが耳に入り、その夜はまんじりともせず、夜が明けた時どの様にして医大に出かけて行ったか、医大に辿りついた時のあの無惨な光景——。講義のあった一年生の教室から、学校の周囲まで隅なく探し、あらゆる手を尽しましたが、何の手懸りもありません。

その内学校で、生存者の名前が次々に書き出されましたが、それにも何の望みもありませんでした。こんなことを書いていたら、何時まで続くか、自分自身手が思う様に動かず、涙があふれます。

あの日の事ほどの様に書いても、実際にその境遇に立った人でなければ、本当の悲しみはわからないと思います。でも其の後遺族の方々の力で、今年は立派な慰霊祭が行われ、本当に頭の下る思いが致します。(後略)

(四八〇) 医専一年生 深 江 寛 男

生化学教室で遭難、八月十六日午後三時、自宅(南高、神代村)にて死亡。

寛男は原爆後十一日午後、原籍地南高来郡神代村の我家に辿りつきました。当日講堂で授業中に突然先生がお倒れになると、自分も気を失い、気付いた時は屋根の下敷になっていたので、夢中で体の出られるだけむしり取り脱出しました。その時足を痛めた隣席の学友が救いを求めたので、友人を肩にして山の方へ逃れたそうで、まだ手術後充分でないのに、自分より大柄な重い人をついだので、とても苦しかったと申して居りました。山の上では、背中に大怪我をした同級生や、苦しがつて水を求める先生や看護婦さん達の為に、病院まで下って水を持って来て飲ませ、又夜は結核病棟で見つけた布団をきせかけてやったりして看護していたが、その内自分も工合が悪くなり、高熱が出て地え難くなったので、西山から来た人上衣やお金入れをあけて、「あとは君に頼む」と、山で手に入れた竹杖をつき、貨物列車に乗って漸う帰って参りました。丁度その時内田信久先生(衛生学教室助教授、被爆死亡)の奥様が赤ちゃんを連れて、御主人の安否を尋ねに来ておられましたので、寛男はまあ命があつてよかったと思う一方、先生の生還をひたすら願うことになりました。

寛男は神代の佐藤先生も特に心配して、度々御来訪下さいますし、近親の者も集つて井戸水のリレーで顔を冷してやり、一方これは毒ガスを受けたに違いないと、応召中の身内の医師宅に行つて、本や雑誌を探したり致しましたが、何もかも無駄に終り、食事は被爆後殆んど居りませんのに、帰宅後は庭のぶどうとトマトを少々頂いただけで、食欲は更になく、次第に口中や咽が痛み出して、水さえ通らなくなり、又顔や体が黒ずみ始め、手や胸など毛細管が一一見られる様になって、終いには体全体が黒人の様な状態で、帰宅後約一週間生きて居りました。他処のお宅では、被爆者が苦しさの余り部屋中のうち廻つて居られたそうですが、寛男は姿勢よく寝たまま、最後は八十才余りの祖父を初め、近親者のとりまく顔を一人一人見まわして、静かに息を引取りました。その様子では、意識は最後までしっかりしていた事と思われまふ。我が家へ帰りましてから寛男は、「自分は辛だけれど、遠く朝鮮や四国から来ている人達は、そのまま苦しんで居て、お母さんにも会えず本当に気の毒

だ。早く少しでもよくなつたら、学校へ行つて又お世話したい」とか、「君達は軍医と同じだから、出征した積りでしっかり働かなければ、と角尾先生のお言葉もあつた」など、うわ言のように云つておりました。

寛男は前に長崎駅に爆弾が落ちた時も、色々お手伝いを致しましたそうで、その時の悲惨な状態をたびたび話していましたが、私はどうしたものかと迷つておりましたが、父親共々、こんな時こそ働くのが本分と、にこやかに家を出て行つた最後の日曜日の別れの顔が、今でも心に浮んで参ります。

【調 附記】 別便によると、寛男君は十九年に調外科で腹部の手術を受け、一年間休学したのだそうで、本来は「自分から勉強もし、努力を楽しんで居りました子ゆえ、後々伸びて行くだろうと、親馬鹿で喜んでいましたものでした」とのことです。

(四八二) 医専一年生 藤 田 正義

遺族 宮城県仙台市北六番丁二四七三 藤 田 かき(母)

(前略) 過日長崎の慰霊祭に出席させて頂きました折は、暑い夏空でございましたのに、何時の間にかすっかり庭の木も色づき始めて参りました、陸奥の此頃でございます。

皆様のお蔭で、久し振りに懐しい長崎の地を踏むことも出来、見事に完成した名碑も拜ませて頂き、感激の余り思わず涙の出る程でございました。今後ともどうかよろしくお願い致します。(後略)

(四八三) 医専一年生 藤 原 元 輔

遺族 長崎県福江市久賀町一〇三 藤 原 元(父)

(前略) 本年度の慰霊祭には、名碑除幕式のこともあり、参拝の心組でありましたが、その意を得ませず、目下医学部大学院に在学中の愚娘(元輔の妹)を代参致せました。

愚息元輔被爆についての思い出は、今日私の心情を痛くし、且つ拙文のよく簡潔に纏め得ない感がありますが、本人が重態の軀をもつて、海路遠く郷里近くまで帰りましたため、凡そ十二時間程を妻と共に看護なし得、死水を執り得ましたことを、僅か

に慰めとしているもので御座います。

彼の言によりますと、元輔は講堂にて被爆し、土砂と火陷の中を学友と手を繋ぎ合
って穴弘法に逃れ、翌日山を越えて、立山町の下宿に帰ったとの事でしたが、その後
数日間、下痢症に悩みながら治療を受け得ず、漸く便船を得て、郷里に近い福江町ま
で帰りついたのが八月十四日朝、病状は既に危態に瀕しており、警察及び消防団の庇
護を受けて居りました。外傷としては、背中に二個の火傷があるのみで、意識は比較
的はつきりして居りましたが、何分衰弱が甚しく、食物を受付けず、殊に視力を全く
失って居りましたため、手を執り合って語るのみで、遂に私達肉親の顔を再び見るこ
とは叶いませんでした。医師の治療も勿論効なく、燈火管制下の一夜を徒らに明か
し、翌十五日午前五時三十分、自ら母に乞うて数珠を両手に掛けて貰い、静かに十九
才の生涯を閉じたのであります。そしてその日に終戦の詔勅の下りましたことは、私
達の悲しみを一入深くせしめました。

入学のための出発に当り、戦局に鑑みて、私の与えた日本刀一口をリュックと共に
背に負い、欣んで乗船した姿が今は哀れに思い出される一つであり、中学一年生以来
継続していた日記、今は遺品となったその日記が、被爆前日、即ち八日八日で終つて
いることも、卒続に堪えぬ思いであります。八月八日の日記には、「新型落下傘式爆
弾」が広島に投下され、惨害のあったことが既に記入してありますが、そのほか八月
一日に大学病院が爆撃され、本人らは担架隊として、跡片付などに活躍した模様も記
されてあります。穴弘法の一夜、寒さに苦しんでいる時、一婦人に一枚の衣類を恵ま
れたことを、死の床にあつて感謝し語つたことも私には忘れられません。私は二十一
年五月、浦上の廃墟を訪ね、感慨に胸を閉ざされて低徊去り難きものがありました。
星霜茲に二十二年、思い出或は近況を寄せよとの御下命に接し、思あたらなるを覚
えますが、以上を以てお許しを得たく、ただ元輔の弟及び妹が長崎大学医学部を卒業
し、末弟も同じく在学中でありますことは、聊かでもその意志を継がせたかの思がし
まして、老境にある私の慰めとして居ますことを、附記させて頂きます。

(四八五) 医専一年生 古 田 弘 久

遺族 佐賀県杵島郡白石町大字福田二〇一八 古 田 義 道(父)

八月九日、特殊爆弾が長崎に投下された事を知り、安否を気遣いながら弘久の帰
りを待ちわびた。十日の晩、西村昭治君(同級生)が竜王駅に下車した途端に死亡した
との情報を聞き、十一日午前八時の汽車で長崎に行く。道ノ尾駅で下車、徒歩で大学
に辿り着いたが、その途上、被爆者達が見るに忍びない気の毒な姿で救いを求める声
が、今も耳底にこびりついている。大学の建物は焼失し、門衛はコンクリートの階段
でうつ伏しに死んでいた。学内の大木も、根本から二米位残して吹き飛んでいた。

次に大学病院に行つたが、正門入口の坂道は悲惨な被爆者で目も当てられぬ状態、
此処でも弘久の消息は判らず、山里町の下宿へも足を運んだが、家という家は悉く焼
けて、何処が道路やら全く見分けがつかない。遂に後日を期して帰路につく。次第に
絶望的な気持に襲われて行つた。

道ノ尾駅前の広場で、医療救護に當っておられた鹿島市の久布白・志田面医師(共
に鹿島中学の同窓生)から、白石町の医療救護団は鹿島市と交代したので、汽車で帰
るべく、駅長官舎で時間待ちして居る由を聞き、駅長さんのお宅に伺つた処、私を見
付けた医療団の小池医師が、「古田君喜べ、息子は助かった。ほら此処に居る」と云
われた時は、全く夢を見ている様な気持だった。お座敷で医師や看護婦さん達に取囲
まれながら、雑談を交わしている仲弘久の無疵な姿を見た瞬間、止め度もなく涙が溢
れ、胸一杯で、思わず知らず神仏への感謝の言葉も口の内、涙をふきつつ午後六時乗
車、十一時半頃白石駅に着く。

昼間、駅近くの各医家に送られて来た重傷被爆者の気毒な姿を見た家内や娘は、
白石駅に降りた無疵な弘久の姿を見て、声をあげて泣いて喜び、よかった、よかった
と連呼しつつ、五百米ほど離れた吾が家に着き、立石医師の診断に従つて安静にして
就寝。無疵と雖も疲労甚しく、刻一刻と悪化する。闇でも入手の困難な医薬品(リンゲ
ル、葡萄糖、カンフル、トリアノン等)を、幸にも親友荒木医師(ニューギニア方
面に出征中)の奥様から見舞として沢山贈られ、また知人の元佐賀好生館病院の婦長
を勤めた久原秀子さんは、見舞に来て帰るに忍びず、その儘付き切りで看護して頂い

た。その間立石主治医は、何回となく往診され、薬品にも恵まれ、最善の療養手当を施したにも拘らず、症状は三十九度の高熱が続き、胸部は肺炎の如く、胃は胃癌同様、一切の飲物は口中が爛れたため受けず、腸は赤痢患者の様に、一日に何十回となく「どす黒い便」を催し、衰弱が加わるのみで、薬品の反応更になく、而も意識は鮮明で、注射など自ら督促する有様だったが、遂に十七日午後十二時四十分、右の手は母に握られ、左の手は父に託しながら、立石医師夫妻、看護婦、学友、親戚、隣人の方々に看守られつつ、静かに冥目す。

青雲の志空しく、而も憧れの学舎で、有史以来先例のない原爆の犠牲と消え失せた倅の胸中、只万斛の涙あるのみ。

倅が病床で母に語った被爆時の概況は、次の通りです。

八月九日は講義中に敵機と思われる爆音を聞いたので、皆机の下に屈むとその瞬間に、ピカッと光ると同時にドカンと音がしたと思ったら、建物の崩れるのと火の出るのが一緒であった。学友達の悲鳴の中を、何処をどうして逃げたか判らないが、無我夢中で裏山へのがれ、気付いた時は学友三人と、その儘ぐったりして十一日朝まで山で過し、お互いに励まし合って大病院に降り、そこで注射針がないため葡萄糖を割ってコップ一杯飲まされ、大学の車で道ノ尾まで送られた。お父さんに会った時は何とも云われぬ嬉しさで一杯であった。「お母ちゃん、長崎の話はもう云わんけん、お母ちゃんも聞さんしゃるな」と。

(四八七) 医専一年生 前 川 茂 樹

遺族 佐賀県伊万里市二里町大里甲二二〇七 前川 文 平 (父)

(前略) 倅茂樹は、当時長崎医大附属医学専門部の一年生で、被爆死亡者の一人ですが、本人から聴取した事項は、次の通りです。

八月九日は授業中に突然青色の光を認めたので、直ちに夢中で机の下に潜り込み、その後は意識不明となったが、「助けてくれ」との叫び声で我に返り、友人三人と暗い中を廊下伝いに山中に避難して一夜を過し、翌日長与の自分の下宿に辿り着いた。しかし下宿の主人も、三菱の工場に出勤中原爆に遭難して消息不明、その夫人も妊娠

中で他人の看護など出来ず、その為ただ成るに任せて十分の治療も受けずに二、三日を過したが、腰痛、背痛、悪寒発熱、食欲不振、全身倦怠、下痢等を来し、苦悶を訴えるに至ったので、遂に十二日に苦痛を堪え忍びつつ汽車に乗り、ただ精神力のみで辛うじて有田駅についた。幸にその頃学徒動員員有田の工場に通っていた倅の妹と遭い、附添って貰って漸う我が家に帰って来た、とのことあります。

こちらでは長崎の倅から何の通知もないので、被害はなかったのだろうと不安に思いつつも、その儘過していました。然し余り消息がないので、十二日に長崎に行ってみようと思っていました処、夕方次女と一緒に帰って来たので、初めて被爆したことを知りました。

その時の症状は、臀部と背部の打撲傷、発熱三十九度五分、全身じん麻疹、口内炎、咽喉炎、咽頭に白い斑紋が見え、開口不充、口臭著しく、腹痛、下痢、全身違和倦怠を訴え、苦悶の状が著明であった。帰宅後は安静、注射、輸血など、万全の治療を施しましたが、症状は増悪する一方で、遂に十七日午前四時に鬼籍に入りました。

九月二十四日に妻と共に医大に行き、当時の状況を聴き、又倅の病状経過も話しました。尚現地も見ましたが、煙突は曲り、建築物は破壊され、馬の焦げ迄も見て、原爆の恐ろしさに感慨無量でした。四国から態々遺骨迎えに来られた方もあった様ですが、「子供の顔を見ることも出来ず、僅かのお骨を持ち帰ります」と、実に悲惨なお話を伺いました。そのお方に比べると、私も倅も幸せだったと申さねばなりません。原爆の恐ろしさ、悲惨さは、その遺族でなければ判りません。私は核が人命を奪う原爆でなく、人生に幸福を与える原動力となることを心から願います。戦争には最早懲りました。(中略)

老人の愚痴ではありますが、若し倅が原爆に遭遇しなかったら、現在は一人前の医師となり、私の後継者となって、私の老後を安穩に過ぎさせる事が出来ただろうと、矢張り凡人の愚痴が出て来ます。

(四八八) 医専一年生 松 鶴 璋

遺族 福岡県八女市福島区大正町四二五―二三七 松 鶴 弘 之 (父)

二十二年前の八月九日午前十一時頃、私はラジオ放送で、「只今長崎市上空に新型落下傘爆弾が投下された。市民全員退避せよ」と、悲痛な声で繰返された後間もなく、腹の底に響く様な重苦しい爆音を聞いた。咄嗟にそれは広島島の様な爆弾であろうと直感した。そこで長崎大学はどうであろうかと早速電話を申込んだが、いつまで待ってもついで呉れない。局に長崎大学は末だ出ないかと聞くと、どうも電話の故障らしいと云う。翌日も翌々日も申込んだが、ただ故障とのみで何も教えて呉れない。

その内に終戦の日を迎えたので、十六日には早朝から妻と共に持たれるだけの物資を持って駅に駆けつけ、長崎行の切符を出札に申出たが、汽車は道ノ尾までしか行かないというので、兎に角それを買って汽車に乗込んだ。道ノ尾駅に下車して見れば、重傷者、軽傷者、戸板に乘せられて運ばれる人、本当に地獄の絵巻物を見る様な悲惨な有様に、身のすくむ様な驚きであった。一部の人は「どうせ降伏するなら十日ばかり前にして呉れたら」と嘆いていた。

土地の人に大学の収容所のありかを問ひ、岩屋町の公民館に行った処(午後四時)、責任者の先生のお話によると、璋は昨日まで外傷もなく元気であったが、悪性の赤痢(註、急性放射能症状の一つ、血便)が出て本朝六時に死去し、その他も七人死去したとのことであった。公民館にはまだ多数の被爆者が居られて、水が欲しい、水をくれと放心状態で叫び続けて居られたが、その姿はほんとに痛ましくて、涙が止め度もなく流れた。持参した物資は、病氣の方に差上げて頂くよう寄贈した。

死体はこれから火葬すとの事であったので、火葬場に当てられた場所に行ったが、それは収容所の近くを流れている小川の河原で、八人の死亡者が一緒に茶毘に附せられた。翌朝行ってみると、薪が少なかつた為か半焼になっていたもので、附近の小学校に行き、事感を話して薪を相談した処、爆風でこわれた窓枠など沢山分けて戴き、妻と二人で神に祈りながら焼いた。これで璋も神の御許で、永遠に平和な眠りにつくことであろうと語り合った。そして原子爆弾の恐しき、みじめさを目のあたりに見て、再び戦争が起らない様に、神に祈りを捧げながら御前にひれ伏した。

【調 附記】 松鶴弘之様は今年八十才の御老体ですが、末永く御健勝と御

多幸をお祈り致します。

(四八九) 医専一年生 松 田 藤 祐

遺族 佐世保市塩浜町三一六 松 田 くら(母)

(前略) 丁度藤祐達の中学時代は戦争の真只中で、卒業の日も空襲でした。卒業式では代表で答辞を読み、松浦伯から御紋入りの硯一式を頂きました。進学の方もなるべく近い所と思い、佐賀高校と長崎医専を受験させ、両方共合格したのですが、長崎へやることに致しました。

二十年七月一日に入学して、八月九日に原爆に遭った訳であります。その時は佐世保から早速出掛けようと思いましたが、仲々汽車に乗れませず、十一日の晩に漸く道ノ尾駅まで行き、十二日早朝歩いて大学へ参りました。学校の赤煉瓦防空壕の所で尋ねていましたら、私の声を聞きつけて壕の中から出て来たのが藤祐で御座いました。

藤祐の話によりますと、爆弾の落ちたのは丁度解剖の講義中で、頭をやられてはと思ひ咄嗟に机の下に入ったそうですが、目の前が真暗になって、暫らくして目を開けたら、あたり一面火の海だったので、夢中で裏の山に這い上り、皆と一緒に避難していたが、夜寒くてたまらないので、十一日夕方漸く防空壕まで降りて来たとの事でした。そこには学生さんが三人居て、一人は来春大学を卒業予定の静岡の宮本(註、精一君?)さんで、手など全部包帯で包んで居られ、今一人は佐藤さんと云われる方で、今朝亡くなられ、一番奥に白い布をかぶせてありました。その間にも、今誰先生が亡くなられたと知せにみえたり、見渡す限り生地獄の有様で、何と申しましょうか、口では云い表せない有様でした。

本人は腰の所をやられていましたので歩けません、大学生の方に背負われて浦上駅へ行き、途中空襲に遭いながら、漸く佐世保についたのが午後四時でした。駅には弟の和夫が担架を持って来ていましたので、それに乗せて家へ運び、すぐ近所の医者に診て貰って、共済病院に入院させ、出来るだけの手は尽して頂きました。

入院中は大学からも見舞って戴き、しつかりせよとお言葉も頂きましたが、自分も氣は強く持っけていても食事が通りませず、日増しに衰弱するばかりで、しかし最後

まで意識ははっきりしておりしたので、終戦の事も本人の気落ちせぬ様、戦争は話し合いで止めになったと話しました。

最後は宮城遙拝やら、天皇陛下万歳を唱え、遺言は「自分がこんなになっても気を落さぬ様に体を大事にして下さい。」と云い、兄弟にもそれぞれ遺言を述べ、恩師の石田先生、幼稚園からの親友高橋君にもよろしくと云い、弟の和夫には、松浦伯から戴いた頌や、平泉清先生の「武士道の復活」「菊池勤王史」の二冊を譲るからしっかりと勉強するように申し、立派な最後で御座いました。

中学時代から東大教授平泉清先生の門下生で、いつも精神修養をして、真面目一方に御座いました。知人の話では、道で会っても礼儀正しく御辞儀をしていた姿が、目にすぎる様だと話して下さいますし、特に親孝行で御座いました。

お友達の方を見る度に、今生きて居たらと思ひ出したり、又長崎で御一緒だったお母様方とお会い致しますれば、時には集って思ひ出話も致しながら、慰め合いたいと思ったりして居ります。(後略)

(四九六) 医専一年生 三島 清和

遺族 鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍二四七 三島 千枝子(母)

(前略) 私は原爆犠牲者三島清和の母で御座います。此度は一方ならぬ御苦勞を重ねて名碑を立てられ、霊となりたる清和も、どれほど喜んで居ることでしょう。遠き奄美の島より伏して御礼申し上げます。

清和は家の長男に生まれました。家は貧しくとも人並に勉強させたい気持で、長崎に居る従兄を便りに入学させました。(中略)

弟も師範学校に入学していましたが、二人とも一緒に死んでしまったのです。(中略)

主人が病身ですので、私が代りに、我身も顧みず失礼致しました。

(四九九) 医専一年生 溝口 涉

遺族 佐世保市上京町七一 溝口 勇三(父)

溝口涉は八月十一日午後六時頃に、非常に疲れた様子で帰宅しました。途中諫早で

下車するように云われたそうですが、その儘帰って来たと申していました。

見たところ、顔と背中に擦過傷がある位で、大したことはなさそうでしたが、非常に疲れているのが不思議でした。皮膚の色が赤黒くなっていました。食慾は十八日に死去するまで、殆んどありませんでした。十二日に共済会病院に入院し、十五、六日に退院、その間に三、四人の佐世保中学同窓の医専生が入院していましたが、涉が最後まで生存したようでした。

十七日に佐世保在住の友人と、レコードを聞いて(涉は非常に音楽が好きでした)皆さんとお別れの会をし、十八日午後八時頃、トラックで私の郷里佐賀へ帰る途中、早岐で「お母さん、綺麗な月だねー」を最後の言葉として、母に抱かれて十八才の生涯を終りました。(後略)

(五〇一) 医専一年生 光 永応美

遺族 東京都東村山市栄町一八八 光 永スキ(母)

(前略) 度々御連絡有難う御座いました。今年は二十三年忌で、私も当地でテレビ、ラジオで心からお参りしていました。皆々様の御参拝、御苦勞を感謝致します。

(後略)

(五〇二) 医専一年生 峰 寛

八月九日学内で遭難、脱出して下宿(片淵町三丁目、川野重信方)に辿りつき、学部一年大坪陽一郎君に伴われ佐賀市に行き、県立病院に入院、八月十六日、終戦の報を聞き、同日病院にて死亡。

(五〇三) 医専一年生 宮 本幸弘

遺族 長崎県北高来郡高来町湯江三部一名二九三 宮 本ツル(母)

○ 八重つぼみ一夜の嵐に葉がくれと 涙の川とかわるすがたは

○ 忠孝に不運つたなく散る花も 白木のすがたにかわるあわれさ

【調 附記】 この短歌は、水茎の跡も綺麗に書かれていましたが、写真板にも出来ないもので、これで失礼させて戴きます。

(五〇四) 医専一年生 卒 田 五十夫

遺族 佐賀県武雄市東川登町内田 卒 田 ノ ブ (母)

謹んで五十夫の思い出を綴らして頂きます。五十夫は大阪市にて生れ、丸々と肥った、外の兄や弟より勝った幼児で御座いましたが、喘息に冒され、主治医より小児喘息だから、十才位までに癒ると云われましたけれど、真夜中の発作時には、布団の上に乗って夜を明かすことが度々でした。

二才の時、父親が佐世保に転動しましたので、潮見小学校に入学、小高い小学校で時々の発作に困りましたが、夏休みには、早朝洗面器をかかえ、休むことなく出席する意地のある子で御座いました。三年生の時父親が大分市に転動になり、女子師範附属へ入学を許可され、ここでもあれこれ療養に努めました、依然として発作が起ります。その頃は三つ違いの弟位の背丈でした。

扁桃腺を切れば喘息は癒ると聞き、手術をして頂きましたが、効果はありませんでした。その時主治医の先生から、こんなしっかりした子は初めてだとお誉め頂いた事を、記憶して居ります。

或る時、女子師範の武政校長の奥様と色々話してましたら、奥様にも喘息のお嬢様が居られ、お灸で癒したから、私にも鬼になった積りでやってみたらとのことでした。早速お灸の先生にお願いして始めましたが、何しろ子供に火をつけることは、親として凌ぎ難い事で、つらくはありましたが鬼になって一カ月続けました処、さしものに濃厚だった喘息発作がびたつと止まりました。本人は元より、家族一同の喜びは云うまでもなく、先生にも大変喜んで頂きました。

それから体がめきめき成長して、三つ違いの兄さんらしくなりました。念のため体を作る意味で高等小学一年まで行かせ、中学は旧制の大分県立中学五年を終え、自分が弱かったので、僕は医者になると心に決めておりました。

長崎医大附属医専に入学を許可され、大東亜戦争たけなわ六月に、大分より古里へ帰り、短日の滞在にて父に連れられ、長崎へ出発致しました。家を出る時祖母に、僕は絶対にこの家には帰らぬと申したそうで、父にせき立てられても縁側に寝転ん

で、一向に出発しようと致しませんでした。家を出る時は曲り角でにこにこしながら、失敬をして暫らく立って居りました。そのゲートル姿が今も忘れられません。

八月七日、一通の葉書に十二日に帰ると書いて来ましたので待つて居りましたが、あの恐ろしいピカドンにて永遠に帰らぬ旅路についてしまいました。原爆から一週間目にやっと長崎へ行ける事になり、父が一人で参りましたが、帰宅したのは翌日の早朝でした。丁度一時間前にお母さんと云って私にしがみついたのは五十夫でしたが、それは夢でした。父は一人で茫然として帰って参りました。

(五〇五) 医専一年生 室 園 重 義

遺族 福岡県筑紫郡筑紫野町昭和町一ノ組 室 園 美代子 (母)

それは久留米空襲の翌朝のことでした。鳥栖のお友達から、重義が長崎を脱出、一泊しているから迎えに来いとお知らせがあり、思いもよらぬ我子の有様に、胸が痛みました。

外傷は右腕骨折、脚に二カ所の火傷、これはズボンの破れから光線が直射した為の傷でした。それ以来一物も咽を通らず、高熱は出るし、目やに、尿、唾液、すべて分泌物は鮮やかな黄色、その液がついたタオルなど、洗えばピンク色に変って消えてゆきます。不思議さ、気味の悪さに、おびえた事が忘れられません。

久留米に連れて帰りましたものの、空襲後で手当も思うにまかせず、田舎の親戚に逃れて行きました。丁度その村には、次男が入学していた航空員養成所が疎開していて、そちらの校医様に御厄介になり、当時としては破格の手厚い看護を受けましたが、この様な病人は初めてで、治療が手につかぬと嘆かれました。最後には咽にしみると云って水も飲めぬようになり、八月十五日の夜、敗戦の騒ぎのさ中に亡くなりました。丁度臨終の直前、学友松鶴様の御両親が、御子息の安否を尋ねてお出でになりましたが、「松鶴君は―」と云いかけて死にました。御両親はその後長崎に探しに行かれ、岩屋公民館で御子息の亡きがらと、悲しき対面をなされました。

私はあと四、五日間呆然として居ましたが、畳の上で介抱も出来たし、二人の息子の内一人だけでもお国に捧げ得たと思つて、すっぱり諦め、一層奮闘しようと仏前に

誓いました。重義が五才の折、夫は若死し、母子家族のことですから、未だに老の身に鞭うち、働き続けて居ります。若しや重義がこの世に出て来て私を見たならば、「お母さん、年寄りましたネ」と申すことでありましょう。

実にあれから二十余年の歲月、悪い夢を見ているような思いがいたします。

當時のつたなき歌を二つ三つ。

○ ^{はたち}二十才にもなりてゐたるに幼子の 如く甘えつつ死にてゆきけり

○ 我子のみ死にたる如く思われて 悲しくて悲しくてならぬ時あり

○ 今一度生き返り来よ我儘も 如何なる無理も許してやらむに

(五一〇) 医専一年生 山崎 邦雄

遺族 千葉県柏市光ヶ丘広池学園住宅西一八号 山崎 きみ (母)

代筆 加藤 弘子 (妹)

(前略) 父は十年前に他界し、母は八年前より病床にありますので、私は山崎邦雄の妹でございますが、代つてお便りさせていただきます。

当時私は十才にも満たない子供でした。今は二兄の母となり、病氣の母も共に過して居ります。今後ともよろしくお願い致します。

【調 附記】 山崎邦雄君の御遺族は長い間不明でしたが、去る八月、同窓生故百

崎知次郎君の御母堂百崎ふし様から、私宛に「故山崎邦雄さんの父君山崎榮作氏は、故知次郎の佐賀高校時代の数学の師で、既に他界されて居ます。名簿では住所不明となつておりますので、調べましたところ判明しましたのでお知らせ致します」という

お手紙が参り、山崎邦雄君の御母堂きみ子様の御住所を知らせて頂きました。誌上を借り厚く御礼申し上げます。

(五一一) 医専一年生 山下 繁

遺族 福岡市箱崎町綱屋立筋八組 川瀬方 山下 ミヨシ (母)

遺族 福岡市箱崎町綱屋立筋八組 川瀬方 山下 ミヨシ (母)

二十年八月九日、原爆当時の有様、全く残酷の一語に尽きます。

原爆の後数日は亡き子を探し歩き、諦めて家に帰りましたものの、数カ月というも

のは、どこかの隅に逃げのびて帰って来るような氣ばかり致し、只今では考えても空しい夢のような思いでございますが、その当時は本心で待ち侘び、親戚からは、あの悲惨な状態で生きているとは思えないから、それよりも早く仏に祀り供養するようにとすめられ、親切に云われた事が、私には腹の立つような思いでございました。それから二十余年の今日まで、見るもの聞くもの、折にふれては思い浮べ、私一生忘れる事は出来ないものであります。これはきつと遺族の皆様も、現在の境遇は違いましても、御感想は同じ事と存じます。(後略)

(五二四) 医専一年生 山下 嘉計

解剖講堂で被爆後、早岐国民学校に収容され、後佐世保市の自宅に帰り療養中、数日後に死亡。

(五二六) 医専一年生 吉岡 董

遺族 大分県宇佐郡四日市町東山下 吉岡 ハル (養母)

合掌、重ね重ねの御便り誠にありがとうございます。また董のことにつき一方ならぬ御世話に相成り、御礼の申し上げようも御座いません。

私、董をなくした後は、長崎に行ったかと思えばまた帰り、三年の間迷いました。

自分の正気はありませんでした。

私別院の和尚様の御法話を頂き、やつと明るい道に入らして頂きました。只今では毎日が御寺参り、有りがとう御座います。

また八月九日に参らせて頂きます。お手数ながら時間と場所を御願ひ申し上げます。私七十四才、おわかりにくいでしょうが、およみ下さいませ。御返事下さいませ。

合掌

(五二九) 医専一年生 米 精一

遺族 長崎県南松浦郡富江町広町 米 トメ (母)

今年も早や余すところ十日足らずとなり、何となく心せわしい毎日で御座います。

(中略)

実は原爆後二十一年も過ぎたのに何のお知らせもないので、医大並びに医専の生徒さん方は、犬死も同然になったのかといつも残念に存じて居りました処、新聞で拝見して実に驚いたのでございます。やっぱり長崎の同志の方々は、私こそ知らなかったけれども、数年前から苦心して遺族の為に出来るだけの努力をされていて下さったのと、感謝の余り泣けて泣けてなりませんでした。何にも知らない私は、本当に馬鹿だったと恥かしい思いが致しました。

早速女学校時代の松尾様へ連絡致しました処、早速詳しいお便りを頂き、又々涙にくれました。何年たっても、あんな死に方をしたので、忘れようとしても忘れられません。自分の年を重ねるにつけ、最近はその様な悲しみを感ぜ、お手紙を読んでは泣き、御返事を書きながら、涙で書けない様になったり致します。

十二月十七日に田吉様からお手紙を頂き、どなた様かと思いながら開封しました処松尾様よりの連絡によって、調先生の方の名簿にも入れて頂いたとの、御親切なお便りでございました。私本当に安心致しました。これで死んだ子供も喜んでいいることと声をあげて泣きました。四十二年には必ず靖国神社に合祀出来るものと、一日も早く実現することを楽しみに致しております。(後略) (四一、一二、二三)

【附記】 米精一君の名前が、大学に残っている記録になかったので、連絡が遅れ失礼しましたが、二十年三月発行の長崎新聞の入試合格発表欄で、確認することが出来て嬉しく思いました。医専一年生は人数が多く、その上入学後一カ月位で死んだので、生き残り学生の記憶から洩れたものと思います。この様な学生がほかにも数名ありました。

(五二〇) 医専一年生 力 武 豊 和

遺族 佐世保市保立町二〇一六 力 武 春 次 (父)

(前略) 去る八月九日の慰霊祭にお参りして、あの見晴しのよい丘の上に、原爆犠牲の諸先生並に学徒の名前を刻んだ立派な金属板を見、我が子の名前を確認して二十二年前の今日を思い浮べ、自然に涙の出るのをどうする事も出来ませんでした。三千世界に子を持つ親の心は皆一つとみえ、他のお母さんと思われる方々が、ハンカチで

目を拭いておられるお姿も、見受けられました。

私は慰霊祭終了後、亡子が下宿していた家を訪ね、当時の模様を詳しく尋ねたいと思いましたが、ただ新大工町というだけで下宿先の名が判らず、困って当時の町内会長様を訪ねて事情を話しました処、多分それは福地様だろうと教えて戴きました。それで早速福地様宅へ参り、力武豊和の名を申しましたら、間違いなくその家に下宿させて貰っていた事が判明致しました。

下宿の御主人は、少し体の具合のお悪い六十四、五才の老婆でしたが、座敷に通され、豊和の最後の状態を詳細に知ることが出来ました。お婆さんのお話によりますと、原爆の落ちた八月九日は、夜になっても豊和が下宿へ帰らないので、福地様では心配され、十日になったら様子を見に大学に行ってみようと思つて居られたところ、十日午前十時頃警防団の担架に乗せられて帰つたそうで、すぐに私の所へ連絡しようとしたが、電信も電話も不通で、どうする事も出来なかったとの事でした。

幸い御親戚に医者が居られたので診て貰い、出来るだけの看護をして戴いたそうですが、八月十四日にととう息を取つたとの事です。その間の苦しみ方は非常なものだったが、梨を一つ大変おいしく戴いたそうで、お話を聞いている中に、私は胸のつまる思いが致しました。

死骸も、豊和の分は福地様の方々が手ずからお焼き下さったとか、誰の骨とも判らぬ遺骨を拾つて居られる遺族の多い中に、私は間違いのない豊和の遺骨を戴くことが出来て、改めて感謝の涙が湧き出で、福地様に心から御礼を述べて我が家へ帰りました。

(五二二) 医専一年生 若 杉 正

遺族 長崎市矢ノ平町二九〇 若 杉 キ ヤ (母)

昭和二十年八月九日は、私にとって一生忘れることの出来ない、又一番悲しい日でありました。その日の朝、私が「今日は空襲警報が発令されているから、学校は休んだらどうですか」と云いましたが、「いや、私達は警報が出たら大学へ行く事になっているから」と云つて、鉄兜、巻脚絆、地下足袋の服装で出かけて行きました。

その日の十一時に原爆が落ちたので必配して居りましたが、その夜帰って来ませんでした。十日に大学へ探しに行きました。大学へ行く道には草木が倒れ、人や馬が死体となって、想像以上の状態でありました。大学の裏門の処へ行った時、大学の先生らしい人が、水道の水を飲んで居られましたから、私が「若杉」と云う医専の一年生は知りませんかと御尋ねしましたら、上の空の様に、「そうだなあ、今そこに居たようだがなあ」と云われました。

それから私は、倒れた木の下をくぐって教室の方へ行きましたら、上の方から学生さんが下って来られたので、お尋ねした処、「今御宅へ連絡に行く処でした。若杉君は葉専の防空壕に居ります。」とお話でしたから、行って見たら、見難い怪我はして居ませんでした。立つ事が出来ませんでしたので、南高来郡有家村から来ておられた救援隊の方に頼んで、医大の防空壕へ担架で運んで戴きました。

私は一旦自宅へ帰りましたが、又直ぐ医大の防空壕へ行ってみましたら、その時は最早死亡して居りました。私が正のことをお尋ねした二人の方も、或いは死亡されたのではないかと思つて居ります。

死亡者「正」自身の話——「私は被爆の際打撲傷を受けましたが、友人の学生が材木の下敷になって居たので、材木をはねのけて一人助け出しました。その時は既に火がまわつていて、他の人は助ける事が出来ず残念でした。

私はその後穴弘法様の方へ避難し、夜になってから葉専の防空壕へ漸くやって来ました。家の下敷になった学友は、十人ばかり脱出しました。」

(八七三) 医専一年生 中山 昭之

遺族 佐世保市浜田町二——中山 愛子(母)

昭和二十年六月二十九日の佐世保空襲にて被災、住む所もなく、佐世保からの医専入学者は、十日間延期されて入学しましたが、折角新調致しました学生服も焼かれ、破れ服で入学した時の哀れな姿、でもその時は先に楽しみもあり、物のなくなった事は却って勇気が出ました。

忘れもしない八月九日は、丁度土曜日だったと思いますが、その日はあの子が初め

て帰省する日でしたので、主人共々好物の品を取揃え、楽しみに待つて居りました。所が原爆投下の事を聞き、楽しみが一辺に心配と変り、主人が長崎に出かけましたが行き違いとなり、昭之の方が佐世保へ帰って来ました。しかしその時は既に口に膿をもったものが出来ていて、北病院に入院させましたら翌日から発熱し、下痢が夜となく昼となく続き、空襲はあるし、ほんとに可哀想な位やつれて、被災当時の模様を聞くと、「自分がよくなってから話すから」と云つて、語つては呉れませんでした。その内昭之が一番残念がったのは、病中に終戦を知りました時でした。何と云つて慰めていいかわかりませんでした。その当時佐世保は水不足で、井戸の水をせつせと取りかえ冷してやりましたが、その甲斐もなく十七日早朝に他界致しました。

もともと本人は海兵志願で、兵学校を受験、一次は合格しましたが二次に落ちたので、本人は予科練を志願する積りで居りましたのを、亡き主人と二人で、お国への御奉公なら軍医になつてお勤めしても同じだからと、医専をすすめたのがこんな事になりました。あの子にすまないといつも主人と語り合つて居りました。この度靖国神社に合祀されるようになります。何よりあの子に申訳が立つと喜んで居ります。今は亡き主人も、きっとあの世で、あの子と共に喜んで居る事と存じます。

(八七四) 医専一年生 小森 巖

遺族 福岡県行橋市大字下崎 小森 増雄(父)

此度原爆思出の手記集が出来ます由、適当な資料をお送りする事が出来たらと思いますが、記録は勿論、記憶すらも二十余年の歳月を経て薄らぎました。彼は整理中愚息の絶筆とも云える手紙一通見つかりましたので、別紙にコピーして送付致します。

当時佐世保の拙宅は空襲で被災、郊外の親戚宅に家庭を疎開し、私自身は現役海軍々人で、陸戦隊員として長崎県北部海岸の警備に従事中でした。八月十五日は停戦と愚息の死が重なり、武装解除や部隊の処理、家族の処置等、全く何を如何すべきか施す術もなく、葬式とは名のみで、遺品の整理は勿論、長崎行も不可能な状態でした。

八月九日に長崎市が原爆で全滅、多くの死傷を出したことはニュースで知りましたが、詳細は知る由もなく、吾子の安否すら確め得ない儘、同級生の森山、奥野両君の

家族と鳩首話合ったが、何しろ通信も交通も杜絶して、その回復を待つ以外に方途なく、徒らに日を送るのみでした。処が十三日に三人で長崎行を計画し、十二日夜おそく頭部負傷の森山晃二君と愚息二人が帰り、奥野昭君は生死不明との事でした。

帰宅後巖が述べた経過は、大略次の通りでした。即ち「八月九日は是非帰宅しよう」と話し、早朝に下宿を出て長崎駅でそれぞれ切符を手に入れ、大喜びで登校、授業が終り次第帰る予定の処、十一時受講中にピカッと光った瞬間、建物が倒れて下敷となり、一時意識を失った。気がついたら別に怪我もなく、外の明りも見えるので、這出すことに成功、屋外には他にも同様の状態の友達がいたので、一緒に裏山を越え、徒歩で片瀬町の下宿に帰ったが、途中数人の学生や町の人が倒れているのを見ても、これをどうするという気力もなかった。夕方近く下宿に辿りつき、半壊の家に森山君を同宿させ、負傷の手当などしてやった。処がどうしたのか、自分も口内が痛んで食物がとれなくなり、早く帰宅したいと思っていたところ、十二日に至り汽車開通の知らせを受け、一同勇気百倍、大喜びで駅に行き、当局の厚意で無賃乗車の処遇を受け、森山君を抱しつゝ同夜十時頃中里駅に到着、同君を家に送り届けた後帰宅した」との事であった。帰宅後の症状は、黒便を排泄し、素人目には腸チフス患者の様であり、高熱が続き、氷塊のみを要求し、体の一部に蚕豆大の黒斑五、六個を認めたが、別に化膿や皮膚の爛れは見られなかった。口中のただれは次第に白くなり、腹部は上方より順次硬くなり、絶命前は一枚の板の様に硬直していた。意識は判然として居り、無意識の発言はなかった。

巖は以上の様な状態で十五日遂に鬼籍に入りましたが、同僚の森山晃二君は一日おそく、十六日に死亡されました。

【調 附記】 小森巖君から佐世保市中里の小森一枝様に当てた、八月六日付の手紙（コピー）を次に抜萃します。「敵機の空襲も益々激しさを増して来ましたが、私達は朝八時から夕方四時迄頑張って居りますから御安心下さい。（中略）今度の休みには佐世保の連中は勿論、殆んど大部分の者が帰郷します。土曜日に帰ると一寸厄介な事がありますので、一日休んで金曜日の十五時二十九分迄で帰るかもわかりませ

ん。（後略）」

（八七六） 医専一年生 橋 本 良 平

遺族 佐世保市塩浜町二一六 橋 本 憲 二（兄）

（前略）私は長崎の原爆で死亡した橋本良平の兄で御座います。実は私の近所に、良平の医専の同級生の弟さんである松田和夫さんが居られ、松田さんから、良平の名が名簿に記載されていないとの連絡があり、恐縮ながらお手紙を差上げた次第です。御多忙中甚だ恐縮に存じますが、御調査の上よろしくお願い申し上げます。（後略）

（八七九） 医専一年生 平 山 真 之

遺族 福岡県朝倉郡夜須町篠隈 平 山 ナ ツ（母）

当時の事はなるべく忘れる様つとめて居ります。でも時折は今亡き真之の写真をながめては、生きていれば今年三十九才になるものをと、悲しむ時も御座います。

（後略）

六 薬専学生遺族の手記

（五二六） 薬専三年生 荒 木 一 夫

遺族 長崎県南松浦郡若松町六一〇 荒 木 春 松（父）

本年の慰霊祭並びに名碑除幕式には私も参列させて戴き、二十二年前のあの恐るべき日の事共を思い浮べ、涙の新たなものがあります。

原爆投下の当日、作一夫は学校へ行く支度をして、カバンを横に抱いたまま上り段に腰を下し、「今日は休みたいなー」と云いながら、珍らしく歌をうたったりして世間を眺めて居たが、やおら立上り、「気分は進まぬが、行かねば級長の面目が立たない」と云いながら、「行つて参ります」の言葉を残して家を出て行つた。その姿は私の目の前にちらついて、どうしても忘れることが出来ない。

仏壇に飾つてある写真を見るにつけ、当時が思い出されて仕方がない。故永井博士

の著書「長崎の鐘」にも荒木一夫の名が記載され、死の直前まで同僚をかばって責任を果たしたことが書かれて居り、よくやったと私も嬉しく思っている。

この度名碑も出来、伴の名も刻まれているので、これからも長崎へ行った際は、これまで通り慰霊碑に参拝し、伴一夫の遭難場所（学校の旧実弾射撃場）を訪ねて、子供のため、全学生のために、冥福を祈りたいと思っている。

（別便）私唯今七十六才ですが、神経痛に悩まされ、歩行は勿論通常の身動きにも困難を来して居ります。妻（一夫の母）と二人暮しで、次男と女の子から毎月少し宛送金して来ますので、それで日々を過して居る次第です。（中略）一夫の母は去る三十一年秋に胸を病み、国立長崎療養所に三年間入院致し、胸の大手術を受け肋骨を六本切り取っております。そのため今日でも栄養剤を初め、あらゆる薬を吞んで生存して居る有様であります。（後略）

（五二七） 葉専三年生 石 田 憲 敬

遺族 熊本市二本木町二六 石 田 保 利（父）

長崎医大原爆学徒五二七名中の一人である長男憲敬は、動員学徒として福岡県吉富町にある武田製薬工場に出動すること満九カ月、卒業期の繰上により二十年七月から待望の学業に復帰し、長崎医大薬学部に戻っておった。

八月一日、私の家は敵の爆撃を受け、新築の家諸共何もかも滅茶々に破壊された。私は当時三菱兵器保安課長として大橋工場に出動し、憲敬は佐世保で行われた海軍衛生見習尉官の試験を終えて、長崎駅に帰着したばかり、妻は大日本国防婦人会鎮鼎分会長の任務を帯びて他出し、長女は女子挺身隊に、二女は純心高女の動員学徒隊に、三女は防空壕に避難し、家は空っぽで幸い人的被害はなかった。

八月七日、昨六日広島に新型爆弾が落され、想像に絶する惨憺を極めた由で、その為か長崎は早朝から敵機の来襲頻繁であった。私は手足纏いになる娘三名を、郷里熊本の本田舎に疎開させることに決意し、夕闇迫る午後七時頃、涙の中にこの三名を送り出した。思えばこの時が兄妹の永遠の別れであった。

八月九日、朝から焼けつく様に暑かったが、朝食をすませた憲敬は仰向けに寝なが

ら、①最近の緊迫した時局と、②角尾学長が親しく見聞された広島の特種爆弾、③毎日防空壕掘りが日課の学校の授業状況等を語り、二、三日学校を休みたいと云った。然し妻はこれに反対し、時局の重大性と医大生の責務について懇々と論じ、登校を勧めた。憲敬は妻の励ましに動かされ、午前七時半頃登校した。其後三時間、出入りの洋服屋が来て色々語り合っていた時、強烈な閃光と耳をつんざく轟音、間髪を容れず

強烈な爆風を受け、私は無我夢中で押入に逃げ込んだ。その後私は身の危険をおそれて、鉄筋コンクリート造りの地下防空壕に移り、その窓から浦上方面を覗いてみると、入道雲が大きく輪をえがいて、上空高く立ち昇り、地上では方々に火災が起つて、見る見る内に一面火の海と化して行く。約三十分後に、妻は放心した様な姿で帰って来た。二人は恐怖の内に医大に居る我が子の身を案じながら、神仏の加護を祈り続け、一睡もせずに夜を徹したのである。

八月十日、この日も前日と同じ炎天であったが、昨日以来燃え続けた火災も大分下火になり、太陽も高く昇ったが、憲敬はまだ帰って来ない。聞けば長崎駅以北の建物も人も皆全滅したとのこと、愈々憲敬の身の上が気鬱りになった。

私は我が子の救助のため防空服に身を固め、医大を目標に午前九時頃家を出発した。電車も自動車も乗り物は一切何もない。敵機が間断なく来襲するので、その間隙を縫っての徒歩行進である。約一時間を費してやっと長崎駅まで辿り着いたが、大波止辺りから先は建物が焼失して何もない。勿論長崎駅も焼けて一面の焼野原と化している。残っているのはコンクリート造りの建物と、石と、焼け残りの鉄類だけに過ぎない。私は縦横に散乱している電線を跳び越え、踏み分けて一歩一歩前進した。

浦上駅から先はその惨禍が一層ひどく、川や溝には幾千万とも数えきれない死体が重なり合い、内臓のとび出した馬の死体もころがっていて、その死臭は息もつけない程である。数カ所で五、六台の消防自動車の残骸を見たが、皆腹を空に向けていた。医大は盛んに黒煙をあげて燃え続けている。大きな二本煙突の一本が「く」の字形に曲っている。山王神社の石鳥居は一本の支柱がなくなつて、驚の付んでいるような形をしていた。

目的の医大の構内に入ると、講堂の焼跡には学生の骨が規則正しく並んで居り、涙ながら合掌して丘の方へ進むと、黒焦げの死体が数十個、これ等の死体は皆普通の原型の何倍もの大きさに肥大し、皮膚の色は黒ずんでいた。中にはまだ息のあるものもいたが、顔も目も鼻も区別がつかない程焼け爛れて、苦しみの中にしきりに水を欲しがっていた。

あたりを見廻すと掘りかけの防空壕があり、近寄ると中からよたよたの学生が出て来た。その学生に憲敬のことを尋ねると、石田君はこちらですと云って、今見て来た死体の所に案内し、これが石田君ですと云って、死体に合掌した。そして次のように話してくれた。

「昨日は三年生の出席者三十数名が、交替で防空壕掘りに従事し、石田君は搬出作業に当たっていました。その時原爆が落ち、壕外に居た石田君は閃光を受け、約十二時間苦しみ続ける中にも、御両親の仁愛を感じながら、遂に午後十一時頃死去されました。次々に優秀な学友に死なれ、実に残念でなりません」と云って、男泣きに泣き崩れた。私はこの学生に感謝して憲敬の死体を見ると、頭の天辺から足の爪先まで焼け爛れ、腫れ上り、頭髮は抜け、爪は肉から浮き上り、これが我が子かと疑う程変り果てていた。私はもうこれまでと諦めて火葬を決意し、一応帰宅して近隣からお手伝いの人を頼み、再度現場に行つて遺体を茶毘に附し、遺骨を拾つて家に帰つたのは、午後十時頃であった。

願れば憲敬は小学校以来成績もよく、体も壮健で、誰からも可愛がられた幸福者であった。昭和十八年三月、佐高、九州歯科医専、長崎薬専と三校の入試を受け、何れも合格して入学を許可されながら敢て薬専を選んだのは、薬専卒業後医大に進み、両者を兼ねて国家に貢献したいという本人の念願でもあり、私の希望でもあった。然し業半ばにして原爆に斃れたことは、洵に残念でたまらない。

近く靖国神社に合祀せらるることとなり、地下の靈魂も如何ばかりか喜び、安らかに冥目して、幾久しく長崎大学を守ることと信じている。

(五三〇) 薬専三年生 岡 本省 三

遺族 山口県下関市栄町三一二五 岡 本 知 定(父)

敗戦のゴタゴタの裡に昭和二十年も去り、やがて花咲く春も訪れようとしている三月の或る日曜日の午後、父は炬燵にあたりながら種々のことを追憶する。

敗戦の八月に一人息子のお前を失った父は、自分ながらもつくり元気が衰えた感じがする。鏡を見ても白髪が著しく増え、日足の短い冬の日影に写る自分の背が曲ったような感じがする。これはお前を失った父の大きな衝撃である。

七月末、元氣一杯でリュックを背負い長崎に発つたお前が、まさかものの十日も過ぎぬ八月九日には最早この世から遠い世界に行くとは、夢にも考えなかった事実である。空襲耐なあの頃は、お互いが唯無事である事のみ祈り続けていたのである。

八月十三日、父は勤め先の小月の会社に出勤した時、お前が防空作業中にあの恐ろしい原爆で命を絶つたことを、小野田田辺製薬(学徒動員先)から聞いた。その時の父の表情は蒼白を極め、茫然自失たるものであった。直く詳細をきくため、小野田に行き、長崎から命からがら奈良に帰る同級の竹田君から、現地の模様を聞いた。夕方帰宅、母や姉妹に真相を告げることは、残酷であったが止むを得ない。瞬間火の消えた様な沈黙が続く、やがてそれは嗚咽に変つた。同じ敗ける戦争なら、親子とも一緒にこの世から消えた方がよい位に思つた。空には敵機が次から次へと襲いかかり、サイレンは無気味に唸り続けている。父はやがて心を取直し、墓標を持って十五日に長崎に向つた。然しその時は終戦の詔勅が降り、国民は唯茫然の一語につきる虚無感であった。

浦上駅に下車、瞬間美しい長崎の町も山も一切無に帰し、凄惨たる言の実感一杯であった。道はなく、此処彼処に黒焦げの人や馬が横たわり、医大の煙突は曲り、建物は外郭のみ残り、空には鳥が騒がしく啼いていた。悪臭紛々たる中を医大に行き、世話人からお前の死を確めて遭難現地向つた。漸く薬専の防空壕を尋ねてたが、お前の遭難は学友松本登君外三名と壕上の広場に並べられ、腹部に僅かの土がかけてあるに過ぎなかった。あの混乱状態の時に、お前達が碌々手当も受けず、如何に苦しんで死んだか想像に余りある。お前の遭難は殆んど裸体で焼け爛れていた。被爆後数時

間苦悶しつつ絶命したお前の苦しさを察し、父は気が狂いそうであった。

現場に丁度学友の富田君が来合せ、当時の模様を聞き、最後まで腕にはめていた時計を貰った。これも仏の導きと有難く思っている。

やがて父は附近に散った木片を集め、遺骸の一部を焼き、夕陽せまる頃帰路についた。附近には沢山遺骨箱をかかえて肉親の遺骸を探している人、又遺骸を焼いている人、肉親の思いは一つで、世の無情がひしひしと胸にこたえた。親が息子の遺骸を焼くなど、逆の事実となった現実である。然しお前は遺骨が父の胸に抱かれ、故山に静かに眠り得た事は、せめてもの慰めとして貰いたい。

どうか安らかに永遠に草に眠って呉れ。やがて父も母もお前の処へ行くであろう日を待ちつつ、最後に思い出して呉れ。

○ 露の世や露の世ながらさりながら

(五三二) 薬専三年生 小曾根 邦 弘

遺族 長崎市田中名一〇一四 小曾根 邦治郎(父)

原爆犠牲学徒名碑の建立に思う

学徒動員で原爆を受け、黒焦げになった子供の実に悲惨な姿を、毎年々々八月九日になると思い返し、二十年の歳月が流れました。

この度芳名碑が建てられましたことは、犠牲になられた方々の御霊は勿論のこと、後に残りました老境の親と致しましても、何とお礼を申上げてよいやら、心の奥底から感謝感激の気持が込み上げて参ります。

思い返せば、邦弘は昭和二十年八月九日、私の甥に当る佐藤龍雄君(当時三菱病院支局勤務医)と共に登校し、薬専の防空爆作業中に被爆しました。その状況について医専の学友田川兄(現原爆病院耳鼻科部長)から詳しい実情を聞かせて頂きました。それによると、邦弘は被爆後薬専から北の方に避難していたようで、田川さんがその辺を歩いていると、道端に学生らしい男が倒れていて、その男が「田川」と云って呼びかけて来たそうです。黒焦げで誰だか判らないので、「君は誰か」と聞くと、「小曾根」と答えたので「おお邦弘君か」と云って、最後の水をやっと探して飲ませて頂

いたそうです。

この様に、被爆死の人達は皆こんな悲壮な最後を遂げたと思われる。田川さんが邦弘の側を通られて、最後の水を飲ませて下さるなんて、不思議な縁というものでしょうね。

それから暫らくたって、大分県中津の武田化成に動員学徒として勤務しておられた邦弘の友人椎名章夫さんから、邦弘が避難の途中、辞世の歌を白墨で岩に書いたとお知らせを受けましたので、そこの岩という岩を探しましたが、風雨で消えてしまったのか、発見出来ませんでした。

ところが、昭和四十年に邦弘の二十周年記念追悼会を営んだ折に、図らずも次の様な邦弘の辞世の歌が判明したのでございます。

○ たらちねの一枝つみて先立つ身 若葉散り行く悲しさ残さじ
あれもこれも人間の考えではどうにもならぬことが、不思議な縁ではつきりして来ました。有難いことと感謝しております。

それに又、邦弘の遺品の中から別紙の様な、邦弘作曲の「神風特別攻撃隊」の歌も見つかりましたので、二十周年追悼会の折お集りの皆様方に、テープコーダーによって合唱して頂きました。

邦弘の姉のもらした話によりますと、八月九日朝家を出る時も、「僕達の命は捧げたとけんで——」と、言葉少く云って出たとの事でございます。

今度医大の芳名碑が完成しましたについて、今日まで二十余年間何の沙汰もなかった肉親の方々の御心中をお察し申上げますと、感激に新たな涙を流し、喜んでおられる事と思います。ここに重ねて心からお礼を申上げたいと存じます。

【調 附記】 私は一日小曾根様をお訪ねして、辞世の歌の書かれた短冊(筆者は同じ遺族の村田直輝氏、二六頁参照)と、謄写版ずりの「神風特別攻撃隊」の楽譜を見せて頂きました。この歌の作詞は小寺健次郎君(現長崎済生会病院産婦人科部長)で、作曲が小曾根邦弘君となっています。予算の関係で掲載出来ないのを残念に思います。

(五三四) 薬専三年生 田 中 博

遺族 大阪府茨木市竹橋町五一五 渡海方 坂 口 サメ(母)

(前略) しみじみ過去を振り返り、感激一入で御座います。たつた今の出来事のように、一日とてあの日あの頃の事、夢にだに忘れられるものではなく、朝な夕な仏前に坐る度に、息子博の写真に語りかけております。死亡した当座は、行きずりに大学帽を被った学生さんを見れば、本当に目をそむけたく、又博の写真も見ていられませんでした。博は被爆一週間ばかり前までは、山口県の科学工場に学徒動員で行っていたのに、丁度一週間ばかり前に、動員解除になって学校に戻ったのでした。そして八月九日の原爆に遭ったのです。まるで死ぬために帰った様なものと、今日でも諦めきれません。誰に抗議の致し様もない、博一人ではないのだからと諦めようとしても、可哀想な博を想えば、年老いて生き残った私が、申訳ない様な思いが致します。その頃は佐世保も日夜空襲空襲で大火災が起きて、死傷者は数知れずでした。博の兄純一は海軍に、弟饒は海軍兵学校に在り、その子達の事をこそ案じていましたが、学生の博ばかりは大丈夫だと考えていましたのに、大学よりの通知で失神した位でした。終戦で二人の子は帰りましたが、博は死にました。

想えば、博は親達の事情のために、中学一年の頃から私の許を離れて父と暮し、そして父と共に被爆死した不幸せな一生でした。未来を夢見て、頭痛持でノーシンばかり呑む私のために、「一日も早く学校を出て、一番先に母さんに頭痛薬を作って吞ませる」と張切っていましたのに、思い出は年と共に深まるばかりで御座います。

遺骨を受取りに行きました時は、浦上駅も仮駅で、切符を買うのに行列をつくりましたが、その中に佐賀に帰るという薬専の生徒さんがいて、「田中君のお母さん!」と声をかけられ、博の死んだ当時の事を尋ね、「黒焦げでしたでしょう?」と云えば、面をふせて、「防空壕作業中でしたので、トレパンははいていましたが——」と言葉をにごされました。二十二年も前の事で、私も六十六才になりますが、何時までも博は、私の頭の中で笑っています。

名碑の建立の時も参りたいのは山々でしたが、何分遠いのと年とでその意を得ず、

博の実弟の饒が県立佐世保南校に教諭として勤めていますので、家族連れで必ず参つて、名碑の写真を送ってくれるとの事で御座いますので、楽しんで待つております。何れ私も必ず一度はお参りしたいと思っています。(後略)

(五三八) 薬専三年生 橋 本 慶 治

遺族 大阪府東大阪市高井田一四三九 橋 本 源治郎(父)

(前略) 今更ながら故慶治の事に思いを深めて居ります。あの日から忘れる事出来ない悲しい日々で御座います。先般故人の氏名、遺族の事情などお調べに預りました、誠にありがとうございます。(後略)

(五四三) 薬専三年生 村 山 直 行

遺族 福岡市中呉服町二一七 村 山 トヨ(母)

直行は学徒動員にて山口県田辺工場に行つて居りましたが、卒業前の勉強のため長崎に帰ることになり、六月二十二日の朝自宅に寄りました。街は六月十九日の空襲で焼野原となり、自宅の跡も火と煙で見る影もない有様でした。漸うのことで私共の疎開先を探し求めてやつて参り、三日程泊つて長崎に帰りました。

所が八月五日の夕方突然帰つて来て、「今度は長崎に大空襲があると予告があつています。私も何時死ぬかわからないので、お別れに帰つて来ました。」と云い、その日は夜通し私とお話しし、翌日は私の料理がおいしいと云つてはめ、夕方「お母様、私の着物はありますか」と云いますので、「全部焼けてしまつたけど、浴衣が一枚だけあるよ」と出してやつたら、これを着て常夜灯のある高台に登り、夕日の沈むのを見ながら、何かしきりに歌っていました。間もなく帰つて部屋に入り、何か書いていたようでした。これが死後に判つたのですが、親に種々御恩になつたお礼の書で「思い出の書」と書き残し、七日の終列車で長崎へ帰りました。

「大空襲があるというのなら、帰らずにいてくれればよいのに」と、一同揃つて留めました。主人だけは泊まれと一言も云わなかったもので、「こんな非常時こそ頑張つて働かねば」と云つて帰りました。若い男が寸時も安閑と出来ない、そんな時代だったのです。帰る時は一時間余りかかる山道を、家族中で駅まで送って行きました。

その途中言葉少くただ一言「これがこの世の見納めか」と云った言葉が、今もはっきり耳に残って居ります。それに流れ星が幾つもあつた事が、何となく胸騒ぎがしてなりませんでしたが、事実その翌々日原爆に遭い、あの様になってしまいました。

直行は長男として生れ、親思いで孝行をし、兄弟中で女よりも一層優しく親切な子でした。汽車が若し延着しなかつたら、或いは主人が「帰るな」と一言云ってくれたら、死なずに助かっていた事と思いますが、こうした運命だったのかとも思います。

原爆が落ちた時は、田舎にいたので連絡がとれず、十日位たって漸く事実が判り、夫婦で長崎に行ってみました。浦上一帯は全くの焼野原で、白骨ばかり転がって居り、学校に行ってみると直行は既に火葬に附され、学友三人と一緒に遺体となって並べてありました。思い出深い下宿屋の跡にも行きましたが、焼野原の中に一枚の紙片がヒラヒラとして居りましたので、取り上げてみると、不思議にも直行の筆跡で、それには色々の事が書かれてありました。その中に次の様な歌も四首ありました。

○ あさげまつ鳥の如くに我はしも 心はやりて母を待つなり

○ 母上の心をしりし日よりしも 心の中は雨とぬれにき

○ 母も生れし効を今よりは 生して生きん此のよき日に

○ あき晴れの光さす中我行けば 静けき心我は楽しも

右の歌の書かれたノートの紙片は、今も大切に保存しております。焼跡に残っていたのは、死んでも猶魂魄はこの世に留って、親を待っていたのではなからうかと、涙が流れて仕方がありませんでした。

思い出の書には、次の様なことも書かれていました。「お母様、お父様、元気でいて下さい。不肖直行もいつかは立派な人となつて、お母様、お父様を喜ばす事があると思います。御両親元気であれ、それが不肖直行の最大の望みです」と。

(五五〇) 薬専二年生 一番ヶ瀬 忠政

遺族 長崎市巾町五〇 一番ヶ瀬 政一(父)

一瞬の光に地獄と化したあの日、薬専二年生だった忠政は、水俣に動員中のお友達と別れて、研究室に四人のお友達と残って居りました。

角尾学長先生が、「広島に原子爆弾が落された。皆用心しよう」と、話されたと言ったその翌日、吾身にかかることも知らないで、学校に出かけて行きました。父も私も西浜の町に行き、あの一瞬の光を受けました。左右の隣人もわからぬままに、それぞれの吾家に落ちた爆弾と思いこまれたか、地下室に飛び込まれました。

暫らくして県庁に火の手が上がり、あちこちが燃え盛りました。上半身焼けた破れズボンの男が、うつろ顔に通り、「浦上の空が赤い、只事でない、火がまわらぬ内に」と父に励まされて、用心にバケツに水を張り、それを持って寺町通りを歩いて中川町に帰りました。家はこわれてガラスの山、天井は落ちかかり、フスマはとんで手の施しようもない有様でした。父は帰らぬ忠政を案じて迎えに出かけましたが、井樋之口あたりから行けなかつたと引返されました。眠れぬままに翌朝早々出かけた父は、帰ってから爆心地の様子を話して聞かせました。焼けただれてうめく声、家につぶされた死体など、地獄絵にも見たことがない恐ろしい惨状だったそうで、傷つきながら歩いて居られた先生に教えられて着いた研究室は、土台石だけの中にボソボソと火が燃えて、死骸が三つあつただけだったとこのことで、茫然と立ちつくしていたが、無意識にお骨を拾っていたそうです。

然し研究室には五人居た筈だから、あと二人の内に若しや生きてはいないだろうかと願いながら、「一番ヶ瀬」と呼びながら穴弘法の方へ行くと、岩の前あたりで「ハイ」と声がして立ち上つた者があつたそうで、転がる様に近寄ってみると正しく、忠政で、最早立てなくて父の顔をじつと見上げたそうです。人々に頼んで戸板に乗せ、家路につきましたが、運んで頂いた方々も、その内三人は今故人となられました。忠政は六日間生きて家中の者の名を呼び、「有難う」と早口にお礼を云って息絶えました。死ぬなど思いもしなかつた私は、死体の側に寝て抱きしめ、一夜をくぐき泣き明しました。あの大鳥の着物も、布団も、お前が居ればこそ買ったのに、あれも要らないね、これもいらないね、と死体に見せました。この悲しみは父も同じ、或いはより以上だったでしょう。

お友達の前田さん等は、水俣から真すぐ家にかけて、私を子供と思ってくれと慰

めて下さいました。小曾根様にはいつも心にかけて頂き、有難いと思っています。

(後略)

(五五二) 薬専二年生 郡家 淑郎

遺族 神奈川県高座郡海老名町大谷五六四七 郡家 徳郎(弟)

(前略) 思えば早いもので、あの悪夢の様なきのこ雲から、早や二十余年が経とうとしていきます。いまでも当時を振り返ると、胸がしめつけられる思いが致します。

(後略)

(五五五) 薬専二年生 安本 道男

遺族 山口県大島郡橋町大字西安下庄 安本 政助(父)

(前略) 昭和二十年八月九日は、私一生を通じて忘れることの出来ない嫌な日で御座います。あれから毎年八月九日を迎える度に、悲しい思いが募るばかりです。あの大战も、当時の日本としては止むを得ぬ戦であったかも知れませんが、進むことだけ知って居た当時の日本の支配者には、聊か批判的なことも云いたい気持ちになります。

広島と長崎とに投下された爆弾によって、戦も終局を告げました。それから二十二年、その間、戦争処理問題としては、農地補償や在外財産の補償など、私共にはそれ程大きな問題でもないことが、騒ぎ立てられ処理されて、最も大切な、あの大战に終止符をうつた原爆の犠牲者に対する補償は、全く等閑に附されていた感があります。亡子道男も、夏休みを返上して国家の要請に応えようと精励していたにも拘らず、動員学徒としても認められず、可哀想だと思いましたが、この度特別支出金の給付及び靖国神社合祀の恩典に浴することが出来、定めて地下で喜んでいることと思えます。殊に長崎医大の原爆犠牲者名碑にその名を連ね、永久に保存されることを知り、どれ程か感涙に暮れていることで御座いましょう。

去る八月九日の名碑除幕式には、是非参列したいと思って居りましたが、余りにも猛暑きびしいため、又八十才を越した老人のこと故、若し皆様に御迷惑をおかけする様なことがあっては、と存じ、御遠慮致しましたことは、誠に遺憾の極みで御座います。しかし、何れ後日必ず参拝致したいと存じて居ります。

(五五七) 薬専二年生 吉田 一馬

遺族 佐賀県神埼郡三田川町大字吉田六七三一二三 川崎 美和子(妹)

戦後二十余年、街を行く人々の表情には今日の平和を象徴するかの様に、いきいきとしたものが感じられます。しかしその表情の中に、あの忌むしい昭和二十年八月を思い出している人がいるのでしょうか。

当時私共は、長崎市松山町(原爆投下中心地より約二百米)に住んで居りました。家族は父が陸軍司政官としてボルネオに出征し、後は母と薬専に在学中の兄、それに家事に従事する姉、小学二年生の私と、五才になる弟の五人暮しでした。

そのうち戦況は悪化し、本土の空襲が激しくなるにつれて、私共にも疎開命令が出ました。兄が在学中だったため、母がその下宿を捜すために同行できず、取敢ず私が一人で、佐賀の祖父母を頼って疎開しました。

戦時中とは云え、田舎で生活するようになりました私は、何と自由なく暮すことができ、そのためか、子供心にも戦争という実感よりは、寧ろ肉親から離れて暮す淋しさとの闘いでした。私は出発の際に母が、「兄さんの下宿を捜したら直ぐ後から行くからね」と云ったことや、あの優しかった兄が、「美和子、休みには必ず行くから元気でいろよ」と云った言葉を、楽しみにしておりましたが、遂に母兄共、それが最後の別れでした。

そしてあの悲しい八月九日、母、兄、姉、弟を無惨に奪われてしまいました。このように家族を一度に失った私にとりましては、その後は他の人々の倅せを羨む連日でしたが、今日どうにかその苦悩から立ち直り、家庭に入って少しは落ちついてまいりました。

このような状態でありましたので、年令的にも相当の開きのあった兄についての委しい記憶は余りありませんが、私共には優しい、父のなき後の家庭にあつては、何かしら落着きを思わせる人であつたと思います。又兄びいきの祖母が、何時も口から出すのは兄の自慢話でした。小さい時から利口で、性格も温和しく、礼儀正しい兄で、その後は事ある毎に比較されたものでした。

大きくなったら薬剤師になると、張切つて勉学に励み、薬専に合格した時の喜びようは大変なものであったと聞いております。でも望みもかなわぬままに、若くして散つたのを思う時、今更ながら、戦火の中に生きようとした兄が不憫でなりません。しかし兄達が蒙ったこの犠牲が、今日の平和と発展を生み出したものであるならば、兄の死も決して無駄ではなかったと思う反面、今後如何なることがあろうとも、二度とあの惨事を繰り返してはならないと、深く念じております。

毎年八月九日がやってまいります。この日を迎える度に、あの忌わしい思い出と共に、優しくった父母、兄姉と、可愛かった弟の面影が交錯して、あの一家団欒の幼時に、私を呼び戻してくれます。

終戦後、父もボルネオにて戦病死し、一人ぼっちになった私は、特に可愛がつてくれた祖母の庇護のもとに育ち、その祖母も亡くなった今では、原爆記念日が来る度に肉親の面影を偲びながら、理解ある主人の許で幸せな日を送っております。

(五五九) 薬専一年生 中川原 哲 夫

遺族 佐賀市城内一丁目三一三 中川原 荒次郎(父)
私のように懸け替えない一人息子を原爆で亡くした、その悲しみと心の痛手は、二十二年の歳月を経た今日に於ても、決して忘れることの出来ない心の重荷となっている。毎年廻り来る八月九日の命日には、自宅で心ばかりの法事を営み、今は亡き子供の冥福を祈っているが、今年は縁あつて長崎県大原爆犠牲学徒の慰霊祭に参拝することが出来た。竣工成った名碑に刻み込まれた吾が子「中川原哲夫」の名を、この目で見た時、一入感慨無量の感に打たれた。(中略)

それにつけても思い出すことは、昭和二十年七月のことである。戦争激烈となるに従い、薬草園の管理や学校警備に動員された哲夫は、下宿を出て学校で起居することになった為、下宿にあった書籍や身廻り品の一部を郷里の親元に送り返して来たが、その中に、遺書らしい自作の和歌数十句が秘められてあつた。その中の一句に

○ 吾れ散りて国の御盾となるならば 何ぞ惜しまん若き命も

というのがあつて、強く私共の胸を打った。本人はこれが永遠の遺書になろうとは、

夢にも思わなかったであろう。然し日頃学校内で、死ねば本望と口ずさんでいた子供は、予て今日あることを予期していたに違いない。

この遺書が本人の希望通り、素直に受取られる日 wait っていた矢先、今回の温い国の措置は、私共遺族にとって、此上もない満足と感謝の念を禁じ得ないものがある。又同時に子供達も漸く陽の目を見ることが出来たことを、さぞかし泉下で喜んでることであろう。私共にやがて下付されるであろう弔慰金を無駄にすることなく、せめて子供の冥福を祈るために、有効に使用することを茲に固く誓うものである。

(八八三) 薬専三年生 池 田 敏 明

遺族 長崎県西彼杵郡崎戸町本町 池 田 寿 人(弟)
兄ちゃん、兄ちゃんが学校の防空壕のそばで死んでから、もう二十二年になりました。た。

兄ちゃん、憶えていますか。前の晩お風呂にはいつて、みんなで楽しく茂木枇杷を沢山食べたことを。あの日が最後のお別れの晩になるなんて、信じられないことです。お父ちゃんは一週間目に、お母ちゃんや保邦も、兄ちゃんと同じ運命をたどりました。

三日目に兄ちゃんをやつと探しあてた時、兄ちゃんはお友達と並んで死んでいました。生き残つたお友達が、赤い女の着物をきせて、瓦礫のセメントの小屋みたいな壁に「名譽の戦死」と書いて、土手の一番はしに、見るに忍びない程ふくれあがつて死んでいたのを、伯父さんと二人で焼きました。

兄ちゃん、痛かつたでしょ、辛かつたでしょ、悲しかつたでしょう。兄ちゃんの面影は何一つなかつたし、何時かひょっこり前の晩の姿で、僕の前に現われて来そうな気がしてならなかつた。けどいくら月日がたつても駄目だから、もう諦めます。

兄ちゃん、ほら三日前だったか、幹部候補生になるお友達二人が出征した時、山里の僕達の家でお友達と送別会をして、「同期の桜」や軍歌を歌つて、はち切れそうな元気な歌を、みんな男の楽しさを発散させて、歌ったことを僕はよく憶えています。今となつてみれば、みんなこの世の別れの杯だったのですね。

兄ちゃん、僕もそのお友達の人、兄ちゃんのことを時折り思い出しますから、安らかに眠って下さい。涙を流さないで眠って下さい。

七、看護婦遺族の手記

(五六五) 小児科看護婦長 中 尾 ナ ツ

遺族 長崎県福江市平蔵町 中 尾 末 松 (義兄)

原爆慰霊祭並びに名碑除幕式典を記念して、原爆犠牲者に対する思い出の手記を編纂し、記念誌を作製する事は、誠に意義あることと思います。

中尾なつ子の事に関しては、幼児より爆死に到るまで、幾多の思い出は尽きないのですが、兄として、彼女の一生は誠に美しかった、と申しても足りない程であります。私も幼少にして母親に死別し、異母に育てられたのですが、異母の生んだ長女が出生後間もなく死亡したので、養育院で育てられていた夏子を預けられ、異母がその子を養育したのが縁で、親子、兄妹の情愛に結ばれたので御座います。

夏子は養育に異常なく、物心つく頃から片時も親許を離れず、知名の人から養女にとの申入も成立しませんでした。高等小学校を卒業後は、家事の手伝いをしていますが、誠実で人情に厚く、素直な子でした。向学の志を抱いて立身出世の道を選び、長崎医大の看護婦となって就職しました。小学校時代から学校の成績もよく、非凡の成績を認められて婦長に抜擢され、誠実に職務に従事して居りました。

彼女の出生は長崎市の或る名家の生れで、双生児として誕生し、親の了解で直ちに五島の養育院に貰われていたのを、養育のため預けられたのです。成人してからは肉親の立場もあり、一回も親子対面をさせずに居りました。処が看護婦時代に、生みの親に面会したい旨手紙で了解を求めて来ましたので、兄として肉身の情を察し、長崎まで出向いて親元に交渉しました。処が父親はそんな子は居ないと申されましたが、母親が面会することになり、旅館に来て頂いて面会は致しました。しかし面会はした

ものの、親しく親子の名乗はあけず、他人行儀の面会で、側から見ている耐えられない気持でした。母親が帰られてから、夏子の気持を聞いてみると、自分には育ての親が本当の親だ、私の考え違ひだったと泣いて語りました。父親の言葉も聞いていたし、育て親の愛情を身に泌みて感受したのでしよう。夏子は万全を期して育ての親に孝養を尽すことを誓いました。結婚話も方々からあったのですが、親兄弟への恩返しなどと申して、結婚もせず、自分の職務に献身的な努力を捧げていました。

又人情も厚く、同郷からの入院患者の見舞もよくしたのか、「いい人だよ」と私達にまでお礼を申された事も度々でした。被爆の際も、僚友や怪我人の介抱をして働いたそうですが、それは省略して、死の寸前の遺言として、長崎に住む異母兄弟達に、遺骨は五島の父と同じ墓地に葬ってくれと申したそうで、希望通りに叶えてやりましたが、死ぬ間際まで如何に私達を信頼していたかが深く察せられます。短い人生に使命を果たした故か、尽きせぬ思出は沢山ありますが、今思う事は、もともとと長生きをして居てくれたらと、惜しい気持だけが残されて居ります。

(五七四) 古屋野外科看護婦 大 坪 和 子

遺族 長崎県西彼杵郡高島町三菱高島鉱業所病院 大 坪 寿 子 (姉)

「奥さん、ダイヤルは何処にかけとるとね」。隣の前田さんの大きな声に、妹和子の折角の美しい詩吟も、ビタリと止んで終った。その頃台所の天井板は、爆弾が落ちた時引きからないう様に剝けてあった。隣の声も筒抜けに聞える時代。妹は久し振りの日曜日、台所で茶碗を洗いながら、自信タップリの大声で滔々と詩吟を口ずさんでいた。何分ラジオと間違えられる位だから、大したものだったらしい。

又妹は寄宿舎のお昼よと云って、メリケン粉をフクラシ粉なしで薄く固くのべて湯がいたダンゴを持って来た。母は妹や弟が長崎から帰るので、御馳走を作って待っていた。その母へそのダンゴを持って行ったので、母は苦笑しながら頂いていた。かみしめると何とも云えない感じのダンゴだった。二十二年後の今でも、そのダンゴの味は妹と共に忘れられない味です。

昭和十九年には、私がフレニコヤトラコの手術をやって貰ったので、妹にも色々迷

惑をかけました。然し頑張り屋だった妹は、自分自身も厄介な喘息や骨盤カリエスをもっているが、少しもひがんだことなく過していた。暫らく家に帰らないので寄宿舎を訪ねてみると、喘息で寝ていたり、骨盤の腐骨が出たので入院していたと、あっさりしたものだ。それに引替え私の仰々しさ。その私がまだこの世の中にお世話になり、あの元気で潑刺とした妹が居ない世の中、何となく変な気持です。

妹が最後に帰って来たのは、原爆より一週間ばかり前の事だった。その頃家の庭には、花よりも南瓜、胡瓜、ナス、トマトで一杯だった。妹達は庭に出て、南瓜の一番色のよいのをしじみ眺めて、「この南瓜持つて行こうかな」なんて。丁度母は小さい妹達を佐賀に疎開させに行つて留守だった。私も又持つて行きなさいと云えばよいのに、「母さんが居らんけん、又にせんね。」「ウン。」と素直に持つて行かない妹。本当に素直な妹だった。それぎり南瓜は嫌いでたまらない。南瓜を見ると胸がせまって仕方がない。

その後あの凄く寒い原爆。父と私は毎日々々あそこ此処と妹を尋ねた。お洗濯でもしていたでしょう。妹の浴衣と簡單服を畠の中で拾い、とうとう妹は私達に二度と逢ってくれませんでした。

角尾先生、大和田野先生、看護婦さん達々々々。皆さんで現在の平和を、私達をまもってくれてる事でしよう。皆さんの御冥福を祈つて!!

(五八二) 古屋野外科看護婦 後 川 千代美

遺族 長崎県大村市水主町一〇九三 後 川 松之助(父)

(前略) 原爆で死んだ子供のことは、一日たりとも忘れた事なく暮して居ります。千代美は子供の時から云うことを聞き、無口にて必要以外はもの云わず、勉強も昔の全優であり、長崎市浜口町の育ちで、小学校時代より、自分は大学病院の看護婦になると云つて勉強した子供でした。

私の勤務の都合で五島に転任し、福江の学校を卒業し、看護婦の試験を受けた時は喜んだものでした。試験の日に祖母が死んだので、「お前は一人でも長崎はわかるから、行つて来なさい。頑張れ」と云つて、一人で長崎にやったものでした。合格した

後は、自分は外科の看護婦になると云つて勉強し、希望通り古屋野外科に勤務して喜んで居りました。

千代美は子供の頃から、寝る時は着物をたたんで枕許に置き、本でもきちんと一枚々々開き、少しでも皺をよせるのが嫌いでありました。兄弟仲よく、皆よりほめられ学校の前の文具店の奥様からも、後川の子供は品物を扱らず、必要以外の物にさわらぬと云われた事もありました。担任の先生は、今でも千代美のことを色々ほめて話して下さいます。

私は戦地に二年居りましたので、千代美は私の代りに死んでくれたのだと、諦めて居ります。

(六〇一) 角尾内科看護婦 本 田 年 子

遺族 長崎県西彼杵郡高島町本町 本 田 正 治(父)

妹年子は、小学生の頃から看護婦を憧れていました。希望が叶つて昭和十八年の春看護婦養成所に入所することが出来ました。幼い頃から強気なほうで、人に負ける事が嫌いだ。又親しい面があり、いつでも親を大事にすることを忘れなかった。

左の文は、年子が原爆により負傷し、死亡に到るまでの間に、聞いたままの状況を纏めたものです。

「昨夜は当直だったので、疲れをとるために風呂に入り、浴槽の縁に腰掛けていると、飛行機の爆音が耳に入り、数秒たったかと思うと家屋が大きく揺れ、天井が落ちて、梁の下敷になってしまった。無我夢中で這い出そうとするが、中々体が思うように動かない。数分たつて、何とか抜け出すことが出来た。間もなく大腿に痛みを感じたので、見ると口がぼっかりあいて、血が吹き出ている。急いで綺麗な布を拾い、応急処置をなし、看護衣を体にくるくる巻きつけて、外の方に向い歩き出した。すると近くで助けを呼ぶかなんかの声がするので、近寄ってみると婦長さんが倒れていた。しっかりと下さいと言いつつながら、手をとり抱き起そうとしたが、婦長さんは動くことが出来ない。そうしている中に火が周囲に廻つて来たので、身の危険を感じふらふらしながら外に出た。何歩か歩いたと思った時、男の先生が近寄つて来られ、「本田さ

ん、しっかりしなさい。貴女のような気の強い人が、これ位の傷でどうする」と云いながら、肩をかして下さったので山に避難した。あくる日、足を引き摺り杖をついて、日見の姉の家に辿りついた。」

姉は近所の人に頼んでリヤカーに乗せ、矢上の病院に運んで、傷の手当をして貰った。その後姉は年子に着せるモンペを作り、三日ばかりして高島の両親の許へ連れ帰った。それから高島病院に入院させ、色々と手当をして頂いたが、一日々々と容態が悪化するが目立つようだった。顔はどす黒くなり、髪の毛が抜けるので、櫛をあてる事も出来ない。歯ぐきからは出血が止らず、食べ物を聞いても少しも欲しがらない。或る日年子は梅干、漬物、胡瓜等を欲しがるので、母があちこちから探し求めて来たが、喜んで食べるだろうと思いの外、年子は食べようもしない。八月二十三日頃から容態が悪くなり、咯血するようになって、二十四日の午後十一時頃には、自分から脈をとりながら、「もう駄目です。お父さん、お母さん、先生、看護婦さん達、大変お世話になりました。お元気で、左様なら——」と云って息を引取った。

原爆により何万人の方が亡くなられておりますが、こんなことが二度と起ってはいらないと思います。(姉代筆)

(六二三) 看護婦生徒 川口シメ

遺族 長崎県南松浦郡若松町八二八 川口和昭(弟)

(前略) 姉の川口シメ子は、私より四つ年上の姉でした。原爆の落ちた時、姉は看護学校二年生で、私は小学校五年生でした。その当時は西彼杵郡崎戸に家族は居たのですが、姉は一日二日の休暇をみては度々帰宅していました。帰宅は矢張りお腹がへる時や、家族が懐かしい時の様でした。それで帰宅するなりもりもり食べてお腹を太め、夜遅くまでかかって、自分やお友達のためのお土産を母や姉と造っていました。学校へ戻る時は、大きなリュックサックに一杯詰めて行くのを覚えています。後で聞いたのですが、学校を一年休学したいと度々云っていたとこのことです。矢張り自分の運命を知っていたのでしょう。

シメ子姉は生れた時から大きな出臍の持主で、いつも綺麗な小さな紐でへそを絞め

ていました。小学生位の時は銭湯に行くのが一番嫌いらしく、母から叱られてはしぶしぶ風呂に行くのを記憶しています。多分看護学校に行つてからも、この臍の紐は肌身離さず絞めていた事でしょう。

又高等科一年生位の時は、お寺の娘さんと仲よしになって、お坊さんの説教を聞くのが好きで、幼くして仏教に熱心になり、説教か遊びかに興じてお寺さんの家に泊り、母からものすごく叱られて、泣いていた事を記憶しています。

原爆が落ちた時は、私共一家は当地五島の郷里へ引揚げていましたが、落下当日から二日位後に、長崎は大被害を受けたらしいと云う事を聞き、自家用船で父達が長崎へ急行しました。然し当の姉は見付けることが出来ず、他所の娘さん達を満船して来ました。その時の母の嘆き様は、二十二年経った今日でも私は忘れません。

父は、自分の娘は若しや五島に帰っているかも知れん、と思つたのですが、姉は帰つてはならず、それで又直ぐ、長崎へ引返して大学病院の焼跡へ行きましたが、空しく探すばかりで、確実な姉の姿は見当らず、遂にそれらしい死骸を見付け、骨にして帰つて来ました。母は毎日毎夜気違いの様になって泣き狂いました。お腹一杯うまい物を食わせる事が出来んと云つて——。その母もその後永くなくしてこの世を去りました。父も亦後を追う様にして亡くなりました。

こんな事情で、川口シメ子の想い出は、当時子供だった私にはこれ位しかありません。然し病院などで白衣の看護婦さんを見ると、必ず姉を想い浮べ、若し亡くなつていなかったら、どんな人生を送っているだろうかと思ひます。

(六三〇) 看護婦生徒 早田タカエ

遺族 長崎県諫早市小野島町 早田多市(父)

(前略) 回顧しますと、二十二年前の八月九日は非常に暑い日でした。原爆が投下された時は、爆音のため皆人は地に臥し、田の中に臥しました。爆弾は長崎に投下され、街は大火災、空は真赤になりました。私は諫早から見えていましたが、浦上の大学病院に投下されたと聞き、我が子供の安否を心配、翌朝早速汽車で長崎に参りますと、汽車は道ノ尾が終点で先へは行きません。道ノ尾で下車して歩きました。道路に

人は人が死に、馬車馬が車を引きながら死んでいる。浦上川には死人の山、目もあてられぬ。防空壕の中からは苦しい声で助けを呼ぶ人の声、病院の方へ行ってみると、病院は跡形もなく炭ばかり、残りの家には助けを呼ぶ人の声、爆風のため大木は折れ、修羅場と化した有様、この時戦争は恐ろしく、二度と戦争をくりかえす事は出来ぬと思ひました。その現場を見た人でないと不明、言語には述べられません。今に忘れられぬのは浦上川の死人、腫れた体の裸の死人、苦しまぎれに川に飛び込んだのでしよう。その川に数知れぬ死体が集中して居るのを見た私、今にも忘れません。

其後娘の死体が見当らないので、娘の名前を呼びながら、野面や山中を「タカエ」、「タカエ」と声を限り呼び歩きましたが、返事は無く、それから病院の避難場所、穴弘法様に行っても不明なので、十日はそれで打ち切り、翌十一日は家族三人で穴弘法様の上の山中を探し廻り、山を越え立山町から市内に下り、市中の病院に被爆者を尋ね廻つても遂に不明でした。仕方なく病院の共同火葬の骨を貰ひ、長崎の真宗のお寺にお経をお頼みして持ち帰り、自分の墓地に骨を埋め、葬式を済ました。命日には法要を営んで居ります。又八月九日の慰霊祭には、初めから毎年欠かさず参拝して居ります。

(六三四) 看護婦生徒 塚 本 秀 子

遺族 長崎県南高来郡国見町多比見 塚 本 実 夫 (父)
戦争と云えば、今尚身の毛がぞつとする思いが致します。大東亜戦争は、我々日本国民として一生忘れ得ぬ出来事であり、印象に残る悲惨な運命でありました。一子を原爆の犠牲となし、残された遺族として、当時を想ひ出し筆をとります。

私は召集で内地勤務の警備に当つ居りましたが、毎日の如く敵機B二九の編隊が来て空襲が続き、被害が甚大であることを知りながら、軍人の志氣に励まれ、終戦を迎えました。幾度となく故郷を想ひ、便りを書くかと思ひましたが、軍律厳しい中で、家庭の様子を知ることが出来なかつた。

召集解除で帰る途中、列車の中で長崎の事を尋ねたところ、詳しく知る人がなく、家庭に帰り事情を聞いて吃驚致しました。早速明けの日の九月七日、長崎に参り遺骨

なりともと思ひ、大学病院に参りましたが、見る物総て、涙なくして尋ねる事は出来ませんでした。

市役所にて分骨を戴き、葬儀を営みましたが、どうしても生残つて悲鳴をあげているのではないかと、臉に残りました。生前、昭和二十年八月の初め頃、一寸帰宅し、学友は大部分病院に帰ってしまったのに、自分は何だか気が進まない、家の者に洩していたとの事です。虫の知らせであつたのでしょうか。家の者は今が一番大事な時だから勤めるよう、勧めて送り出したそうです。大好物の食物も余り口に入らず、何だか召集中の父に語りたい様子でいたそうです。

白衣の天使として職場に倒れ、吃度戦争を恨み、早く平和の暁をと、願つて居る事と思ひます。

八月九日、永遠に忘れ得ぬ日、この日を迎える度に、秀子の叫びを聞く想ひが浮んで来る事でしよう。秀子の冥福を祈りつつ――。

(六四〇) 看護婦生徒 林 末 子

遺族 長崎県松浦市今福町北免二〇〇九 林 ユ キ (母)

(前略) 毎年八月九日が近ずきますと、昨日の事のように新しくなつて思ひ出してなりません。皆様も同じ思ひでいらつしやいましょう。

あの時の事を思ひますと、ぞーつといたします。十一日五時ごろ、四人の怪我人が来ましたので、それはそれはびっくりしました。皮膚科の先生、それから高島の人、それから娘。私の子供は左の手を折つて、杉の木ぎれでくびつてもらつて来ました。先生はそれはそれはひどくて、十日目におなくなりになりました。奥様の疎開先がわかりませんので、あちらこちらにお伊りいたしまして、先生がおなくなりになる少し前に、漸く間に合いました様でございます。

私の子供は、二十八日ぶりに九月五日に亡くなりました。高島の橋本さんと云う人は、おしりをひどくやられて、十四・五日ぶりに亡くなれました。どなたにどうしてあげたらよいやら、どうもこうもなりません。あの時の事を思ひますと、手にもつたものも落して、只泣くばかりでございます。

いつも思い出しは泣き、どうしても諦められません。子供も息を引きとる時に「アメリカに負けて残念だ、どうしても死にたくない」と、そればかり云って息を引き取りましたので、なお忘れる事が出来ません。(後略)

(六六〇) 看護婦生徒 山下 栄子

遺族 長崎県西彼杵郡長与村斉藤郷七四一 山下 末市(父)

私は原爆で亡くなった大学病院の看護婦生徒、山下栄子の父でございますが、二十年八月九日は、私は川南造船所に勤めて居て、帰宅することが出来ませんでした。翌十日、川南からの帰途、早速大学に参りましたところ、受付に貼ってある生存者名簿に栄子の名が見えないので、これはしまったと思い、病院の裏山をあちこち探し歩きました。生き残った人々に尋ねますと、朝の中に一寸見たきりで其後は見えないと云われたので、がっかりしてしまいました。その日は歩いて長与まで帰り、翌日は又病院の裏の畑や山を探して廻りました。其処には怪我人や死人が沢山居るだけで、栄子の姿はどこにも見当りませんでした。

その翌日からは、伊良林小学校、勝山小学校、その他市内の収容所はすかさず探してみましたが分らず、時津や長与のお寺、はては諫早方面から東彼杵郡まで、一週間余り毎日尋ねまわりましたが見当りませんので、愈々断念して病院の看護婦寄宿舎の焼跡に行き、其処にあった遺体から少しづつ骨を貰って帰りました。尚自宅に看護婦服が一着置いてありましたので、その服と骨を納骨箱に入れて埋葬致しましたが、その当時は、せめて死顔だけでも思ったり、大東亜戦争がなかったら尊い命を失わなくてよかったのに、と思ったり致しました。然し今では国家のために命をすてたのだから、仕方がないと諦めて居ります。

それでも若し栄子が生きていたら、今頃は婦長になっているかも知れないし、又お嫁にでも行っていたら、孫の二三人位はいるだろうと思うと、病院で看護婦さん達を見たり、子供連れの婦人会った時は、思わず涙の出ることもあります。しかし唯今はつとめて、「なんば考えても帰って来るでなし」と自らを諭しながら、その日その日を送って居ります。

八、事務職員遺族の手記

(六六八) 長崎医大事務官 山木 武俊



医学部本館の事務官室で被爆、少し前まで国房教授とお話していたが、教授の辞去後間もなく被爆し、体が大きかったのと被爆による衰弱のため、倒壊家屋から脱出することが出来ず、助けを求めたが誰も救助出来る程の元気のある人もなく、そのまま建物と運命を共にせられた由。

遺族 東京都中野区江原町一—二〇—二 山木 孝子(三女)
亡きお父様とお母様へ

【お父様へ】 私がこうしてお手紙を差上げるのは初めてですね。残念ながら私はお父様のことを全然憶えていません。だって三つでしたもの。

お父様が亡くなってから、お母様は四人の子供をかかえ、弱い体に鞭打って私達を育てて下さいました。そんなお母様を見て、お父様がとても怒めしく思えました。

お母様があなたの許へゆかれた時は、雪の降った寒い日でした。入院して四日目ではんとにアツと云う間でした。お父様を御存知の東大病院の先生が、力の限りつくして下さいましたが、とうとうあなたの許へ行かれました。

初七日の時、お母様のお友達がみえ、お婆あちゃんに、「ここまで立派にお育てになったのですもの、後は御心配いりませんよ」と云われているのを聞き、どんなに淋しくとも、辛くとも、強く生き抜くことが、今までのお母様の御苦労やお父様に対して、御恩返しになると思いました。そしてその言葉が私を励まします。

お祖母ちゃん八十才ですが元気です。自分の子供達のことには心配が済んだのに、孫(私と兄)が心配をかけているんです。なるべく心配かけないように、お父様やお母様の分まで孝行しましょうね。

【お母様へ】 民子姉ちゃんは、今中学一年と小学一年の子がいるんです。お母様は上の娘は御存知ですね、東大分院のベッドの中で「女児誕生」の知らせを受けましたね。早いでしょう。英語を沢山勉強して通訳になって、海外旅行がしたいなんていう様になったんですもの。

育子姉ちゃんは体がすっかり丈夫になり、結婚した今でも好きなピアノを教えてください。毎年発表会に招待してくれます。四才から大人まで、とても賑やかです。お母様にも見せてあげたい様です。

お兄ちゃんも、文部省の芸術局へ勤めています。

私は？ 鶴田さんのお世話で東大へ勤めています。お父様を御存知の方がいて、よく面倒をみて頂いています。鶴田さんにはとてもお世話になっているんですよ。東大ではとても楽しいです。昼休みにバレーボールをしたり、卓球をしたり、それに疲れると三四郎池で、あひるを見ながら休みます。

家の方では、俊子おばさんが心配してくれて、何かにつけて面倒をみてくれます。やっぱり元気で生きていられるってすばらしい事です。原爆で今も苦しんでいる多くの方々、ほんとにお気の毒です。だから私は一生懸命生きるつもりです。お父様もお母様もニコリしていられる様に頑張ります。

いつまでもお安らかに！

さようなら

(七〇七) 第一病理教室技術嘱託 高谷重雄

遺族 長崎市御船蔵町一―三九 高谷シツ(妻)

昭和二十年八月九日午前十一時二分を、私共親子は永久に忘れることは出来ません。今年の八月九日には、皆様方の温い御心によりまして、名碑除幕式をして頂き、誠にありがとうございました。亡夫(高谷重雄)もさぞ喜んで居ること存じます。就きましては亡夫の思い出として二―三、したためさせて頂きます。

主人は音楽が好きでした。又小鳥を飼い、草花を育て、のどかな調べを楽しんでおりました。子供は三人でございましたが、それはそれはとても子煩悩な人でした。

主人は当時病理学教室に勤務しておりましたが、戦局がきびくなるにつれ、病理

学教室からも次々に兵隊に行かれ、小人数で勤めて居りました。主人は常に「自分は大学で死ぬのだ――」と申して居りましたが、本当に一片の影もなく、亡き人となりました。

丁度その頃、主人は町内の副会長を致して居りましたので、八月九日は朝七時から町内の会合に出席し、九時頃だったと思いますが、家に戻り大学に出勤しました。丁度その日長男がお腹をこわし学校を休んでおりましたので、一度出たものの又帰り、「一栄(長男)に絶食させるのだヨ」と云い残して出かけたのが、最後の言葉でございました。

家を焼かれ、着る物も焼かれ、裸同様の姿になった私共四人は、ふるえながら主人の帰りを待ちました。十日には朝早くから山道を越え、長男と二人で大学方面に出かけ、高く積まれた死人の山を一人一人探しました。十一日には、次男と病理学教室のあたりを隈なく探しましたが、その日も駄目でした。十二、十三、十四、十五日と毎日足を引きずりながら、山や谷をさまよい歩きました。夢中でさがしましたが、とうとう探すことは出来ませんでした。

月日は流れ、早やあれから二十二年も過ぎました。今元気で生きておりましたら、それぞれの子供に出来た五人の孫達にかこまれ、幸せな日々を過したであらうでしょう――。

最後に臨み、あの時主人と一緒に亡くなられた方々の、御冥福をお祈り致します。

(七〇九) 配属将校室準尉 谷本十三郎

遺族 長崎市鳴滝町九四八 山中久美子(二女)

(前略) 亡父谷本十三郎は退役軍人として、家で菊作りやお寺のお世話など致しておりました。当時の相次ぐ若い方々の出征で、教練教師が不足し、父も終戦までの四、五年を、長崎医大にお世話になった次第でございます。剣道は相当の腕前だったらしいですが、医大では銃剣術を教えていると云っていました。対空監視の役があるから、敵機襲来があると双眼鏡で空を見ている、とも云っていました。無口ながら厳しい父で、戦争批判でもしようものなら、一刀のもとという位で、竹槍も持たねば

ならぬと云っていました。弟達三人も、相当に父の気魄に恐れ入っていました。ところが、医大に通い始めた頃から、父の偏狭なまでの魂が、何となく角がとれ始めたのではないか、と思われる節々がございました。それははっきりと指摘出来なくとも、夕食の時の父の話の内容、感激した点などが、それまで父が育った軍人畑の中のもの、まるで異質なものであることを、聞いている私は感じました。それは戦時中といえども、高く掲げられた医大の精神とも云うもののなか、研究、医療という人道精神ともいうもののなか、私にはよく判りませんが、「洗練された教授の方々や事務官、又若々しい学徒のみが持たれる何ものかが、父に大きく影響したのではないかと、今になって考えます。

原爆後、十一日に私は山里に参りました。十九日頃でしたか、死亡証明書を頂くまでに、数回山里を見ました。悲憤の涙の味は、子を育てて二十年経った今の方が、深いように思います。

しかし、尊敬する医大の先生方や事務職員の方々、そして可愛かったであろう学生諸氏と共に、名碑にその名を刻まれて、父は私に「平和」を訴えていることと信じます。

(七一〇) 輔仁会囑託 地 本 鶴 松

遺族 長崎市油木町一―七 陣 内 信、香(長女)

お父さん―心の底からこみあげる懐しい言葉を久々に口に致します。七十年は不毛の地と云われた浦上の原野にも、春夏秋冬の花が咲き、又散り、二十二年の月日が流れ去りました。恐怖、苦痛、憤りの交錯した心を持ち、逃げ惑い、探し求めたあの日の事は、月日がたつにつれて益々鮮明に、又焼け爛れた悪臭さえも蘇ってきます。八月七日の朝、新聞を読みながら、広島に落下傘爆弾の投下された事を話されましたね。その時のお声が耳の底に残っています。

医大の裏門近くにある私達の家からは、黒く塗られた病院も見え、いつもの様に国民服にゲートルを巻き、出勤されるお父さんの後姿に、行っていらいと声をかけ、私は県立高女の油のにじんだ腕章をつけ、防空頭巾を背にかけて、母の声に送ら

れ、学徒報国隊として、茂里町兵器工場へと急ぎました。あの日の朝食―永遠の別れとなるには余りにもさりげなく、数時間に迫る運命を、神のみが知る事であつたでしょうか。

目を射る閃光、物凄いい音、二階の仕上工場にいた私は、床が階下にずれ落ち、あちこち体をぶっつけながら、下敷になってしまいました。その瞬間私は「工場が爆発事故を起したのだ、このまま死んだらお父さんやお母さんは、どんなに嘆き悲しまれるだろう」と考えました。渾身の力をふり絞り、隙間から這出して工場の外に出ると、見渡す限り倒壊した家、電柱、傷つきうごめく人々、地獄絵とはこの様なものかと思いました。山王神社の鳥居は一本脚になっており、水を求める人々を見、下敷になって助けを叫ぶ人々の声を聞きながら、なす術もなく穴弘法山へと逃げました。医大病院の窓からは白衣の人が飛び降りている。その結果も見ず、煙に追われながら――。その夜長崎の空は真赤に染り、幾千幾万の御霊が昇天して行った事でしよう。

痛む足を引ずり、お父さん、お母さんを探し求めました。松山の叔母さんの家の焼跡から、真白く焼けたお骨が―。爆心地の事とて、即死であつたろうと思います。

大学病院へその半生を捧げた母(旧姓末次キマ、元産婦人科婦長)の消息もわからず、医学の殿堂であつた大学病院も、一夜にして廃墟となり、玄関の広間には、苦痛に悶え苦しむ負傷者の呻き声が充満し、病院前の石畳の坂道には、ずらりと死体が並べられ、焼け爛れた顔や衣類では、さだかに肉親の面影を見出すことさえ出来ませんでした。それから数日後、「地本鶴松・キマ、八月九日爆死せし事を証明す」という一片の紙切れを警察から貰い、全く生きる望みをなくしました。

或る日、お父さんの旧友の方から、商工会議所に来る様に云われ、はやる心を压えて行ってみると、小さなボール箱を渡されました。それはお父さんの遺骨だったので。何時もの場所(金庫の前)のお父さんの机の位置にあつたお骨を拾っていて下さったとか。真白く焼けたお骨は、ボール箱の中でカラカラと空しい音をたてて、私の胸に抱かれました。涙がポタポタと落ちました。お父さん、お母さん、どの様な最後だったでしょうか? 同じ浦上の野をさまよいながら、遂に巡り合う事もできず、十

五年間慈愛のまなざしで育てて頂きながら、子として報いる事もできず、一杯の水さえ差上げることが出来なかった事を思う時、心が重くなります。

兄二人を戦地に送り出し、これで国に御奉公が出来たと云っていたお父さん、そして長男は戦死し、自らも戦いの犠牲となってしまわれましたね。一瞬の中に真黒焦けになって死んだ人々、平和を得るための尊い犠牲と云うには、余りにもひどい事だと思います。

二十数年たった今日でも、行きずりによく似た人を見た時、もしかすると立ち止ります。お父さん、お母さん、私は今三人の子供に恵まれ、幸せに暮しています。お父さんの血が流れている立派な男の子達です。そして折ある毎に、「あなた達のお祖父ちゃん、お祖母ちゃんね」と話して聞かせます。お祖父ちゃん、お祖母ちゃんと呼ばれて、あの世で苦笑しておいででしょうか？

永遠に安らかにお眠り下さい。心より冥福を祈ります。そして何時までも何時までも、平和な日々であります様、あわせて祈ります。

(七五〇) 図書係司書 山口 静夫

遺族 長崎市白鳥町一〇一—一三〇三 山口 林之助(兄)

静夫は、期せずして、父林一の業を継いだ。

戦局の逼迫と共に、既に死の予感があったのか、衣類を分ち、死後の遺品の処置を頼んだりした。

当日は、かねて立寄る親戚にも寄らず、空腹を抱えて、医大へ急いだ。

踏めば崩れる礎石のみが残っている図書館の焼跡には、時から先と膝から下が焼失した白骨が、只一つ、仰むけに転がっていた。予期したよりも小柄だったので、ことによると、ここに勤務していると聞く少年のものではないかと思ひ、その旨を、金比羅山を越えて、少年の家へ告げ、館員の生存を祈りつつ、数日に亘り、医大の裏山をはじめ、諸処の収容所をたずねたが無駄だった。焼跡に戻った時には、屍体は無く、或いはと思ひ、骨の一部を拾い、あたりに散乱している鉄兜に入れて、図書館裏の防空壕にしまって置いたのも、なくなっていた。分骨を頼もうと、少年の家をたずねた

が、母一人子一人のこの家は、もはや無人となり、その消息を知る者はなかった。仕方なく、奉公袋に入れてあった頭髮と爪を、壺に納めて弔った。

○ さわやかな笑を残して朝戸出の 君は爆下に死して帰らず

美樹枝(嫂)

(七八一) 配属将校室雇 岡田 醇子

遺族 神戸市長田区長尾町二丁目一〇—二 岡田 美佐(養母)

(前略) 岡田醇子は私の実兄谷克己(当時大学病院薬局長)の長女で、おっつけ満二十一才になる時でございました。長崎の県立高女を出まして、京都の女専を卒業、当時若者は戦時中ゆえ働かねばならぬので、両親の側から軍関係とかの仕事で、大学に勤めていました由でございます。

実のところ、私達夫の死後、醇子を養女として来て貰う積りで、岡田姓に致して居りましたが、まだ子供でもあり、女学校時代に改姓することも厭がりますので、友人間では谷姓で通し、京都女子専門学校入学から岡田姓に致したく、京都時代は母方の祖父(京大名誉教授岡本梁松、当時在命中)の家から通学しておりました。

就きましては誠に申上げかねますが、名碑銅板に遺名記入の際、若し可能でありましたら、岡田醇子の上でも横でも、(谷)の一字を括弧内に入れて記入願えないものでしょうか？ お頼みいたす次第でございます。但し今となりますと、大体完成されてある事でございましょうから、字くばり、スペースの関係もあり、全体の調和を乱してはとも考えますので、強いてと申上げる訳ではございませんから、よろしくお願い致します。何分にも御地で岡田姓を知る人が少く、同窓生でも判るかどうかと考えたからでございます。その点御諒承下さいませ。

醇子は当日(八月九日)普通の通り大学へ出ましたそうで、その日は家に帰らず、人手をかけて探したそうですが、翌日も帰らず、十三日のお昼頃に薬局の方が、醇子は病院の玄関に寝かされているとお知らせ下され、それからリヤカーで夕方家に帰りました由で、兄の家は西山町二丁目でした。

醇子は「家へ帰られて嬉しい。疲れているからあとは明日話す」と申して、間もなく息が荒くなり、そのまま息を引きとりましたそうで、着衣もすっかり代っていたと

のこと、何処でどうして着換えさせて頂いたことや、或いは焼けてしまっていたのかと、想像ばかり致しておりました。手足と身体に少しかすり傷があった位、とか聞いております。

兄克己は健康をそねておりまして、九日の日も自宅に居りましたそうでございますが、その後二十二年正月はじめに死去致しました。

御手紙を頂き、初めて貴方様や永井先生方に、あの大混乱の中に御介抱、お慰め頂きました由承りまして、醇子は日本中の幸せ者だったかとも存じ、感謝の気持で一杯でございます。永井先生へは、今は早や御冥福を祈り上げるばかりでございます。

(後略)

【調 附記】 原爆直後、私は学内の負傷者を助けながら裏の丘に登り、重傷の角尾学長を教室の人と一緒に丘の上に運び、永井助教授の出血を止めてやり、夜に入ると街の救護本部から届いた乾パンを被爆者達に配給して廻り、穴弘法下の民家の庭で学生や三菱の女子挺身隊の人達と作った握り飯を、又被爆者達に配った後、谷間に造られた物療科の急設バラックで一夜を過したが、其処に谷薬局長のお嬢さんがグッタリした様子で横たわって居られた。みると傷は大したものではないが、元気がなく、苦しらしい。私は着ていた上服を着せかけ、永井助教授と枕を並べて寝たが、翌朝は角尾学長のことが気になったので、早く起きてそのバラックを辞した。そのお嬢さんがこの岡田醇子さんであったことは、御母堂の手記を読んで初めて知った。このバラックに連れて来たのは、「追憶」の中の清水教授(兼専)の手記からみて、恐らく同教授ではなかったかと思われる。

(七八八) 東亜風土病研究所雇 草 野 チヨカ

遺族 長崎県南高来郡千々岩町野田 草 野 千代女(母)

昭和二十年八月九日、その日は夏の日差しが一杯に空は晴れわたっていました。私は早朝から野良へ出て、田の草取りに汗を流していました。昼も近くになるとB二九が一機、爆音を響かせながら西の方へ飛んで行きました。やっと腰を上げ、その銀色の機体を雲の彼方へ見とどけた瞬間、パツと光線が走り、そしてドカン、大きな音、

見る間に火が一杯に拡がり、真赤に焼けた雲が空を覆ってしまいました。

長女チヨカはその年の四月、長崎医専の山口先生の研究生として、勉強に励んでいました。「自分は女医さんになるんだ」という娘の希望は、二十一年に長崎女子医専が出来る予定だったからです。私は二年前に夫を亡くし、その娘に全てをかけていました。そう云う娘の言葉が生き甲斐でもありました。

しかし其の日の夕方には、もう人の噂が色々と伝わって来ました。「長崎は全滅だ。」「草も木も残っていない。」「今行くとみんな死んでしまう。」等と。私は娘の安否を気遣いながら、慙々待たなくて二日目に搜索に出掛けました。家には子供達を残し、親類の人を連れて、一日分の食糧を身につけ長崎へ向いました。夜家を出て一晩中夜道を歩き、翌朝長崎につくと、もう一面は見るも悲惨な光景でした。

悪臭は鼻をつき、道路には人々が黒焦げ、建物はまだくすぶり続けていました。医専の焼跡に立った私は、「あゝもう駄目だ」と一瞬目の前が真暗になりました。一抹の希望も、私の体から崩れ去ってしまいました。

やっと気を取り直し、今度は親類の家へ行ってみました。空から敵の艦載機が低空飛行でサーッと来ては、道に腹ばい一つ、娘の遺体捜しに懸命でした。三度も四度も山を越えて捜しにやって参りました。或る時は「死んだ者を見付けて何になるんだ」と云われたり、軍人からは「米軍が上陸したら自分の身が危い。捜すのは止めて早く帰れ」と追い返されたこともあります。

最後の捜査の時の事です。八月二十七日、その日も夜になり、道端に寝てうつうつして休んでいましたら、毎日捜しまわっていた娘が、山里小学校の後の川に飛び込んでいたので、その子を抱き起し「チヨカ、チヨカ、チヨカ」と一生懸命に叫んで、「やっと見付けたね」と云いました。でもそれはまさに夢だったのです。側の人に揺り起されて、やっと気がつきました。「あゝ夢だったのか」。翌日その現場にも行ってみました。でもやはり駄目でした。

(八三二) 教 務 課 平 石 喜美子

遺族 長崎市万屋町五一九 セントラルビル四〇一 平 石 義 男(兄)

三組の白い落下傘

今日も上々の日本晴れである。空は真青に澄み亘り、遙か南の洋上の白い波はギラギラと輝き、眼にしみ入るようだ。

西部軍第二四連隊、陸八〇六四部隊の第三中隊の高射砲陣地の一日が始まった。

それは長崎港外の一角、香焼島安保陣地の将兵である。

七月に入るや、敵機の躍動は日増しに激しく、つい先日は白い航跡を残して、伊王島の海岸近くに潜水艦が黒い姿を現わし、身近に戦争の逼迫を肌と感じていた。

無電室では、「広島に新型爆弾投下、被害甚大」の秘密の電波をキャッチし、昨日は敵の偵察機が高々度から撒布した四半分の伝単(号外)を見て、我等は憤り、拳を握りしめた。「日本よい国、神(紙)の国、八月八日は灰の国」と囁く。陣地では、初年兵も、上等兵も、我等学徒幹部候補生も、将校も、文字通り歯ギリして迎えた昨日の今朝である。

九、〇〇時、「野母方向」、「敵機発見」と同時に、高射砲の各中隊は警戒体制より空襲戦斗の配置についた。次々と下される命令を、各々の任務に魂を打込み「タマ込メ」、「撃テ」の時は今か今かと待った。併し敵機は野母沖より福田沖へと遙か遠く、不気味に爆音を残して飛び去ってしまった。

陣地では、空襲戦斗体制は解かれたものの、朝食もソコソコに、戦斗配置についたままの、訓練に訓練を重ねての連続であった。

一一、〇〇時になろうとする時であった。「零の方向」、「軍機長崎侵入」の敵B29の爆音と同時に、胡麻粒ほどの機影を眼鏡に捕えた。

陣地は一瞬緊張の糸がピンと張りつめた。敵機は高度一万米、陣地より望見し、稲佐山と金比羅山の中間を、「零」の方向に「侵入」中である。観測の兵は観測器にとびつき、秒読みを始めている。「浦上上空」「長崎駅上空」「県庁上空」「本部長崎(南山手町)」「深堀上空」「野母上空」「野母半島通過」と、時計のセコンドのよう

に次々と報告している。

敵機は逃げるように、野母半島より南の洋上に消え去った。だが、しかし——。特別任務の私は、観測眼鏡にしがみつき、敵機の「浦上上空通過」時に投下された異様な「三組の白い落下傘」を発見、中隊長に報告すると同時に、精密照準の操作を進めた。

耳にあの重苦しいおさえつけるようなB29の爆音をききながら、必死にシズシズと降下する「三組の白い落下傘」を追いつけた。観測の兵が「野母半島通過」と報告するのと丁度同時であった。

「三組の白い落下傘」は、一瞬パッと白い光を発したかと思うと、あの驚くべき大きな火の塊が、上空より長崎市をおさえつけるようにして、覆いかぶせてしまった。その炎の塊はムクムクと、見るまにアツという間もなく、完全に長崎を丸呑みにしてしまい、今度はその炎の輪の中より、真黒な煙と炎が勢よく空に向って、止まることを知らぬ勢で、やがて太陽を呑み、覆いかぶしてしまった。すると長崎は、急に真黒い日影となつてしまった。

爆風に吹き飛ばされ、倒れた観測器を抱き起し、炎と煙の最高度は確か一万三千米と報告した。それはアツという間もない、数秒間の出来事であった。敵B29の機影を発見し、それが野母半島から逃げるように消え去るまでは、二十秒そここの僅かの時間であった。

原子の雲は長崎を覆い、太陽をも呑み込み、将に人のなせる業かと、自分の目を疑うような、物凄さであった。あの原子の雲の中には、長崎がある。母が、兄が、姉妹が、そして友が——。一瞬脳裏をかすめた。

指揮所が急にさわがしくなった。情報が入った。たたみつけるように、敵グラマンP38の来襲である。高射砲は力の限り、砲身も焼けつくばかり打ちまくった。——敵機は去った。夜が来た。暗い夜空に、長崎の街は赤々と燃えつづけている。あの時だ。幾多の友が、肉親が、傷つき倒れていったのは——。

いま銅板の碑に、柁の目のように、多くの先輩と、又友と、仲よく手を握りながら行儀よく並んでいる。

妹、平石喜美子の名が刻まれている。二十歳の青春の夢を胸に抱きながら――。

線香の煙は細く、長く、一すじ、二すじ、空に消えている。

つき抜けるように空は青い。夏草は茂り、蝶は舞っている。蟬は鳴いている。

(八四三) 生化学教室雇 福田 穂実子

遺族 長崎市出来大工町四 福田 なきみ(母)

穂実子が長崎医大生化学教室の研究室の用員として勤め始めたのは、二十年六月一日のことでした。それから八月九日まで二カ月余り、出来大工町から奥平幾代さんと通いました。斉藤先生の御指導のもとに、鶏やカナリヤ等の血液を採ったり、検査したりするのが仕事の様でした。

本当は当時、穂実子は日本女子大に在学中でしたが、少々体をこわして帰省してありました。幸い全快して、三月末には帰校する筈でしたが、戦争は益々激しくなり、旅行も危険になって参りましたので、本人も上京しながら、親としても、みすみす火の中の様な東京に一人でやりたくない気持から、戦局がどうになるまでと思つて、勤めに出したのでございます。

医大に通っている内に、女学校時代のお友達も沢山おられ、又斉藤先生も色々なお話を聞かせて下さるので、毎日がとても楽しく、女子大に居るより勉強も出来ると喜んで居りました。しかし或る時、「お母さん、鶏や小鳥達がね、私の顔を見ると逃げ廻るのよ。私が鬼の様に見えるのでしょうね」と云うので、「そんなにいじめたら地獄に落ちるよ」、「でもそれが仕事ですもの」と、淋しそうに笑ったこともありました。

八日の夜は、うす暗い電燈の下で、モンペ、ハンカチ、腕章に至るまで、アイロンをかけておりました。かけながら、その朝角尾先生から聞いた広島の新製爆弾のことや、悲惨な状況について話して居りましたが、最後に「一機来ても危いそうだから、お母さん、直ぐ防空壕に逃げ込みなさいね」と云いました。

九日の朝は、いつもの様に起きて御飯を炊きましたが、仲々水が引かず、長い時間をかけて炊き上げた御飯は、お粥みたいでした。思えばそれが「今日に行くな」とい

う暗示ではなかったかと思ひます。いつも早く来られる幾代さんも仲々みえず、玄関で長い間待ちました。その時私は穂実子の顔の生ぶ毛を撫でてやりながら、色々話しました。今でもそれが昨日の事の様に、臉の底に残っております。

やがて幾代さんが来られました。その日の幾代さんの容姿は、まるで天女のように美しく見えました。穂実子は飾りけもない髪をうしろに束ねて、白い衿足がすき通り、アイロンのきいた清潔なモンペをはいておりました。道路に出た二人は、揃って電車に乗り、見送りの私にニッコリ微笑んで行きましたが、これが最後の別れとなつてしまいました。彼女等には、死出の旅路となつてしまつたのでございます。

十五日まではいつ帰るか、いつ帰るか心待ちにして居りましたが、何の知らせもありませんので、終戦の御詔勅を聞くと直ぐ、奥平さんと御一緒に医大へ参りました。折よく横山先生にお逢いして案内して頂きましたが、「この辺が二人の居た室です」と云われ、あちこち探して居る内に、焼瓦の中でうつ伏せになつたまま、白骨と化している穂実子を見た時、「ああ此処に居たの」と、思わず泣き伏しくなりました。併し私一人ではないと心に云い聞かせながら、指の一節までも拾つて抱いて帰りました。あの朝丹念に掃除して行つた仏壇に、自らの亡骸を安置したのです。二十年の短い生涯でありました。

八月九日の原爆を機として、戦争は終わりました。穂実子達の死は決して犬死ではなかったと信じます。今咲き初めた露草の様な、はかない生命ではありましたが、残された私の胸の中には、そのままの姿で生きて居ります。今では毎年奥平さんと一緒に死の現場に行き、香華を供えて昼食をする習慣になつて居りますが、恰かもそこに幾代さんも穂実子も同座している様な錯覚を起します。今は熱帯病研究所の建物の前の広場になつておりますが、その日となれば、研究室職員の方々が祭壇を設けて下さったり、お茶の接待をして下さったり、お心遣いを深く感謝して居ります。地下の二人もさぞかし喜んでゐる事でしょう。

二十年前のあの日と少しも変らぬ太陽の光、碧い空の色、入道雲のたたずまい等、アンゼラスの鐘の哀音に黙禱を捧げながら、いつも思う事は、二度と再びこの様な悲

惨事の起らぬ様にと、只々そのみでございます。

(八五〇) 葉専事務員 松 尾 滝 子

遺族 長崎県南高来郡口之津町東大泊五一三 養 輪 貞子(妹)

お た き さ ん

姉滝子が葉専に務め始めましたのは、昭和六年に下関市梅光女学校を卒業して、下関市彦島から長崎に転住いたしました翌年頃からではなかったかと、記憶しております。それから原爆で亡くなるまで、長い間大変お世話になっていたのであります。

その間、卒業生や在校生の皆さんからは、「おたきさん」の愛称で呼ばれていましたから、御存知の方が多いのではないかと思います。

姉は男まさり、活潑で行動的な性格でございました。昭和十四・五年頃ではなかったかと思いますが、姉は独りで東京・関西方面へ旅行したことがあります。その時卒業生の方々が、「おたきさんがみえた」と次々に、関西地方に在住されている卒業生の方へ連絡をとられ、会を持たれたり、或いは名勝史蹟を案内して頂いたり、本当に楽しい旅行だったと喜んでおりましたことが、深く印象に残っております。

戦争で結婚にもふみきることが出来ず、青春を葉学の若人と共に過し、学校と共に尊い人生を終りました。血のにじむような苦しい年から、早くも二十有余年、平和な現在を迎え、今でも姉たき子がヒョッコリとグビロが丘から降りて来るような気がして、悲しみの涙は時と共に過ぎ去り、当時の元気な姉の思い出にひたることの方が多くなった、今日この頃でございます。

お 知 ら せ

余白が出来ましたので、今春の靖国神社春季例大祭のお知らせを、左の通り申し上げます。

私は昨年十月十八日の秋季例大祭の折に、単独で上京して大祭式典に参列致しましたが、その後本年二月にも、同志三人と「年金下付の件」を陳情に上京した際に、皆と一緒に靖国神社に参拝して、「永代神楽祭」の申込みをして来しました。その後は毎月一回「靖国」という刊行物が届けられますが、それには色々の記事が記載されており、明治維新の志士、平野国臣や武市半平太(唯今テレビ「竜馬がゆく」に出て来る人)が祀られていることも、詳しく記されております。

その「靖国」の中に、春季例大祭の案内広告が出ておりますので、最早や御存じかも知りませんが、その文面通りを転載させて頂きます。

靖 国 神 社 春 季 例 大 祭

(日時)

(祭典)

(昇殿参拝時間)

四月二十一日 午後三時

清 祓

午前八時より午後二時まで

四月二十二日 午前九時

当日祭

午前十一時より午後三時まで

同 日 午前九時三十分

勅使参向

四月二十三日 午前九時

第二日祭

午前十一時より午後三時まで

同 日 午後六時

直 会

境内能楽堂舞台において連日吹奏楽、日本舞踊、歌謡曲、能狂言、浪曲、奇術等数々の奉納芸能が行われる。

先日、長崎県諫早市お住いの遺族の方から、「団隊参拝の企てはないか」とのお問合せがありました。が、皆様が御老体であり、その他種々の事情から、まだその企画は致しておられない由をお答え申しました。どうか皆様、この度は各自に御参拝のほど、お願い申し上げます。

(四三、四、八記)

編集後記

調 来 助

本誌の出版が大変遅れたことをお詫び申し上げます。何分意外に沢山な手記が集り、それを私一人で原稿用紙に書き直しつつ編集しましたので、十一月一杯で書きあげる予定が、とうとう一月中旬になってしまいました。これから植字、校正、印刷、製本など、まだ沢山の工程が残って居りますので、仕上りは三月下旬か四月中旬になりそうです。手記をお書き下さった方々には申し訳ありませんが、どうか悪しからずお許しをお願い致します。

本誌に書かれている所を総括的に申し上げますと、大体次の通りであります。

一、旧長崎医科大学で原爆の犠牲となった人は、総数八八四人で、それを分類すると、次の表の様になります。

学 生	職 員					
	学 生	教 職 員		事務職員	看護婦	
		学長及び教授	助教及び講師			
	医大学生	一七	一〇	二〇五	五二	一〇七
	医専学生	一九四	四一	二〇五	五五	一〇七
	薬専学生	三七				
						八八四

二、原爆死亡者の氏名は、巻末にある名簿の通りであります。大学にあった職員名簿も学生名簿も原爆で焼失し、而も二十年余の長年月を経過している。死者の決定には大変苦勞致しました。止むを得ず、次記の様な、主として戦後に作製された資料を参照し、重要な点は、次記の委員会で検討した上で決定したのであります。

【参 考 資 料】

- 一、学部連絡簿（二冊）―昭和二十年十一月
- 二、医専連絡簿（二冊）―同上
- 三、遭難願未調査書（学部、三冊）―昭和二十、二十一年頃
- 四、同（医専、三冊）―同上
- 五、職員連絡簿―昭和二十、二十一年頃
- 六、原爆当時の死亡者及び生存者名簿―昭和二十四、二十五年頃
- 七、追憶―昭和三十年十月出版
- 八、長崎医学同窓会員名簿―昭和三十八年度版
- 九、官報―昭和十六、十七、十八年（長崎大学経済学部図書館）
- 十、長崎新聞―昭和二十年三月（県立長崎図書館）
- 十一、各遺族よりの通信―昭和四十二年三月―四十四年三月

【原爆碑建設委員会委員】

委員長	長崎大学医学部長	三 谷 靖
委員	長崎大学名誉教授	調 来 助
委員	長崎大学医学部教授	篠 島 四 郎
委員	長崎大学薬学部教授	佐 藤 純 一 郎
委員	長崎大学附属病院薬剤部	青 木 義 勇
委員	長崎大学総務課長	西 森 一 正
委員	長崎大学医学部事務長	秦 野 滋
委員	長崎大学医学部事務長	高 取 治 輔
委員	長崎大学医学部事務長	菊 野 義 春
委員	長崎大学医学部事務長	村 山 民 江
委員	長崎大学医学部事務長	柳 田 実 雄
委員	長崎大学庶務課長補佐（本部）	神 谷 宏 太 郎
委員	長崎大学庶務課長補佐（本部）	永 井 元

三、以上のうち遺族の判明したものは、教職員二三名（五六・一％）、事務職員七九名（三八・五％）、看護婦五三名（四九・五％）、学生四七二名（八八・九％）、但し外国人学生を除けば九一・六％で、全体を合計すると六二七名（七〇・九％）となります。

四、巻末名簿の死亡者に番号をつけましたが、それは名碑の順になっています。医専及び薬専の学生で下位の番号のついているのは、名碑が完成した後に判明した人達であります。

五、遺族の手記で初めて書いてあるのは、被爆状況並びに死亡までの経過で、学生の分は「遭難願未調査書」により、其他のものは主として「追憶」を参照して書きました。

六、私宛に送られた手記には、私自身に対する謝辞が沢山書かれていましたが、それは一切省略させて頂きました。（前略）とか（後略）とか記されている所は大体それであります。どうか悪しからず御諒承下さい。

七、二十余年の時日が経過すると、記憶がうすれ勝で、手記の文中に明らかに間違っていると思われる部分が多少ありましたので、それはこちらで訂正させて頂きました。これも御諒承の程お願い致します。中には大学の記録では二年生であるのに、遺族の方が一年生だったと云われるので、名簿や名碑をその通りに直した後で、事実は二年生であったことがわかり、困ったものもあります。又大学の記録にある名前が違っている遺族から申出られたので、名碑にその様に刻んだ後で、実際は大学の記録の方が正確であった例もあります。名碑は最早訂正の仕様がないので、この記念誌に正誤を記載することに致しました。（八頁参照）

八、原爆犠牲者名碑及び遺族会名簿の中に、原爆でなく普通の爆弾（昭和二十年八月一日の爆撃）で死亡した学生が三名います。大学の方では終始原爆死亡者と同等に取扱っているで、この度の請願でも極力それを主張しましたが、遺憾ながら文部省当局からはどうしても聞入れて戴けませんでした。その辺の事情は、医専二年生益田良和君の遺族手記中（九七頁）に詳しく記載致しましたので、御覧の上、御諒承願ひ

たいと思います。

九、原爆死亡学生の中五名の遺族の方々は、既に動員学徒としての援護を受けて居られるそうで、この度の見舞金は下付されませんでした。が、年金を毎年戴いておられることと思います。其の他の遺族の人達も、是非そうして貰いたいという希望が強いので、国会議員の方々のお勧めもあり、長崎在住の遺族有志の間で、その請願運動を開始することに致しました。そのため遺族会役員四名（調、滝川、田吉、大橋）が去る十二月二日に上京して、長崎選出の国会議員を通し請願書を提出して参りました。このことが将来どのように伸展するかは、今のところ全く五里霧中で、予測することは出来ませんが、私達は事情の許す限り続けて行く積りであります。

十、昭和四十二年八月九日以降、今日までの決算報告をせねばならないのですが、唯一回上京しただけで、出費も少く、この記念誌の印刷代や郵送費がどれ程かかるか、まだ不明でありますから、決算報告は次の機会に譲らせて戴きます。尚、今後改めて御寄付を仰ぐことは致さない積りで居りますが、まだこれまで一度もして戴いていない方には、是非お願い致します。

十一、終りに臨み、本誌の出版に御協力下さいました寄稿者の方々、及び出版費として多額の御寄付をお寄せいただきました方々には、本誌を通じて、厚く厚く御礼申し上げます。（昭和四三、二、一一）

十二、慌しかった昭和四十二年度も事なく過ぎ、大多数の遺族の方は最早や、文部省からの見舞金をお受け取りになったことと思います。

この度の申請事務は、相手が官庁なので遺族会は一切関係せず、専ら長崎大学医学部補導課でやって頂きましたが、申請者が御両親が租父母に当る方でない場合は、事が順調に進まず、大変苦労されたことと思います。これについては補導係長の神谷宏太郎氏が、終始相談手になって下さったそうで、お蔭で、法規上どうしても不適合であった方、及び申請書を御提出にならなかった方数人を除き、遺族判明者の九割以上の方が無事に受理されたと聞いております。この間の神谷氏の御苦労に対し、遺族一同に代って心から御礼申し上げます。（四三、四、八）

昭和四十三年四月十日 印刷
昭和四十三年四月十五日 発行

(非売品)

原爆思い出の手記集

忘れな草

編集 調 来 助
長崎市本原町一―二九

発行 長崎市本原町一―二九 調来助方
旧長崎医科大学
原爆犠牲学徒遺族会

印刷 同文印刷株式会社
長崎市尾上町一―五